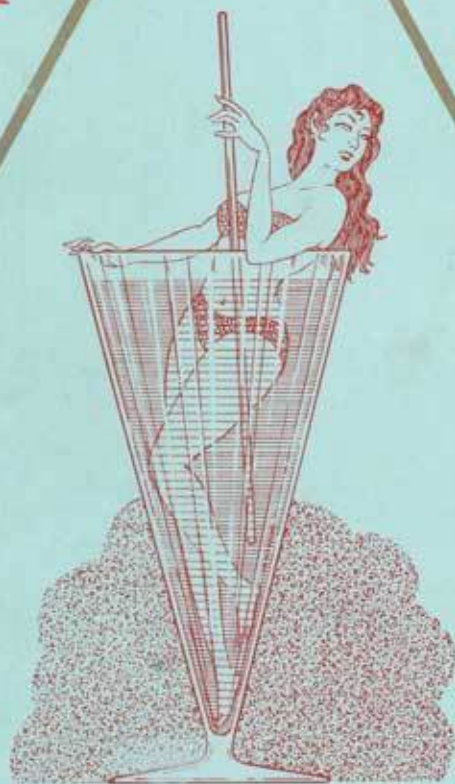


新しい風俗文献誌

4



1971

4

[illegible]

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan

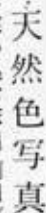


雑誌コード 2805

4月号 ¥350

Ⅱ／女体緊縛写真集Ⅱ 定價一〇〇〇円（送36円）

三 隆



・本誌写真部構成・

シラ・ケニ
関谷富佐子
関谷富佐子
長井葉津子
左近麻里子
左近麻里子
中河恵子
中河恵子
梨花悠紀子
関谷富佐子
座間明子
佐々木真弓
川路義子
シラ・ケニ
川路義子
関谷富佐子
渡部好美
金原加奈子
中河恵子
中河恵子
長井葉津子
長井葉津子
川路義子
三浦純子
佐々木真弓

·編集部構成·

[illegible]

佐々木 眞知子
前田 富知子
谷田 眞知子
シロノ 女
長井 眞富葉
川路 眞富葉
前田 眞富葉
関谷 眞富葉
川谷 眞富葉
佐々木 眞富葉
長井 眞富葉
前田 眞富葉
三浦 眞富葉
関谷 眞富葉
川谷 眞富葉
佐々木 眞富葉
金原 眞富葉
中河 眞富葉
座間 眞富葉
関谷 眞富葉
前田 眞富葉
渡部 眞富葉
三浦 眞富葉
関谷 眞富葉
長井 眞富葉
の？

▽賞金△

10 15 10 5 3 1 1
篇篇篇篇篇篇篇

勇敢な女性の出現を望む

採用の方には壹万円以上拾万円まで差し上げます。

私を原則としておりますが、若し掲載されない方がありましたら、その旨添えさるよう願います。御都合に依つては助手手添え或はプレイのみの出演とします。その時の報酬については改談に応じます故御照会下さい。

関してのお申込みは、年令、略歴、身長と体重をお書き添え願います。写真とされは尚結構ですが、若しお手元のものがなければ、なくとも差支えありません。

大阪市住吉郵便局私書箱第41号
曙出版株式会社編集部宛

最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
 十組十枚 一〇〇〇〇円
 二十組二十枚 一八〇〇〇円
 五十組五十枚 四〇〇〇〇円
 百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

1 台上に晒す全裸(三浦 純子)
 2 開股パイプ責め(三浦 純子)
 3 尻挙げ開脚責め(三浦 純子)
 4 二つ折り臀挙げ(三浦 純子)
 5 麻縄強烈柱縛り(三浦 純子)
 6 エビ責め縄猿轡(三浦 純子)
 7 海老縛り閨責め(三浦 純子)
 8 正面エビ強烈責(三浦 純子)
 9 喘ぐ縄猿轡痛め(三浦 純子)
 10 痛苦に耐える女(三浦 純子)

11 驚づかみの黒髪(三浦 純子)
 12 二折りの引回し(三浦 純子)
 13 開股正面逆立責(三浦 純子)
 14 豊満を縛る魔手(座間 明子)
 15 沖縄美人の表情(座間 明子)
 16 高らかに笑う顔(座間 明子)
 17 股間縛りに喘ぐ(座間 明子)
 18 美しき全裸縛(座間 明子)
 19 後手縛りを誇る(座間 明子)
 20 開股縛りに諦観(座間 明子)
 21 緊縛に悶える足(座間 明子)
 22 白肌をくびる縄(前田真知子)
 23 鏡に映るエビ責(前田真知子)
 24 全裸の美女に縄(前田真知子)
 25 さらに出した女(前田真知子)
 26 純肌を柱に晒す(前田真知子)
 27 首縄菱亀甲縛り(前田真知子)
 28 柔肌に喰い込む(前田真知子)
 29 裸女を押込める(前田真知子)
 30 光に映える白肌(前田真知子)
 31 逆反り弓吊り責(前田真知子)
 32 責に諦観の美貌(前田真知子)
 33 開股責めの序曲(渡部 好美)
 34 蠟涙責めに哭く(渡部 好美)
 35 悦虐の開股縛り(渡部 好美)
 36 閨中の股間縛り(渡部 好美)
 37 全裸緊縛の愉悦(渡部 好美)

38 爛熟した女体責(三浦 純子)
 39 ムチ打ちの洗礼(三浦 純子)
 40 愛妻飼育の過程(三浦 純子)
 41 股間縛りの正面(三浦 純子)
 42 海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)
 43 強烈二折り責め(谷山久美子)
 44 赤裸の尻を暴く(谷山久美子)
 45 アニマルの表情(谷山久美子)
 46 苦痛に反る足指(谷山久美子)
 47 極限の苦痛襲う(谷山久美子)
 48 悦虐悶えの果て(谷山久美子)
 49 緊縛最高の悦楽(谷山久美子)
 50 歯で咬んだ猿轡(谷山久美子)
 51 責めるの許して(谷山久美子)
 52 苦悶の末の頂点(谷山久美子)
 53 椅子開股で晒す(谷山久美子)
 54 強縛愉悅の極み(谷山久美子)
 55 大の字開股縛り(谷山久美子)
 56 情容赦ない麻縄(谷山久美子)
 57 敵しき後手縛り(谷山久美子)
 58 ムチ打ちに泣く(谷山久美子)
 59 条痕を尻に残す(谷山久美子)
 60 哀憫非情な麻縄(谷山久美子)
 61 女性自身を晒す(谷山久美子)
 62 柱に二女の連縛(谷山久美子)
 63 責め疲れた二女(谷山久美子)
 64 全裸の二女陳列(谷山久美子)
 65 高小手を開陳(谷山久美子)
 66 椅子開股の二人(谷山久美子)
 67 連縛双丘の珍景(谷山久美子)
 68 羞恥に悶える女(谷山久美子)

69 美しき床の飾り(叢子 好美)
 70 羞らう美女二人(叢子 好美)
 71 正面相對の連縛(叢子 好美)
 72 股間縛りの併立(叢子 好美)
 73 尻も何も丸出し(叢子 好美)
 74 捕われの全裸像(渡部 好美)
 75 一体にした緊縛(渡部 好美)
 76 点火した蠟燭責(渡部 好美)
 77 足挙げ正面棒責(川路 好美)
 78 棒縛り羞恥責め(川路 好美)
 79 三本の棒で拘束(川路 好美)
 80 麗しき首縄旅情(前田真知子)
 81 伸びやかな肢体(前田真知子)
 82 一糸まとわぬ女(前田真知子)
 83 灯籠の前で縛る(前田真知子)
 84 Mを恋する表情(前田真知子)
 85 無垢の肌に麻縄(前田真知子)
 86 美は麻縄を超越(前田真知子)
 87 白肌と汚れた縄(前田真知子)
 88 金髪は縄に動く(前田真知子)
 89 後手縛りで開脚(前田真知子)
 90 両手挙げ美肌晒(前田真知子)
 91 日本式胡坐縛り(前田真知子)
 92 碧眼に驚きの目(前田真知子)
 93 白人の肌を縛る(前田真知子)
 94 金髪碧眼の女性(前田真知子)
 95 高小手に縛る(前田真知子)
 96 諦観白人の表情(前田真知子)
 97 投げだした全裸(前田真知子)
 98 卓上の一輪の花(前田真知子)
 99 畳の上に転がる(前田真知子)
 100 縛った異国の女(前田真知子)



徹底の自粛本誌

一、本誌は特殊な風俗文庫を研究する平和で
健康な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に關する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。

奇クサロン

233



ロマンチック・サディズム……………李 源初
夫婦ブレイのマンネリ打破について……………今田 雄三
サロン楽我記(第八十二回)……………辻村 隆
出産後のM女「奴隷牝への憧れ」……………佐野みさ子
短信往来「まりこの願い」……………北川まりこ
フォト 乗馬女性の面影……………佐野 寿
投書家として一つの提案……………大西 弘明
初産の記(ういさんのき)……………富田由美子
イメージ画「柔軟度測定吊り」……………須坂 旭
奇ク三月号読後雑感……………格 雄二郎
イメージ画「イヤな魅力」……………緑 JOE
和装縛りに関して「最近思うことども」……………山本 五郎
編集部だより……………編集部
SM歌謡「ピンクの花」……………富士井夢路
フォト・レポ「夫婦ブレイの成果」……………紀川 正信
六カ月腹をさらす「妊婦責めブレイ」……………阪東 太郎
ベッドの中で「夢は楽し」……………吉岡 保利
大橋美代子さんへ「蔓縄とハリツケ」……………早木 夢二
フォト「恨みことなど申しません」……………末広 平三

奇譚クラブ

△第二五巻 第四号・通刊第二七八号▽

(昭和四十六年) 四月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言「ポスト・フリー・セックス」……………和田令一郎(9)
私、思うんで、浣腸しちゃうから……………原 砂土(10)
創作「花転々」——被虐の浮草……………座頭木之助(14)
晴着奇譚 乱調の美……………牧 高志(26)
随想「狂気と天才」……………井上 京喜(31)
連載小説「大噴火」(第三十一回)……………千葉 青鬼(34)
被虐の実例に想う「吊るし責め」(上)……………柴 利好(42)
「畜SHOW」ほど(下)「スター誕生」……………麒麟 欧二(50)
女責め図絵の系譜 桂子を縛る……………南 彦造(60)
人工女性の生態 ある「美女」の生い立ち……………清川 純平(67)
水田真紀子「女子大学生」……………水田真紀子(72)
習作シリーズ……………斎藤 夜居(80)
文献研究「性典入門」(4)……………藤見 郁(84)
連載小説「パノラマ島秘譚」(2)……………虹丸 虹吉(99)
感激と考察と空想 ヘンなたわごと……………

- 欲びの育つ館紳士たちのための人間浄瑠璃(中)……………宇光 仙(102)
懸賞創作入選作品「逆転」……………室 一鬼(114)
危惧と期待 II 雑 夢……………白川 文子(120)
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」……………鬼山 絢策(123)
被虐の旅シリーズ「生 贄」(いけにえ)……………由利美千子(132)
随想と希望「妊娠中のブレイ」……………羽鳥 水江(140)
SMカメラ・ハント「続・薊魔子の巻」……………辻村 隆(142)
『魔子の甘く泣く夜』……………大西 弘明(167)
愛読者は恋しい「花と蛇」に夢を託して……………花影 叢(170)
創作 幻想 帝国(1)……………座頭 孝司(184)
無念のパンティ狩り「狐 弁天」……………細吹悠紀夫(186)
辻村隆研究「SM写真構成家としての辻村隆」……………芳野 眉美(193)
連載・青春の陥穽「鎖の衣裳」……………渡部 光雄(210)
告白「夫婦SMブレイ雑感」……………団 鬼六(214)
連載小説「花と蛇」(続編第七十三回)……………奥山 雅信(224)
懸賞入選 倒錯の終末……………編集部選(252)
読者 通信……………読者ギャラリー II 「造形文字」細川健二・「人身御供」岡たかし・「駁馬手引書?」春川ナミ
オ「実験報告書カルテX」室井亜砂路
「嫉妬の嵐」志羽利也
目次カット……………「お供」西名鶴 II 「嬉しい!」……………あらい・かず
扉カット……………「競 花」……………室井 亜砂路

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

- 暈ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- M男性を尻に敷く
略号(あこ) 一二〇〇円

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あめ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みな) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を載く
大手札四枚一組 略号(そめ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円



室井亜砂路・画

ポスト・フリー・セックス

北欧のスエーデン、デンマークなどから澎湃として起こったフリー・セックスの風潮はアメリカに伝播し、やがて日本にも、ひたひたと押し寄せてきた。

さて、このフリーセックスの次に来たるべきものはなにか、と考えると、それはスワッピングであるといってよいだろう。事実アメリカに於いては既にこのスワッピングが大流行ときく。本誌あたりでも夫婦の交換プレイが、もっともっと喧伝されてもよいのではないかと思うが何事でもアメリカの後塵を拝したがる日本のものであるから、今夏あたりは或る程度、盛んになるのではないか。

スワッピングのモラルとしては、別に取り立てて難しいこともないが、要は相互理解の下に、相手を傷つけることなく天与の自由をエンジョイすればいいのであって、七面倒くさい事を言うのだったら、最初からスワッピングなんかを考えねばいいのであって、この限らない楽しみを味わえる者は、勇気と実行力と決断力のあるエリート人種だけである。

「命短し恋せよ乙女」今年こそは大胆にそして奔放に、その上慎重に、スワッピングの醍醐味をみんなして、噛みしめようではないか。私はその報告を楽しみにしている。

(和田令一郎)



私、思うんでございます

『浣腸しちゃうから！』

原 砂 土

カット・岡 たかし

昭和元禄田舎芝居も、猿芝居の猿の言葉でした、で幕とホッとする間もなく、中国問題決議で国連は大賑い。世はまさに変動し、急速に人間世界は変貌しつつあるようです。

政治も経済も荒れ狂う潮の如く、また渦の如くにの今日とはいえ、人間様は生きらにやならぬ。情報化社会の知識の洪水の中で、個々の庶民は私を忘れずに「豊かな社会」の中で「文化的生活」を保持しなければならぬのです。「カンチョウしちゃうから」と、テレビ番組で毎週日曜日夜八時から主役級の堺正明が叫んだからとか、一般雑誌や週刊誌がサド・マゾをふんだんに記事にするからといって、人は狂ってはいけないと思うのです。

「サド愛好会長の募集した、女性『浣腸』ガマン会」と題した、「週刊実話」9/28号の「変態事件調査」はその一つです。『忍耐指

導の会』の事務の求人広告を利用し、実は求人に応じた女性に浣腸し、座敷のまん中で耐え忍び、もだえ苦しむ若い女をじっくり鑑賞しようというねらいで、新聞に広告を出したというのです。

事件の主人公は長崎郁世(38)。広告主たるSM愛好会事務所の採用通知にいわく「仕事は毎週土、日曜に義務的に浣腸を受けるだけの簡単なものです。十分間排せつをがまんすれば千五百円の日当を払います。それ以上がまんすれば、五分毎に三百円の割増料金を払います」これが、職安法六十三条二号、六十五条九号違反で内偵され逮捕。捜査員の踏みこんだ「四畳半の寝室にはいたるところに荒縄でしばった女のヌード写真がはってあり天井からロープ、それに部屋にはパイプレーター、浣腸器などがところせましと散らばっていた」

この記事の中で注目を要するところは、「二冊の本が、彼の人生をはっきりと区切った。一冊の本は『奇譚クラブ』というサド・マゾ専門誌。その中にある緊縛プレーの写真、清楚な処女を順々にいじめ抜いていく小説の描写、苦しむ女たちにみちたこの本に足がふるえた」

という、くだりです。

この男、「その後二カ月の間に同じ雑誌が十数冊も」たまり「秋風が吹きはじめるころ長崎は一本の麻縄を手にして帰った」まず妻とプレイし、及んでかかる事件へ、といった具合だった、ということでした。

この記事、誤字の多いのが事の真実性に不安を抱かせるとしても、会長長崎、何故に狂える。権力争いの昭和元禄猿芝居の猿の方が脳の働きが一枚も二枚も上。昭和元禄庶民もっとしっかりせい、と言いたくもなろうとい

うものです。もともと、SM愛好会会長とあれば、かつて名古屋の某由貴子氏は「処女喪失はMの必要条件」といったようなことをいわれていましたので、サド会長交じて、M会長となり、お上のお縄で緊縛を戴き、まことしきMの道に踏みいりその極致を味わったのでは？ という、マゾヒストの目には、美しき絵と映るとも解されます。

しかし、私、種々の雑誌の類を拝読しますが、このよう事件での記事の取扱ひ方の中でズバリ誌名をあげる例を他に記憶していないのです。かつて、自衛隊員が横須賀で起こした一人プレイのニュースでは、大方が誌名は伏せてあったと記憶しております。

歴史はめぐる、ファッションもめぐる。東京は上野の松坂屋というデパートの一階に紳士用下着の売り場がございます。そこには、ブリーフとかいう今様男下ばきが巾をきかせておりますが、一角に、「日本の伝統、クラシックパンツ。二五〇円也」が列せられております。色は三色ばかりございまして、それは即ち越中ふんどしのことのようにです。晩秋の午後、上野の山の美術館の帰途によってみて、懐しさとともに、「クラシックパンツ」が我が愛すべき尻をまさぐることを想像するだけでも快いことでした。

秋は芸術、人間回復の秋でございます。クラシック下ばきといえ、女性用はカタカナ

日本名は何と呼べばいいのでしょうか。きょうびの女性は和服を着用に及んでも、お腰は着けても、その下になおパンティを着けているのが大部分と知り、私は非常に哀しんでおりました。そこで我が愛妻君に忠言に及んだのです。何故に女狂えるか、と。

我が妻愛妻の名に違わず、さる日、外で待ち合わせの折、和服を召して参られました。開口一番、私、「きょうは？」と、問えば、「あなたのいった通り純和風です」と、まことに以心伝心の夫婦の妙を地でゆく様な返事が返って参りました。「そうか、今日は特にきれいだヨ」と普段より色っぽく見える女房を愛しんだものです。

ニッポンのケネディの名を持つ石原慎太郎参議院議員には、かつて作家たりしころ「狼生きる豚は死ね」と題する作品がございました。まことに現在資本主義社会は激しい競争の社会でございます。自由競争の原理に基礎づけられた自由主義体制下では、それゆえに、人間の悲喜交々が面白おかしく展開されるわけです。長洲一二横浜国大教授の「資本主義の名著」なる名著の中に、E・フロムの「自由からの逃走」がとり上げられています。この中で、SとMが論ぜられているのです。石原さんの「狼生きる豚は死ね」をもじりまして「サディストのさばり、マゾヒストはそばと生きろ」といっては、やはりまずいでし

ようか。それでも「悪は栄え、善良死ね」というのではないということにより、ある程度は認して、ただけですまいか。フロムさんは、SM双方、人間に備わった属性だといっており、いずれにも偏らず主体的に生きることを説いております。

資本主義の名著の中に、サディズムとマゾヒズムという人間の属性を論ずる名作が数えられるのですから、情報の洪水化した今日、SMが盛んに取り上げられる中で、緩やかなマイペースの奇ク誌は、素材を経済活動の中にも求めてしかるべきでしょう。今、巷には出世コースをハイペースの、いわゆる秀才の輩の商品取引に関する失墜を話題にしておりますが、サディスト交じて、マゾヒズムに泣くのを劣等生は嗤うのでございます。「狼生きる豚は死ね」のいきおいだった人々が、逆に「豚は死ね」を受けることになるわけで、まことに厳しい競争の社会でございます。

商品取引といえば株式相場の方にも、株で損をしたという声を多く聞きます。私、おもうのですが、物価の値上がり、銀行定期の利息では対処してゆけないから、株や土地などの値上がり中の大きいものを狙おうというので、株に手を出して損をするわけです。銀行も株でかなり利益を上げています。その利益の一部を利子として分配するわけです。銀行を止めて株にゆく人は、銀行と競争するよ

うなものです。銀行以上に勉強しなければ、大部分の庶民は損をするのがオチです。Mに甘じられない人は、狼として闘わなければ豚となつて死ぬ運命にある、といつて差支えありません。

競争社会の典型にセールスの世界が取り上げられます。就中、証券セールスマンの競争の激しさは株式ブームのせいもあってか、よく小説等にも描かれますが、小便を飲む話は実話として語られ、株式小説をものする作家清水一行、黒岩重吾、邱永漢の各氏に共通に取り上げられております。セールスマンが顧客をつくるに際して、自分を認めさせ、可愛がられる動機というのがあって、邱氏は「話の特集」の古い号の中で次のような例を述べています。

或るセールスマンが、或る社長の仕事をなんとかしてもらおうとして、或る料亭で客をしているところをつかまえたとして出かけた。玄関先で、番頭を介して社長に話を通じた。

——「ちやうど客が帰ったあとで、社長はほろ酔い加減で芸者を相手に一人で酒を飲んでた」そこで「自分はこれまでに十七度も訪ねて行ったが、いつも断わられ続けた」旨を話すと、「そんなにしつこくわしのケツを追いまわすのはどういふわけだ、とからんできた」セールスマンは「社長に惚れているんで

す、といつてしまった」——

——「なにッ？ 惚れとるって？ 惚れるとか、惚れられるというのは、男と女の間だつて、そう簡単にあるもんじゃない。それを軽々しく惚れとるなんて、言葉の使い方が間違つたらんか」忽ち逆襲されてしまった。

「いや、ほんまです。社長に惚れとります」といってしまった。「ほんまか？ ほんまやな？」社長は何度もたしかめた上で、「よしそんなにわしに惚れとるなら、わしの小便飲めるか？」「ええ、小便でも何でもくださるものはいただきます」——社長は芸者に土鍋を持って来させ、藤田の見ている前で、鍋の中に小便を一杯した。その上、「飲みにくからうから」と砂糖をもって来させて、ご丁寧にはいただきます」と言うなり土鍋を両手で持ち上げて息もつかずに一気に飲みほしてしまつた。

——サラリーマンに「アジト」づくりが大流行——という見出しの記事は「週刊現代」十二月二十八日号。サラリーマンの間に脱職場脱家庭を目指しての、流行ということですが。これは、所詮は自己解放のための変身願望の一顕現ではないかとして、関西のN氏が世話役で二、三十代のサラリーマン約十人で組織している「女装の会」が取り上げられております。グループは、土曜日の午後から日曜日

に女装して街に出るそうですが、仕事上の気がかりを忘れておれることと、女になるというゲームの楽しさを味わうことが目的だということでございます。これについて、作家のIN氏は「自己愛的な満足しかないという気がする」と述べておられます。私、思うのですが、自己愛的満足でケツコー毛だらけ、奇ク一月号の中村純様の色っぽい写真を見ながら、ネコ灰だらけ、お尻のまわりはクソだらけとなれば、浣腸しちゃうことになるのでございます。朝日新聞十二月二十日付「庶民派」シリーズの第一号に渥美清氏が登場し「いまの世の中、ケツコー毛だらけ——おシリのまわりはクソだらけだよ」と申され「みかけより、ケツの穴の小さいところがあります」と述べていらつしゃいました。

昭和元禄と経済的繁栄のぬるま湯に浸りきっている日本を憂えて、日本武士三島由紀夫は割腹なされました。まことに立派だと思ひます。しかし、ここでのこれについての論議は遠慮致しましても、切腹願望の読者、及び中康弘通氏の感慨いばかりでありましたでしょう。ともあれ、昭和元禄田舎芝居猿芝居の猿も、三島由紀夫氏の諫死、憤死の前には人間と猿の差をまざまざとみせつけられたことでしょう。

庶民は「フーテンの寅さん」よろしく「おシリのまわりはクソだらけ」そこで、浣腸し

ちやいたくなるのでございます。水田由紀子様、浣腸しちゃうから！

附稿 二月号寸感

懐しがってもしじまらないが、私がまだ少年の頃、そして青年にかけて、最大の秘かな楽しみは奇クの発売日であり、そして、グラビアの写真と、告白に託された人間の心奥の吐露と悶えと歓びを共にする一人の時間だった。そのことは誰かに告げたくても名状し難く、遂には一人で涙して歓ぶという奇妙な情況になるのだった。そのころ（勿論今も持っているのだが）、私は非常にロマンティックな想念の中に、自らの生をまさぐっており、人間としての自分を、追求していたように思う。そして又、私のそのころを夢想家と呼ぶことで片づけたくはない。奇クこそ、まぎれもなく人間の叫びのあふれた場所だ、と私は真実思っていた。グラビアのないことは今淋しいのだけれど、それでも尚奇クは私にとってかけがえのない雑誌である。他に類書を求め得ないのである。

二月号を開いて、橘房由氏の「苛虐淫乱思いつくまま」と野村圭次郎氏の「貴婦人の飼犬」それに加賀明男氏の「イチジクの殻が潰れた時」は、今はや一昔前のことになる私の若いころに極めて相似たというより、まぎ

れもなく私のことを書いたのではなからうかと思いたくなるような作品で、追憶する気持ちを熱くさせ、今は現実の波風の中でロマンの濃度も薄れている胸を、いたく刺激したものである。

橘房由氏の御説には、その一つ一つに肯くばかりであって、このような方のあらばこそ今日の奇クもありなん、の感慨でなる。そこに一言すれば、「『奇ク』自身が、市民権を得ないで、現在のままある方が希望する方向とは逆に好ましい、というところが本音ではないだろうか。勿論、今のままで市民権を得ることは望ましい。しかし、市民権を得た時、他誌と同じく、何とはなしにひからびた一冊の本、という感じになってはいけない。或る種の秘密めいた、公然とは読みづらい、だから一人で秘かに読み、自分の、人間の真実を求め、秘密裡に自分を裸にする、そして人間のどこかはなしに哀しい、そのくせ嬉しい、奇妙に興奮する、いつてみれば、秘かに自分の秘密の部分に慰める、まさぐるようなそれをさせるような奇妙な雑誌であって欲しい訳だ。

野村圭次郎氏の「貴婦人の飼犬」又、なんと私を随喜させる作品ではないか。二十四才の青年と四十才の貴婦人の組み合わせ、また場所が山の中であることが実にいい。そしてこの登志子婦人は非常に優しい。このような

婦人に可愛がられる「人間犬」圭次郎君はまさしく至福といわねばならないものと思う。この好編を読んで、登志子婦人に責められ調教される圭次郎にとってかわっていた私は、逆にあまりの感情の昂ぶりのために、Sの血が登志子をいじめたい衝動にかられたことを告白しておきたい。「登志子、四つんばいのまま、私のまわりを走るのだ、そして犬らしく甘えなさい」「ワンワン、きゃあん、きゃあん」と。

加賀明男氏の「イチジク——」を読んで、人は自らの若いころを憶い出されるものと思う。「よくある話じゃないか」と。そしてよくある話であって、繰り返しの効かない人生の一回性がために、よくある話は貴重になってくる。加賀氏の「アツ子の事が忘れられない」気持は良くわかる。良くわかる故に感動的だ。しかし、私は一言つけ加えたい。それは、加賀氏の願いも空しく、多分、十中八九、加賀氏を「可哀想だと思う」女性はいない。だから、「直ぐペンを持って勇気づけるお便り」もないと思う。さらに言えば中野アツ子嬢は、加賀氏の忘れられない気持に反して、とくに加賀氏のことを忘れているだろうということだ。加賀氏よ、いまに分かることがくるさ。だから、だから、そんなものだから、イチジクにまつわるお話は私を、そして読む人を感動させるのではないか。（了）

被虐の浮草

花 転 々

座頭木之介

(一)

焼け爛れた瓦礫の都市の港に、何回目かの引揚船がはいった。ぞろぞろと棧橋に上る引揚者の群れを、ひとりひとりつかまえて、アメリカ兵が頭からDDTをふりかける。男も女も、いちように白い粉にまみれた。卑屈に猿のように笑っている。望遠鏡で見ると、粉まみれになった顔のしわまで、手にとるように見えた。望遠鏡は、海軍の潜水艦乗りだった夫の遺品である。

「奥さん、何見てるんだ？」

うしろから武藤が声をかけた。筋肉質のたくましい軀をした武藤は、パンツ一枚の姿でひとつかみの胸毛を汗でひからしている。

窓は西の海にむかってひらいており、西陽が射し込んで部屋の中は、ひどく暑い。

「ええ、ちょっと海を……」

美千子は望遠鏡を元の棚に返して、ゆっくり窓辺を離れた。落下傘の絹布を裁断した白布を、バスタオルもどきに裸体に巻きつけている。乳房は隆く尻はまろやかに盛上って、

そのくせ脚はすらりと細く、ほとんど理想的といえる女体美の持主だった。

「疲れただろう」

これをお喰べ、と武藤は鞆の中からアメリカのチョコレートを出してすすめた。美千子は畳に正座して、行儀よいしなでチョコレートを齧った。武藤は、その美しい顔をみつめて、「唇がいろっばいな」と目尻にみだらなしわを寄せた。傾く太陽が美千子の白い膝をあぶり、美千子は尻をよじって影の壁ぎわへしりぞいた。「奥さん——」武藤がその背に



宮崎昭平・画

かぶさって、布ごしに乳房を探り、汗ばんでぬめらかにひかる白いうなじに唇を這わす。

美千子は、かすかにうめきを洩らした。

「わたし、まださっきの疲れがとれないわ」

「弱いな」

「社長さんが異常なくらい……」

「奥さんの方が弱過ぎるんだ、まだ二十七のくせに。尻に気合入れてやろうか、また」

「もう沢山！ 叩かれるのは、つらいわ！」

「フフ、何事も体験だと思いな」

武藤は美千子の軀から絹布をはぎとった。

「社長さん、お願い。撲たないで——」

美千子が身をよじってあらがうと「ええいジタバタすると縛るぞ」武藤は紅潮した美しい顔を張った。びしっびしっびしっとなつづけざまに顔を張られると、美千子は黒髪をみだして悲鳴をあげた。

「はじめだわ……まるで犬みたい……ああ、はじめだわ！」

美千子は泣きながら、壁際でよつんばう。

「脚を開け」

「ちゃんと、してるじゃありませんか……」

美千子は羞恥のあまり、青ざめた顔色でうしろをふりむいて言った。

「もっと、ひらくんだ」

「ああ、むごいったらない！」

白いくるぶしが、いびつな角度に展いた。

「なんていい線してやがるんだろう」

「いやいや、おっしゃらないで！ 虐めるんなら早く虐めて早くゆるしてください」

「そう、せかすない」

武藤は笑って、ズボンのベルトを手に取る。と立ち上って振りかぶった。美千子はふりむいておびえた。「それで打つの？」言った時ベルトが襲いかかった。びしっ！ 白い双丘にみるみる一条の赤縞が滲む。悲鳴をあげて柔腰が激しくくねる。二条、三条と鞭が赤い打条を印していく。狂ったように腰がくねり、悲鳴は長いトレモロを曳いて流れた。

「もういいだろう」
と、武藤は鞭を捨てて、挑みかかる構えをみせた。

美千子の唇から別種の悲鳴がこぼれた。

○

武藤が石段を伝って帰って行くと、いれかわりに娘の珠美が学校から戻って来た。母親に似て目の綺麗なこの可愛らしい娘は、小学二年生である。

「あ、帰ったの……」

まだそのまま裸体を畳に這わせて泣き崩れ

ていた美千子は、朱腫れした臀部を慌てて隠しながら服をまとった。

「珠ちゃん、チョコレート貰ったわ。さあ」

「武藤のおじちゃんがくれたの？」

「そうよ、武藤の小父ちゃんがくれたのよ」
娘と二人してつましい食事をすますと、

美千子は時間が気になって食卓をそのままにして家を出た。島野美千子は映画館の窓口嬢をしている。昼夜二交替制だが、彼女は殆ど夜の部の勤務だった。五時が交替の時間だ。彼女のパラソルが足早に石段をくだって行った。その頃の映画館の入りはすごかった。大衆の娯楽をみたすものは映画しかなかったから、窓口でチケットと金を扱う美千子は多忙でそうとう神経がくたびれた。

九時半にハネて、モギリ嬢や映写技師たちが帰って行くと、美千子は一人居残って現金の番をして、社長の武藤が来るのを待っている。なければならぬ。武藤は事務所に詰めているときもあったし、館のことは使用人に任せて三桧台地の結核療養所に行っている時もあった。その療養所に、もう永らく彼の妻が療養生活をしているのだった。

「遅くなった」

外の雨の中から武藤がはいって来ると、か

すかに陰気な病院の匂いがした。

「今日の売上げです」

美千子は現金とテケツを揃える。「うむ」

武藤は、ざっと見て「昼間はごくろうさんだったな。鞭で打たれたところはまだ痛むか」

と、目尻に好色なしわを寄せて言った。

「知りません」

美千子は顔を紅らめて帰り仕度をした。

傘もなしに雨の中に飛び出して、美千子は濡れて行きながらうしろを見返った。武藤は追いかけて来なかった。

(二)

五日後に月末が来て、給料日であった。

閉館^{はね}たあと武藤は、従業員一同を事務所に集めて二、三の注意を与えたのち、各自に給料袋を手渡す。美千子の給料はモギリ嬢と同じように僅かなものだった。敗戦後の混乱したインフレの世の中で、それは母娘二人とも一カ月暮し得る金額ではなかった。

皆が帰ったあと美千子は一人事務所に残って、武藤が特別手当を出すのを待った。待っていることが、たまらなくみじめな情けない気持だった。

「おい、何を待っているんだ」

客用ソファにかけて武藤が言った。意外な冷たい言葉を浴びせられて、島野美千子は頬が青ざめた。

「いつものお手当を……」彼女は顫えを帯びた声で言った。

「奥さん。お気の毒だが、あんたは今月で鹹^{くび}にしたいと思っている。窓口に据えるにはもっと若い娘の方がいいし、駄のつとめの方もサービスが悪いからな。今はな、奥さん。元貴族の未亡人でも、どん百姓の妾になって、それは凄^ひいサービスをするそう^うだ。パンスケも顔負けするくらい^いのな」

聞きながら美千子は、それはもともとその未亡人が淫蕩^{いだう}なのだと、胸の中で叫んだ。

「縄で縛られて、血がにじむまで臀を打たせたり、浣腸で責め立てられたりするそう^うな」

「言わないで！」

美千子は耳を掩^{おお}って頸を振った。

「元男爵吉野隆介の奥方吉野多加子の話だ。百姓上りの山林^{やま}成金、岩清という男の妾になって、生血を吸われてかえって妖しいほど美しくなったそう^うだ。マゾヒズムの極致に達して、妖しい花の精になったんだらうな。——奥さんには分かるか？」

武藤は思いのほかな博識を示して、サド・

マゾ論を語り出したが、美千子の思い詰めた奇妙にうつろな表情に気付くと、途中で口をとぎした。生活を脅かされて死を想っているような美千子の横顔は、異様に美しかった。「まあ、夜道は物騒だから、ともかく送って行こう」武藤はそう云ってソファを立ち、灯りを消した。

焼灰の匂いのする暗い道を辿りながら、乳房にさわりうしろから腰に触れてくる武藤の手を、美千子は拒まなかった。

「社長さん、羞かしい真似をしますわ。見てくださいますか？」

せいっぱい媚をたたえて美千子は言い、ぼつんと裸電灯がとる電柱の根方にしゃがんで、白い臀を見せて小用をした。そして立ち上るなり、武藤の胸に身を投げて、

「見捨てないで下さい！」

美千子は叫んでおいおい泣き出していた。

「いっしょうけんめい、おつとめをしますから、見捨てないで……」

熱い涙が男のシャツを濡らした。

○

美千子の家の近くにある薬局がまだひらいていた。アメリカ兵とパンスケが先客で居たが、二人が出て行くと薬局の主人は、顔見知

りの美千子にむかって笑顔をむけた。

「奥さん、何か？」

美千子は羞かしそうに、一度武藤の顔を見返ってから、小さく云った。

「あのう、浣腸のおクスリ、いただきたいのですけど……」

「かしこまりました」

主人はガラス・ケースの中を覗いた。

「イチジクよりほかに、注射器型のものはないかね」

武藤が云うと、主人は百CCの白硝子の浣腸器を呈示した。

「すみません、生憎これだけです」

「それでいいかね、奥さん？」

その武藤の言葉に、美千子は耳を紅く染めて狼狽した。武藤は笑いだして、主人に薬液を調査させた。

浣腸具を胸に抱いて、美千子は曲りくねった石段の小径を登り、我家へ帰り着いた。玄関の片えに連翹れんぎょうの花が咲いている。匂うともなく花卉が匂うようだった。

「ママ、お帰りなさい」

玄関にはいると、娘の珠美が飛び出して来る。毎晩感心一人で留守番をしているが、母親の帰りを寝ずに待っていていじらしい。

「おじちゃん、いらっしやい」

娘は武藤に、ぴょこんと頭をさげた。

「チビは寝ろ寝ろ」

武藤は、じゃけんに珠美の頭をこづいた。

「珠ちゃん、早くお寝みなさい」

茶の間で服を脱ぎながら美千子は云った。

美千子がすすんで裸になるのは始めてのこと、覚悟した真剣な美しい横顔だった。神棚と並んで夫の遺影が懸かっている鴨居の下で女ざかりの美しい未亡人はブラジャーとパンティだけの姿に変わった。

「旦那さま……」

と美千子は武藤を呼び、一瞬真っ赧になりながらパンティを先に脱いだ。そして美千子は、娘の勉強机を電灯の真下に据えて、その上にあがって顎と乳房を机の平面にすりつけ臀を高く屹立させた。

「ああ……」

白い脚がいびつに八の字形に展いて、電灯の光をはね返した。

「ああ、笑ってらっしゃるのね……」

うしろをつかの間ふりむいて、美千子は泣くような声で云った。耳の付根を紅くして羞恥の色が匂うばかりだ。武藤はロープでその美千子の頸と腕を縛って机に巻きつけた。細

いくびに縄目が喰い込んで美千子は机と口づけしなければならなかった。くびすじも紅く腕の縄目も、みるみる紅くなった。

「アア痛イ……」

いたいたしい哀艷な姿態を無情に電灯が照らし、武藤は冷酷な外科医のように、丸くそびえる白い腰部に針を立てた。ミシン針がプツプツと突き刺さるごとに机上の哀れな女体は悲鳴を洩らした。苦痛にくねる劇しい腰の顫動で机が崩れそうな軋みを立てた。

「旦那さま、ゆるして……ゆるして……」

「ふっ、まだ序の口だ」

錆びた針、光った針をとりまげて三十本余りが、ことごとく臀丘に植込まれて怪奇な林をなした。雪原を無数の赤い細い糸が垂れて錯綜し、しなだれて太腿へ滑り落ちた。

(三)

針が抜かれ縄が解ほどかれると、美千子は机からおりて深く息を吸い、乾いた唇で武藤の顎に口づけした。

「針で責められるのもつらいわ……」

涙に濡れた目で微笑わらって、責められた肌を撫でさすった。武藤は美千子の被虐の反応を測る検査をしたが、美千子はそのとき身をよ

じって羞かしがった。心を裏切って、躰は明らかに苦痛に喜悅しているのだった。「こいつ」と武藤は、ぴしっと太腿を撲った。

「さあ奥さん、浣腸してやろう。また変わって味なものだぜ」

美千子は風呂場の隅でしゃがませられて浣腸責めを享受した。初めて体験する、羞かしい、そしてくるしい責めに、彼女は泣きながら、必死に耐えた。宣告された時間をけんめいに守りとおした。背肌一面にあぶら汗をにじませて、顔面蒼白になりながら、十分というおそろしく長い時間を耐えぬいた。生汗とうめき声の熱気が、狭い風呂場にむんむん籠った。トイレは風呂場の隣にあるが、そこまで這って行くのが忍耐ぎりぎり、向こうに見える白い便器がかすんでうつった。羞かしく見苦しい光景をさらけ出すまいという女としての羞恥の一念で、美千子はまさに死ぬ思いで便器までたどりついていた。

茶の間に戻って美千子は哭いた。哀れに啜り泣くその唇を武藤はしつように吸い、ブラジャーをむしりと、荒々しく乳くびを握りあげてミシン針で刺し責める。美千子の哀しい泣声がちまちま苦しげな悲鳴に変わった。「おまえを、すばらしいマゾ女に仕立て上げ

てやる」

「あああ……私はとてもそんな……あああ」

「おまえはマゾの素質十分だよ」

「そ、そんな……う、うそです……あああ痛い、痛い」

「こうしな」

乳房を針で縫われたまま、美千代は仰向けに臥かされた。手を縛られて腰の下に二つ折りに座布団をあてがわれた。

武藤は意外に、はやく離れた。それが自分の罪であるかのように美千子は怯えた顔色で武藤の顔を仰ぎ見た。縛られている白い二の腕の紫づいた充血が痛々しい。

「わたし妊るかも……」

「孕んだら墮すのだ。わけもないことさ」

「私の躰はほんとにおもちゃなんですのね」

「そうだ、おまえは儂のおもちゃだ」

右肩をぐいと横向きにさせられて、縄を解かれた美千子は、起き上って二の腕と手首を揉んだ。

「腹がへった、夜食の支度をしろ」

「はい」

美千子はパンティだけを身につけて、台所に行った。

武藤は腹がくちると、布団に寝そべって美

千子に肩や腰を揉ませた。固い革のような筋肉質の男の体を、汗を流して美千子は揉む。裸の双つの乳房が、ぷるっぷるっと弾んだ。

「もういい」

武藤はむっくり起き上って、美千子のパンティのゴムを引っ張って、ぴしっと腰のくびれを弾いた。

「はい、脱ぎます」

美千子がパンティを除る間に、武藤は彫模様のある牛革のベルトをズボンからひき抜いて、びゅっ、びゅっ、と素振りした。

「こわい……」

美千子はふるえながら柱を抱いて、こわごわ腰を突き出した。

武藤は前にまわって美千子の手首を合掌縛りに縛ると、しばらく乳房を虐めつけた。それからうしろにまわって臀丘に鞭を打ち込んだ。びしりっと重い肉音がひびき、悲鳴が鋭く湧いた。

「ああああ」

のたうちくねる柔腰を、五、六回も鞭でしばいたあと、

「そら、今月の手当だ」

武藤は紙幣で、美千子の片尻を引っ張叩いた。裸ゼニが、畳に舞った。有難うございま

す、と、それでも礼を言う美千子の声が悲鳴まじりに、かすれた。

(四)

冬になり、武藤が死んだ。

——或る日、波止場で三国人系のやくざと、日本人やくざとのデイリがあつて、折柄吹きまくる木枯の中で刀槍がきらめき銃弾が飛び交うた。

武藤はそのときちょうど銀行に赴くべく海岸通りを歩いていて、凄まじい市街戦に遭遇した。五十メートル程先に銀行の建物が見えていて、武藤は車道を斜めに突っ切って走った。飛来した一箇の流弾が、走る武藤の後頭部へめり込んだ。

殆ど即死の状態でこの男は死んでいる。彼の経営する映画館は人手に渡り、ビンゴゲームと射的場が変わった。

島野美千子は勤め口と情婦の座を同時に失った。彼女は途方に昏れる思いを味わった。

高台の家の窓から見える夜の海の白い波濤が心を寒くした。

彼女は二度三度と職安へ赴いたが、仕事口は、さっぱりなかった。

「おじさん、お酒ちようだい」

美千子は、さかり場のうす汚い飲み屋の床几に腰をおろした。淋しくって、やりきれなくて、かなわなかった。雨催いのじめじめした陰気なクリスマス・イヴだった。

「はい、お酒。しかし、あまり飲めそうな顔じゃねえな」

四十五、六の暗い眼をした飲み屋のおやじは、そういいながらうすわらって、コップ酒と、やきとりを置いた。

「なに言ってるの、飲めるわよ」

美千子はカストリ酒を一気に飲みほした。ものの二、三分もすると彼女は目がまわりだした。姿勢が崩れて床からずり落ちた。しかし、意識はまだあつて、立ち上って「お勘定置きます……」と金を払った。

「ま、お嬢さん。奥で少し酔いをさまして帰んな。それじゃ途中が危ねえ」

ふらふらしている美しい酔っぱらいを、おやじは肩を貸して奥の三畳間へ運んだ。

○

「俺も海軍だった。おまえさんの主人のように士官なんていう偉いものではなかったが、ガダルカナルでひどい目に合ったクチよ」

復員してみると女房子供は焼け死んでしまっていて、ひでえ話だと飲み屋のおやじは、

しんみりした口調で言った。

店を閉めて、むさくるしい三畳間に七輪を置いて煖をとりながらの、茶飲み話だった。

「このお店、儲かるの？」

美千子は言った。彼女はまだぼうーと頭が重い。意識不明になって、二時間ばかり脂臭い布団に寝かされていたのだ。

「生きるってことは大変だわ……わたし、もう疲れてしまった。もうどうにでもなれという気持なの。いっそ都会へ出て、アメリカ兵相手のパンスケにでもな……」

彼女は当てがわれていた座布団の枕に、もう一度、頭をつけて、うすく涙のひかる目で天井を仰いだ。

「もったいねえ。おまえさんのような上品な美人が、そりゃもったいねえよ。そう自分を安売りするもんじゃねえ」

「でも、もう軀を売るしかほかに、道がありません……」

「だからさ、そんなら、いい旦那を僕が世話してやろうというんだ」

「おねがいします。本気で、おねがいしますと言いますわ」

島野美千子は言った。

「いい覚悟だ。それじゃ、おまえさんがどん

な駄つきをしているか、お乳のかつこうから尻のかつこうまで、とくと下検分しなくちゃならねえな」

「裸にむいて見るがいいわ！」

美千子は、一瞬美しい眼を裂けるようにみひらいて、吐き出すように言った。

「よし云ったな」

荒々しく服を剥ぎとられ、パンティは引き裂かれた。

「よし、立ってみな」

全裸にされて立たせられた。その申分のない均斉美に、おやじは声をのんで見惚れた。

「いい駄してやがる……めっそもねえいい駄だ……たまらねえ」

おやじの性急の挑みに、美千子は身をゆだねながら花のように仄かに笑った。

「もっと強く噛んで。血が滲むくらい……。ベルトでお尻も打って……」

「おまえ、虐められるのが好きなんだな」

「そうらしいわ……」

(五)

美千子は飲み屋のおやじに偽りの住所を告げて帰った。身を任せていながら、やはり胸の底で一抔、警戒しているものがあつた。

我家に帰り着いたときは夜も遅かった。鏡台の前で裸になってつぶさに駄を眺めた。ひさしぶりに紅い責痕に彩られた雪白人膚はみずみずしく潤い、火照^{ほて}っていた。いきいきとして艶やかだった。美千子は乳房を抱きしめて頸を垂れた。

四日たって美千子は飲み屋へ行った。本当に覚悟を決めた顔だった。海の風いだ、風の静かな、師走としてはあたたかい夜だった。

裏口から彼女ははいった。のれんの間からそっと顔をのぞかすと、

「やっぱり来たか、奥さん」

おやじは、よだれを垂らしそうに相好を崩した。

「来るか来ねえかと、いらいらしてたぜ」

一人居た客が帰ると、おやじはすぐ店をしまった。三畳間で美千子は外套を脱いだ。下には紺に白衿の清楚なスーツを着ている。

「女学生みたいな感じだぜ」

美千子は咽と衿あしに口づけを享けた。カストリ酒の匂う男の唇は、あの武藤の唇よりも動物的にうごめいた。

「ほかの男にや渡したくねえ」

「でも生活のためです。パトロンを世話してください」

濡れた唇で美千子は言った。

「仕方がねえ。僕にも金儲けになることだからな」

相手の男から世話料をせしめるつもりだろう。腹の中で色と慾の物騒なソロバンをはじいているのが、その顔付に見えた。

「渡したくねえんだが……」

「何を考えていらっしゃるの。私、困るわ」

「おい」

おやじはまた美千子を抱き寄せ、濃厚なキスをした。胸をひらかせて白いむっちりとした肌に長い口づけをおこなった。そして彼は外へ出て行った。

二十分もたたぬうちに、若い——ひどく若い青年がおやじとともに現われた。贅沢であつてどうにも下品な服装だった。ぶあつい唇にアメリカ葉巻を啜っていた。

「こちら、今大岩清様の坊ちゃんだ。成夫様とおっしゃる。坊ちゃん、この女がそうです。どうです一級品でしょう。こんな田舎街のバーの女なんか較べものになりませんぜ」
成夫は近くのバーで遊んでいたらしい様子であつた。酔った顔をして葉巻の煙を吹き、「美人だね。掘り出し物だが、年は幾つ？」
「二十七になります。美千子と申しますが、

——よろしく」

美千子は畳に三つ指を突いて頭を垂れた。

「ふうむ、僕のおやじが囲っている元貴族の吉野多加子よりずっと美人だが、しかし多加子は、ヴィナースのようなすばらしい魅をしてるからね」

「ごらんになって、悪かったらよろしゅうございます」

美千子は、吉野多加子という名前にライヴアル意識を持ったように、スーツを脱ぎだした。女豹のような感じがにじんだ。

「分かった。おまえの魅は、あとで見る」

岩清成夫はふいにとどめて、格子縞の外套のポケットから札束を出してポイと投げた。

「この女、僕が買った」

外へ出ると成夫は、美千子の細腰を掴んで歩きながら、

「おまえの家に行こう。ホテルなんて面白くないからね」

「はい」美千子は、うなずいた。

タクシーの中で成夫は美千子の耳を噛み、乳房を測るように弄^{いじ}っていたが、やがて強く抓り上げた。美千子は呻いた。

「虐めなきゃ面白くないんだ」

彼は美千子の耳を噛みながら小声で言い、

「どんなにでも……」と美千子は答えた。

車を降りて、我家へ至るせまい石段を登るときに美千子は外套を脱がされ、それを胸に抱えながら腰のくびれをびしびし叩かれた。

美千子は低く呻いて柔腰をくねらした。

家に到くと、成夫は美千子に風呂を焚^たかした。成夫は湯舟に身を沈め、はいつて来た美千子をそのままスノコの上に立たして魅を観察した。彼は、この年上の女の肉体が均斉を保ち、若く緊^しまった曲線美を備えているのに

えも云われぬ満足を覚えたらしくて、暫く声を失っていた。

「いかがですか、お坊っちゃま……」

美千子は笑^えみをたたえながら、ゆっくりと背中を向けた。

「どう、お坊っちゃま？」

「悪くない。いい魅してるね」成夫は湯舟から出て濡れた手で白い臀を打った。

「アア……」美千子はぶるっと胴顫^{おそ}いた。

寒さのためのようでもあり、興奮のためのようでもあった。

「いい魅だ。こないだいい魅してるとは思わなかった。さぞ味もいいんだろうな」

「まあ、厭——」

美千子は微笑を唇に刻んで、成夫の手を把^と

って乳房へ誘い、

「いじめて！」

熱い息で言った。

噛まれる。白い肌のいたるところを鋭く深くえぐるように噛まれる。堪えかねた悲鳴が

美千子の唇から噴きこぼれた。

「痛い……痛い……」

美千子は前のタイル壁に双手を突いた。優美な腰が、ぐうっと彎曲した。

成夫はゴムホースで烈しく撲った。美千子の悲鳴がタイル壁に飴^なする。

○

部屋の中で、成夫は「レール」というプレイをさせた。

柱から柱へ荒縄を張って美千子にまたがらせ、ロープを架線にして歩かせる責めであった。荒縄は美千子の乳房の高さにぴいんと張られていて、それをまたぐと、縄は一そう鋭く張りつめた。

「かんにんして……」

美千子は、架線の上の艶めかしい白い電車と化^なって後手に括^{くわ}られると、蒼ざめた顔色になった。

「さあ、歩け！」

成夫はワニ革のベルトで美千子の尻を撲つ

た。縄レールの上を美しい白い電車が行く。柔肌を紅く染めて、泣きながら、うめきながら、腰を悶えさせながら、びしっびしっ尻を撲たれて前へ進む。ようやく渡り切ると、今度は乳房を撲たれながらうしろむきにいざらされるのだった。雪肌は血をにじませ、妖しく無惨な眺めだった。

「も、もう……ゆるしてえ」

電灯の真下で美千子の美貌は苦痛にゆがみ火のような熱いくるしい息を吐いた。

(六)

年が明ける。明けて正月二日の日に島野美千子は、盛り場の飲み屋のおやじの許へ行った。今夜ここで成夫と落ち合う約束でもあったし、また美千子はおやじに頼みたいこともあった。訪問着姿で現われた美千子の容姿は目も綾な美しさであった。

「おめでとうございます」

陰気なむさくらしい三畳間に三つ指を突くと、ときならぬ場所にぱあっと大輪の花が咲き出でた印象であった。その真新しい華やかな衣裳は、成夫が買い与えたものだろうとおやじは察した。

「うまくいっているらしいな」

「ええ、おかげさまで……」

「坊っちゃんの実めには馴れたかい。毎晩、悲鳴を挙げているんだろう、え？」

美千子は皓齒をこぼしてわらった。

「ご想像におまかせしますわ」

「おい、たまらねえな、色っぽくて」

おやじは、にじり寄って臀に手を伸ばす。

「駄目よう、お坊ちゃまに叱られます……」

美千子は、しかしわずかに身をよじったただけでおやじの手を強いて拒まなかった。

「撫でるだけよ、つねったりしないで……新しい痣がついたらバレちゃうから」

「わかってるよ」

「ねえ、どなたか私の子供を預ってくれるとこないかしら？ お坊ちゃま、娘の前でも平気で私をお責めになるから珠美がおびえて泣き出したりして困るんです。教育上よろしくありませんわ。母親がすっ裸になって鞭打ちされる姿を見せるなんてのね」

「なるほど、そいつは困るだろうな」

娘を預ってくれる人を、心がけて探してやろうと、おやじは云った。

「お願いしますわ。——ああもうかんにんして。痣になっちゃうわ。いや！ほんとにもう勘忍して！」

美千子は細腰を蛇のようにくねらして、壁

際にへばりついて香わしい荒い息を吐いた。

彼女は日頃の習慣から無意識に手をうしろへまわして縛られる手つきをしていた。ハッと気付いて慌てて手を元に戻した。

「なんだよう、縛ってくれというんじゃねえのか？」

「くせになってるものですから……」

「これ。そう逃げ腰にならねえで、じっとしていねえか」

「もうよして、かんにんしてよう……ああ着物が破れちゃうわ」

「裸になんなよ」

「なにを云うの。わたしの躰はお坊ちゃまの物なのよ」

「いいじゃねえか。あの成金の道楽息子に、そう操を立てるない」

「キスだけで勘忍して」

美千子はぐいっと腰をひねって向きを変え首をねじむけて紅い小さな唇を突き出した。誰よりも巧みな濃厚なおやじの口づけが美千子の口をひたした。

「ああ、ううう」

美千子が、思わず甘美に悶えだしたとき、店の前にタクシーがとまり、成夫の声が聴え

た。おやじは泥棒猫のようにさつと店の中へはいった。間一髪、成夫が店へはいつて来ると、おやじはしゃあしゃあとして新年の挨拶を云い、祝儀にありついたらしく、

「こ、こりゃどうも……ささ、坊ちゃん。坊ちゃんの美しい飼猫が奥で待ってますよ、頸を長くしてね」

「たまには、おやじのところでも飲んでやろう。酒の仕度をして持って来な」

横柄な言葉を残して成夫は、三畳間にはいつて来た。美千子は立ち上って彼を迎え口づけをした。唇をほどくとこの若い好色な暴君は、平手でびしっびしと美千子の臀を撲ち据えた。美千子は、羽織を脱いで柱に寄り縋り、着物にびっちり包まれた丸い隆起を烈しい平手打ちの雨にゆだねた。

「帯を解け」

「はい……」

しぶい朱錆色の帯が、錦蛇のように彼女の腰から落ちて畳にとぐろを巻いた。白い長襦袢に紅いしごきを締めた姿は、夜の伽をつとめる花柳の美妓のように艶であつた。

美千子はパンティを除くと白い腰をさらけ出して成夫の膝のうゑに伏した。

「お坊ちゃま、明けましておめでとうござい

ます。いいえ、このとおりむき身を出しましておめでとうございます。今年もどうか美千子をよろしく、どうぞ見捨てないで、どんなひどい責めでもなさってくださいまし」

胡桃のような肌に去年の青痣が散らばっており、成夫はその数を算えるように撫でまわし、それからおやじの手垢のついた古風な大ソロバンを押しつけて白い肌を挽いた。美千子は悲鳴を洩らして腰をくねらした。

「もう髪が擦れてしまつて……」

美千子は起き上つてはつれ毛を搔上げると艶然と囁い、衿を大きくくつろげて乳房を露呈した。獐犢な鮫のように歯を剥いて成夫の顔が迫り、きしきしと音をたてて嚙んだ。

「ああああ……」

美千子の唇から悲鳴が噴きこぼれたとき、酒肴の膳部を抱えておやじがはいつて来た。

おやじは膳をそこに放置して淫虐の光景に見入った。成夫は責めをやめずに横目でおやじの姿を見ると、「しっしっ」犬を追う手付きをし、おやじは慌てて消えた。

成夫は酒をくらいながら、年上の女の豊熟した肉体を思うさま責め廻つて、悦虐に爛れる。メチル酒を飲むと成夫の嗜虐癖は火のうにたけつて、残酷をきわめるのだった。真

鍮の火箸で乳房を責め、這わせた腰肉を激しく算盤で挽き、赤い血の条を曳かせた。更に酒と悦虐とに酔い痴れて、美千子をギシギシと縛りあげたまま酔いつぶれた。

美千子は店に居るおやじを呼んで手足の縄を解いてくれるように頼んだ。おやじはあきらかに獣欲の徒になっていた。意識不明の成夫の軀を荷物のようにかたわらに抛り出すと美千子の縛めをそのままにして襲いかかったのだった。

(七)

春三月である。岩清成夫は吉野多加子の娘葉子と華燭の典を挙げた。父親の情婦の娘を妻に迎えたわけである。葉子は芳紀十九才、人々の噂では並ぶものがないほどの美人だそうである。

美千子は逢つたことはないが、吉野多加子に対しては胸中優越感を覚えていた。顔、肉体、年令あらゆる点から、噂に高い吉野未亡人を凌駕していると自負していた。

「けれどねえ、十九才のお嬢さんにはとても太刀打ち出来ないわ」

茶の間の窓辺に倚つて、晴天の早春の海を俯瞰しながら、島野美千子は白い頬を淋しそ

うにゆがめた。

「私、今月の四日で、もう二十八になったんですもの……見捨てられたって仕方がない」
「それで、あのバカ息子は手切金はくれたのかい？」

飲み屋のおやじは、美千子の髪を匂いながら言う。

「ええ。退職金だといって、幾らかはね」

「退職金？ ウフフ、この牀の退職金だな」

窓辺の木椅子に坐る美千子のピンクいろのセーターの胸に、おやじの手が伸びた。

「あら、いきなり……よしてよ」

「いいじゃねえか、おとなしくしてな。——ところで、今日僕をここに呼んだわけはなんだい？」

「また私の買手を探して欲しいのよ。頼むわ小父さん。誰かいい、永続きのするパトロンを世話してくださいな」

「ああ心得た。おまえのためなら女げんの真似も、いとわないぜ」

「ありがとう。変な御縁だけど、私はこの世間でおじさんだけが頼りだわ。——待って、脱ぐわ」

窓を洩れる春の陽ざしに澄んだ瞳をきらめかして、美千子はセーターを脱いだ。ブラジ

ヤーを足許に投げて、ぶるっと白い乳房を露呈した。

「綺麗でしょう。青痣が消えたから」

美千子は娘のクレヨンをとって乳首になすりつけたが色は出なかった。珠美は他家に預けられることなく母の許に置かれていた。

「うむ綺麗だ。娘々した若々しい肌だ……小便可さい小娘なんかひけはとらねえ。成夫の奴、もったいねえことをしたもんだ」

おやじは輪ゴムで乳房の先端を緊縛した。

「うううう」美千子は烈しくうめく。成夫と手が切れて、ひさしぶりの被虐感である。

「あああ、痛い……」

「おい。成夫の奴は、どんな責め方をしていたのだ」

「もう忘れたわ……」

「忘れちゃいねえ筈だ。さあ云わねえか！」

「あううう、お乳が挽げそう。痛い！……成夫のことなんか、もうどうだっていいでしょう。おじさまの責めが素敵だわ。あああ」

美千子は、なめらかな白いのどを、大きくのけぞらした。

日向の畳に広い和紙が敷かれ、硯と筆が用意された。和紙は畳にピンで止められた。その仕度をしておやじは、台所の板土間で美千

子を全裸に剥いた。美千子はタイルの流し台のふちをつかんで、馬乗り遊びの馬のように背を平らにして腰部を突き出した。

「ねえ。おしりも、もう責め痣は消えてるでしょう？」

クルミいろに光る美しい臀部を惜しげもなくだいたんに展示して、美千子は、うす紅くびを染めていた。

「すこし羞かしいわ、わたし……」

「うそ吐け」

「まあ、ひどい。嘘じゃないわ」

「可愛いかったようにやがる」

「早く鞭を浴びせてよ。じらさないでいじめて下さい」

おやじは、美千子の夫の遺品である海軍バンドを鞭にして、白い双臀を痛々しくまっ赤に染めあげた。そして泣き叫ぶ美千子をそのまま茶の間へ引きずって行って腰に縄を掛けて筆をはさみつけ、畳の和紙に字を書かせた。

柔らかく腰がくねって、明瞭に、「マゾおんな」という文字を綴り終わると、美千子はとたんに哀しい感情が、どっと衝きあげて来て、畳にまろんで哭いた。

「マゾ女が、マゾ女と書いたのだからあたり

めえじゃねえか。なにもそう、うろたえて泣くことはねえ」

「でも、何か不当に私を辱かしめてるわ……

それが哀しくてくやしいのよ」

「ああ分かったから、そこに這いな。今度は竹笥で打ってやるぜ」

おやじは笑いのめして言った。

「もういやよ」

「なんだと——」

「いやよ」

美千子はすばやく起き上ってスプリング・コートを裸体に羽織ると、勝手口から外へ飛び出して行った。

(八)

美千子は石段を小走りに登りつめて、熊笹の繁る小径を山の方へむかって駆け出した。うしろから追って来るおやじの毛の薄い後頭部が春の日に光った。美千子は笹の葉を鳴らしながら一心に駆けた。やがて柔らかな春草におおわれた小草原に出ると、美千子はそのグリーンのしとねにゆっくりと倒れ伏した。

ほどなく、おやじが追いついて来た。

「ごめんなさい」

纖腰を起こして、美千子はほえんだ。

「本気で逃げたわけじゃないの。かんにんしてね」

彼女は言った。

「いいところだな、静かだよ」

と、おやじは辺りへ目をむけた。

森の奥からキジやコジュケイの啼き声が洩れ、前は熊笹の群落を越えて波止場と紺碧の海と、海原はるかな淡紫色の島影まで一望に見はらされた。

「気分が落ち着いたわ」

美千子は、立ち上ってコートを脱いだ。

燦々たる春の太陽のもとに全裸身をさらして数歩をあゆみ、場所をえらんで高々と這った。その肢体は、均斉のとれた鹿のように美しかった。双丘が陽に白く映え、うなだれた双つの乳房は、柔らかな影を草のうえに宿した。竹笥が唸り美千子の澄んだ悲鳴が小草原にながれた。おやじは、やがて竹笥に代わって熊笹の束で撲ちしばきだした。

「ああ、貴男——」

美千子は蛇のように細腰をくねらした。

○

「妊娠するわ、きつと。——予感がするの」

ぐったりと仰臥して乳房と腹に太陽を浴びながら美千子は呟いた。おやじは美千子の腹

に頭を載せて煙草を喫っている。

「俺の子を産んでくれ……」

「一服、喫わして——」

美千子は煙草をねだり、しかしたちまちむせて咳込んだ。細い眉をしかめて涙ぐんだ。「彫刻のような躰だ、おまえの躰はよ」おやじはうごめいて、白いのど辺りに舌を這わせだした。

「すこし休ませて……」

美千子はあえいだ。その乳房を鋭く熊笹の鞭が打った。肌がぱっと紅く染まり、悲鳴が口を洩れ、身悶えが起こった。

「儂と一緒にならねえか」

と、笹で颯りつづけながらおやじは云う。「ちゃんと籍に入れて結婚式をあげるんだ。あんな店でもおまえと二人でやっていけば、儂ら三人喰えねえことはないだろう。娘だっ て女学校ぐらいまではやってやれようじゃねえか。儂はもうおまえを他の男に世話する気がしねえんだ」

美千子は臉をひらいて青い空を仰いだ。春の空は希望の色をたたえていた。

乱

調

の

美

文 と 画

牧 高 志

とき……明治、大正、昭和つまびらか詳かならず。
ところ……同様、一向に定さだかならず。

○

その日は少し曇っていましたが、元旦、朝から早々とお化粧して、日頃仲良しのかおると美喜子、それにあたし理恵の三人は、はしやぎながら一緒に揃って観音様へお詣りに行ったんです。

そしてその帰り途、丁度、仲見世を通過して横町へ曲ったとたん、いきなり竹藪の中からえたいの知れない男達がバラバラ……と飛び出して来たかと思うと、あッという間に三人共、捻じ伏せられ、素早く縄をかけられてしまったんです。

「フンフン、それはまあ、とんだ災難でした

ね。それでどんな風に襲って……いや襲われました？」

お正月だから、皆んな自由のきかぬ、お振袖の晴着でしょう。あっちこちと、お着物の袂や裾が邪魔になって、もがいているうちに、とうとう両手を、後ろに回され、手首を揃えて重ねた上から、きつく縛られ、鹿の子の帯揚げの上から胸が痛くなる程、縄を巻きつけられたんです。

「ウム、それで三人共、同じようにして、縛られたの？」

いいえ……かおるは、ぶ厚い袋帯の上からぐるぐる巻に縛られ、お振袖の着物の前をあけて、ていねいに緋縮緬の長襦袢の間から縄をくぐらせてから、後ろでギュウツと締めあ

げられました。

また、美喜子の方は足早く、一等早く逃げ出そうとして、前へ転んだ処を、上からぎゅうっと押さえつけられ、足袋はだしのまま、地面にびったりと坐らされて両手を後ろに回し、何度も縄を胸や腕にかけられて縛られた挙句、鼠色に薄汚れた男の下着みたいな布切れで猿轡されて頬がくびれているのが、よく見えました。

「それから三人とも散り散りバラバラになって、君一人だけが例の荒れ寺へ連れて行かれたって訳なんだね」

いいえ、最初はそうじゃないんです……。初めから何か男達には魂胆があったと見えて一人宛、妙な具合に縛ったあたし達を、そ

ばに待たしてあった小型車に、ぎゅうぎゅうに押し込め、小一時間余り走り廻った処で、強制下車させられたのですが、そこで嚴重に目かくしされて何度も敷居を跨ぎ、最後に、ひんやりする部屋へ放り込まれちゃったんです。窓がないから、きっと地下牢だったかも知れません。

「この女は……（とあたしの方を指さして）どん亀和尚が欲しいタイプだから無傷のまま柱に縛って、しばらくシヨウを見物させてやろうじゃないか？」

「それがよからう」ときまってあたしだけは、ともかく地上へ登る階段の細柱へ立ったまま縛りつけられたのです。

「ちょっと待って下さい。このあとで、あなたが世にも奇怪な人身御供になるお話は、後程ゆっくり承ることにして、お友達のかおるさんや美喜子さんの方は一体全体、どうなったんです？」

あたしの場合、もともと人身御供だって初めから手心を加えた芝居といえは芝居的だったかも知れません。けれども、かおるや、



お美喜の方は筋のないズバリ本番責めでしたので、本当に可哀そうでした。

かおるは丁度、丸組みの帯締め結び目のあたりの、お端折のすぐ下に、トゲトゲしく毛ば立った荒縄がぎゅうツと一本喰い込み、綺麗に着付けていた晴着が乱れて、そのためか長襦袢の合わせ目が二つに分かれ、その間から赤いメリンスのお腰がチラチラと見えていました。

「吊っちまえッ」という号令と共に、かおる

の長い振袖がダラリと垂れて、そのまま三米ばかり高く宙ぶらりんに吊られてしまいました。チラッと光る閃光に、白い足袋をバタバタさせているのが見えましたが、私たちだって縛られてるんですものどうすることも出来ませんでした。

一方「あれー許して……」と力一杯叫ぶ、かおるの悲鳴で、それまで縄尻をとられて部屋の片隅にうずくまっていた美喜子は、矢もたてもたまらなくなつたのでしよう、矢庭に駆け出そうとして、階段目がけて走り出

したのでしたが、縄尻がピンと張ったままでたぐられて、男衆の手で再び抱きすくめられてしまったのです。

「この女めッ。またまた、なめたことを、しやがって。おいッ、見せしめのために、この帯を解いてヤンな……真裸にするンだよ。早くしろいッ」

美喜子の縄は、やや手間取って解かれましたが、嫌がるのを後ろから男がぐつと羽交い締めにし、別の前の男は美喜子の紅総絞り縮

緬の帯揚げを衿裏や帯の下から脱ぎ、紅白の帯じめを解き、ふくら雀結びの帯の帯枕を取ると共に、左右の羽根も一挙に崩してしまいました。

スルスルッと帯が解かれると、続いて腰紐をとり伊達じめを解いて、それこそ目も覚めるような鳳凰模様の振袖がパリと床の上へ落ちると、あとは燃えるような緋縮緬の長襦袢一枚という無残さ……。

「何をぐずぐずしてゐるんだ。早くこれも脱がせるんだ……」

今度は、別の第三の男が美喜子の前へ回って、細めの伊達巻を解き、赤い長襦袢を脱がせ、とうとうピンク色の鮮かな裾除け一つにしてしまいました。

「取るんだよ、それも……」

美喜子は一瞬苦痛に満ちた顔で身をもだえたようでしたが、その都度、後ろから両手をギュウッと握られているのがねじ上げられるので、抵抗することも許されなかったようです。

裾除けの紐が解かれると……あたし達、このお正月だけは純日本式にしましょう、などと前々からお約束し、本当のことを申し上げますと、パンティ類は一切やめて、昔風なお腰

巻一枚だけで歩き廻っていたのです。

ですから大変……とうとう、とんだ事になってしまいました。

「ヘッヘッヘッ……何だい。今時、珍しいじゃないか。おいッ、この女共は腰巻をしとるぞ」

美喜子は、踊りのお師匠さんが特に縫ってくれたという、白い腰布に真新しい紐のついた赤いメリンスのお腰をぴっちり締め居り、約束通りパンティ類は一つも身に着けていませんでした。

「親方ッ。赤い腰巻だけでこの女を、こっぴどく責めちゃ如何です？ 時代劇そっくりの目の保養が、たっぷりと出来ますぜ……おい皆んな、そうだろう？」

いっその事、素っ裸にされてしまえば諦めもついたでしょうが、振袖を脱がされた乱調の挙句の果てが、赤いお腰一枚というのは余りにも無残美が逆に高調された形となり、お腰の中のおぶなさを前提とした責めの風景は——柱に縛られたまま、すべてよく見るんだと、そばから強制されても、羞かしさが先に立って、ぶるぶる身体が震えて仕方がありませんでした。

あとで、あたし達が無事、救い出されて、

かおるや美喜子と逢いそれからあとの話を聞くと、チンピラな男達は女の操をどうのこうのというのではなくて、晴着に魅せられ、下手くそなライトを照射して、怪しいカメラに撮りたかったのだそうです。

吊られたかおるは、空想も空想、出来もしないのに振袖の晴着女の燦製と称する人肉料理の素材として、また赤いお腰で転げ廻った美喜子は、女とお腰というピンク映画のテーマの材料にされたようです。

理恵の場合は、どうしたかって？……じゃ申し上げますわ。でも、最後まで笑わないで聞いて下さいよ。

「どうだい？ よく責め風景が拝めたかい。今度はお前の番だよ」と、ようやく柱から縄を解かれたあたしは、宙吊りになって空しく回転している晴れ着姿のかおると、目も鮮かな真紅お腰一枚のまま磔のような恰好をさせられている美喜子の哀れな姿をよそ眼で見ながら、例の小型車にひとりぽっち乗せられてヌルヌル海坊主と悪名高い、どん亀和尚の居る女衞寺へと運ばれて行ったのです。

○

「来たかい、待ってたぜ。ここは瑞巖寺といつてな、昔から由緒あるお寺なのに世間の奴

等は女衞寺と吐かしやがる。ただ、何分にも金もない荒れ放題の寺でさあ、御覧の通りだなあ。それにしてもよく来た。早速上って貰ってといたいが、畳が抜けるかも知れんから、縁側の柱に縄尻を縛りつけて腰を降ろして、まあ、わしの話から聞いて呉れ……」

「和尚ッ。この女は初めから何でもよくききますぜ。そういっちゃ、おべっかに取られるかも知れんが万事、和尚好みぴったり。徹頭徹尾、仕込んでやってくんなさいよ。どうです、この縛られっ振りのいいこと……それにうるんだような、このまなこ」

「うるさいな、お前は黙らっしゃい。娘御、失礼しました。何を眺めとるのじゃ。ああ、これかい。これは、わしの越中禪で、その横に干してあるのは、先頃成仏した、おせんという女の湯巻なのじゃ。おせんは、いい女じやった。わしの欲望が次第に高まってくると荒縄を持ち出し、進んでわしの責苦を受けて呉れた。まだ卒塔婆は作って居らんが、庭先にこんもりと土が盛ってあるのが、おせんの墓だアな。」

縁の下を御覧。青竹、荒縄、たくわん石に早桶まで、揃えてある。おせんは……いや、おせんばかりじゃない。ここへ連れて来た文

金高島田の娘でも、あんたみたいに初詣や婚礼の披露宴から戻る途中、拐された本振袖の令嬢達も、終まいには皆んなわしのいう通り両手を後手に縛られて、朝から晩まで奉仕して呉れたンだよ。

わしゃ、こんな風通しのよい粗衣を年中、着とるが、女達には、ぐうたらな恰好はビタ一文も許さなかった。だから時折、寺の中から女の悲鳴が聞こえるのは、何処ぞの高級修道院みたいに、夏でも帯を高々と結び晴れ着に身を包んだ若い女達の姿が陰翳したから訪れた客人は、まんず驚いとる始末だあな。

やあッ、これはまた長々と話を申した。では、あんたの本音を聞く前に、先ず衣裳を拝見するといくかな。地模様のある薄空色の綸子に金銀入りのししゅうの中振袖、豪華な帯に鹿の子絞りの帯揚げをきりりと結び上げ、裾が乱れて……もう少し左右を外側に披ろげると、左様、目も鮮かな緋色の長襦袢が出てくる序でに……もう少し左足を前に……そうですわ、長襦袢の下は同色の蹴出しに、もう一枚、同じく赤の腰巻という奴を嵌めていらっしやる。

成程、お嬢さん、あんたは典型的な日本の娘さんに違いない。パンティなどというもの

は寺の外で、はくもんですよ。

また、つまらんことを申したな。では早速縛り責苦の冥利、晴れ着の人身御供さんになって貰いましょうかい。

女は常々罪が深いから、悪の根源をたち切るためにも、因果な両手は後ろ手に縛られなくてはいならない。よろしいかな。勿論、盛装の晴れ着は何といっても女の生命だから、出来るだけ派手に、うんと豪華に着付けしても一向にかまわない。この絢爛無比、豪華な盛装が次第に乱れる時……おお、その時こそ、わしのいう乱調の美が忽然と現われて来るのじゃ。たとえ、瞬時であろうとも最高潮の美が閃き、堰を切ったような絶叫が、女の口から噴き出すように出てくるものだ。だから女衞寺の人身御供は、おつとめがすっかり終わった信者のように、終始至極、娛しいとまでほめはやす女も居る始末なンだよ。

さて人身御供殿は、この部屋の奥まった処に在る。お部屋の中は、真暗だ。百奴蠟燭が一本。あんたはそこで三日三晩、冷たい御供物台の上に仰向けに寝て、阿弥陀如来さまに一切、身をまかせなければならぬ。

ただここは人目のないのを幸い、誠に荒行でな。つまりじゃ、正月の晴れ着姿で両手を

後ろ手に、きつう縛り、帯から上は文字通り縄だらけにする。縛られ女地蔵といってよいかも知れぬ。また、台というても奥行が一米足らずだから、御仏前に対し、あんたの帯から下は丁度向かい合うようになる。白足袋のすぐ上を縛り、左右にくつと拡げて行く。長襦袢が開いて蹴出しや赤いお腰巻が充分、拡がった処で、縄尻を台脚に、しかとくくりつけるのじゃ。

つまり罪業の深い、およそ女の美と名の付く、もろもろのものは、すべて明からさまに阿弥陀如来の、おん前にさらけ出さなければならぬ。行事にしては淫に過ぎるじゃないかと、大方の叱責を受けるかも知れないが、決して左様なものではない。

阿弥陀如来の素朴な指先は、赤いお腰の周辺を万遍なく撫で給い、格調高い白鳥の羽の先端は、絶えずフワフワとそなたの上に飛び交い賜うのじゃ。

もしもこの御荒行に対し大声をあげて逆ろうたり抵抗しようとする女共は、即座に地下数十尺の地獄に蹴落とされ、身柄一切を閻魔大王にあずけてしまう。また、幸いにしてこの行を終えたる時は、更に陰と名の付く以外の女肉体から諸々の悪魔の霊を払い落とすた

めに、三三が九カ日、連日連夜、読経裡に身を苛められなくてはならない。勿論、晴れ着や帯は、しみをつけたり破れたりするであろうし、下着類は汗としみで、どろどろになり妙なる芳香を放つようになるであろう」

○

「どうじゃな。今日で、そなたは七日目。振袖も帯揚げも色が、すっかり褪せて参ったようじゃ。天井から、ぶら下ったり、荒庭の上へ坐らされたり、柱に縛りつけられて鞭を受けること数百回……よく辛抱しましたね。えらいッ、それでこそ正しく未来永劫成仏疑いなしじゃ。結構でした。それでは、ご寄進のしるしとして、その帯、帯揚げ、赤い腰巻の三点を置いて行きなされ。申し遅れとったが御供殿の隣のお納戸が、この寺の宝物殿なのじゃ。竿に懸けてあるのが御供になった娘達の帯。その下が、その女の帯揚げで、帯の裏に張ってある赤や桃色の腰巻は勿論愚僧の懇願で、ご寄進願ったもの……。やがて理恵とやらの三点も飾って進ぜように。ご得心が付きましたか。それはよかった。なるほど、きき分けのよい娘御じゃのう……」

なに？ いまなんと申されたかな？ わしも少しは耳が遠うはなったが、そんな小さな

声では若い者でも聞こえんわい。もそつとはつきりいうてみなされ。そんなに羞かしそうにせんならんようなことかな？

ふんふん、またこの行を修めに参詣してもいいかと云われるのじゃな。いいともいいとも、いつでも来なされ、それでこそ如来様のご慈悲も深こうなりますのじゃ。フッフ」

○

それでお終まい。ホッホッホッ、変な夢。新年早々から妙ちくりんな夢を見ちゃった。

「何ぁーんだ。夢だったの？」

そうよ。貴方本当だと思ったんでしょ。お馬鹿さんね。今の世の中に、こんなことである？ かおると、お美喜に逢って、この話をしたら、二人ともゲラゲラ笑い出したわよ。でも、もしも正夢としたら、神社やお寺へ初詣した晴れ着の姿の女の人、一人残らず吸い込まれて出て来ない筈よ。だけど生命に別条がなければ、胸高帯の晴れ着で後ろ手に縛られてみたいワ。来年は彼氏に縛られ、縄尻を取られてお詣りしてみようか知ら……

○

いやはや恐れ入りました。女心のお粗末を一席、悪筆ながら申上げました次第。

——(終)——

随想

狂気と天才

井上京喜



あらい・かず画

「狂気と天才は紙一重」とは、言い古された言葉である。

しかし、なぜ狂気と天才は似通っているのか、どこが違うか、という説明は、あまり聞かない。

私は、私なりにこう考えている。

「人並の考えと、人並な行動からは、人並の結果しか生まれない。異常な考え方と、異常な行動からこそ、天才偉人と呼ばれる成果が生まれる」と……と。

言ってみれば至極、当然なことである。しかし、これだけでは、狂気と天才との近似性は解るとしても、狂気と天才の区別はできない。

私は、狂気を二つに分けて、固定した狂気と、変化する狂気と呼ぶことにした。

固定した狂気とは、同じことを繰り返す狂気である。あるいは、自己満足と言っても良いだろう。

釣りキチガイ、マージャンキチガイ、野球キチガイ、等々、それぞれの趣味、道楽が、程度を越えると「キチガイ」と呼ばれる。それらの「キチガイ」は、十年一日の如く、同じことを繰り返し、ただそれを楽しんで居るだけで進歩とか変化とか言うことは、あまり

見られないように思われる。

坂田三吉も一人の将棋キチガイであった。

しかし、坂田三吉には、世間並の常識はなかった。彼には、素人と本職、有段、無段の区別は存在しなかった。勝負事をする以上は誰でも負けたくないと思えるが、凡人は、限界とか、段階を考える。そしてあきらめる。しかし、坂田三吉には、平凡な常識がなかったからこそ、相手が本職であろうと、有段者であろうと、負けたことをあきらめることができなかった。常に工夫し、時には、高段者も戸惑う程の常識はずれの手を打つこともあった。この常識を打破る変化こそ、天才への道ではないだろうか。

コペルニクスは、太陽や星が動くのではなくて、大地が、つまり、地球が動くのだと言った。アインシュタインは、空間は曲り、平行線は存在せず、時間は、計るものの速さによって変わると、未だに凡人には理解できない相対性原理によって、原子力の秘密を解き明かした。

紀の国屋文左衛門は、嵐の海を乗り切ったから豪商になった。

天才偉人、立身出世をした人々は、大なり小なり、何等かの異常な行動があったもので

ある。

ところで、一体何のために、このような屁理屈を並べたのか、賢明な読者はすでにお気づきであろう。

異常こそ、天才への道であるとは、異常文学への礼讃であり、奇クへの讃辞のつもりである。と同時に、変化を求めることは、時折見かける「マンネリ化」への警告でもある。女を裸にして縛る。ただそれだけを、同じことを繰り返していたのでは、本当の気狂いでしかない。

私は、マルキ・ド・サドの映画を見た。画面の中の縛られ、責められる女からは、異常性格や、エロチックな感情は何も感じることではできなかった。強烈な社会風刺だけが、私に灼きつけられた。

マルキ・ド・サドは、世間の悪評とは全く別で、彼にとって、女の責めは、それ自体が趣味や目的ではなくて、社会風刺の表現を強烈にするための一手段でしかなかったのではないかと思われた。

私は、奇クに、それ程までの文学性を求めるわけではないが、カメラとペンを持って、商業誌に書く以上は、それなりの努力と才覚

が望ましいと思うのである。

女は、ただ裸にすれば良いと言うものではない。縛り方や、ポーズをいくらか変えて見た所で、それ程変わりばえするものでもない。

常識を越えた変化、それは、むしろ奇クの本来の姿ではなかったのか。他誌では絶対に見られない異常な世界、慣習や常識にとられない自由な世界、それが奇クの特徴ではないのだろうか。

それが只単に、女の裸を見せるだけのエロ本になり下ったのでは、色付週刊誌の方がまだましだと言いたくもなる。

少しばかり説明してみよう。

女の美しい素肌が見たい。だからと言って素裸にすることしか考えられないのでは、只の凡人、色キチガイでしかない。逆に、着せることを考えるのが、奇クらしい考え方であろう。

女には、全裸以上に恥かしい姿というものがある。過去の奇クの中から幾つかを拾って見ても、オシメカバー、褌、バタフライ、半分押し下げたパンティ、等々。

更に最近では世の中変わって、男性にとって

誠に楽しい時代である。一昔前までは、エロ本の類でしか見られなかった、透明な衣裳がシースルーの名によって、堂々と街にはらんしている。素肌にシースルーを着せて見たいと思うのは私一人の異常だろうか。

ビニールと言うSMびったりの素材が豊富に出廻っているのに、なぜ昔ながらのゴムにこだわるのだろうか。

着せるのがどうしてもいやなら、塗ったり描いたりしてもいいだろう。ほら、ボディペイント。

女の局部を隠すにしても、花、傘、お面、その色々の小道具、小猫、小犬と言った小動物、果物、野菜、等々。無粋な白線等御無用に願いたい。

とは言っても、これまでに書いたことは、数多くの雑誌、週刊誌で見られることでもあり、常識的な衣裳の一部を省略する（一部だけを残す）という形でしかない。

思い切った素材の変化、場所の変化、上下前後の変化、性別の変化等、できないことでもない。殊に最近では、街にもテレビにも、性別不明みたいな人間がいっぱいである。女に男性用下着を着せて見ては？

きちんと着せる必要もない。好きな所に、

好きなものをひっかけて、下着ショウというの如何であらうか。

切り取るのも楽しいものだ。素肌に、ナイトドレス風のもの、あるいは、極く平凡な街で見かける衣裳を着けておいて、好きな所を切り取って行く。

さらに、濡らす、汚す、塗る、……

裸になれたモデルさんでも、恥かしがり、いやだと言うかも知れない。だから縛って無理やりに、と言うことになる。

もうお分かりでしょう。縛るにしても、ロブと決めることはない。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

糸、紐、縄、鎖、針金、帯、ビニールテープ等々。鎖は近頃、アクセサリーとして様々な美しいものが出廻っている。女が身につけていた鎖でそのまま……そう、鎖と限ること

はない。そう言えば、近頃は首輪みたいなものや、やたらに紐の多い服装も、よく見られるようになった。女の衣裳をそのまま女の自由を奪うことに利用できるだろう。

そう、女を縛るのではなくて、自由を奪いさえすればよいのだから。

線から面へ、面から立体へ、水面思考から立体思考へと移ろう。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

面と言え、張り薬と言うのがある、ペタツと張り付けるだけで簡単だが、簡単には取れない。薬効もあって、むずむずひりひり、場所によっては、薬公害に御注意を。

昔、簀巻というのがあった。荒むしろでは楽しみはないが、ビニール巻、漁網包みとなれば、金網はちょっときつ過ぎるかな。

立体と言え、箱や、檻しか思い付かないのは凡人である。電気コタツの四足に、女の四ツ足？を固定して、責めには電気を点けて。椅子は、腰掛けるだけのものではない。

女に椅子を乗せて、そう空間的な広がりの中で好きな所に女の体を固定させる。つまり、平面的な張付けではなくて、手や足を空間の好きな方向へ向けて上げさせる、等々。

思い当たるままに拾ってみたが、もちろんこれが総てではない。ともかくも常識や慣習にとらわれない自由な変化、それが奇クの本命でもあるうし、マンネリを打破する道でもあり、人々を楽しませるものであり、只のエロ本からの脱出でもあるう。

奇クを文学となし、天才偉人への道しるべと混同するも、しよせん異常狂気のたわごとと過ぎないだろうか。

懲 治 檻

懲治檻に渡されたジャンヌの場合は、いわばエリートコースを進んだと見てよい。何政なら、そこでは最初から意思を持った人間としての待遇がなされるからである。有明本陽三重菱縄という本格的な掛縄作法で自ら歩いて行けるということ自体、大きな名誉といわなければならない。

懲治檻の目的は虚善、すなわち、偽りの服従を曝き出し、容赦なく拷問檻に差し戻してしまうことなのである。

拷問檻は又、不服従者がその反抗心を消失して、完全に屈服するまで、徹底的に責め抜くための場である。

前者は検察と試練を意味し、後者で刑罰と洗脳を達成する。この国が要求している鋳型に合って行かない限り、この両檻から出ることは不可能といってよい。

F五五三号（張恵華）、F七五一号（清水由香）の二人は、拷問檻送りの女囚たちの中に混ざって順番を待っていた。一メートルほどの間隔をおいて巾広のコンベヤーの上にくくりつけられているのである。

膝と足首を夫々約五十センチ離してコンベ



第三十一回

ヤーに固定され、膝の線を底辺とする正三角形の頂点のあたりに首輪がとめられている。

胸と両膝の三点に支えられて嫌でも臀部をツキ上げた恰好にならざるを得ない。勿論両手は後手にククられているので、自分でこの拘束から逃れることは出来ない。拷問檻送りが一人増えるたびに、コンベヤーは一メートルずつ前進して行く。そのベルトが、きしって、キュー、キューという音が、彼女たちにひどく不吉な予感をあたえ、いっそう、おびえさせるのであった。

何度もうことだけれども、この国に来てはじめて五段階、七階級などと品定めさせら

れてしまったとはいっても、シャバにあったときは、或いは金持ちの令嬢、或いは美貌を誇るスター、或いは大会社の社長秘書等々、いずれも、その知性と美貌で知られた才媛ばかりだったのである。彼女等の周囲には蟻が蜜に集まるように、われこそはという若い男性が、むらがっていた。それだけに、知らず知らずのうちに男性を見下ろすようになっていた女たちも少なくないのである。全くのところ、何不自由なく人生を楽しんでいたものばかりだといってよからう。

前号まで「有明が君臨する地底の秘密国」には、世界中から数多の美女が誘拐されて来ている。彼女等は全裸の暮しを強いられ、ただ一人の男性であるマスター有明に隷従しなければならぬ。品質、服従度等により、五段七階のクラスに分類された裸女達は、悉く激しい訓練、又は調教の日々を送って行く。最下等のクラスは、家畜や家具としてしか扱われないが、上位に進むにつれて自由の程度が増し、マスターを助けて、この国を治める責任を分担するようになる。原潜ネプチューン号で陸揚げされた新入りに、こうした苛酷なレセプション（受け入れ作業）が行なわれていた。

それが、今はどうであろう。マルガレエテがいった。「ちょっとばかり美しうございまして。それがいけなかったのです」と。たしかに彼等に罪ありとすれば、美しく生まれ育ったことだけにすぎなかった。美しかったから有明の組織のねらうところとなった。そして、遙々と海を渡って、どことも知れない地底の王国で剥き出しの裸身をさらして、牛馬のように追い廻される、運命となってしまった。文字通り、裸一貫しか、頼るものもない。シャバにいたときの地位や名声は糞の役にも立たないのである。どんなベストドレッサーであっても、赤裸にされては肉体の材質だけが問題になるにすぎぬ。パットや何かで造りあげた偽りの姿体美は、ここでは通用しない。

F五五三号は豊満な臀部をピラミッドの頂点にしてブルブル慄えていた。すっかり洗滌され止血された今は、もう赤の屈辱を想像することもできなかったけれども、その代わり銀色に光るカプセルの端が「縫い目」の間から覗いている。銅のクラス以上では、日常、絶えず携行していなければならない身分証明のライセンスなのである。

コンベヤーが何回目かに停まったとき、思わず

「ヒイッ」

という声が喉を突きやぶった。カテーテルによって、強引に体液を吸いとられる。拷問檻へ送られて行く途中での粗相を防止するためである。

コンベヤーラインの終点に鉄檻に車輪をつけたような荷車が置いてあって、ここまで動いて来た女囚はベルトからはずされ、この檻の中に収容される。わずか畳一枚ほどの床面積なのに、あとからあとから追い込まれて、何と二十人ばかり。立錐の余地もないとは、このことだろう。ホワイト・アスパラガスの缶詰のように、立ったままギュウギュウに押し込まれたのである。何のことはない、山手線のラッシュアワーのようなものだ。乳房や腰が、汗に濡れた他人のそれとピッタリ押しつけられて不快な感触に悲鳴をあげる者もある。それより、檻の周辺に立ったのは、もつとみじめで、鉄格子に身体を圧迫され、目を白黒していた。

カジ棒には、牽引用に調教された畜位の女囚が六匹、繋ぎとめられている。檻が厳重に鍵をかけられて、護送かかりの下士官に送り

状が渡されると、アマゾン女兵が一人、御者台に乗って、ヒューッと鞭を鳴らせ、

「出発ッ！」

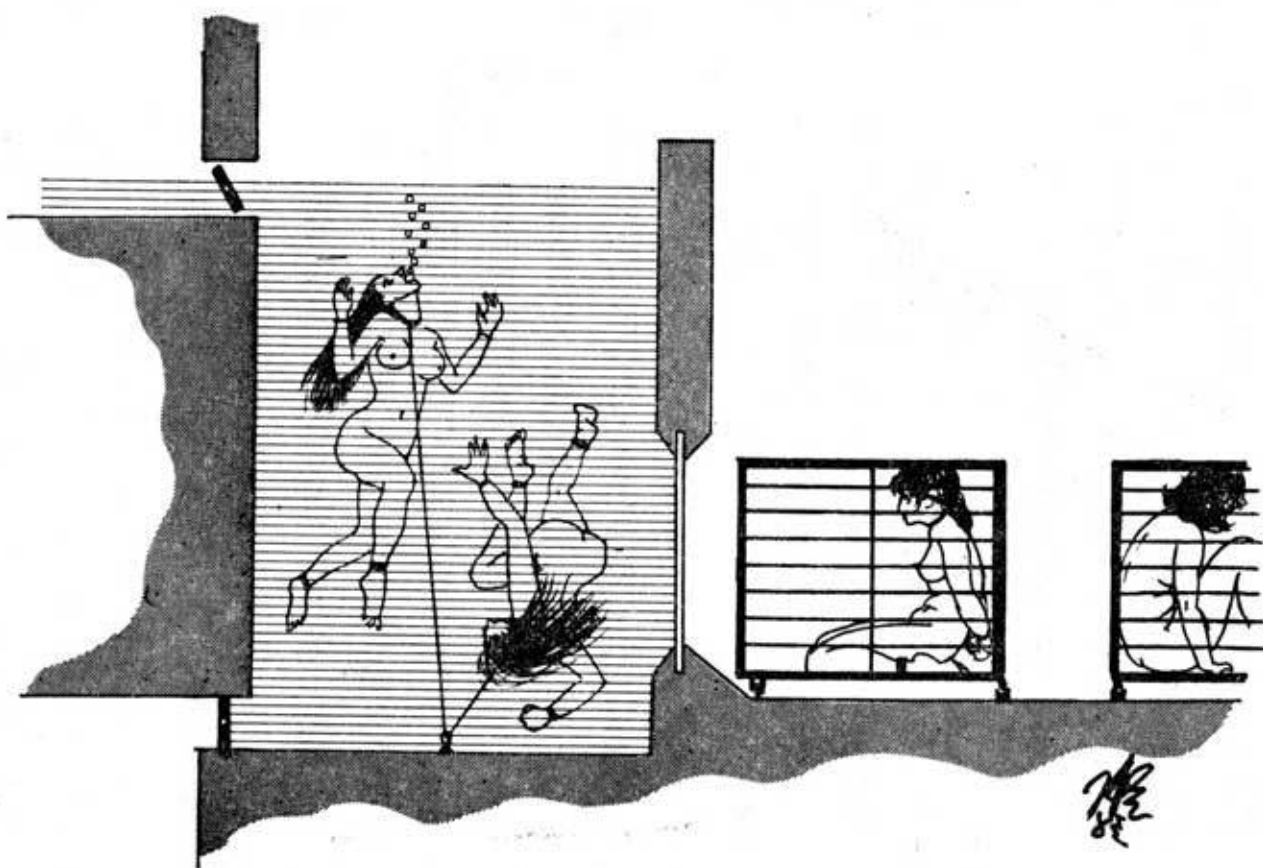
と叫んだ。

六匹の美畜は渾身の力をこめて曳きはじめた。ところが女囚を満載した荷車は重く、容易なことでは動き出さない。忽ち鞭がとぶ。六匹が六匹とも飛びあがって、必死のあがきをはじめた。みるみる美しい脊中に汗がふき出してきた。だが死にもの狂い、というときには、エライ力が出るものである。一見、不可能に見えた重そうな木の車が、ゴロツと一回転した。一旦動き出せば、比較的、楽になるのか、六匹はゴトゴトという荷車をひいて前進をはじめた。爆発しそうな心臓の鼓動を静め静め、切なげに舌を出してあえぎあえぎ、進むのである。

スプリングのない荷車は、ギシギシとゆれた。その度毎に、スシ詰めになった二十人の女囚は押し合いへし合いして、ハデな悲鳴をあげた。

ステンレスのギャグをかまされた上、絶対、声を立てることを許されない美畜たちには、それさえ羨ましく思えること

なのである。六匹の美しい曳き馬は目に涙を浮かべて、こんなことを考えながら、それでも黙々と進んで行く。



ここでも又、例によって、はずかしい人定検査が行なわれる。高さ八十センチほどのパイプのバーに腿を触れて立ち、上体を前に両手を床につけて支え、両足もギリギリまで開いて、四つん這いになるのである。反抗したって、押えつけてでも、そうした姿勢をとらされてしまう。

獄長がカプセルを取り、入れ墨された肉体番号と照合すると、収檻番号別に仕切られたストッカーの中にボンと抛り込んでしまう。収檻中はライセンスを没収されるのである。

拷問檻では、女囚は何一つ言う必要はないので、すべてが機械的に動いて行なってしまう。それだけに、叫ぼうが哀願しようが、女囚の声は一切、無視するよう、獄卒は義務づけられている。凡そ一カ月に一回、行なわれる巡回審問のときだけ出檻訴願の機会が与えられる。この時だけ、審問官は女囚の訴えを聞き、獄長の出した収檻記録と照合し、服従度が向上したかどうかを勘考する。

是とされた者は、直ちに懲治檻渡しとなるが、これは仲々むずかしいといわなければならぬ。何故なら、獄長はじめ獄卒は、何のかのと難クセをつけて、よい報告を審問官に提出しないからである。それが獄卒にとって

正当の義務とさえ、されているのである。間違つて良い判断を下した女囚が上級から差し戻されて来ると、獄卒は罰せられなければならない。逆に、間違つて悪い判断をしたとしても、罰せられるおそれはないのだから、当然、女囚に対して苛酷な評点をつけやすくなるのである。

拷問檻では、その名の通り、寝る時間以外は組織的な拷問で終始する。ただし、何かを自白させるための拷問でもなければ、刑罰としての拷問でもない。強いていえば拷問のための拷問であつて、女囚たちの心をハッキリこの国に定着せしめ、救いをあきらめさせる目的を持っている。

従つて、与えられる苦痛は常に鮮烈なものでなければならず、刺戟の重複による麻痺状態も、異常性誘発によるマゾ的現象も、共に嚴重に警戒されなければならない。女囚を拷問に狎れさせてはならないのだ。このため、専門のカウンセラーが配属されていて、獄吏とは別に、絶えず女囚の精神状態をチェックしている。又、あたえられる拷問自体も多種多様に亘り、古今東西の著名な拷問機具は、殆ど残らず蒐集されているといつてもよいであらう。

ただ一つ、ここで採用されていないジャンルは、永久に肉体や精神を損壊させてしまうような種類の器具である。たとえば、殺すことを目的とした鉄娘（アイアン・ドウター）や、永久に指を片輪にしてしまう「指つぶし器」などは、使用してはならないことになっているのだ。つまり、女囚の商品価値をおとしてしまうような拷問機具は使用を許されないのである。

シユーンというモーター音がして、扇形の部屋のかなめのあたりにユニット檻が出てきた。間口六十センチ、奥行八十センチ、高さ七十センチの箱型の檻で、構造部分をアングル鋼で、それにフェンスの金網のように角目波形番線で編んだ格子が取りつけてある。但し、前面上半分だけが強化ガラスになっている。このユニット檻は後下部にとりつけたコンペヤーチェーンによって横に移動するよう仕掛けになっていて、各檻との間隔は二十センチである。

両端をヘヤーピンのように、まるめたコンペヤーラインは、全長百メートル、ラインの延長二百メートルの循環式で、二百五十個のユニット檻をタクトシステムで回している。

この往復のコンペヤーラインに沿つて両側に拷問室が並んでいる。

ガラス窓の下のところ、F七五一というプラスチックの札が差し込まれたので、清水由香は、その犬小屋のような檻に自分が入れられるのだということを覚った。

「これが今日からのお前の個室となる。汚さないように住むんだよ」

アマゾン女兵だった獄長は、小肥りの身体を案外、敏速に動かして、由香の手錠をはずす。拷問檻はリタイアしたアマゾン女兵によって管理されている。彼女等は身体にピッタリ合ったタイツを着て、目だけを出した覆面をかぶっていた。

ガラス窓上部のロックを解錠すると、檻の前部が扉のように開く。おそろおそろ頭を入れようとすると、

「だめ、だめ。これは尻から入るのよ」

ガラス扉の方を向いて正坐させられる。何にしても、せまい。座高の高い由香は、正坐すると頭がつかえてしまう。

両側からパイプが挿し込まれ、たちまち由香の上体を背面に押しつけた姿勢で固定してしまった。

「昼間は、こうして正坐していること。用足

しは、丁度お尻の下に丸い穴が明いてるからその中にしなさい」

といいながら由香の首輪に細い鎖を通し、それを窓の外に引っ掛けて名札のフックに掛ける。前扉が閉まるとガチャンと鍵の落ちる音がした。

丁度、首のところを鎖にひかれ、腿のあたりを横パイプが通っているの、由香は、上体を曲げることができない。ステンレスの床が、とても冷たく感じられる。

「新入りは一日だけ拷問を免除してやる。このコンベヤーは朝の四時から、夜の八時まで十六時間かかってラインを一回、廻ることになっている。一カ所、約五分ずつ停まる。だから、おまえは、あしたのこの時間に再びここにあらわれてくることになる。そのあとでいよいよ拷問が始まるんだから、今日一日、よく覚悟を、きめておくんだよ。サア、時間だ。地獄めぐりの始まり、始まり」

最後を冗談めかして檻の角を叩く。丁度、そのときブザーが鳴って、由香を入れた檻は音もなく右手へ移動して行った。

臭 気 責 め

それは全く地獄図絵だった。

ユニット檻が静かに移動して行くにつれて張恵華の眼前に展開して行った光景は殆ど信じ難いものであった。

すべての拷問室はコンベヤーラインの方を明けはなして、檻ごと横に動いて行く女囚たちに拷問の有様を見せつけるような設計になっていたのである。したがって、責められないときには、正坐して他人が責められるのを見学していなければならぬ。たとえば間口が四メートルある拷問室の前には、ユニット檻が五ツ並んで、最高五人の女囚が、その部屋の拷問を見ることになる。そして、五分毎に一コマ移動するから、二十五分間は、その部屋で責め抜かれる仲間の阿鼻叫喚を聞きつづけなければならない。

叫喚とはいっても、恵華がはじめて見せけられた光景は無声の世界だった。それはコンベヤー側にガラスを張りつめた大きな水槽だった。その中で、水責めシーンが展開されつつあった。

水底にある滑車を通った一本の鎖の両端に二人の女囚がそれぞれ首輪をロックさせられていた。鎖の長さは、やっと水深の分しかな

い。言いかえれば片方が極限まで沈むことによって、漸く一方は水面に顔を出すことができる。呼吸が出来るのは、その瞬間だけなのだ。

この水槽は、上下に夫々同容積の予備水槽を持っているから、殆ど瞬間的に水を満したり、排水したりすることが出来る。勿論その速度も自由に調節できるから、拷問の種類や方法に応じて使い分けるのである。

はじめ、この二人の女囚は全く水のない状態で連縛され、それから徐々に水を注入して行ったのである。水深が鎖の長さの半分に達するまでは、どうやら二人共、同時に息をすることが、できたのだったが、それ以上、深くなってくると、どうしてもシーソーゲームをはじめなければならない。それも初期は、お互いに協調し合ってウマく交替することが可能だったのだけれど、水深が増すにつれてそうも行きかねる事情になってきた。一人が水底まで顔を沈めて、次に水面まで顔をあげる時間だけ、呼吸をツメていることが難かしくなったからである。勢い、シーソーゲームのテンポを早めなければならぬ。それでもダメなら、結局は力の強い方が勝つであろう。死ぬか生きるかということになれば、お互い

の協調は破れざるを得ない。二人は齒ガミして両足を踏んばり、少しでも自分の鼻先を水面に出そうとする。

張恵華が見たのは、二人の裸女が水中で必死のイガミ合いをはじめた瞬間だった。ゆらゆらと藻のように揺れる黒髪。互いに相手を蹴落とそうとするかのように、組んずほぐれつする白い肉塊。何かスローモーションで見ると印象的だった。

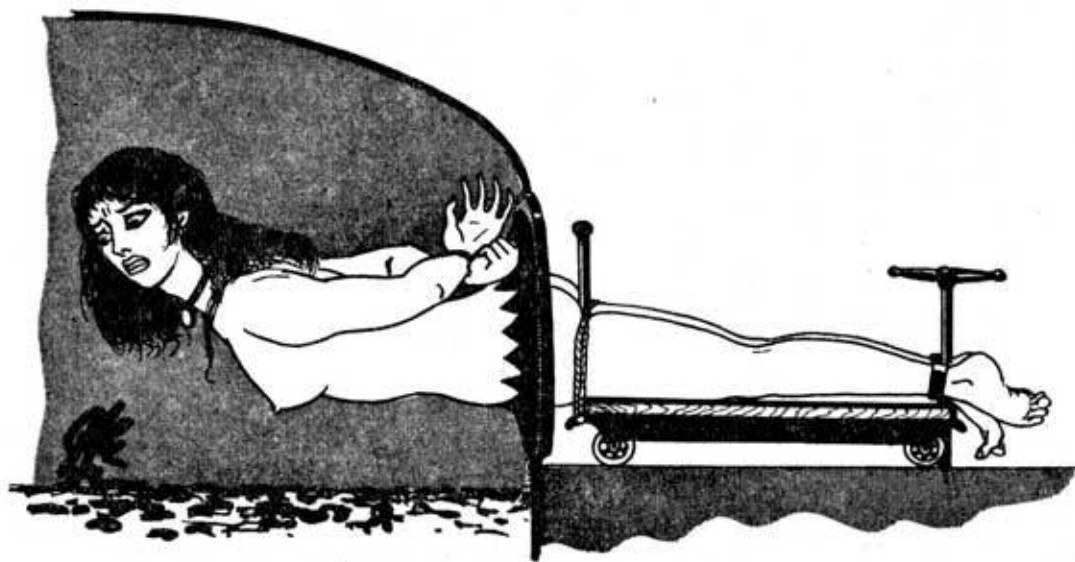
遂に一人が勝ったらしく、グリーンと水底から浮かび上ろうとする。水深は、もう彼女の背丈より二十センチも高い。どうしてもバタ足で水をかなければならぬ。そして、彼女の鼻先が、やっと水面に届こうとした瞬間、負けていた女の手が、その足に、からみついた。バランスを失った先の女は、気泡を一ぱい噴き出しながら、もう一度、水底に吸い込まれた。気泡を出しきったということは、反射的に水を吸い込んでしまったことを意味する。負けて勝った方の女は、してやったりとばかり、水面に突進する。ところが、残酷なことに、その時には、すでに水深が鎖の長さを超えてしまっていた。グッタリと水底に横たわった先の女を引っぱって、狂気のように

跳ね廻って見ても、鼻先は僅か数センチのことで水面に達することができない。みるみる限界が来る。

苦渋の色を顔にうかべた女は、口から鼻から胸孔に僅かに残っていた空気を吐き出してしまった。胸をカキむしるのは、その代わりに呑み込んだ水に、むせたのであろう。

溺れた者を救うには一刻を争う。瞬間的に排水が行なわれる。獄卒がとび降りてくると河岸へあがったマグロ

のようにのびている二人の両足を縛って、上から下りてきたクレーンに引っかける。二人の裸体は逆吊りになった。たちまち鼻と口から飲み込んだ水が、ドツとばかりに流れ出てくる。この苦痛は、大変なもので、それがかえって、二人を蘇生させるのに役立つのである。二人共、息を吹き返して、手足をバタバ



タさせて、もがき苦しむ。

こうした有様を、恵華は横に移動させられながら観察したのである。凍りついたような恐怖が、かえって目をそむける自由を奪っていた。それに、同じことが、いつか自分の身に及ぶのだと思えば、怖くても見ないわけにはゆかないのであった。

ユニット檻は静かに移動して行った。逆吊りの二人がどうなったか、見届けないままに恵華は次の拷問室を見ることになる。

そこは、まだ空っぽだった。黒いタイツで、身を包んだ獄卒が二人、立っていたが、丁度、恵華のケージ（ユニット檻のことを、この国では、こうも呼んでいた）から数えて、三つ先のケージから、一人の女囚を引き出した。おびえ切った裸女はガタガタ慄えながらうずくまってしまう。逃げることも抵抗することも考えられない様子である。

獄卒は犠牲者の手をねじりあげて、後手にロックした。

部屋の中央に一本の鉄柱が立っている。二メートル位の高さのところに、長さ一メートル程の横棒が突き出していた。その横棒から垂れ下っている鎖に女の後手を留める。女は自然、やや前かがみになりながら立つ。逆手だから苦しくてブラ下れない。さりとて、ギリギリまで引きあげられているから、膝をゆるめることもできぬ。

鉄柱の下部、床上十センチ位のところに、とりつけてあった、これも長さ一メートルほどの横棒が、鉄柱を中心に半径一メートルの円を画くように廻りはじめた。それが丁度、女の足首をはらうような形になった。無意識に女が、それをまたぐ。すぐグルッと一廻転して又、足首にあたる。再び女がまたぐ。横棒は一回転毎に、ジリッ、ジリッと高さをあげはじめた。そして、床上三十センチ位の高さまでセリ上って、女が充分テンポに馴れはじめたとき、横棒は突然、無数の穴から炎をふき出したのである。たちまちそれは火の棒になった。

「キヤーアッ」

女がソプラノで叫ぶ。向こうズネを炎に焼かれたからであった。炎の熱を避けるためには前よりも一そう大きく、またがなければな

らない。しかも、依然としてそれは廻転毎に上へ昇ってゆくのだ。火の縄とびであった。女の顔は炎に照らされて、絶望にゆがんでいた。

炎の棒をまたぎそこねた女が太股を焼いたところまで見て、張恵華は氣を失ってしまったらしい。

氣がついたとき彼女のケージは、入った時とは反対側の折返し点に到着していた。ガラスのはまった前扉が閉じていて、一人の女がやさしく彼女の頬を叩いていた。

「お氣がつかしましたね」

ニコリ笑う顔が天使のように見えた。勿論、英語だった。事実、カウンセラーは真白いナースのような制服を着ている。

「特別なお許しで、あなたは今夜、休息を許されます。どうぞ、こちらへ」

といわれても、痺れ切った両膝では立ちあがることもできない。這うようにしてケージを出る。次室へ入ると、そこは手術室のように清潔な浴室だった。サウナ室もある。大理石の湯舟で、こわばった筋肉をほぐすと、さき程の女が、ていねいにマッサージをしてくれるではないか。

まあたらしい下着と、素晴らしい絹のネグリジェを着せてくれる。隣には、豪華としかいえないような程の居間、いたれりつくせりの調度品が、ととのっていた。又、その隣室は幸福な眠りをさそうかのような高価なベッドを置いた寝室になっていた。

五十才位、品のよい白衣の天使は、ニコニコしながら言った。

「今晚一晚は、ここは、すべて貴女のものですよ。ゆっくりとおくつろぎ下さい」

張恵華にとっては、強烈な刺激だった。ホコンで捕獲されてから、赤裸に引き剥がれ家畜にも劣る取扱いを受けてきた数週間であった。地上の生活を殆ど忘れかけていたといってもよかった。

それが一挙に過去の生活を取り戻したのである。急激に浮上した潜水夫がショックをさけられないように、恵華も目のくらむような衝撃を受けた。

生まれて、はじめての柔らかい絹のベッドは、かえって仲々寝つかれなかった。ウトウトまどろんでいるうちに、夜が明けてしまった。これ程、夜を名残惜しく思ったことはなかった。

老女が運んできた朝食をベッドで喰べ終わ

ると、再び例の浴室に案内された。

「お気の毒ですが貴方の夢は終わりました。

又、檻に戻っていただかねばなりません。お着物をおとり下さい」

思わず恵華は後ずさって、嫌々というようにな仕ぐさをした。

「いけません。どうか規則に従って下さい。

さもないと獄卒を呼ばなければなりません。

そして、そして貴女は大変な罰をあたえられるのです。ネ、どうか、聞きわけて下さい。

何カ月か後に、キット又、ここに来られるでしょうから」

「何カ月も……」

恵華は、あふれ出る涙を押えもせず、呆然とつぶやくのだった。老女はやさしく彼女を裸にして行った。恵華は、もうさからわなかったのである。

時々、豪華な地上の生活をさせること、これも一種の拷問だった。その点、拷問檻は心にくい程、計算され抜かれてあった。恵華はマンマとその策略に乗ってしまった。英国での教養あふれる生活がよみがえってきて、再び裸体を恥じる気持が強まり、檻に閉じ込められる苦痛が耐え難く感じられてきた。不潔

な匂いもたまらなく嫌に思われる。何よりもこの理不尽な取り扱いに反抗したいという自尊心が、つのって来た。

「どうかね。ゆっくり眠れたらう？」

再び出発点にケージに戻ったとき、待ちかまえていた獄長が片ことの英語でいった。張恵華は顔をそむけて答えなかった。経験を積んだ獄長には何もかも見透かすように判っていた。こうならなければ、これから始められる拷問の効果は半減してしまうからである。

水槽では、又、違う女たちが同じ責め苦にのたうっていたし、次の拷問室では、これも又、見知らぬ裸女が歎き叫びながら、炎の縄とびをくり返していた。そして、その次の部屋には最初に恵華を責める拷問が準備されていたのである。

ひき出された恵華は抵抗するひまもなく、うつ伏せにさせられ、腰から下を車のついた小さなトロッコのような、台に縛りつけられた。両手も後にロックされてしまった。トロッコのレールの先にゴムのカーテンを張った直径六十センチばかりの丸いハッチを有する小さな硝子室があった。獄卒はトロッコを押して、彼女の上半身をゴムの中に突っ込んだのである。

激しい臭気が恵華を襲った。見ると硝子室の中には満々と汚物がたたえられているのである。それも今朝二百人余りの女囚達の生々しいものが、バキュームで運ばれてきていたのだ。恵華は、その上に身体をつき出していた。腰から下は固定されていたけれども、上体は空中に張り出したまま、何の支えもなかった。力を抜いたら、ボシヤンと汚物の中に落ち込んでしまうだろう。命には別条ないかも知れない。しかし、潔癖な恵華は、自分の顔や乳房が汚物にまみれるのを我慢することが出来なかった。そんな姿を、想像するだけでも耐え難かった。だからといって、彼女の脊筋や腹筋が、どれ位、その上体を支えてくれるだろうか。答えは絶望的だった。おそかれ早かれ、疲れ切った彼女の上半身は、重力に抵抗する力を失ってしまうであろう。

硝子室の外には、恰好のよい恵華の豊満な双丘が、はみ出して、小きざみにふるえていた。縛られた足首から先の足の裏が、もどかしげによじれて、この豊かな家庭に育った令嬢の苦悶を、雄弁に物語っていた。

——(未完)——

——被虐の実例に想う——

吊るし責め

(上)

—その実際とプレイの限界—

柴 利 好

はじめに

だろうか。

S・M愛好者の中には「縛りたい」「縛られたい」と願望する縛りマニヤが多い。これは流石にわが国が「縛りの本場」だからなの

この縛り願望がさらに昂じると、吊るしマニヤに進むのが、常道のようなのである。「吊るしたい」「吊るされたい」に進化する訳であ



る。即ち「吊るし」こそ縛りの到達する一頂点である、理解してよいのではないだろうか。それは被虐者の受ける苦痛（悦虐）の度合においても、加虐者のS性を極度に高める手段としても、単なる緊縛のみが与える刺激より勝ること数等といえるからだろう。

扱て、山口広氏によって「吊り責め考」が発表されたのは、たしか四十一年の六月号であったと記憶する。数多くの図解を添えた八頁に及ぶ長編は、引力に基づいた物理的研究論文で、しかも実験のともなわない理論のみによって構成されている点で特色ある力作であった。これに対し本稿で述べようとする吊り責めの話は、全てが筆者自身の実験を基本としている。そしてこれに読者の理解に資するため、最近の誌上を飾ったM性女性による実例を適宜挿入したものである。従って先賢山口氏の作品とは異なり、学問的、科学的基礎こそ持たないけれども、悉皆経験的な記録であることをご承知戴き度い。何卒山口氏の作品と併読されることを望んで止まない。

1

吊るし責めは洋の東西を問わず、古今にわたって行われた最も重い拷問の一つだが、この責めが肉体的にどれほどの苦痛を与えるも

のであるかは、実際に経験した者以外には理解できないと思う。しかもその苦痛は、吊るし責めの方法によってさまざまであり、折檻の目的如何によってもその方法が異なることも見逃がせない。

折檻の目的を、被虐者の生命や肉体上の破損など全く顧慮しない場合と、飽くまでも被虐者の肉体を破損から防衛しなければならぬ場合とに大別して考えて見よう。先ず前者では息絶えるまで吊るして放置して置くものが最高の刑罰であることはいうまでもない。絞首刑がその好例だが、昔、西洋で海賊に対して行われた鎖吊るしの刑などがこの部類に属する。この刑は、頭の先から足の先までを鉄鎖で雁字搦めに縛り上げて、仕置柱の腕木から高々と宙吊りにして、そのまま死に至らしめるものである。その死骸が鳥が啄ばむにまかせて幾日も放置した酷刑であって、その実録は英国の海賊史などに詳しい。

後者、即ち被虐者なるべく傷つけることなくして行われる吊るし責めは、SMプレイに代表されよう。プレイでは、吊るされる相手が耐え得られる肉体的限界を予め見きわめその所定の限界内でのみ実行される。この肉体的忍耐力の限界を何処に求めるかは、個人

的に、はなはだしい差異があるから、これを一概には規定できない。それも吊るし方次第で当然、苦痛の度合も違ってくる。

先ず吊るしの中で最も苦しいとされている逆さ吊るしから話を進めよう。

2

以前誌上に、八時間もの長時間にわたって野外での逆さ吊るしに会ったという読物が載せられていたが、これはフィクションであろうと思う。その文中には、北アで落命した登山家が、逆吊り二十四時間で息絶えたという当時の実例も引用してあった。

プレイの実際としては、関谷富佐子夫人が三十分間の逆吊りを恒例として実行されているという。刑罰としてならいざ知らず、単なるプレイとしては、この三十分という時間の逆吊りは、まさに一驚に値すると思う。まして逆吊りの俣鞭打を受けられるのだそうだから、なおさら驚かされる。

谷山久美子さんの場合は足首を揃えた一直線の逆吊りで十分間、続いてY字形、逆吊りで二十分間宙吊りされている。しかもこれらの逆さ吊るしは、その直前に、猪吊りで十数回の鞭打を浴びた後に行われているのだから彼女は少なくとも引続き四十分近く吊るされ

通していたことになる。

その上彼女は、当時生理薬の関係でギブアップがいつもより早いのだと告白しておられるのだから、身体のコンドیشنが良好なら、小一時間はさまざまな吊るし責めに陶醉できる人なのだろう。その証左として「マゾヒスチック・アニマル」において彼女は、開脚逆吊り、直線逆吊りの二種の逆さ吊るしを受けた上に、鞭打その他の折檻を加えられている。鼻孔にはゴム粘土の鼻孔栓、口には彼女自身の体液を染み込ませた布をいっぱいつめ込まれたの猿轡。彼女の呼吸はこの猿轡の僅かな間隙が唯一の頼りという極限状態のもとで行われたこれらの吊るし責めが、被虐者にとってどれほど苦痛に満ちたものであったかは「真赤に充血した顔面」「激しく切迫した息」「呻吟が大きくなり猿轡から遂に洩れた絶叫」等の表現によって、知ることができ

この時の直線逆吊りは五分近くだったと記されてはいるが、もしも彼女の鼻、口に自由を与え、呼吸を満足にできる状態で、それも他の折檻を全て省いて、逆さ吊るしだけに全精力を集中させたならば、小一時間はおろかそれ以上の長時間を苦痛に耐え続け得る能力

を、彼女は備えているのではあるまいかと想像される。

逆さ吊るしの苦しさは普通の吊るし、つまり頭を上にした吊るしとは比較にならないものとは誰しも想像がつく。これは頭部の鬱血現象が苦痛の最大原因をなしている。この場合の苦痛は「痛い」という表現よりも「苦しい」という言葉の方がよく当てはまるように思う。両足首を一括して縛ったために起こる縄目の局部的苦痛は頭部鬱血による苦しさと比較すればもの数ではない。前記の谷山さんが初めの直線逆さ吊るしで十分間吊るされた時、顔面が蒼白になった、と報告されていることは全く意外であった。何故なら、こうし

た場合鬱血によって顔面が真赤に充血してくるものとばかり常識的に心得ていたからである。恐らく当時の彼女は肉体的に極限状態に陥っていたからなのであろう。

田宮寿子夫人は直線逆吊りで、大島照代さんはY字形逆吊りと直線逆吊りとを連続して受けておられるが、いずれもその時間的記録は記されていない。左近麻里子さんも京都の一夜で、後ろ手高手小手縛りでの直線逆吊りがある。レポーターの記録によると、大分時間の経過があったように見られるが、その正確な滞空時間が不明なのは惜しまれる。小竹雪村夫人は何回も開脚Y字形吊るしを受けておられるが、十分以上経過した記録がある。



木村洋子さんは多くのM女性中でも特に吊るし専科生ともいえるほど吊り責めの好きな人らしく、室内、戸外を問わず、正位でも逆吊りでも、何でもござれの強烈派だが、彼女にもY字形逆吊りで、十分分の責めに耐えた記録が見られる。

逆吊り三十分のプレイに耐え得る女性として、大橋美代子夫人の存在を最近号の「逆吊りの記録」で知った。

彼女の場合は高手小手に縛られた裸身を先ず机上に乗せ、次いで両足首を縛ってその縄で天井に吊り下げてから机を外すという方法が取られている。初めてのこの逆吊りをされた時、彼女は余りの怖ろしさに大声を出したので猿轡を嵌められてしまったのだそう。

爾来何度か吊されて、今では三十分くらいなら、声も出さずに辛抱できるまでになっている。それだけでも、猿轡は必ず嵌められて吊るされておられるという。その上、もっと驚いたことは、逆吊りの俤、ビニール管を鼻孔に一本ずつ差し込まれ、イルリガートルに入れた牛乳を一方の管から注入し、鼻の奥を通して片一方の管から下の容器に流し出すというプレイをされるとのことだ。まるで中世の魔女拷問のような残酷な責めを併用された逆吊りは、プレイとしては最も凄まじいものの一つであろう。

3

頭を上にした、正常位の吊るし責めの場合、被虐者は普通高手小手に縛られて、背面の縄尻で吊るされるようである。この正常位

の吊るしでも、時間が長引けば当然血液は身体の下方に移行して頭部から貧血状態が起る。そして意識が朦朧としてくる。この状態が被虐者にとって苦痛であるか、将又、悦楽であるかは問題ではあるが少なくとも逆さ吊るしによる頭部鬱血状態に較べ、苦痛の点では凌ぎ易い。しかし乍ら、正常位の吊るしでは、この頭部貧血（或は下体鬱血）の苦しみが感知されるよりも、それに先立った激しい苦痛が吊るし縄に連結されている縄の緊縛部位に感じられる。例えば高手小手に縛って吊るしたとすれば、二の腕から腕部に掛けられた縄目に体重の全てが集中される。つまりこれらの部位の皮肉に苦痛が甚だしく感知される。この苦痛は、「苦しい」というより「痛い」と表現した方が適切だろう。逆さ吊るしの場合とは逆な表現が当てはまる訳である。この苦痛は実際に経験して初めて分かるほど耐え難いもので、頭部の貧血が起ってこない遙か以前に、吊るされたその瞬間から直ちに襲ってくる痛みなのである。被虐者はこの激痛の故に悲鳴をあげ、よほどの豪の者でない限り、長時間の放置に耐えられるものではない。

旧幕時代の公刑では「吊るし責め」が最も

重い拷問で、「石抱責」「海老責」でも白状しなかった場合にのみ行われる最終的手段であったことは常識となっている。この吊るし責めは、高手小手持りの小手を縛った縄尻で吊るされたらしいから、その苦痛のほども察せられる。恐らく両肩が逆になって、脱臼もしたであろうし、吊るし時間が長引けば、下降した血液が爪先から滴り落ちることもあったであろう。

このような肩骨の脱臼や、爪先からの出血に至るまでの残酷な仕置は、公刑であればこそ可能なことで、SM遊戯たるプレイとしては到底期待すること自体が無理であり、また容認される訳もない。

兎に角、痛さを即時的に激しく感知するのは、逆さ吊るしよりも正常位吊るしの方が遥かに早く、その苦しみに耐え切れずにギブアップすること、それだけ早いことは事実である。

従って、正常位吊るしに関する誌上の実例が逆さ吊るしよりも少ないのは、このように被虐者に与える苦痛の差異、つまり苦痛感知の時間差によるものと判断される。

肉体派の水野香代夫人が、後ろ手、高手小手に縛られた上、補助縄なしの正常位吊るし

を敢行された記録の中には、その滞空時間が記されていない。もっとも、この時は吊り縄を固定せず、引っ張った俛であったから、そんなに長く縄を保持できなかったのかも知れない。いずれにしてもポリウム豊かな夫人なので、使用した縄は普通のロープではなく、長尺の布製であったにも拘らず、吊り上るや否や夫人の腕から胸にかけての皮膚が見る見る変色して来た、とレポーターは報じている。この重量のある女体を引張り上げていく作業の苦労もさること乍ら、素裸の俛嚴重に縛り上げられ、吊り上げられた夫人の苦しさは如何ほどであっただろうか。常日頃身体中を皮肉を絞り切るほど緊しく縛られつけておられる夫人ではあろうけれども、一般的に緊縛と、吊るし責めとの苦しさの相違がどれほど違うものか、この時の実験で文字通り身に滲みて感知されたことであろう。

4

そこで正常位吊るしのこの苦痛を幾分でも緩和さすための方法として、横縄や縦縄の増縄が考えられた。高手小手に縛った場合、それをいきなり吊るすことをせず、身体の他の部位を、例えば肩口、胴腰部、脚部下肢などの要所々々を幾段にも別縄で縛り上げる。そ

してこれらの横縄の各々に縦縄を連結して吊るし縄に結びつけるのである。こうすれば体重の支点が横縄の数だけ多くなるから、それだけ横縄の一本一本に掛かる重力が分散される。ということは肉体的苦痛がそれだけ分散されることになるのである。

苦痛を味わうM性として、このように苦痛の軽減に努めることは、いささか矛盾するよう受け取られようが、こうした手段を取ることによって、より広い範囲に苦痛が拡がり圧迫感が五体の四方八方に浸透してくる。しかもそれ相当に時間的なプラスも得られる。即ち、より広く、より深く、より長く悦虐の境地に浸ることができるのであって、この点先に述べた公刑の吊るし責めとプレイの吊るしとは全く趣旨が異なる仕置となることを注目すべきである。これを鑑賞者の側について見ても、全身を程よく幾段にも括られ、深く喰い込んだ縄目の反動で反って盛り上った肉棚の形状や、肌合の美しさは、単純な小吊るしよりも遥かに楽しい見物に違いない。

モデルとか女優達を使つての吊るし責めのポーズは大概このような縛り縄の増縄手段に頼って行われている。そうしないとその苦痛度や、肉体上の損傷が甚だしくて、到底演技

に耐え得られないから、当然の措置と思われる。それはむしろ美醜の問題以前のことからであろう。ただし、こうした演技の場合は、重力の掛かり方が不自然で、当然吊るしの主要部分に掛かる筈の重力が別縄（補助縄）に掛かっていることが歴然として、如何にも拵え物としか見られない吊るしポーズが多いのは己むを得ないこととはいえ、全く興醒めである。

5

四ツ手吊るし。獸吊るしとも猿吊るしとも呼ばれるこの吊るし方になると、苦痛も前二者とは違ったものになってくる。足首に受け



る痛さは、逆さ吊るしの場合と同様ではあるが、両手首の痛さが格別なのである。下手をする手首脱臼の恐れさえある。手首の骨格は足首より遥かに複雑で、幾多の小骨の集合によって形成されているから、それは訳も無く脱臼してしまうから始末が悪い。

映画や舞台その他でこの猪吊るしを受ける演技者が、吊るされ乍ら、自分自身の両手で吊り縄を固く握りしめていたり、或は別に仕組まれた握り棒につかまっていたりする姿を屢々見掛ける。これは単に、苦痛を幾分でも和らげようとする意図もさること乍ら、手首脱臼を防止しようとする手段であると解される。しかしこのようにして被虐者自身が吊り縄を把握したりする猪吊りは、眺めとしては興が湧かない。四ツ手吊るしの本命は、何と云っても両手首、両足首を一つにまとめて縛ってこそ価値がある。プレイの場合ならば手首の骨や皮膚の破損を防ぐため、手拭などで

保護した上で縄掛けすることが多いのはその性質上、致し方なからう。先に記した谷山久美子さんの猪吊りでは、手首に何らの細工もない、本当の四ツ手吊るしであった点で、真に素晴らしい実験だと思う。山本富子夫人が信州の山中で受けられた四ツ手吊るしについては詳細な説明がつけられてはいないが、赤松の枝に高々と吊るし上げられている彼女の写真で見ると、本格的な四ツ手吊るしであっただろうと思う。それは鎖ブリーダー、鎖パントリー付きの日常生活を営まれ、後ろ手錠を掛けられて毎夜就寝されておられるという夫人の、強度のM性向からも充分推察することができる。

四ツ手吊るしは、このように手足を一括して吊るすのが本来で、それでこそ猪吊りとも獸吊るしとも別称されている訳だが、四ツ手に縛った縄で直接吊るし上げる方法の他に、棒などを使って担ぐ方法もある。これは獲物を捕獲地点から運搬する途中にとられる手段で、まこと獸吊るしと呼ばれるに相応しいやり方である。しかしプレイにこれを試みるとすると手足の間に差し込まれた担い棒が骨に接触して、体重がその接触点に掛かり、丁度挺子の支点の作用を起こす。当然その苦痛は

言葉通り骨身にこたえる耐え難さであるばかりでなく、取扱いを誤れば、骨折すらも免れないから余程の注意を要する。

左近麻里子さんはこの四ツ手吊るしを受けた後、磔刑に近似したY字形柱吊るし縛りを十分間、Y字形逆さ吊るしを五分間と、三種の吊るし責めを継続的に実行されている。その吊るしの何れもが、谷山さんと同様に手拭などの保護を用いない直接縛りである点、非常に印象深い。その時の四ツ手吊るしの滞空時間が記されていないのは、多分他の二種の吊るし責めの時間よりは、短かったに相違ない。ということは四ツ手吊るしが、上記の他の吊るしに較べて被虐者にとってどれほど苦痛なものかを知る一つの証左になると思う。殊に手首に直接縄掛けした場合の苦しさは格別なものなのである。

辻村氏の懐旧録によれば、青木順子さんが二夜に亘る悦虐プレイの終幕として、この猪吊るしをされることが書かれている。この時彼女は自分のはいていたパンティーを口の中に押し込まれた上を、ロープでグルグル巻きに猿ぐつわを嵌められる。そして、全裸の俣四ツ手に縛られ、青竹に吊るされ、大の男二人（辻村氏と夫君）に担がれながら庭中をぶら

ぶら廻る。その揚句ブロック塀の飾り穴と鉄の脚立の間に青竹を渡して猪吊るしに吊り下げられ、顔といわず全身にハルンの洗礼を受けたのであった。

この猪吊るしに要した時間がどの位であったか分らないが少なくとも十数分は吊られ放しであったであろう。それも静止吊るしではなくブラブラ揺れながらなのである。青竹への吊り方も分明しないが、多分四ツ手に縛った縄を青竹に括りつけたもので、青竹を、手足を縛った縄に直接くぐらせたのではなからうかと思う。何れにしても、プレイとしては最高の部類に属する。この猪吊るしの結果、彼女が肉体上に受けた損傷がどのようなであったか、特に手首の皮膚と骨格への影響や症状などについて詳しく承り度いものである。

四ツ手吊るしの変形として谷山さんにとられた右手、右足と左手、左足を夫々縛りつけて行われた股裂きさながらの吊るしは、言語に絶する責め苦であつたらしい。しかもその姿の俣で蠟涙を点下されたというから、流石のマゾヒスチックアニマルを「く、くるしいもうやめてえー腕の付根や腿の関節が今にも外れそう。もうダメ……ああ、もうがまん出来ない！」と絶叫させているほどだ。その上

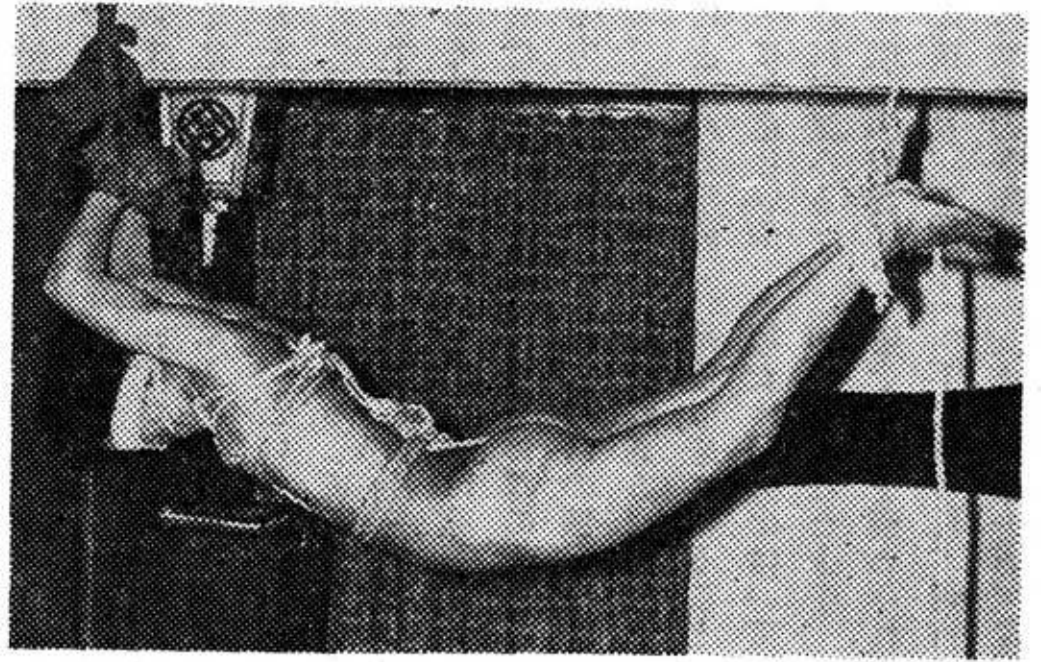
に湯量約一リットルの流腸をした後、彼女を鐘に見立てて、臀部をゴツン、ゴツンと撞かれたので、下降された時は昏睡状態に近かったとある。この時の滞空時間は十分近かった。

6

手と足をそれぞれ別縄で縛り四方に引っ張る張り吊るしも行われている。四ツ手吊るしの変形である。

これと似た吊るしに、両手両足を、それぞれ一つに縛って、身体を直線に伸ばした姿勢で吊るすハンモック吊るしもある。これらの張り

り吊るしは、四ツ手吊るしの項で述べた通りの理由で手首が一番痛い。これに加えて身体全体が伸ばされるから、手首の関節の他に、胴体にまでもこの伸ばしの影響が現われ、その苦痛は全身に及ぶ。四ツ手張り吊るしでもハンモック吊るしでも、自体を仰向ける場合と俯ぶせにする場合とがある。そのどちらにしても手首に掛かる体重の負担は、手首だけ



単独に縛られているから猪吊るしよりも大きく、それだけ苦痛も甚だしい。俯ぶせの場合の方が身体が逆海老状に屈折するから、仰向けの場合より一層苦しいことは事明である。この張り吊るしは、吊るすこと自体よりも身体を引き伸ばす、「伸ばし拷問」の一方法として、行われた例が多く、殊に伸ばしの限界を超えた、四肢を引裂く死刑に応用されている。

笹原八千子さんは色々変わった吊るし責めの経験者だが特に印象深いのは、このハンモック吊るしを仰向けと、俯ぶせと両方を連続して受けておられることである。彼女は仰向けハンモック吊るしではさして苦痛を訴えなかった様子だが（当然苦痛は甚だしいのだがよくそれに耐えていることだけでも）、俯ぶせ、つまり背を上腹部を下に向けてのハン

モック吊るしでは、背骨が折れるように痛んで、吊るしの実時間三分間というものの、ウメキ通しておられたということだ。山口兄も指摘されているように、ハンモック吊るしの実物写真は大変珍しい。それは、この吊るし責めの苦痛が余りに激しいためにプレイに適さない故と思われる。四十二年六月号掲載の笹原さんの真正正銘の二種の吊り責め姿を玩味され度い。

ところで、最近号にも新人川路叢子夫人のハンモック吊るしが見られる。延々四時間になろうとする悦虐プレイの、最終を飾るにふさわしいこの責めは、何と、飽くなき被虐の快楽に陶醉する夫人の懇願によって行われている。

「この鴨居に私を吊れないかしら？ 何とか吊ってほしいのよ」云々。女性の方から吊るし責めを要求した人は、谷山久美子さん以来であると、辻村氏は述懐しておられる。

吊るし方は両手を腰紐で縛って鴨居に固定し、両足首を予め伊達締めで括りつけ、その上をロープで縛って、ロープを鴨居に掛けて引絞っている。こうして吊るされた女体をブランコのようにゆさぶり、ネクタイで連打し続け、その上にバイブを加えられた夫人は肉

体的苦痛よりも、被虐の想念に支配され、快樂の呻きを続けたが、遂に「ギャーッ」という悲鳴を一声あげると、その尽意識を失ってしまったという。その実景と詳細については四十五年二月号によって確認され度い。

サディスチンがマゾヒスト或は男奴をハンモック吊るしにして、その吊るした胴体に悠然と腰掛け乍ら、煙草をくゆらしているといった光景は、外国のSM絵によく見掛ける。

春川ナミオ氏のお作にも同様のテーマが用いられている。着想としてはなるほど面白いけれども、いざ実行となると果して如何か疑わしいのではなからうか。この吊るしの姿勢を長く続けて、手首や肩の脱臼を意に介せず人間一人の重量に耐え切れる男性は、そうざらには見当たらないのが現実だと思う。しかし絶無と断言することは、軽卒かも知れない。何しろ世間は広いし、奇妙なご時世なのだから……。兎に角、こうした姿こそSM性向者の描いた願望世界の一つの表現であることは間違いない。

これは余談だが、俯ぶせハンモック吊るしをアクロの踊り子に実行して見度いのが筆者のかねてからの夢である。手足を吊るした縄の支点を次第に近付けて行くと、背骨の逆曲

げに慣れた踊り子の胴は、苦も無く真二つに折れて反り返り、頭と尻が密着するまで屈曲するだろう。そうしたら、逆海老状に屈折した彼女のウェストを別縄で縛って重しを吊るしてはどうだろう。嘸かし楽しい眺めになるに違いない。

四ツ手吊るしの変形の一つに、両手首を両膝の後ろに一つにまとめて縛り、足首で吊るす方法もある。これは責めのポーズとして非常に美しく、古典的責め絵でも折々お眼に掛かる。この吊るし方を、実際に行われたのが田宮寿子夫人である。夫人がこの吊るしを受けられたのは、連続数時間に及ぶ様々な責め折檻の一過程として実施された。この時は足首の損傷を防ぐためゲートルを足首に巻いた上で縄掛けされたにも拘らず、吊るした結果「足首が痛い」と苦痛を訴えておられたことが報告されている。こうした場合、一般的には膝の後ろで合わせて縛った両手首が非常に痛むし、頭部が普通の仰向け四ツ手吊るしよりも下方にのけ反る形になって、想像以上に苦しい責めである。

谷山さんも同様の吊るしをされたが、この時はバイブという人工悦楽器を併用された結果、苛酷な両足吊りの責め苦を忘却させて苦

痛と快樂の渦中に我れを忘れて耽溺していたと報告されている。滞空時間は示されていないので不明である。

谷山さんが俯ぶせハンモック吊るしを受けた時、彼女は吊るされた当初は手首を縛った縄を自分で握りしめていたのを、無残にもその手をこじあけるように縄から離されて吊るされてしまった。

本誌二月号から、その折の迫真の記録を引用させてもらおうと

『牝犬の髪は微かに震え、必死にこらえつつも、激痛は背骨を伝わって、全身をさいなみ始めていた。クククッと、懸命に声を殺してクミイは、骨のキシむ疼痛にたえつづける。

……支えのない体は、悶絶寸前のケイレンを起こしてビクビクと打ち震えていた。もう牝犬は声を立てる気力もなく、ハアハアという苦しげな吐息だけが激しく流れた。……手首の縄をとくと、縄痕が、まるでネジの螺旋のように深々と、赤い凹みをつくって、その強烈さを、まざまざと物語っていた』

これをもってしても、この吊るし責めがどんなに苦しいものか知ることができる。

素敵な商売はない(下)

ス タ ー 誕 生

麒 田 欧 二



カッタ・日本武士

「御来場の皆様、何卒ステージに御注目ください。御覧の通り、私の足許にございます二個の檻、この中には、斯界の名調教師B女史が、東洋は日本に於きまして心血を注ぎました労作、ナンバー12ならびに13と名づけまし

1

た男女一組の奴隷が入って居ります。申すまでもなく、男女とも品質最高、選り抜きの日本人種でございます。女史の言に^{げんよ}拠りますれば、このペアが演じますところのレパートリーは何と五十六態、夙に名高い女史作品中でも蓋し会心の作との由。のちほど檻より引き出だし、その一端を御高覧に供しました上、御入れいただく段取りと相成りまするが、そ

の前に、調教師自身の簡単な説明を附しまして、在日訓練中に撮影いたしましたフィルムをお目にかけたいと存じます。では、B女史どうぞ」

拍手に迎えられて、オレたちの黒い主人が登場する。

オレとパートナーは、例の平べったい檻に別々に入れられ、ライトが煌々と集中したステージの真ん中に置かれている。

オレたちは、貨物船でアメリカへ運ばれて来た。とはいっても、上陸後も終始檻に入れられ、幌つきのトラックで輸送されるオレたちには、自分がいったい何処に連れて行かれるのか、皆目見当がつかなかった。気がついた時には、晴れがましくライトを浴びた舞台の中央に居たというわけだ。

会場に集まったのは、全米に散らばった秘密クラブの経営者や、また彼等に非合法のシ

ヨウを幹旋する闇のプロモーターといった連中らしい。身動きもならぬ全裸で蹲る、オレとパートナーを、檻の近くまでわざわざ覗きに来て、品定めする酔客もあった。

やがて、B女史の説明で映写が始まった。

スクリーンは、オレがまだ檻禁される前のパートナーの調教を写し出していた。オレが知ってからは木偶のように自らの意志も感情も失い、どんな恥かしい命令にも黙々として服従する彼女が、フィルム最初の部分では狂気のように抵抗するのをオレは見た。激しい気性をむき出しにした彼女の生き生きとした顔が、苦痛に歪み、羞恥に悶えながら、パートナーが熱に溶けるように、理性ではどうにもならぬ混濁の渦に引き込まれ、次第に敗北の淵に己れを失って行く過程が、オレを感動させた。フィルムが進むに従い、彼女の表情から目に見えて生氣が消え失せ、終には木偶のような無表情に変わって行く。

次には、オレが登場した。

自分というものを第三者の眼で観たのは無論初めての事、その浅ましい屈辱の姿に、オレは全身が火のように熱くなった。檻禁された最初の日に、突如として意識を失い、その間に身に着けた総てを奪われて吊られるまで

の記憶の断層が、しかし、このフィルムによって埋められた。また、メイドの鞭に気を失ったオレが、その寸前に最後の凄まじさで嘶く情景には、われながら眼を瞠った。場内から、どよめきが起こり、口笛が吹き鳴らされたのもこの時だった。

さらに画面は、パートナーとの様々なデュエットから、黒い主人、メイドを交えての三人プレイ、四人プレイへと進み、観衆の溜息とともに映写は終わった。

再び場内が明るくなると、いよいよ、オレたちが舞台に引き出されることになる。

司会者が現われた。

「さて、如何でございましたか。ただいま御覧に入れましたフィルムにて、この新しいシヨウが、かつて類を見ない傑作であることはよくお解りかと存じまするが、さらにこれより、取っておきのお楽しみ、生の実物をお目にかけてみましょう。その比類ない肉体、その卓抜した演技は、必ずや皆様の御満足を得るものと確信いたします」

司会者の言葉が終わると入れ代りにB女史とメイドが、例の白と黒のコルセット・スタイルで、ともに鞭を携えて登場した。

初めての舞台に身を固くするオレたちの耳

を聳して嵐のような拍手が一斉に起こった。

2

眩いばかり華やかなステージで、オレたちは、レパトリリーの幾つかを、演じさせられた。オレとパートナーが巧みにタイミングを合わせて、最後の呻きとともにガツクリ力を失ったところでオーディションは終わったが会場からは期せずして、名調教師B女史への讃嘆の声があがった。

B女史は、世界を股にかけて諸々の人種から素材を発見し、それをシヨウの演者（言い換えれば奴隷、即ち「シヨウ奴」である）として調教した上、秘密組織に幹旋する、こうした裏の世界でも数の少ない、しかも極めて高名なプロ調教師だったのだ。「B女史の手にかかったものなら安心して買える」というのが、この社会での通説になっていた。

オレたちは、予定通り競売にかけられ、過去に例のない高額で白人のプロモーターに買われた。

こんな処まで来て、女神とも太陽とも敬慕する黒い主人と別れなければならなくなったオレは、涙を流して、檻の中から悲痛な声を

あげた。あのブロンズの肌、濃密な体臭から永久に引き離されることを考えただけで、死んだ方がましだと思った。オレが自ら人間性を放棄し、アメリカくんだりまでおめおめ連れて来られたのも、すべては黒い主人への限りない憧憬からではなかったか。

檻の中から見上げたオレの絶望の眼差しに気づいたB女史は、新しい主人となったプロモーターに、笑って言った。

「このオスの方は、どうやら、あたしに気があるらしいのよ。別れの挨拶だけでもさせてやってちょうだい」

それから、片足のハイヒールを脱ぎ落とし檻の餌孔の前に差し出した。

オレは、孔から突き出した首を精一杯のばし、透明なナイロン靴下に包まれた足の裏に鼻を押しつけた。他の皮膚の色とは対照的に彼女の足の裏は白々と、しかも絹のようにやわらかかった。僅かに汗と皮革の匂いを混じえた懐かしい体臭がオレの肺に満ちた。夢中で口づけし、頬ずりし、さらに舌を伸ばして甜めまわすオレの唾液で、恰好のいい足の裏は忽ち濡れ光った。彼女は擦ったように身を退こうとするのを、オレは懸命に追いつがって、その爪先全部を口の中に含んだ。

「さあ、もうお止め。いい子だからね」

そう言うと、B女史はオレの口から足を引き、濡れたまま靴に戻した。

「なるほどねえ」

呆れたとも、感心したともつかず呟くプロモーターの声を聞きながら、オレはまだ涎のしたたる口をひらいたまま、がっくりと首を落とした。

「さあ、お別れは済んだのよ」

彼女のハイヒールの底が、オレの額を軽く蹴って、檻の中へ押し返した。

「聞きわけがいいね」

女史とプロモーターは別れの握手をした。

「あんたも、いろいろと大変だね」プロモーターは苦笑しながら、「で、今度は——？」

「ギリシャへ飛ぶつもり。——もう、材料は手に入れてあるから」

「ま、今後ともよろしく」

女史が去ると、プロモーターは、オレたちの檻にシートを被せて、運び出させた。

視界を失ったオレは、B女史の姿を脇に追いつながら、声を殺して泣いた。

3

地下室は、三方が鉄格子を嵌めた檻になっており、そのコの字なりの檻は細かく区分されて、プロモーター専属のショウ奴隷が一人ずつ繋がれている。「お座敷」がかかると地下室から出され輸送用の檻に移されて、幌つきのトラック或いは奴隷用輸送機で、各地に送られる。

オレ——すなわち13号と、パートナーの12号は、隣り合った檻に入れられたが、オレたちの他にも、人種、国籍の違った雑多な仲間で、檻房は大方、満たされていた。

オレたちの主人であるプロモーターは、全米に手広く得意先を持ち、海外にも名を知られたこの世界の大立者だった。アメリカという国が、想像以上に大きいこと、しかも一般社会とは隔絶した謂わば裏側の世界もまた、われわれが考えていたような、コソコソした一握りの人間たちのものでないことを、オレは知ったのだ。それは、絢爛と花ひらいた別世界だった。

オレたちは、輸入されたばかりの最も新鮮なコンビであり、B女史の名が物を言って評判がひろがり、地下の檻を温める暇もないほど忙しかった。

オレたちのデュエットが、何処でも好評だ

った原因の一つは、アメリカへ来てから、パートナーの性格が見違えるように一変したところにあるようだ。彼女は、日本に居た頃の、あの木偶のような無表情とは違って変わって、どんな些細な動作の一つ一つにまで、繊細な感受性を示すようになった。

(オレに、惚れたな)

やがて、オレは、そう確信した。

かつては石のように硬く、冷たく、僅かの反応さえ見せなかった同じポーズに、彼女は忽ち咽喉をふるわせて呻き、全身を羞恥に染めて悶えるのだ。見物の心にしみ入るような嘔り泣きの声と、身も世もあらぬ媚態は、巧まざる演出として、初めのうちは確かにショウを盛り上げた。だが、それが時とともに顕著になり、終にはショウの半ばで、彼女は、はやばやと続行不能の状態に陥るようになった。つまり、二人の呼吸とタイミングにいちじるしい、ずれを生じたわけで、こうなっているのは最早、デュエットとしての演技は成り立たない。その破綻をオレは何とか喰い止めようと努力した。

「まだだ。頑張れよ。もう少し、辛抱してくれ」

オレは、猿轡の奥から、声にならない声で

パートナーを励まし、彼女もそれに応えて、歯を喰いしぼり、必死に耐えようとするのだが、彼女の肉体はすでに、意志だけではどうにもならない状態に交容していた。

女体の持つ不思議というものであろうか、近頃では、ショウの始まる前から、檻を距て見る彼女の眼は、しつとりと潤んでいた。それは恋する乙女の眼だった。

「こりゃ、ショウにならん」

われわれの破綻を、素早く見抜いたのはプロモーターだった。

「惜しいが、ペアをとり変えるより仕方なからう。お前は明日から、ブラック3号をパートナーにしろ。出し物は同じだ」

数カ月来のパートナーは、泣く泣くオレから引き離された。それに代わってB3号という、はちきれそうな乳房と腰を持った黒人の娘が、オレの新しいパートナーとなった。

漆黒に輝く肌、噓せ返るような濃密な体臭——それに、オレは再びめぐり逢えたのだ。

4

黒いヴィナスのような若いパートナーとオレは、今までのレパートリーをそのまま続け

たが、即成ペアの悲しさ、相互にもどかしさを味わうばかりで、しつくりと呼吸が合わなかった。というより、多くの場合、オレの方が、その黒い魔力にペースを乱されて、うっかりタイミングを狂わす結果になった。

ある夜、鉄格子を距てた檻の中で、パートナーがオレに提案した。

「ねえ、あたし達には、あたし達の新しいレパートリーが必要だと思うの。それで、考えがあるんだけど」

「どんな……」

「あたしには、昔から演^やっていた特技があるの。高い所から吊した綱に、歯の力だけでぶら下ることと、細い棒の上に、口だけで逆立ちすること——この二つが、あたしたちのショウに利用出来ると思うんだけど……」

彼女の考えていることは、オレにも大体想像がついたけれど、そんな芸当が実際に可能かどうか、オレの方には自信がなかった。

主人の許しを得たオレたちは、早速練習を始め、どうやらショウとしての目安はついたものの、それは飽くまでも、オレ自身の精神的、肉体的条件に左右される場合の大きい、かなりの危険を伴ったものだった。

◇ポジション(I)——オレは、例の三角

禪のまま床の上に仰向けにはりつけられる。黒いパートナーは、もちろん全裸の後手錠で支点に、口の力だけで倒立する。一見、何でもないうだが、彼女の全体重がかかる支点が、充分に確固とした状態にないと、忽ちバランスを崩す結果になる。さらに、実演の途中で、オレが大の字に括られた体を僅かでも動かせば、これまた、均衡を失う危険が生ずる。正直いって、これは容易ではなかった。

また、このショウに変化をもたせる意味でコミック的要素を取り入れたのも、黒いパートナーのアイデアだった。

演技に先立って、肝心な支点に様々の準備動作を加えるが、思うようにならない。万事窮す——天を仰いで長嘆息というところへ、どこからともなくヒラヒラと舞い落ちて来た三角禪、それを何気なく用いると効果観面。パートナーは、その三角禪にやきもちを焼く仕草をしたり、感謝の口づけをしたり……こういったアドリブの面白さをつけ加えた。

◇ポジション(Ⅱ)——オレは、両手両足を左右に開いた恰好で、天井から水平に吊られる。空中で、僅かに揺れているオレの脇に縄梯子が垂らされ、それを黒いパートナーがするすると昇る。といっても、後手錠のまま

だから、口と足だけしか使えない。彼女は巧みに、梯子の横縄を咥えながら上って、ペンまで昇ると、ニッコリとして客席に挨拶を送る。次に、ここでもコミック的要素をふんだんに見せたあと、サッと身軽に飛びつき、一瞬ののちには、垂直にぶら下る。彼女は、自らの体重を口の力だけで吊り下げるわけである。

一方のオレも、彼女の全体重に耐えることは決して楽な仕事ではなかった。だが、オレにとって、それ以上に苦しかったのは、物理的苦痛と官能的苦痛とを同時に受けながら、そのどちらにも負けることが出来ないということだったのだ。どちらか一つにでも負けることは、彼女の死を意味している。オレは、猿轡の奥で絶えず呻きながら、死の危険と血みどろの悪戦苦闘を続ける。

だが、彼女の方は、そんなオレの苦闘など意に介さないように、垂重にぶら下ったからだを、自ら揺らし始め、次第に、その振幅を増してゆく。スポットライトを浴びて漆黒に輝く彼女の肉体が、空中で振子のように弧を描く。それがオレの苦痛を一層追い上げる。オレが耐苦の最後を予感して、アッと思った時、彼女は身を翻して、縄梯子に飛び移っている。

彼女は多分、オレの苦悶の限界を察知するのだろうが、まさに神技ともいうべき、絶妙のタイミングには、何とも感嘆せざるを得ない。ほんの、まばたき一つするほどの時差を捉えた早業で、しかも機械のように狂いがなかった。

この新しい出し物は、オレたち自身がびっくりするほど受けた。

僅かの間に、オレたちのペアは、秘密ショウのナンバーワンにのし上がった。

5

アメリカへ来て半年ほどの間、大袈裟な言い方をすれば、オレたちは眠る暇もないほど忙しかった。その証拠に、オレには「ホームサービス」が、たった一度しかなかった。

「ホームサービス」というのは、プロモーターの自宅で、その妻の使役奴隷としてサービスすること、多くの場合、ショウ奴としてすでに商品価値が落ち、専ら地下牢暮らしをしている連中が充てられた。

プロモーターの妻は、夫より二十も年下の美人だったが、職業がら、殆ど家に居つかぬ夫に、当然のことながら、その忿懣の吐け場

を求めていた。そうした彼女の欲求不満の犠牲にされたのが専属奴隷たちで、毎日、一人あるいは二人と曳き出され、若い女王の慰みものにされた。これは謂わば彼女の特権のよきなものであり、自分に対する妻の不満を充分承知している夫は、かねてから黙認していたし、一方の奴隷は奴隷で、あらゆる虐使と羞かしめを含めた自らの立場を甘受したのもシヨウの演技者としては価値を失った自分たちにとっての、せめてもの償いの心算だったのだろう。

彼女にとって、奴隷は人間ではない、というより、畜類以下のものであったらしい。全身を刃物で傷つけられ、毛髪や歯を抜かれ、彼女の便を耳、鼻、口など凡ての孔に詰め込まれ、浴槽へ逆吊りにされ、火の点いた葉巻の的にされるなど、殆ど考えつく、すべての虐待を受けた男奴隷や女奴隷が、半死半生、虫の息となって檻に返されて来ることもあった。彼女の行為、残虐さの度合は、その時々不安定な精神状態、肉体的不満の累積、あるいは生理的な影響によって、さまざまに形を変えたが、正直いって、オレの時についてはいた。というのは、オレが呼び出された時は彼女が、謂わば満たされた状態にあったから

だ。

その時彼女は、寝室で若い男と抱き合っていた。不在がちの夫の眼を盗んで、彼女が白昼、堂々と浮気をしていることをオレは知った。彼等は、畜生以下のオレなどに、何を見られ、何を知られても、もちろん意に介さなかった。

オレは、両手と両足をそれぞれ三十糎ほどの鎖で繋がれ、さらに五十糎余りの鎖で、首とベッドの鉄棒とを連結された。

「ほら、お前の好きなものをやるよ」

現在ではオレの一部ともいえる三角褌を持ち出した女は、戸に四つん這いになっているオレの頭に、それを被せた。

「面白いのよ、これ」

女が、男に声をかけ、二人はベッドに並んで腰かけた。

オレは、自分の手でそれを締めるのは初めてだったが、鎖を鳴らしながら、何とか身に着けた。

「よく見てるのよ」

そう言うが早い、女はオレを蹴転がし、仰向けの恰好にした。

こんな場合にも、オレの意志とは全く別に三角褌の効用は変わらなかった。

「なるほど、こいつはいいや」

男はゲラゲラ笑い出した。

「ねえ、畜生にしちゃ、立派だと思わない」

女は悪戯っぽく笑った。

「こいつめ!!」

男は、自分の唇で女の言葉を遮り、手荒くベッドの上に押し倒した。

女は、キャッキャッと嬌声をあげて暴れたが、やがて、しんと動かなくなった。オレの眼の前に、二人の足の裏が突き出されている。

男の唇が離れると、女が、甲高い声で命令した。

「お甜め。——あたいたちの足の裏を、いいと言うまでおしゃぶり」

しかし、オレの鼻先にある四つの足の裏はシーツの上を滑り、跳ね、伸びたり縮んだり動き回り始め、オレの突き出した舌は、それを絶え間なく追いかねばならなかった。

いきなり突っ張った踵に顎を蹴られたり、爪を伸ばした指先を眼に突っ込まれたり、巨大な扁平足で鼻を押しひしがれたりしながらも、オレは懸命に作業を続けた。四つの足の裏は、オレの唾液でびしょびしょになり、シーツの上に、小さな水溜りが出来た。

突如、四つの足の裏が一度にオレの顔を蹴った。首の骨が折れるかと思われるほどの烈しい反動で鎖に引き戻されたオレは、そのまゝ、ふっと気が遠くなった。

しばらくして、意識を取り戻しかけたオレの耳に、女の声が聞こえた。焦れたような声が、男を詰なっている。

「何さ——意気地なし。早く……」

「早く、早く……男はねえ……」

男が、当惑しきったように、ボソボソ呟ささいている。

「あんたは、若いんだろ。うちの宿六とは違ふんだろ。恥かしいと思わないの」

この若い、美しい女の可愛らしい唇から飛び出す荒っぽい言葉に、オレは少々愕おどろいた。

「そうだったって……」

男は、ますます意気が上らない。

「それじゃ、この軀は、見かけ倒しだっていうのね」

「だから……だからさ、もう少し待って……って……こればかりは、オレの自由に……」

「わかった。あんた、ほんとうはあたしを愛してないのね。だから……」

女が何か手荒なことをしたらしく、だしぬけに男の悲鳴が聞こえた。

「そ、そう乱暴にしたって……あつ、痛いってば……」

「だってえ……」

今度は、むしろ泣き出しそうな、せつなげな嘆息とともに、そう言いかけた女の声が、

「あつ、そうだった」急に明るい調子に変わった。ベッドが軌はんだかと思うと女がオレの方へ這い寄って来て、いきなり首の鎖が引かれた。オレは、苦痛に呻く。

「いつまで、ぼんやりしてるんだい。早く、そいつを外はずすんだよ」

女が、三角褌を指さした。自分で外すのもオレは初めてだった。しかも、着ける時と違って想像以上に骨が折れたが、まだオレの体温が残ったのを、恭々しく女に捧げた。女は待ちかねたようにひったくると、男の前にはうり投げた。

「さあ、これをして」

「こ、こんなものを？」男は、気味わるそうに、眼の前の三角褌をながめ、

「勘弁してくれ。もう少し……ほんの少し、待ってくれば……」

「もう、待てないの。さあ」

女は、いらいらと身を揺すって迫るが、男はまだ、手に取ろうともしない。

「汚いじゃないか。これは、畜生のするものだ」

「あんたは、その畜生以下じゃないの」

「だ、大丈夫だから……これだけは……」

「それじゃ、あたいがこれほど頼んでも、出来ないって言うのね」

女の怒りが、爆発寸前の震えを帯びた。

「お別れよ」

「ま、待ってくれ。し、しないとは、言っていないよ。すればいいんだろう……すれば」

追い詰められた男は、力のない声でそう言うのと、ベルトを取り、腹に当てた。

「生温くって、気味が悪いよ」

「あたいが、してあげる」

女は、いそいそとして、男の背中で尾錠を締め上げる。

「ウウ。痛い」

「我慢、我慢」

気の進まぬ男に、とうとう三角褌をさせ終った女は、眼を据えている気配だった。

ややあって、女が弾んだ声をあげた。

「すごいわ」

「うん」

「これは素晴らしいわ——あんたも、一式造らせたら」

「うん」

だが男の声は、消え入りそうに沮喪している。

今度は、女の方が積極的に男を押し倒す。

どのくらい経ったか、床に蹲まったオレの頭の上に突然、頓狂な女の声が降って来た。

「あら、これを取り上げたのに……」

女が男を引き起こして、四つの眼がオレを覗き込んだ。

三角褌を取られたオレは二人の肴にされる羽目に追いこまれた。

6

オレは、うとうとと夢を見ていた。むろん例の平べったい檻の中である。

楽屋入りしてから眠るということは滅多になかったが、現在では、全米の秘密社交界に並ぶものない大スターとなった、オレと黒いパートナーには、殆ど身を休める暇さえなく、今のオレに不満があるとすれば、それは眠る時間が足りないことだけだった。

普通、オレたちが眠るのは輸送中の飛行機かトラックの中だけだった。オレたちは、目的の地へ着くか、食事を知らせる飼育係の靴が

檻を蹴りつけるまで、死んだように眠った。

肉体的には、このちょっとした睡眠だけで充分だった。どんなに短い眠りでも、ひとたび目覚めると、オレたちの体には、新しいエネルギーが充満していた。それは、オレたちに与えられる餌——食物の力だった。というより、特殊な食餌投与によって、オレたちの肉体そのものが作り変えられたといってよい。

オレたちには、一般に奴隷という通念からは想像も出来ないほどの栄養価の高い食物が与えられた。もちろん、オレたち自身のためではない。オレたちの商品価値を支える肉体的プロポーションや肌の色艶を、常に最高の状態に保持することが目的だ。

調味を別にすれば、オレは毎日、王侯なみのカロリーを摂取していた。王侯には、数え切れない後宮の美妃があり、オレには、飽くことを知らぬ観客の要求があったのである。

今日も、楽屋入りの前にたっぷりカロリーを与えられたオレは、その充足感から、つい、うとうとしたらしい。そして眠ったと思うと、いつもと同じ夢を見た。オレの心のふるさと、黒い女神——B女史の懐かしい面影である。日本に居た頃の恍惚の日々、その全身を痺れさせる濃密な体臭までが夢の中で蘇

り束の間の甘美な陶酔に浸りかかると、決まって飼育係に蹴り起こされるのが常だった。

突然、檻が蹴られた。いつもと同様、全身にショックを感じて、オレは目覚めた。鉄格子の間から、爪先の尖ったハイヒールが眼にはいった。檻を蹴ったのは、飼育係ではなくこのハイヒールの主らしい。そう思った時、頭の上から、声が降って来た。

「しばらくだったね」

オレの心臓が、咽喉から飛び出るほど跳ね上がった。恐る恐る眼を上げると、つい今まで夢の中に居たB女史が其処に立っていた。ああ、何という偶然だろう。それとも、オレはまだ夢を見ているのだろうか。

オレは、わけの判らぬ喚き声を上げると、夢中で孔から首をさし伸ばした。——と、これもまた夢と全く同じに、女史の足が、ハイヒールのまま、オレの鼻先に突き出された。眠る間もオレから離れない、あの全官能を揺さぶる体臭が、オレの肺を破裂するほど満ちた。眩暈く虹が、オレの全身を包む。

「ずいぶん、人気者になったんだってね」

懐かしい特徴のある笑い声。オレは、眼に一杯の涙を浮かべ、ただウツウツと咽喉を鳴らしながら、尖ったハイヒールにかぶりつこ

うとした。その瞬間、今まで視界の外にあって気づかなかったもう一つの靴が、オレの額を蹴った。

「おい、おい。俺を忘れたのかい」

荒っぽい靴の洗礼より、その声が、オレに決定的打撃を与えた。五体の血が一度に凍った、かと思うと、次には逆に熱流と化した。

Nだったのだ。あのNが、B女史と親しげに肩を並べ、笑いながらオレを見下ろしているのだ。

(畜生ッ)

オレは、どろどろに溶けた鉄を流し込まれたような、支離滅裂な頭の中で叫び続けた。

(やっぱり、そうだったんだな。畜生ッ。畜生ッ——)

まさかと思いつながら、いつも心の片隅に引っかかっていたことが、今や、紛れもない現実として証明されたのだ。

(こいつは、こいつはグルだったんだ。初めてから、オレを欺したんだ)

オレは、現在の境遇を不幸だとは決して思っていない。むしろ、毎日毎日が充実した喜びの生活でありオレは生まれる前から、こうなる自分を夢みていたのではないかと、今では感じているほどだ。この眠った天性を、オ

レの中から引き出し、喜びを覚えてくれたのはB女史に他ならない。いわばB女史は、オレの生みの親であり、心のふるさとだ。太陽とも女神とも崇め、オレの血の最後の一滴まで捧げても足りない偶像だ。それにあのメイドだって、苦痛と凌辱の苛酷な調教の中で、一度として恨んだことはない。だが、Nだけは違う。彼は、すべてを承知しながら、素知らぬ顔で、オレを欺いたのだ。もし、彼の口車に乗ったのがオレでなかったら、眠れる奴隷の血を持たぬ人間だったら、Nは、罪もない一個の人間を、死にまざる地獄へ叩き込んだことになる。虫も殺さぬ顔をして、オレに声をかけた時から、彼は、オレが現在のような境遇になることを見通していたのだ。Nは奴隷商人だ。オレが、B女史の調教に喜びを見出だし、今また充ちたりた奴隷の生活を送っていることと、Nがオレを欺したことは別だ。許せない。絶対に許せない。

(殺してやる)

オレは、憎悪の形相で、Nを睨んだ。

「おい、おい、そんな怖い顔をするな。お前が俺を怒る理由なんてないはずだぜ。聞くとここによれば、全米一の大スターだっていうじゃないか。その上、こんな素敵なパートナ

ーと優雅な生活は送れるし、文句を言う筋合いはあるまい。それもこれも、元はといえばオレの推薦があったればこそだ。俺はむしろ感謝されて然るべきだと思ってるんだぜ。もっとも俺の趣味は、お前みたいな獣じみた軀をしている奴を死ぬほど恥かしめてやりたいということなんだが、どうやら現在じゃ裏目のようだね。ま、どっちにしても元気で結構なことだ。アハハハハ」

女性的な甲高い声で、Nは笑った。

オレは、あまりの怒りに口もきけず、ただ猛獣のように唸り続けた。

「ぼつぼつ、大スターの登場時間らしいな。それじゃあ、全米一のショウとやらを拝見させていただくかね」

Nはもう一度、オレの後頭部を靴で踏みつけると、B女史と一緒に楽屋を出て行った。

7

オレたちの入った二つの檻が、舞台に運ばれた。舞台といっても、客席の真ん中に一メートルほどの高さにしつらえた円形の回り舞台で、四方からの照明が、鮮かにオレたちを浮かび上らせた。

音楽とともに司会者が現われ、ショウの前口上を述べ始める。オレは檻の鉄格子の間から、あるものを探し求めた。すべてのライトが舞台に集中し客席は殆ど顔の見分けもつかないほど暗かったが、オレは目指すものを容易に見つけることが出来た。というのは、それが舞台に一番近いボックスに居たからだ。B女史と並んだNが、薄い唇の端に笑いを浮かべて、オレの方を見ているのと、ぱったり視線が合った。こともあろうに、彼は、自分が陥れた奴隷のショウを、その最前列から熟くと観ようというのだ。それが、オレへの恥かしめの決定打であることを、彼は百も承知しているのだ。

彼が、オレに向かって、にやりと笑った。(よし、笑え。今のうち、いくらでも笑っておけ。だが、貴様の楽しみにしているショウ

——ご投稿下さる方へお願い——
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作(イメージ画も)毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

は、金輪際、見られないのだ。よしんば、全世界の眼に屈辱の姿を曝しても、貴様たった一人だけには見せることは出来ない。自分の運命も知らずに、そうして笑っている貴様の方が、どんなに哀れか、直ぐに思い知らせてやる)

B女史と何か囁き交しながら、気取ったポーズで、ブランドーグラスを唇に運ぶNを、オレはむしろ、憐みの眼で凝視めた。

オレには、もう覚悟が出来ていた。それを逸早く肌で察した黒いパートナーの眼が、鉄格子の向こうから、悲しげに注がれているのをオレは感じていた。

口上が終わった。

二人の飼育係が入れ代りに現われ、先ずオレを舞台に固定するべく全裸、後ろ手錠のままのオレを曳き出す。チャンスは、この瞬間しかなかった。舞台に、鎖で括られてしまっただけでは、どんな抵抗もすでに不可能だ。しかも動作は迅速を要する。何故なら、飼育係は、万一に備えて、ピストルを携帯している。オレの行動が寸秒でも余分の時間を喰えば、目的を達する前に、忽ちそれが火を噴くだろう。

(さようなら、B3号)

この異国へ来て以来の、こよなき伴侶であり、今では愛情さえ感じている黒いパートナーに、オレは心の中で別れを告げた。と同時に、全身を力一杯ひねった。この一振り、両側からオレを抱えていた二人の飼育係の手が一瞬離れた。その刹那をとらえて、オレは一個の弾丸となって、頭から客席へ突っ込んだ。目標は充分定めてあった。オレの頭は、僅かの狂いもなく、Nの腹のど真ん中に深々と食い込み、バリッと、肋骨の碎ける音がした。Nはむろん一言も発せず、オレの頭をめり込ませたまま、フロアに仰向けに倒れた。悲鳴と叫喚が湧き上り、その中で銃声が轟いた。オレの身体は鞠のように跳ね上り、再びNの上に折り重なった。頭蓋のドームの中が真っ赤になった。

(これでいいんだ。オレはいま、B女史の足許に居る。こんなに彼女の身近かで死ねるなんて、考えても見なかった。オレは幸せだ)

一種の恍惚が、オレを包んだ。

(ごきげんよう、オレの女神……)

オレは急速に、再び返らぬ無意識の底に沈んで行った。

——(完)——

私が桂子を知ったのは、一九六三年の夏だった。当時の彼女は目立たぬ地味な存在だったが、そのプロダクションでは、結構、便利に重宝がられていたようだ。そのプロは世間で云う「仕出し」中心のプロで、各テレビ局とか、撮影所のエキストラを多数、送り込んでピンハネをしている群小プロだが、新



○ 女責め図絵の系譜 ○

桂子を縛る

文 と 絵

南 彦 造

聞とかチラシの広告では、所謂、誇大宣伝に属するほどの特典や能書を謳っていた。彼女もスターを夢みて応募した美女の一人だが、芸能界というものは、思ったほど簡単にはいかず、仕事のほとんどが「その他、大勢」であり、エキストラの域を出なかった。一般に大部屋女優になって終まったら、先

ずスターにはなれぬ——と云われている程、芸能界では登竜門を閉ざされた大部屋女優、それ以下の「仕出しプロ」だったから、悩み続けた挙句の果て私の所属していたタレント事務局へと志願して来たのだった。

私の所属していたプロの事務局は、大きな広告会社や民放各局の賛助で組織されていたので、専属のタレントのほとんどはテレビ界は勿論のこと、映画撮影所関係にも多数進出していた。従って研究生の志願者も多かったのだが、正式に養成した者以外は、依託生として、お世話する形だったので、彼女の場合——研究生の友人だったということなので、いちおう私が個人的に預ることにし、チャンスをみて登竜の道も考慮する——と云うことにした。

というのも、彼女は埼玉県のN女子高校を卒業したての若さだったし、外見は地味な乙女で、華やかな美女ではなかったから、さして芸能界では伸びる可能性を持っている——とは思えなかったからであった。

ところが……ある日、訪れたBカメラマンが、彼女のグラマー振りに眼をつけ、是非とも「モデル」に——とのことなのだ。

私は別に、彼女の持つ「美」と云うものに

ついて、深く追求したことは無かったので、
 ハぶん、なるほど……ねエVと改めて、彼女の
 美点をコスチュームの上からだったが、内
 部まで想像したものだった。

BカメラマンはハセミぐらいでいいVとの
 ことなので、とにかくにも彼女のOKをと
 り、Bカメラに委せることにした。

私は、彼女にハ現代のタレントは自分の美
 を認めさせるためには、あらゆる角度からカ
 メラマンに撮って貰うことだ。但し、ヌード
 だけは簡単に撮らせるなよ！Vと念を押すの
 を忘れなかった。というのは、ほとんどのカ
 メラマンはモデルを裸にしたがったし——事
 実、ヌード写真の方が、金になるからでもあ
 ったが、私は彼女が処女で、裸体が他の男性
 の眼に曝されるのに嫉妬めいた嫌悪を感じて
 いたからでもあった。内心、想像でしかない
 のだが、セーラ服を通し眺める彼女の肉体の
 しじまには、ありありと見事なボリニームが
 映し出されていて一人前の女体を想わせた。
 面積の広い円顔——それは女優の清川虹子
 的ではあったが、そこには女性ホルモンに溢
 れた、性的魅力が感じられたし、顔相学から
 云っても、一般に顔幅の広い女性は「女科医
 師」の定評つきなのは衆知の事実だった。

それに彼女は鼻の形がよい。悪く言えば団
 子鼻だったが、鼻の頭につけ、肉がつき、極
 端に云えば「胡坐をかいた」ような鼻の持主
 だった。鼻相学的にハ倅せ者であり財力に恵
 まれるV幸運を生まれ乍らに備えている——
 と云う。

またこうした女性の腰部は、円々としてい
 て、尻エクボの出来たハミロのヴァイナスV的
 な形態だと云われていた——その上、膝小僧
 の円さだ——ふくらはぎの張った見るからに
 健康そうな練馬大根——それらは、すべて隠
 された肉体美を如実に物語っていた。

私は心の奥底では、彼女の魅力の虜になっ
 ていたのかも知れない——とにかく、私は私
 なりに彼女にハカメラマンの罠にだけは、絶
 対にかからぬようV注意した(?)つもりで
 あったが……見事に逆転のうきめに会おうと
 は、泣いても泣き切れぬ、私であった。

○

その日は、ちょうど彼女が勤めているデパ
 ートの定休日だった。彼女とは約束が出来て
 いるので、私は別に附添い人の心配もせず見
 送った。Bカメラマンもハ安心せよ、テス
 トやからなVと関西訛りともつかぬ言葉で、
 頬を緊張ばらして笑ったが……思えば、それ

も意馬心猿の現われで——絶対ヌードにして
 みせる——との計画だったの、も知れない
 ——今にして思えば慚愧の極みだ。

その上、来られては困る附添いの人の監視
 を予防する銜いに過ぎなかったのだ——と知
 ったのは、既には彼女がハすべての内部の秘
 密を、Bカメラの前に曝けだし撮り尽されたV
 お祭りの後だったのでも知れよう。

○

「あかんア。そのブラジュア、とってんか
 ア。代りに、このバスタオル……巻いて！
 そやそや……あんたのは肩掛けのゴム紐が太
 くてあかんのや。邪魔でかなわん」

Bカメラは、うさんくさそうな眼つきで桂子
 の丈夫なブラジャーの紐を、ピンと弾いた。

桂子はハッとして胸を押えた。最初のうち
 は、彼女の横顔のアップとか——仰角に向い
 た瞳など——適当にパチリ、パチリと撮影し
 ていたが、やがて、アトリエのG画伯にドア
 の鍵をキンと掛けさせ、

「誰も見ては居らん。此処は神聖なG先生の
 アトリエじゃけん……安心せよ」

と多少語気を荒げてBカメラは云った。彼女は
 恐怖を感じた。だが逃げようにもドアの鍵
 が掛かっていた。下手に抵抗すれば男二人の

腕力では押し倒されるに違いない。

この場合は、平気な顔をして男たちのいう通りになる振りを見せねば、どんな結果にさせられるのか分かったものではない——と感じられるほどの冷たい戦慄が曝き出しの彼女の背筋を走った。鳥肌が、カサカサに乾きそうであった。

△でも、まだ身を守る手段はある▽

と彼女は、つとめて冷静をよそおった。

△怖い！ 男の異様な眼つきが、何を思っているのか？ 早く知りたい▽

そう思った時——Bカメラが、急に優しい眼つきになった。

「少し休もうかねエ？ 馴れない様子だし。

それに、まだまだ時間は充分あるさ……」

「うん。まア、絵のモデルさんでも、写真のモデルさんでも同じようなもんだが、疲れると決まって……肌の色がたるんでいかん」

とG画伯は一人ごとのように頷いて、ゆったりとパイプの煙を吐いた。

「そうや、コーヒーでも淹れるか？」

とBカメラが合槌を入れた。

「君は馴れンようだが、何才かネ？」

「高校を終わって、就職したンです」

彼女は、かろうじてG画伯に答えた。舌の

先が、カラカラだった。唾液が涸渇していて声にならなかった。

「いい体をしているねエ。儂のアトリエで使いたいくらいだよ。ふふふ……」

とG画伯は、悚んだように四肢を締め、蹲まった俣の彼女に触れんばかりに近寄って囁いた。G画伯の吐く煙が、彼女の耳朶を弄った。六十才に近い、初老の男の妙にあぶらぎった、ネットリとへバリつくようなだみごえだった。

彼女は眼を閉じた。避けようとすれば飛び掛かって来そうな殺意を感じた。コーヒー・ポットが沸騰していた。

「サア、出来たぞ」

とBカメラがカップを彼女にも渡した。

「休憩したら本番だぜ。南君から頼まれてるんだから、傑作を撮らんにア面目がたたんと、さり気なく笑ったBカメラは、△キミの下着が古臭くて、型が写真的でないから、すっかり外して、バスタオルを着用するよう△何度も、何度も説得した。

「ねエ、いいじゃアないか。裸になれッて云ってるんじゃアないンだ。チャンとバスタオルで巻いたポーズなんだよ。きっと素晴らしきポートレートが出来あがるぜ！」

G画伯も熱心だった。Bカメラが下着に手を掛けようとするので、彼女は逃げるように振り切って、部屋の隅に走った。

「さアさア、背中を向けているから、早く取り替えなさい！ 終わったら、ハイッ！ と元気よく返事するンですよ！」

G画伯とBカメラは、悪戯っぽく背中を見せつとめて彼女の方を眺めないようにしているので、彼女は、全ストでない気易さから思い切ってバスタオル姿になった。

どうしても許してくれそうにもないので彼女は△早く撮り終えて帰して貰おう▽と、決心したのだった。

○

「はい、よろしい！ 今度は両手を上に組んで、胸を反らして！ その方が、形のよいオッパイが一段と個性的になるンだよ」

彼女は云われる俣に両手をあげた。Bカメラが、スリとバスタオルの合わせ目を外す。パリりと翻転して、ベロンと彼女の乳房が露出した。押える余裕もない一瞬だった。

「その俣——その俣——」

と、Bカメラは一気にシャッターを切っていた。彼女は気も転倒しそうだった。羞恥と絶望が、彼女の心を奪った。

G画伯の鋭い眼つきが、彼女の裸身を捕えていた。Bカメは彼女に立ちポーズを強制した。パリりとバスタオルが落ちて拡がった。

彼女は、生まれて始めて曝す裸身が、幾つかの雑誌のグラビアに印刷され、書店の棚に置かれる過程を何回も想像した。

△お嫁に行けなくなる！▽

そう思うと、厳しい母の顔や、マセた弟妹の生意気な紅い唇が映った。

△どうしよう？▽

彼女は、初めてこの結果の複雑な恐ろしさに戦慄した。

○

「困ったわ。先生！」

と、彼女が泣き込んで来たのは、その夜のことだった。余程、当惑したらしく顔面蒼白だった。

「ネガだけは、返して頂きたいの」

と、必死でせがむのを、私も暗澹たる想いで睥睨めたのだったが、氣をとり直して、Bカメの事務所へダイヤルを回した。

Bカメは、まだ現像中だったらしいが、軽い口調で彼女の素晴らしさを報告した。私は無性に腹だたしかった。カメラマンのどんな職業意識がむき出しだった。

△畜生奴ッ、裏切者ッ▽私の心は、爆発しそうだった。神聖なるものを犯された憤懣と、やるせない彼女への想いで、△即刻ネガを渡せ！▽と強要した。

彼は突然の私の激昂に、意外だった様子が窺えたが、とにかく私の要求を入れて△応じる▽ことを確約した。

私は、すぐ車をとばした。彼は、私を暗室に招じ入れると、早速、水洗したばかりのネガを取り出した。

「これなんだがねエ。実に凄いなだねエ」

と電灯にすかして見せた。なるほど、ネガではあるが、裏立ち、表返し、屈曲位、臀背位など、あらゆる角度のアップ、ロング、ミディアム——など、なんと36枚分。3本のネガがクリップで吊られていたのだ。黒白が逆ではあるが、彼女の肢体が見事に成熟しているのが、よく判った。

△畜生奴ッ、うまい味をしめやがって！▽

と、新たな怒りが盛り上った。こんなにも量感に満ちた若々しい女体を見るのは初めてであった。胸の隆起こそ幼いが——たるみのない処女の乳房、ハミで挟ったように可愛らしい臍の穴。案外と大人っぽい腰の線——Bカメは彼女の隅々まで、あますところなく撮

りまくっていた。

私は、このネガを焼き捨てるに忍びなかった。何とかして、このネガを保存したいと思った。が、焼き捨てねばなるまい。では、それ迄に一度、焼きつけた印画を見たい。黒白反対のネガの俤ではなく、明確な裸像を此の眼の奥に、美しく印象づけて置きたい。

私の獣心が、何かを計画しようと掻きたてているのだった。

「君も……阿呆なもんだよ。これだけの……

ええモデルは、そう見当たらないでエ」

「しかし、彼女は不本意なんだから仕方がないんだ！」

「本当かねエ。彼女は内心喜んで裸になったと違うか。女の本能で最初は拒むが、所詮は、結局、見せるのが女というもンさ」

「そ、そんな莫迦なッ！」

私はムキになって否定した。とにかくにも彼女の処女体を見て終まった男に対する、男としての私の本能的な怒りだったのかも知れない。

「君さえ、承知なら、まだまだ彼女の真の美しさを探り出すことが出来るンやがねエ」

と彼は、私の心を読んだかのような口調で北叟笑む。

「不可ん！ とにかく撮ったネガの全部を渡せ！ 私が処分する」

「焼くのか？」

「無論だ！」

私は、勿体なように渋々と差し出すネガをまるめて、ポケットに押し込んだ。

「素人だねエ、君も。そんなことでモデルの世話をしようなんて……」

彼は舌打ちして私のポケットの中身に、まだ未練の表情だった。

「今回だけは、彼女の頼みもあるンでナ。悪く思わんでくれよ」

私は吐き捨てるように答えて暗室を出た。

○

下宿に戻ると、まだ彼女は待っていた。私は彼女の前だったが、貴重なネガを焼き捨てるに忍びなかった。その前に一度、印画紙に焼いて、その美を確かめたい——と思った。

「どうでしたの？」

「うむ、受取って来たよ、君の要求どおり。

……これだ。3本だってね、撮ったのは」

「はい」

私は惜しい気持でネガをポケットから出すと、彼女はスタンドの灯にすかして映像を確かめた。彼女の眼は初めて他人に撮られた自

分の裸に対する好奇と興味に濡れていた。私は彼女の瞳に浮かぶ心奥の機微を確かめる能力を持たない。彼女は今、何を思い何を考えているのか？——それは、あのレンズの前に佇立した瞬間のおぞましい素肌の不快感か？——それとも、被虐的な悲哀感か？——欲びか？——それとも初めて客観的に眺める自分の肉体の美に対する再認識か？

じっと真剣な瞳で、ネガを眺める彼女のしぐさに、私は、はかり知れない女の愚を感じた。同時に惜しみても余りある美事な彼女のネガに、限らない愛着を覚えた。

私はネガを彼女から受取ると、見ている前で焼き捨てるべく、マッチを取りに別室へ。

そして戻りがけに、私の手持の別フィルムとすり替えた。

燃え燦ぶって炭化するネガの姿を、彼女は複雑な表情で眺めていた。私は、悪いとは思いつたネガの消失を防ぎたかったのだ。

○

彼女が帰宅後——私は、すぐさま密着印画に取り掛かった。ひととおり焼付けて眺める彼女のヌードは私の眼を奪った。初めて、かい間見る彼女の裸体は、かつて見たことのない水々しい情感と哀愁に満ちていた。無理矢

理に撮られた現場のムードが、一枚一枚の小型印画に滲み出ている、表情も豊かだった。私は終夜——飽かず眺め、私は私なりに構想を練った。

Bカメの構図に満足出来ない私は、極端に個性的な種々のポーズを彼女の幻影に要求していた。ひねって、反って、折り曲げて、前から、後から、縦、横、上、下——と際限なく、モデルとしての彼女を私は酷使した。私の頭の中で、彼女の表情は、歪み、ベソをかき、涙して、眼を閉じた。

それから——何時間たったであろうか？

私と彼女は、あるホテルの一室で向かい合っていた。彼女はリラックスした態度で私との談話に明るい微笑さえ浮かべている。

その愛らしい瞳は、既に成熟した大人のセクシーな輝きと、男を惑わす魅力をたたえていた。

私は、さりげない素振り立ち上ると、彼女に出すべきグレイプジュースのカップに、サラリと睡眠薬の粉末を落とし込む。私は薬の効能を祈り、柏手を打つ——。

「どうしまして？」

「いや、なに——」

と、私はとぼけた顔で誤魔化す。彼女は美

味しそうに咽喉を鳴らす。効果テキメンで彼女は意識朦朧として昏をかき始めた。

私は得たり——と、心の醜い裏面を露骨に現わしてテレビの悪役もどきに、彼女のネグリジェの紐を解く。私はBカメラもどきに彼女の下着を強引に剥ぐと、両腕を背後に取って高々と縛り上げた。彼女は、まだ意識不明の尽だ。時折——赤いバラのような唇を開いてよだれさえ長々と引いている。私は用意のスポット・ランプのソケットをコンセントに差し込む。バッグから一眼レフを持ち出す。

彼女を夢に最も描いていた緊縛ポーズにしてライトをあてる。素早くカメラのシャッターを切る。彼女が眼を覚まさないうちに、撮り終わらねばならない。私は彼女を夢中で、まるで「玩具人形」のように伸ばしたり曲げたり、縮めたりして、たちまち3本分のネガを消耗して終わった。

私は、意識不明の彼女の緊縛を解き、下着をつけ、もとの姿に還元し、恢復の強壯剤を唇に含ませた——彼女が瞳を開く。

「あら？」

と彼女。私は優しく彼女をいたわる。

かくして彼女とのデートは終わった。が折角のネガが見当たらない。何処へ行って終ま

ったのか？ 慌てて捜すが見つからない。困った困った。汗が流れる。彼女に気づかれてはならない。彼女の怪訝そうな眼、眼……。そして掴み掛かって来る彼女……。

○

吃驚して、眼を覚ました。夢を見ていたのだ。夕空が真赤だ。寒々とした夜気にパジャマだけの肌が冷たかった。

△なんだ。……だが……待てよ！ 俺だって彼女のヌードを撮影する権利がある。いっちゃん計画するか？！▽

私は、かつてない悪だくみを思いついた。夢で見た倅に、実行すればよいのだ——私は彼女の魅力にとり憑かれていたのだ。まだ、現実には見極めぬ彼女のヌードに憧れていたのだ。夢で見たように剥いて、縛って、思い切り、レンズを駆使してみたい。

△よしッ、今夜こそ実行だ！▽

私は出勤すると△明日は公休だから是非とも日比谷公園で。……相談したい仕事があるのです▽と電話した。彼女からは——

△此の間のような仕事はいやよッ▽

と、返答がはねかえって来た。

△無論さ！ あんな酷い奴とは絶交だ▽

と私は正義漢ぶって返事をしたが、何とな

く後ろめたさは拭われない。

だが、勇を鼓して云った。

「実は……テレビ局の友人がねエ、是非、君と二人だけで会いたいと云ってるんだ」

「嬉しいわ！」

彼女の笑顔が見えるようだ。私は、あれやこれやと計画した秘策を実行に移すべく、段取りに掛かる——彼女が到着したら出来るだけ明るく振るまい、食事を取り歓待する。時間を稼ぐため、飲み物をすすめる。彼女はオレンジジュースが好物だから、それを用意して置き、すきをみて睡眠薬を投入する。喜んで飲み干した彼女が睡って終まえば……万事、OKだ。早速、用意の撮影に、とり掛かる——。

私は思った。Bカメラ以上の傑作を撮りあげてみせよう。しかも、私好みの、サディステイックな緊縛写真をだ……と。

途中で気づいて泣き声をあげたら——猿轡を噛ませて、鴨居から吊り下げてみよう。彼女の大柄なヌードを特殊な角度から撮り上げる——これは門戸不出の私の資料だから、決して他見は無用にしよう。

私は、実験がしたいのだ。ありきたりの写真とか絵画など——他の作家が試みたカスを

拾い漁って、さも自分の体験のようにみせかけるのではなく、実際に、自分の眼で、手で触覚で、指先で、確実に得た本当の材料を、自らの文献として、残したいのだ。

そのチャンスが到来したのだと云える。想ってみればBカメのお蔭だ。彼が彼女をヌードにしたればこそ得られた、私のリピドなのだった。

彼に感謝せねばならない。彼が裸の彼女の魅力を私に提供してくれたればこそ、私の構想が練れ、奮起出来たのだ——有難う、Bカメ君！

私は内心、おのれの着想に酔っていた。そして、得られた実験と文献資料の見事さには他の作家の誰もが△あッ▽と驚嘆し、データーの分与を求めるであろう、と思った。

そのチャンスが刻々と迫りつつあった。私が成功の美酒に酔い痴れるのも、間近かの時刻の問題だったのだ。

ビビビ……。

とブザーが鳴った。階下の受付からの呼び出しだ。

△来たぞッ、彼女からだ！▽

私は躍る心臓を押えて、階段を一階のフロアへ下りた。

ここは池袋附近の閑静なホテルだった。人眼を避けるにはもってこいの、文化的な明るい、たたずまいだった。

Bカメがよく仕事場に使う、格好の、防音壁つきの小部屋が、いくらもあったのだ。

「南さん。モデルさんからよッ」

と、女将が電話器を握って、笑顔だ。

「すみません」

私は期待に震え乍ら、受話器を握む。――

だが、直後にはその手から力が抜け、やっと耳にあてているだけという状態に陥った。

「どうなさったの？」

「いや、何でも、ありませんよ」

私は、訝かる女将の視線を背に、力なく階段を上らなければならなかった。

△あたしねエ……結婚することにしたのよ。

彼に相談したら、その方がいいって云うし、私も、早いに越したこと、ないと思ったんです。だってねエ、この間の先生のように、男の人ってすぐ……。だから、有名なタレントさんやモデルさんになるなんて、よっぽど大へんなことって判ったし、私の知らなかったような、決心がいると思うの。ごめんなさいねエ。南先生には、御親切にして頂いたので……感謝するわ。でもねエ、南先生のように

純粋な方ばかりじゃないと思うのよ。男って割かし狼よ。ですから、何時どんな時に突然体を狙われるかも知れないと、思え出したのよ。ねエ、そうでしょう？ 今夜お会いするテレビ局の先生だって、きっと五十歩百歩じゃないかって……。ごめんなさい▽

「なるほどねエ——」

と私は、ひとりごとを呟いた。受話器から聴こえてきた彼女の声は、ざっと以上のような内容の断わり文句だった……。△うまく行かぬもンだぜ……世の中は……▽

「どうなさったの？ お待ちの方、いらっしやらないの？」

と、女将が計算書^{つけ}を持って、襖を開けた。

「どうだい？ おかみ。おかみのヌード、撮らせんかい？」

「いやですよオ。……だいいち、あたしなンのハダカ、売れますの？」

「ああ、売れるともさ」

「御冗談を——」

私は、照れ臭そうに笑い転げる女将のボリウム^ムたっぷりのおヒップを横眼に△さて、これから、どうするか？▽と、あてはずれの時間を持て余していた。

Ⅱ人工女性の生態Ⅱ

ある△美女▽の

生い立ち

清川純平



及川マサミ。

三十八歳。

無名歌手兼小料理ホステス。

十歳年下のタクシー運転手と、

ちいさなアパートに住む。

ハイネックのチャイナドレスが

ピッタリのスラリとした美女。

若くつくっているせいもあるう

が、どうみても、そんなとしには

みえないチャーミングなひとだ。

外見はせいぜい二十六か七。夫婦

仲のよいことは有名で、アパート

のおくさん連中にうらやましがら

れている。

仕事（地方廻りの剣劇一座で、

歌謡曲を唄う。股旅ものが得意の

由）で、月に十二、三日は家をあ

けるが、ときには、旦那を同伴す

ることがあり、収入はわるくない

ようである。一時、東京都内の三

流どころのキャバレーのステージ

に立っていたこともあったが、や

はりトシには勝てず、近頃はもっ

ぱらドサ廻りのようだ。

仕事は休みで家にいるとき、濃

厚なメイクアップをし、買物カゴ

を手にして、スーパーマーケット

で肉や野菜を物色する平凡な女性

のこのひとの過去が、どんなもの

だったかを知る人はいない。

もっとも、いまから十年ばかり

前、ある週刊誌が彼女の過去をあ

ばき、あることないこと興味本位

に書き立てたことがあったが、彼

女は、周囲の視線にいたたまれず

当時の東京目黒区駒場町のアパー

トを出て、そうしたことにあまり

関心を示さない下町の、墨田区吾

嬬（あづま）町の、いまのアパー

トに移った。

昭和十九年の秋、及川政美少年

は、当時の「満洲国」牡丹江省の

日本軍宿舍にいた。その年の春、

伝染病とかでアツという間に父、

母、兄弟の家族のすべてをうしな

い、行くあてもないまま、父が軍

のご用商人で食料の納入業をやっ

ていた縁故で、部隊に引きとられ

「少年兵」という名目で、隊長づ

きの当番の役をあてがわれていたのだった。

十二歳、紅顔の美少年である彼は、いふなれば部隊のマスコットであった。

上司の許可もなしに、部隊内にそうした「いささかう」を置くなどということは、許されることではなかったが、そろそろ敗戦の色の濃くなったそのころは、少年の一人や二人、部隊全員が心を合わせて、適当にごまかすことができたのである。

兵隊の一人が、どこからかみつめてきた中国女の服、クーニャンの、すそ長のきらびやかな服を着せてくれ、また別の一人が、顔をつくってくれると、すばらしい中国の美少女ができあがる。部隊幹部三十人が居並ぶ会食と称する宴会に、部隊長のとなりに坐らせられた少年に、三十人の食っているような、やくような視線がそがれ彼は、まるで女になったような気持だったと言う。

「はげしい軍隊生活のなかで、あの晩の、みんなの私をみつめる目と、きらびやかなクーニャンの服が、たったひとつの楽しい思い出だった」

というのだから、哀れである。ところが、その会食のさいちゅうに、ちょっとした事件がおこったのである。

「上官殿！」

血相変えた兵隊が、あわただしく会食の場へとびこんできた。

「査閲であります！」

上部機関の本部は、かねて一つの情報をキャッチしていた。

(T-2部隊では、女の子をかくまっている)

T-2部隊というのは、政美少年がかくまわれている部隊でありおそらく美少年の彼が、第三者から「女の子」と誤認されたのであらうことは容易に想像できる。

本部は、その情報をさらに調査するために、夜を待って係りの将校に憲兵をつけて、査閲をかけて

きたのである。

査閲官は大巾な捜査権をもっており、部隊長でも手はだせない、おまけに、オニよりこわいとおそれられている憲兵が、もう部隊入口からツカツカと入ってこようとしているのだ。

「オイ、政美、来いッ！」

若い、まだ任官したばかりの少尉が、少年の手を引き、あわててその場を去った。

酒が出、豪華な食べ物の並ぶ会食は、非公式に黙認されていた。

だが美少年はまずい。いまこそ、かくまわれているとか風評の絶えない女が、もしもいたなら引っ捕えて、と意気こんだ査閲将校以下の連中も、空しく引きあげるしかなかった。

もっとも、部隊が、ひそかに貯えていた酒、缶詰、砂糖、タバコなどのプレゼントが、一行が乗りつけたサイドカーに、山のように積み込まれたのは、ここで、行きが行なわれたことになるのだ。

少尉の、たくましい両のうでに抱きすくめられ、私宅に連れこまれた政美少年は、恐ろしさに、おののいていた。

査閲というものの、正体のわからない恐ろしさは、肌で知っていた。そして、少年兵とは名目だけで、自分が非合法のヤミの人間という存在であることも。

「声を立てるんじゃないぞ」

少尉は、私物入れ用の押し入れの扉を開き彼を押しこんだ。

押し入れの中は広く、カビくさく静かで暗かった。毛布のほかは何もなく、かくれるには絶好であった。

政美少年は、恐怖にふるえながら、毛布をすっぽりかぶって横たわった。

着たままの、中国女性の服から香料の香りにまぎって甘ずっぱいような、ワキガのような、体臭と考える香りがただよってくるのに気がついたのは、それからしばらくたってからだ。おそらく、この

服の持ちぬしは美人だったにちがいない、などと、とりとめのないことを考えているうちに、いつしか寝てしまったらしい。

ふと目がさめたら、足もとに何者かのけはいがする。

それは先程、この押し入れにくまってくれた、名も知らない少尉だった。

すっぽりと服のすそをまくりあげられ、顔をおしあてられて仰天した。

恐ろしさに、逃げたかった。

だが、会食場のほうがどうなっているかわからない、うっかりここを出て査閲官にでもみつかったら、たいへんなことになる。

彼は、身をよじりながら、少尉の奇怪な行動を懸命にがまんするしかなかった。

少尉の荒々しい吐息を肌に感じたが、いまは恐怖と苦痛にさいなまれ、どうするすべもなく、ただ闇のなかにふるえているしかないのだった。

「あれから二十六年、いろいろのことがあった」

彼女は眼をうるませる。

終戦の翌年の秋、引き揚げ者として日本の土を踏んだ彼を、やさしく迎えてくれる者はなかったのである。

「彼女」と「彼」の使いわけはいささか厄介だが、引き揚げ当時はたしかに男性だったのだからこれは致し方ない。いましばらく辛抱ねがいたい。

彼は、どこをどう立ち回ったのか東京都下立川市の、米軍基地の雑役係として住み込むことに成功した。

満洲では日本軍に、日本に帰ってはアメリカ軍に、どちらでもモグリの住人として生活したのは偶然とはいえ、おもしろいことである。

基地の雑役からPXのボーイ、はては、将校の家族宿舎の雇い人と、アメリカ軍関係に厄介になることおおよそ十年。

十二歳の紅顔の美少年は、二十歳のたくましい若者に成長していった。

この間に、英会話は一人前となり、オートバイ、自動車の運転もマスターした。自己流ながらギターを弾き、歌のべんきょうもやった。

白人のなかで生活するおかげで彼の思想も日常の生活も、しだいに日本人ばなれがしてゆくのはあたりまえのことであろう。

外人にはソドミー、つまり男色の愛好者が多い。背丈こそ一七〇センチと、一人前だが、やせた色白のくちびるの真っ紅な若者は、男ともつかず女ともつかない、いわば両者を兼ねそなえた人間―そして、どんな要求にもノーといわずに従順にしたがう政美は、かれらのよいえじきであったようだ。

「ずいぶん、へんな相手にぶつかったわ。あたしのからだのすべてが、商品として高く売れた時期もあったわ。外人はしつこいなんて

よく言うけど私の出会った連中ときたら、しつこいなんていうもんじゃなかったわ。まるでキチガイかケダモノよ」

外人のソドミストには、相手がいじる者が多いが、どういふものか政美青年の出会った人間はその逆のことを好む者が多かったという。

「大型のジョッキを持ちだして、それへ、おしっこしろ、というのよ。いくら男の私でも、そんなところで、仲々出せるものじゃないわ。でも、いやとは言えないし」
いいつけ通りにしたら、それをゴクゴクと、まるでビールのようにのんでしまったばかりでなく、こんどは逆に、自分がその中へみたして、

「どうでしょう。こんどは、私にのめ、のめってきかないのよ」

さらに、もっとひどいものになると、中年の軍曹あがりとかいう男は、彼を三日契約で自宅にとじこめ、初めの二日間は、食事代わり

に果物とチョコレートだけ。あと
のものはパン一とかけらも口に入
れることを厳禁し、三日めに、ト
イレへ連れこんだ。

「ほんとに不潔な趣味なのよ。出
てくるものは、チョコレートとフ
ルーツだけだから、どうというこ
とはない、なんて言いながら舌つ
づみうつんだもの。こちらは恥か
しいというより、胸がわるくなっ
て、吐いたわ」

外人には、いわゆる便器趣味の
人間が多いというが、彼の告白は
それを裏付けるのだった。

彼の運命に、大きな転機が生じ
たのは、二十三歳の秋のことであ
った。

相変わらず、ネグラと心得て、
もぐりこんでいた米軍宿舎のボス
に誘われて日光ヘドライブに出か
けた帰りみち、国道四号線で大型
トラックと正面衝突。助手席でう
たた寝していた彼は、大ケガを負
った。ボスは、奇蹟的にカスリキ
ズ一つなく、車は大破したものの

彼が一人で、災難を一身に負うこ
とになってしまった。

下半身をグシャリとつぶされた
形で、病院に運ばれたとき、院長
はいった。

「局部損傷。すぐ切らなければキ
ズが悪化して手をつけられなくな
る。男としての機能を失うのは辛
いだろうが、生命には代えられな
い」

当たりどころが、よっぽど悪か
ったのだろう、目もあてられない
ほどの損傷。

「それは、悩んだわ。だって、そ
っくり切られちゃったら、どうい
うことになると思う？」

しかし、いくら悩んでも生命に
は代えられない。

全身麻酔六時間におよぶ大手術
のすえ、ついに切断されてしまっ
た。

手術というもの

初期の女装マニアは、かくされ
た肉体までも女装しようとはしな

い。もちろん、身も心も女になり
きるためには、思いきってじゃま
なものを切り取ってしまいたいと
本心で思うようになるものだが、
いざ切断となったら、なかなか決
心はつきかねるし、手術には多大
の危険が生じやすいし、莫大な金
もいる。

だから女装マニアの多くは、衣
装や持ち物に金はかけても、切っ
たりなどはしない。

ステージダンサーとして、歌手
として、テレビタレントとして有
名なK・Mは、ほんとうに女にな
りきるために、あえて切断にふみ
きった勇氣ある一人だが、手術を
前に、その恐ろしさ、莫大な金、
そして苦痛、そして切ったあと、
悔いはしないか、女ともつかず男
ともつかない人間となることの恐
怖の体験を語り、やはり切るべき
でない、と洩らしている。

まして、理由もなしに切ったり
するのは、施術者が、場合によれ
ば罪に問われることにもなるのだ

から、いくら切りとって、と願っ
ても、容易に叶えられないどころ
か、現時点では、それは不可能と
いうことになるだろう。

ここで思いだされるのは、むか
し、中国にあった、宦官へかんが
んという存在である。大奥に仕
える男性たちが、女中たちと間違
いをおこさせない用意に、予め切
ってしまうという、残酷なやり方
で、無理に機能喪失人間をつくり
あげてしまう。切られたほうは、
やがて、物の考え方でも、発声で
も、身のこなしでも、すべて女性
化してしまい皮肉にも、かえって
皇帝の寵愛を一身に集めたり、特
殊な方法で、女帝や女中たちを結
構よろこばせたりした、というこ
とが文献にのこされている。もち
ろんこれは昔のことであって、現
在では、そんな風習は影をひそめ
てしまっている。

無事、退院した政美青年は、外

見こそ以前と変わらなかつたが、ひとたび衣服をぬげば、もはや男ではなく、かといって女でもないなんとも、奇妙な外観であつた。いちばん辛いのがトイレと風呂。男のように、立ってシャーというわけにもゆかず、風呂へいけばジロジロみられる。切断以後、目立って肉体的に女性化するのが自分でもわかり、こわくなったというのだ。胸はふくらみ、声は丸く、肌のツヤさえ桜いろ。ヒゲも伸びが鈍つたし、スネやウデの生ぶ毛がうすくなり、自分ながら見とれるように、きれいなからだになつていった。

本格的に、女になろうと決心したのは、二十五歳の夏のことであつた。

デパートへ行って、下着から和服まで一式ととのえ、発声法まで研究した。町の神社の祭礼の素人のど自慢に出たら、鐘三つ。たまたま後援のため来場していたレコード会社の文芸部員にすすめられ

オーディションをうけたら合格。その縁故から、地方廻りの劇団に加入し、アルトともソプラノともつかないユニークなハスキーな声で一時はずい分人気を集めたという過去をもっている。

現在同棲中の彼とは、タクシーに乗り合わせたのが縁で、いっしょに住むことになったのだが、ベッドの中では一般の夫婦となんら変わりはない、と真剣な表情で強調する。

「近いうちに、もういちど産婦人科の手術をうけるのよ。もちろんいまだって、あたし、献身的にくしているから自信はあるけど、先生が、ほんものそっくりにこしらえてやるってタイコ判を押してくれたのよ。でも、そんなものにとよらなくなつて、男の悦びもわかるし女の悦びもよくわかるのだから、あたしは二人前よね」

と、嬉し気に眼を細め、本当に幸福そうである。

いまは、どこからどこまで完全

な「彼女」になりきっている彼女である。どんな暑いときでもハイネックのチャイナドレスで押し通すのは、これだけはどうしてもカムフラージュできない、のどぼとけをかくすためと、

「牡丹江で、私を女にしてくれた少尉さんが、どうしても忘れられないための中国服」という。

彼女のアパートに通されると、なんのつもりか、かならず入口の鍵をかけてしまう。

キチツとドアに鍵をかけ、畳にすわつたとたん、やはりふつうの人間では出せない、ある種の妖気めいたものが、その表情に浮かぶのはこの人の過去が、そうさせるのかもしれない。

過去といえ、いやな思い出を振りきるために、政美からマサミへと、名を変えたのは三年前のことだそう。

しかし、みずから妖気を振り払うように、激しく首を左右にゆさ

ぶり、

「ねえ、参考までに手術のあと、みせたげましようか？」

やがて中年期というのに、その肌にいささかのおとろえもないのは、美容を保つためには収入のぜんぶを使い果たしてもおしくないという、その生活態度のおかげなのだろうか。

「ステージへ立つ前に、パンティなんかとっちゃうのよ。そんなとこは、やはり男ねえ」

きわどいことを軽くいつてのけスラリとたちあがって、イタズラっぽくウインクしながらドレスのすそをまくりあげて、白い腿をゆつくりさらしはじめるその表情には、たしかに、世間の平凡にくらしている男性にも女性にもない、なんともいいようなない、すさまじい鬼気といった感じの閃光が走るのであつた。

—(おわり)—

× × ×

× × ×



カット・志羽利也

□ 水田真紀子習作シリーズ □

女子大学生

水田 真紀子

女中が、その部屋の中へ麻のロープを持って入っていったとき、梨花は既に手首を後ろに縛られて坐っていた。

「あら？」

女中は、その姿を見て、ちょっと立ち止まってから、改めて襖をしめた。

「もう縛られてるの？ ずいぶん、手まわしがいいのねえ」

実は、縛りに来たのであった。縛る時、さぞ抵抗されると覚悟して入ってきたのに、相手が、もうちゃんと縛られているので、女中

は少し気がぬけた感じであった。

既に梨花は縛られていたのである。それもと丁寧に着衣まで、みんな脱がされ裸にされて縛られていた。

部屋の隅には、スカートやシュミーズが、やや乱雑にまとめられていて、その傍でパンティー一枚の身を縛られて、きちんと正座してうつむいていたのであった。

「まあ、誰に縛ってもらったの？」

女中が問いかけるのを無言で、ちらっと、こちらを見上げた瞳が美しく輝いて、ちょっ

と赤くなった。

「おや、見かけない子だね。素人さん？」
その瞳を見て女中が近より、しゃがみこんで顎に手をかける。

「まだ、若そうね」

どこかに幼い面影が見うけられた。

「いくつなの？ あんた」

「二年です」

はっきりした声であった。

「二年って、どの？ まさか——」

年令をきいたのに、この返答にちょっと女

中は、とまどったようであったが、

「じゃあ、なに、あんた、学生さん？」

「はい、女子大の二年です」

「まあ！ 大学生なの」

へえっ！ と感心したり、驚いたような声をあげて、女中は息をのんだ。そして、改めて全身を眺める。

若い肢体であった。小麦色の、しみ一つない素肌が、若さで、はちきれそうであった。

その素肌が惜しげもなく晒されて、後ろ手に縛られているのを、女中は珍しいものでも見るように眺めた。

「名は、なんていうの？」

「川本梨花っていうんです」

美しい瞳で見つめられて、女中はちょっとたじろいだようであった。

「まあ、あんたったら」

しばらく言葉が続かなかったが、

「梨花さんっていったわね。あんた、こんなことされて羞かしくないの？」

いぶかるようであった。

「そりゃ、羞かしいですわ」

梨花は改めて耳もとを染めたが、

「あたし、前にもモデルになったことがあるんです」

ちょっと笑ってみせた。

「モデルって、写真の？」

女中は、こんな姿でヌードの写真を撮らせたりするのかと、びっくりした。

「いえ、油画のモデルですわ」

「あ、なるほど」

想像が外れたのに、ちょっと笑ったが

「そのときも、こんな姿で？」

「いえ、くくられたりなんかしませんわ。今日が始めてなんです」

明るい声であった。

「へえ！ で、今日は、どんなことをされるか知ってるの？」

「いえ、知りませんわ。でも、くくられるってことは条件だったから知ってたんです」

「条件？」

「はい。最初からそう言われてるんです。何倍もギャラがもらえるんですもの、仕方ありませんわ」

「じゃ、お金もうけでやってきたの？」

「はい。あたしアルバイトして学資を稼いでるもんですから」

割りきった答であった。女中は、これには二度びっくりで、いつも今までのケースは、商売女の、もう何もかも知っている者で、そ

れでも中には、あまりのことに途中から悲鳴をあげる女もあるのに、この娘は果たしてこれからの扱われ方に耐えていくことができるか、それが疑問である。

勿論、どんなにされるか知らずに連れてこられたのだろうが、何も知らない、ずぶの素人で、それも若い娘だけに、ちょっといじらしい気がして

「梨花ちゃん、こわくない？」

と、きいてみた。

「周旋屋さんから、裸のままにくくられていればいいからって言われて、こうして今、くくられたところなんです」

「まあ、あの人に縛られたのね」

「はい」

女中は梨花の肩から二の腕にそって素肌をなでていきながら

「でも、女の身で、こうして自由を奪われていたら、どんなにされるかってこと、考えないの？」

「どんなにされるって？ でもモデルになるだけなんですよ」

「まあ？」

女中は、ほんのこのことを言おうか言うまいかと、ためらっているようであったが、梨花

の素肌をなべているうちに、そのはちきれそうな若さに軽い嫉妬を覚えて、この美しい肌が羞恥で赤く染まり、のたうって悶える様を想像した。

「いまに分かるわ」

とだけしか言わなかった。

後ろ手にされて、縛られている手首の具合を、ちょっとたしかめてみたが、案外きつく縛られていて、軽く握っている指先が、少し色が変わっているのもあわれであった。

「痛くない？」

後ろから、肩越しに尋ねると

「少し痛いんです。でも、しばらくの間だったら、がまんできますから」

体を、やや前にかがめて正座して揃えている足のふくらみが、すんなり伸びて、きちんとひざ頭を合わせているのが見える。この、弾力のある長い足も、すでに女中にはない若さであった。

「胸も縛ってあげるわ」

麻ロープをしごく、

「胸もくくられるんですか？」

顔が上がった。

「そうよ、胸から二の腕も動けないようにして置かないと……」

後ろから梨花の乳房の上を、ロープをたぐって二、三回、まわしてしめつける。

「あ、きついわ」

しめるたびに、梨花はウッウッと呻いて体がよじれた。更に乳房のすぐ下も、くるくるとロープをまわしてゆく。

「ウーン」

息をつまらせて、こらえているのが、よく分かる。

「何さ、このごろの若い娘は帯を結ばないから分からないだろうが、もっともっと締めあげるのよ」

容赦のない力で締めあげると、梨花の二の腕は、背なで肩から真っすぐに伸びて、体にびったりと、つくまでに縛り上げられた。いや、体に喰いこむように締めつけられ、柔らかい二の腕の肉にロープが喰いこんで、痛々しい姿になっていた。

「息が、つまりそう……」

ゆるめてほしそうな声であったが、女中は許さなかった。その上、前にまわって梨花の乳房を、上下を縛ったロープの間から引っ張り出すのである。

「あ、あ」

乳房は引っ張り出されると、もうロープに

上下を挟まれたまま、もとへ戻らずに大きく前方へ飛び出したままになって、倍のふくらみになった。

「羞かしいわ、こんな」

その乳房をみて、梨花は身をかがめる。

「アルバイト料、もらってるんでしょ。文句を言うんじゃないの」

ロープで締めあげられた裸身を上から眺めながら女中は、もう同情者から敵対者に変わっていた。この、自由のきかない柔らかな女体が羞恥と屈辱に悶えてゆく姿を想像して「さ、立つのよ、連れてったげるから」

と、うながすのであった。

「ひどいわ、こんなにきつく、くくっちゃって——」

梨花は、上半身を太腿に押しつけるようにして身をよじっていた。抵抗してみたが、結局立たされて、後ろから、こづかれた。

「あ、あたしの洋服を……」

ふり返るのを、叱りつけるように

「あとで、渡してあげるわよ」

パンティだけの姿で歩かされる。つまみ出された乳房が、歩きたびに胸でゆれるのが羞かしかった。こんな姿で廊下で誰かに逢うのが、たまらなかったが、幸い誰にも逢わずに

別の部屋に連れてこられて、後ろから突かれるように転げこんだが、その部屋に入って梨花は驚いた。

「あっ！」

と思わず声をあげた。明るいライトが正面の左右から照らされていて、暗さに馴れていた目がくらんだのであった。

そのまま、部屋の中央にあった黒檀の客机の上に、まるで寝台に寝るように仰向けに寝かされて、起き上がれないように肩のところで机に縛りつけられた。

頭が机から出て、ガクンとのけぞるように落ちる位置であった。だから自分の姿を見られなかったが、まさかこんな机の上に寝かされるとは思っていなかったもので、どんなにされるのか、とまどった。

机は大きいといっても足の方は、ひざから先は向こう側にはみ出して、充分に足の裏が畳につかえた。体だけが机の上にある。

女中は、梨花をそんなにしてから

「ちょっと待ってるのよ」

と言って、部屋を出ようとした。

「あ、待って。あたしはどうなるの？」

顎を上に向けた梨花の顔が、さかさまからあわてている。女中は笑って

「あなたに大金を出した人が来るわよ」

「えっ！ それは誰？」

「フフフ、心配しなくてもいいわ。ほんとうにそんな恰好で縛られてると、どんないたずらでも出来るわね。でも貞操を奪われるような心配はいらないわ」

「そ、そんな、あたしいやよ。そんな約束じゃなかったわ」

梨花の自由になる足がバタバタもがいた。「おとなしくするのよ。だから何も、そんな心配はいらないっていつてるじゃないの。そのかわり……」

「え？」

女中は返事のかわりに、また近よってきて梨花のお尻の下に座布団を二つ折りにして、ひいてやった。

「こうしたら、手首がじかに押されないから痛くないわ」

梨花はパンティだけの腰を持ちあげるような姿勢にされて、痛さの辛抱より、この姿勢の羞かしさに頬が赤くなった。

「いや、こんなにされるの」

もがいたが、自由のきかぬ身では外すこともできなかった。

「よく発達してるわね。とても素敵だわ」

女中は、悶える梨花の体の動きをみつめて「どんなことになっても、声をあげちゃ駄目よ。もっとも、声をあげても、どうにもならないし、さるぐつわをさせられるから、もともとよ」

何でもないように言うのだが、梨花はびっくりした。

「えっ！ さるぐつわ？」

そんなにまでして、この身を晒さなければいけないのかと、ただ金額に目がくらんで、こんなアルバイトを選んだことを悔んだ。

「もう、あたし、よすわ。ほどうて下さい」

必死になって、もがき始めた。

「馬鹿ねえ、もう逃げられないわ」

「いやいや、それでも、いや」

梨花は、もがいた。

「そんなに言うのなら、このパンティをとってしまふよ。洋服も返さないわ。どうして帰るのさ？」

「えっ？」

女中が、パンティの上からだか、梨花の柔らかな肌を押さえた。

「あっ」

電気に触れたように、梨花の裸身がピクリとした。

今まで、パンのため、学資のため、モデルのアルバイトをやったことは何度もある。しかし、体にさわられたり、縛られたりしたことはなかった。今こうして裸身を縛られて仰向けに固定され、どんないたずらをされようと逃がれるすべのない身にされて、急にこのアルバイトがこわくなってきた。もうお金なんかいらぬ、帰してほしい。そんなに身の危険を感じていた。

女中が出て行って、しばらく明るいライトに照らされ、梨花の素肌は不安と危惧に晒されたまま、時間が過ぎていった。

やがて、ふすまが開いて誰かが入ってくる気配がして、梨花はハッとなった。見ると、まだ、おっぱいの幼い顔の少女であった。小さな包みをもっている。その少女が、無残に晒された梨花の傍に坐った。

「お姉さま。あたしが奉仕します」

真面目な顔である。

「えっ？」

後ろへ落ちた顔をあげて、のぞいてみると少女は大きな鳥の羽をとり出してきた。その羽毛で、梨花の柔らかい横腹を軽く撫ぜ始めたのだ。

「あ、あっ」

その感触に、梨花は身をよじった。まるで触れるか触れないかのような撫ぜ方、そのくすぐったい感じが、たまらない。

「あ、いやよ、よして——」

不自由な裸身をくねらせて梨花が悶える。しかし、後ろ手にされて机の上に仰向けに固定された身の、どうして逃れることができない。脇腹からのどのあたり、少女が無表情に撫でてくる。

「あっ！ いや」

身の置きどころがなかった。体中の血が逆流するような思い。全身にまわってくる、くすぐったさに悶える。

太腿の内側の、股のつけ根のあたりを撫ぜられた時、梨花は思わず、ぞくりとして洩らしてしまった。

「ああ！」

パンティに押さえられて一面に拡がった温かい感触に、梨花は真っ赤になる。

「ゆるして、かんにんしてえ」

全身が、波打っているのであった。

そのうちに少女は、大きくふくらみをみせてつまみ出されている梨花の乳房に焦点を合わせた。無表情に動かす羽毛のおぞましい責め苦。

「いや、いやよ」

悶えても、決して休みのない動作に、ひとりでに梨花の乳房が火を持ってきた。乳首のあたりがキュッとしまって羽が撫ぜる度に、よけいに強い刺激となってくるのである。

「ああっ！」

始めて経験する体のうずき、理性では制止できない感情が、好むと好まざるとに拘わらず、梨花の体に襲来するのであった。少女には、この感じはわからないだろうが、こうすることを教え込まれているのであろう。

固くなった梨花の乳首を二本の指先で、こね始める。

「いやぁー、ふうっ」

梨花の悶えが、一層ひどくなる。指でいじりながら、仰向いて悶える梨花の唇に少女の薄い唇が合わさってきた。

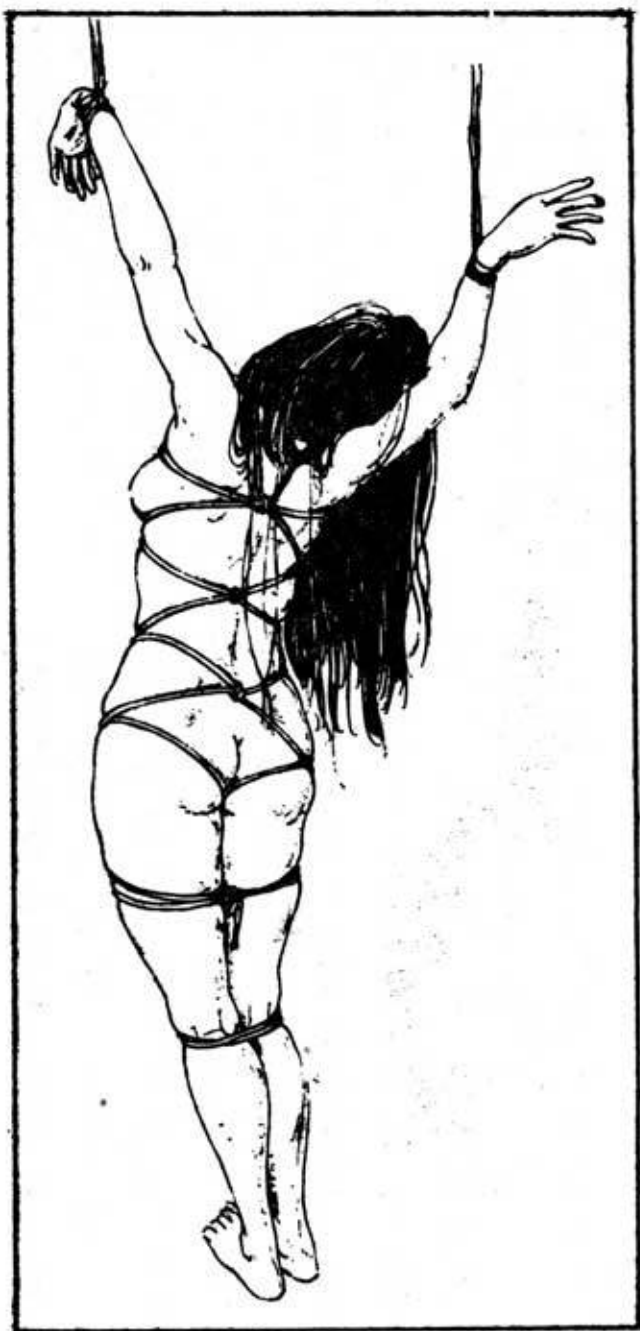
「むうっ！」

息をふさがれて梨花は呻く。こんな少女にもてあそばれて……と思うけれど、梨花の女としての感情が制止できないのであった。

悶えぬいて、ぐったりしたところを、少女のために片足を机の足に縛られて、ハッとなった時には、もう足の自由がきかず、少女は無雑作に梨花のパンティを剥がしてゆく。

……読者ギャラリー……

『造形文字』 細川 健二



「いやっ！」

言ってみても、腰は持ちあげられたままなので、クルリとヒップの線が外れる。縛った片足の方へ両足を揃えさせて、器用に脱がされた。パンティは、縛られた方の足にたぐりよせられ、別の足首も片方の机の足に縛られようとした。

「ああッ！」

下半身が完全に上げられて固定されると、梨花はそれきり気が遠くなった。

☆

ふと、気がついたとき、少女はそこに居なかった。明るいライトに照らされて、梨花はひざを合わせようと腕くのだが、もうどうし

ようもない。腰が座布団のために持ちあげられているだけに、一層羞かしいポーズであった。

誰かに見られている感じがして、思わず瞳を廻す。しかし誰も部屋の中には居ない。ただ一人、こんな屈辱的な姿で転がされているだけであった。しかし、どうも人の気配がするのである。ジーンと、押さえつけるような音がきこえる。パシャッという音も耳に入

「あっ！」

梨花は、それがカメラのシャッターの音であると気がつくと、とたんに全身の血が凍る思いになった。この羞かしいポーズをフィ

ムに収められているのだろうか？

身をくねらせて、この姿態から逃れようとするが、よけいにジーンという音が耳についた。8ミリカメラの廻る音、と気がついた時羞かしさに梨花の裸身は真っ赤になった。しかし、まだこれだけならよかったのである。次には、もっともっと羞かしい思いをさせられたのである。

中年の男女が入ってきた。そして、梨花の目をみはる中で、身にまとった衣服を脱ぎ始めたのである。女は、スリッパも脱いだ。

「まあ、この娘の肌は綺麗ねえ」

全裸の梨花を眺め廻す。

「まだ若そうね。きつと、びっくりして声をたてるわね」

「声をたてさせちゃ、可哀想だぜ」

男が口をきいた。

「そうね、さるぐつわをかませちゃうわ」

女が花模様のショーツを脱ぐと、下にメンズバンドを着けていたが、それも脱いで「メンズで汚れてる、これをさ——」

梨花の目の前で、ひらひらさせると、こともあろうに矢庭にそれを梨花の唇を押し分けて、詰めこもうとしたのである。

「むうっ！」

おし込められて梨花は呻いた。

同性の、おぞましい臭いが口一ぱいに拡がって、ぐぐつと吐き気がしたが、遠慮会釈なく詰めこまれ、ショーツまでくわえさせられた。入りきらなくて、その一部が唇からはみ出している、その上から手ぬぐいで、ぎゅっと、さるぐつわをされた。

「う、うっ！」

舌を押しつぶされ、大きく開いた口の中、一ぱいに丸めこまれた、中年女のくせのある臭いが、手ぬぐいに押さえつけられて梨花の鼻を、つんと刺戟する。舌全体に伝わってくる青くさいような味。その不潔さに、全身でもがいたが、どうすることもできないのだ。

下半身は、明るいライトに容赦なく晒されて、今こうして同性の汚れものを口一ぱいに入られて、あまりの屈辱に梨花は全身を羞恥に染めて不自由な体をよじる。

「いや、こんなひどい目にあうのはいやよ、もうかんにんして」と泣きわめくのだが、その声は「むう、う、う」と、さるぐつわに殺されて、悶えぬく裸身が、よけいに艶めかしうつつる。中年男が、

「たまらねえじゃないかよう」

野卑な言葉を投げかけた。夢中になってい

る梨花は、気がつかなかったが、数人のため息がきこえてきた。明るいライトにさえぎられて殊更に暗くなった隣室には、今夜のショーを見るために、既に多勢の客が詰めかけて今まで息をひそめていたのである。

暗闇からカメラを構えた者もあろう。こちら側の明るい照明では、フラッシュも必要としない。梨花が大きく足を上げた側に、この隣室がつながっているのだ。

うら若い処女が、惜しげもなく足を上げてこれらの客たちに提供しているだけでも貴重なものであった。その傍で、これから海千山千の中年の男女がショーを始めようとするのである。これは、たまらないであろう。

梨花にとっても、見るに耐えない眺めであった。筋書きは、梨花の美しい体に刺戟された男が、これを眺めながら他の女を求めてゆく、というものであった。

男は、半ば演技である。しかし受身の女性は、途中からほんとうに熱中してきた。それが見ている者に、はっきり分かるのである。男はときたま、梨花の裸身を撫ぜたりした。

「う、うっ！」

梨花は素肌に伝わる、おぞましい感触に、総身の毛穴が慄えるのである。その掌の感じ

が、まるで毛虫に撫ぜられたように、いやだった。上半身と両足首は、縛りつけられていて、動かせないので、自由になる腰のあたりが悶える。

その腰は座布団にもちあげられ、大きく左右に上げられた太腿が、ともに暗やみの客たちの眼前でゆれるのであった。梨花は羞かしさに死んでしまいたいくらいであるが、どうしようもなかった。

「むうっ！ ふうっ！」

あまりの屈辱に、せつない呻き声をもらすだけであった。

花も恥らう若い女の裸身は、こうして男たちの眼前で、明るいライトに、うぶ毛の一本一本までが見えるように晒されているのであった。

「むうう……」

その声までが無残な哀れみを含んで足首を左右の机の足にくくられているのが、尚一層痛々しい。その片方の足首には、今まで身につけていたパンティが丸められて、悶えるたびにゆれている。

こちら側からのぞくと、大きく波を打っている梨花のおなかの向こうで、つまみあげられた乳房までが、大きくゆれている。

その乳房が、中年女の呻きとともに下からつかまれて、ぐぐっと梨花の裸身が反りかえった。中年女はぐったりとなると、男に抱きおこされ、今度は机の上でもがいている梨花の裸身を抱きかかえるようにのせられたのであった。

「うーっ！」

その重みに梨花の二の腕を縛ったロープが張りさけるように身をしめつけた。

中年女は、梨花と方向を逆にのせられたので、梨花の腰を頭の方から抱く形になり、中年女のお腹の部分が梨花の胸を圧し、梨花の顔は、むんむんするこの女の股に挟まれるような恰好になった。

見られるだけでも羞かしいところへ、いくら同性とはいいながら息がかかるほど顔を近づけられるのは、たまらない。仰向けになった体に、女の肌がぴったりとかぶさって、その肌ざわりからして気持が悪いのだ。

「うううっ！」

梨花の悲鳴が、さるぐつわから洩れる。

そんな姿勢になったところを、男がこの女の体をゆするのであった。中年女の体が左右にゆすられると、梨花の体もゆれる。

乳房の上下をぎっちり縛られて、その間に

挟まれて持ちあげられている、梨花のふくらみが、ぴったり女の体重に押しつぶされて左右にゆすられると、苦しさに辛抱できない。

「うううっ！ うううっ！」

梨花の悲鳴が一層、せつなく部屋の中に拡がってゆく。男が女に何かして、いじめているにちがいない。

「ひいっ！」

女も、もがいて梨花に抱きついてくる。

熱い息が肌にかかって、そのおぞましさと羞かしさ、乳房の痛みと息苦しさに、梨花は悶えぬいていた。

中年女の、しまりのない肌がぴったりつけられて、虫ずが走るようないやらしさの中にゆすられるたびに、さきほど少女に鳥の羽でいじられた時に味わった、充血するようなしびれを乳房に感じ始めていた。

「むううう」

体をよじって耐えている。

「あ、あーん」

女の、感きわまった声とともに

「ぐうううっ！」

梨花の苦しそうな声が、さるぐつわの中で大きかった。仰向けられて、あごからのけぞっているとはいえ、梨花の顔の上に女の動作

があった。そのいやらしさに、梨花は身の置きどころがない。

「うっ、ううう」

暗闇の客たちの、ため息が大きくなり、8ミリの回転音が、ひとしきり大きくなったがもう梨花の耳には入らなかった。

貞操こそ奪われはしなかったが、死ぬほどの羞かしさを味あわされて、梨花がようやく解放された時は、衣服をよこされても暫くは手もつけられず、膝を抱いてすすり泣くばかりであった。

縛られていた手首が痛く、二の腕にもくつきりと赤いすじが入っている。それよりも、最後に女にいじりまわされたうずきが、何にも増して梨花の屈辱感をさそうのであった。

見れば、今のさきまで梨花の口の中に詰められていた中年女の手とショーツが、ぐしょぐしょに梨花の唾液を吸ったまま、残されていた。

この匂いと、いやな味は、一生、梨花の胸から消えないであろう。

ポケットは、分厚い札にふくらんではいたが、梨花は呆然として夢遊病者のように夜道をさまよっていた。

文献研究

性典入門

(4)

齋藤夜居

好色床談義（好色三部書のうち）

好色床談義も亦稀本中の稀本で斯道文献に詳しい岡田甫氏（近世庶民文化研究所）も、不幸にも、まだ原本に遭遇せず、と語ったことがある。残闕序文の末尾には、「好色重宝記、好色旅枕、此の床談義右の三部を引あはせみる時は好色一道においてくらき事なし。さるによって此の三部を合せて好色三部の書と名付申候」とあり、後の、はこやのひめごと、逸著聞集、あなおかし、等を江戸三大奇書と称した如きものである。伝承本があまりにも尠なかったため、いたずらに「好色三部書」の名のみ伝えられてきたものだった。

好色旅枕とその原型であるべき好色訓蒙図彙についてはさきに記した通りであるが、この好色床談義も戦後の艶笑出版ブームの折に復刻された事を知った。『元禄文学資料』と題されたA5版四十七頁ほどの小冊子がそれである。刊行および校訂者は洛北の隠者采薇庵主人となっており何人の戯名か知らない。推定刊年は昭和二十八、九年頃か——。テキストは古写本を底本とし、全六巻のうち巻六欠本のまま紹介、まことに惜しむべき事であるが、これの活字化はまったく貴重だった。内容は、

巻之一。御台所の好色。奥様の好色。後家の好色。密夫の好色。

巻之二。幼女の好色。女中の好色。腰元の好色。お乳の人の好色。下女はしたの好色。舞子の好色。

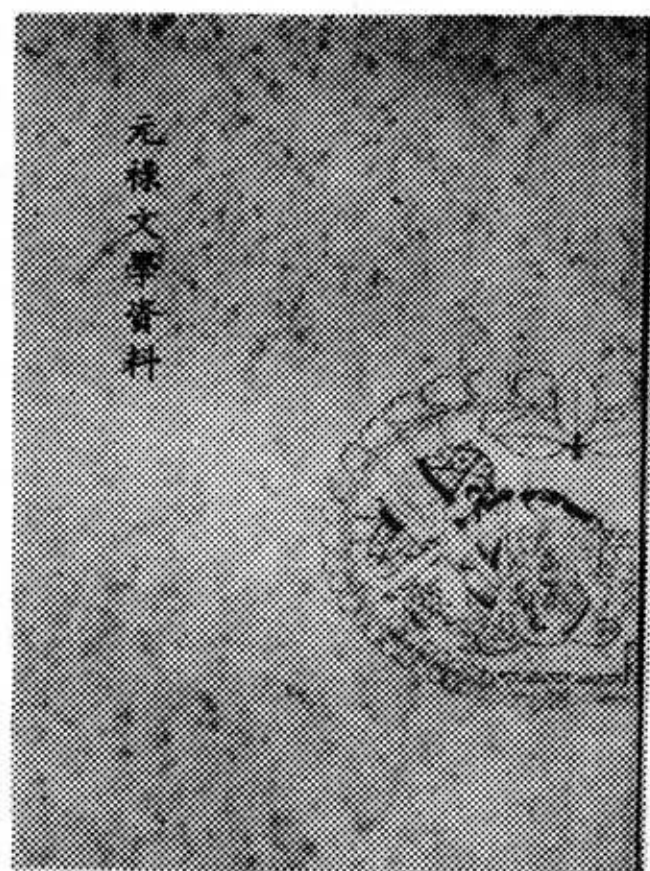
巻之三。女商人の好色。かのこゆいの好色。てかけ物の好色。作物浪人女の好色。諸国浦々の好色。有馬湯女の好色。風呂屋湯女の好色。

巻之四。はたごや女の好色。こい屋はすわの好色。小歌びくにの好色。かぐら女の好色。茶屋女の好色。惣嫁の好色。女護島無礼講。

巻之五。太夫の好色。天神の好色。囲の好色。半夜の好色。仮契の好色。

巻之六。好色衆方規矩の起。男女三品の胴

「好色床談義」所載「元禄文学資料」



元禄文学資料

人形。好色養生主論。玉茎浅行四名の弁。同深行五臓傷損の弁。交合行事八深六浅呼吸の論。交合玉茎の入式。床入さす神子。交合禁制の日時。補益門。食物宣禁本草。女子をてんじて男子になさしむの術。婦人懷妊せざるをさするの術。夫に種なきを種さずくるの術。床の間の喜悅。玉門ひろきをせばくするの術。男いんせいもらさざるの術。

と、なっており書名通りの好色読物で巻六が性論となっていた様子だが欠巻である。

好色床談義は元禄二年（一六八九）に上梓

されたが、それより約八年程前に刊行され、浮世草紙として画期的な大成功をおさめた西鶴の好色一代男の数多い亜流の一種だとされている。

第一話の△御台所の好色はり床談義△は女を嫌い小姓をこのみ給う殿様の嘶である。勿論、見てきたような嘘嘶だが、戦国の余風ともいうべき男色が、当然のこととされている点がおもしろい。

巻之二の△幼女の好色△というのは、幼婚の心得という形だが、どうも、少女を床に馴染ませる技法を説いたものと思われる。

巻之四にある△惣嫁の好色△は、古雅なたくみな文体で賤娼の風俗をつたえているが、惣嫁—江戸ではのちに夜鷹とよぶ—を買っても、いろいろと世話をやかねば思うようにしたのしめないから、こうこうしろというようなことを書いている。

婚姻男子訓

『婚姻男子訓』二冊本は、文化二年（一八〇五）版と、『良姻心得草』と改題された弘化三年（一八四六）版の二種あることが知られ

ている。内容は同一である。

尾崎久弥氏の、個人雑誌『江戸軟派研究』（大正11）第二十二冊に紹介され、大正十四年に春陽堂発行の『江戸軟派雑考』にも入っているが、刊年当時の事情もあって肝心の所が省かれていたが、最近になって広田魔山人氏がその所蔵改題本に拠って、会員雑誌『江戸紫』創刊号（昭和43・6）近世庶民文化研究所発行に、その伏せられた部分を今日では最早遠慮する程の記述ではないので紹介されている。

著者の津田義宗は名古屋の儒者で一種の郷土史研究家であって、尾張地名考、尾張方言考などの著書があり、嘉永五年（一八五二）歿。詳しいことは森銑三著『古書新説』（昭和19）の中にある。

内容。

縁談大意。年月之事。夫婦齡違之法則。男女相性之解並に丙午庚申之事。血脈の解。息男慎むべき条々。—上巻— 女子見立てる伝。婚姻之畧伝。婿心得べき事。夫婦情之事。夫婦交憐慎むべき事。—下巻—

『江戸紫』誌の主眼目「夫婦交合慎しむべき事」では、古言と体験を並説し、俗耳に入り易いように心がけて記されているが、特に珍

しい説もなく、常識程度といったところで、過度の交りは、健康をそこなうことになるから自戒せよと説いている。

江戸性教訓の典型

姪事戒

江戸文化の爛熟から廃退へ移ろうとする、文化十二年（一八一五）に出版された『姪事戒』はまったくの俗訓書だが、事戒を称するほど格調の高いものではないが、よく普及された知識書であって、纏りよく要約されている。長寿延命衛生といった養生法そのもののうち、特に性の戒めだけを説いた所である。その意味では、定本といった存在だが、「内容余りおもしろいものではない」（高橋氏説）。活字化は『徳川性典大鑑』上巻に、途中まで載せてある。

併し、当年の庶民感覚に即した性訓の基本型が整っているという意味では、冗漫のうらみはあるがこれの紹介も亦無意義ではない。編者高井伴寛は医家ではなく一種の戯作者で、蘭山と号し、「三国妖婦伝」「平家物語図会」その他の著述がある。天保九年（一八三八）歿。

○男女別あって正しく、道を以て情を制すべき事 ○二柱の神詠、女は男に先だつまじき事 ○腎の臓を虚する戒め ○姪事四時の戒め ○腎虚せし者命を損（おと）す事 ○子なき女に子を求むべき事 ○夫婦子を求むる旺相日の事 ○胎内の男女別るる事並に五輪五脉の弁 ○胎生を墮胎せしむる戒め ○庚申の夜会合を禁ずる弁並に交会禁忌の日 ○孕婦（はらみおんな）姪事の戒め並に胎内十月形を成す弁並に付図 ○男女婚媾正しかるべき事

と、なっており多分に俗信的な事柄の説明附説に富み、一読して科学以前のおろかしさを感じる。懐妊してより、十月満ちて胎を離るるまでの図説なるものがあり、挿絵はこれだけである。

江戸から明治へ、性典のかけはし

しめしごとと雨夜の竹がり

写本で伝えられてきた秘書一卷らしく、板本の有無を知らないが、流暢な文章である。性訓書としては珍しい命題、しめしごととは

『江戸紫』創刊号（近世庶民文化研究所）



秘言・秘伝の意味であろうか。『うまの春』という明治三十九年に林若樹が編んだ艶本書目に、初めて書名が記載された。作者は、楳本（すぎもと）法印となっている。本文活字化は『稀書』第七冊（昭和27・10）、および『徳川性典大鑑』下（昭和28・4）。『日本艶本大集成』にも、抄出がある。作者の「法印」というのは戯れであろうが、法印大和尚位の略で僧正に贈った僧綱位の最上の階級の意味である。僧侶の筆になったものであろう

『姪事戒』所載挿絵 (胎内十月形付図)



か？ 私考に過ぎないが「相本」と「杉山」という近似性から、鍼などで杉山流などときくところから、勾頭や検校などという富める盲人の説いた性愛口伝の書という気がするが、中国性典や半知識の和蘭陀医学からの悪影響が認められるし、ほとんど迷信とも狂信とも

云うべきであろうか。むしろ狂信的悪戯で、真底は婦女子をしてクニニリングスに誘うための行為の言訳け、更に習慣性への導き方、いわゆる好き者の謀略戦術とも受けとれぬことはない。また、このことが筆者あるいは口述者をして法印（もしくは検校）といった有

産にして、武家町民とは異った階級の筆だとする証拠にもなる。これは、私の推理になるが、ちぢれ毛の女は世上では美開というが、それは嘘だ、と断定した点や、女をえらぶのだったら美婦よりも美器説の書き出し、肌のつやつやしたという表現、顔面の高低と女性器との関係を自信たっぷり述べたあたり、そしてこれまでの文中にも、幾度も△にほひ▽を書いたことなど、視愛の感覚以上に接触愛（口唇愛）の強調に、なんとなく明を失った者の語る快楽としての△性▽への追求が感じられてならない。それに僧職だったら文章がどうしても漢文調になろうし、盲人と和学だったら塙保己一の例もあって、不思議ではない。とにかく立派な疑古文であって、当時としては教養のゆたかな人の筆であって、戯文戯画式の俗悪さがなく、正直に生命のよろこびに触れようとする一種の近代性の曙光が認められるのではないだろうか。つまり江戸性典から明治性典へのかけ橋とも云えそうだ。

附記 この入門今回より起稿当初の予定通りの発表順序に行かなくなった。不同になった事情は省きますが、次号よりは一篇独立の一種の資料読物としてご覧賜りたい。



五本のろうそく

その部屋のドアには《録音室》と書いたカードがさしこまれていた。美香の欲望を受け入れるには、そぐわない部屋の名称だった。移動椅子ごと、美香は室内に運びこまれ、ドアは自動的にしまった。

そして、その車椅子のきびしい固定から、少女はようやく解放されたのだ。

「立っていいわよ。苦しかったでしょう」
 そういうと、シコは自分の着ている紫色のジャンパーのポケットから、鍵をとりだし、少女の手枷と足枷の錠をはずした。

六回完結 S 小説

〽その二〽

パノラマ島秘譚

藤 見 郁

このわずかな間、美香の手足は完全に自由をとりもどした。手首と足首の周囲には、枷具にしめつけられた赤いあとが、ぐるりとしみついていていた。少女の、とくに傷つきやすくなめらかな皮膚に、それは痛ましい模様だった。

よろめくようにして椅子から立ちあがった美香は、本能的に室内を見渡した。一秒でも早くトイレへかけこみたい。

しかし、少女の下腹部の圧迫感を解放するドアは、この部屋のどこにも見あたらなかった。《化粧室》そして《トイレット》という文字を、少女は血ばした目でさがした。それらしいドアは、しかし、どこにもない

のだ。そして、広い室内ではなかった。壁の一面に床から天井までとどくような巨大な鏡の貼りついているのが、チラッと美香の視界にはいった。

「どこですか、どこにあるんですか？」

齒から空気がもれるような声で、せわしく美香はきいた。臀部を無意識のうちにうしろへ突きだし、全身をつまさきで浮かせるような格好になっていた。こうしないと下腹部に力はいり、耐えていたものがほとぼり出してしまうのだ。

「まだだよ。もうすこし我慢しなさい」
 じらすように、Qはゆっくりと語尾をのばした。そして、再度、視線をシコに送った。

シコはうなずき、天井を仰いだ。

この部屋の天井には、頑丈な鉄鉤が打ちこまれていて、その鉤には一本の長いロープがひっかけられてあった。

縄じりの片方は壁に仕掛けてあるハンドルにつながれ、片方は天井の鉤から垂直に、床まで垂れさがっていた。

シコはいきなり美香の片腕をつかむと、垂れさがっている縄じりの前までひきずっていった。そして、美香の両手首を前でひとつに重ねると、その縄で縛りつけた。手枷のあとがまだうすれもしない手首に、また非情な縄目がくいこむのだ。

「あッ、なにをするんです！」

美香は愕然としてみもだえ、反射的にしりごみした。

しかし、抵抗の力は弱かった。腰に力をいれると下腹部の緊張がゆるむのだ。ここで失態を演じることはできない。

シコは慣れた手順で少女の両手首を固く縛ると、壁のハンドルに止めてあるもう片方の縄じりのそばへ寄っていった。

ハンドルをまわすと、縄はきりきりと巻かれた、天井の鉤にひっかけられている縄は、Qの意志どおりに、美香の両手首をまっすぐ

上に吊っていった。

「あれッ」

美香は息をひきつられるような細い悲鳴をあげた。垂直に、一本の白い物体となって美香のからだはのびあがった。思わず洩らしそうになり、少女は太腿をよじり合わせた。

「顔をあげて、そのまま前をみてごらん」

Qは、歌でもうたうような楽しそうな声でいった。

美香は目をあげ、正面の壁をみた。

そこには、左右の手首をロープでひとつにくくりつけられて、頭上にたかだかと吊られた半裸の少女の、哀れな白い姿が鮮明にうごめいていた。

「あッ」

破裂しそうな膀胱の危機を一瞬忘れて、美香は声をあげた。壁の大鏡にうつっているのは、まぎれもなく、自分のみじめな全身であった。

Qが、どこから取り出してきたのか、片手によく光るハサミを持って、美香の背後に接近した。そして、いきなり、ばちん、ばちんとハサミを鳴らして、少女の肩にかかっているスリッパの二本の紐を切った。

美香はまた悲鳴をあげた。思わず肩をゆす

った。両手首を吊りあげているロープが、頭上でふるえた。

上絹製の白いスリッパは、ひとかたまりの布きれとなって雪のように美香の足もとにすべり落ちた。

一瞬、美香にめまいが襲った。そのめまいからたちなおる余裕もあたえずに、Qはつぎにブラジャーの紐を切り落とした。十七歳の清純な乳房が青い陰影をともなってさらけだされた。

鏡のなかの全身が、驚愕と羞恥にのけぞりくねった。少女のまぶたの裏に、屈辱の閃光が走った。

「おめめをあげなさい」

シコがいった。つづいてQもいった。

「目をあげて、鏡のなかの自分の姿をよく見るんだよ」

Qの手には、細い金属製のムチがにぎられていた。そのムチは長さ八十センチほどで、にぎる部分のふとさは一センチ。先へいくほど細くなって、先端は一ミリほどである。弾力性がある、釣り竿のようによくしなう。

Qは、その銀色のムチの先で、美香の尻のもっともふくらんだ部分を、軽くたたいた。

「ううッ」

と、美香は乳房をふるわせてうめいた。

どんなに軽いムチでも、いまの美香には刺激である。膀胱が縮みあがり、たまりにたまった液体がこぼれそうになる。一度こぼれだしたら、もう絶対におさえきれない。あとはとめどもなく溢れ、ほとばしるにちがいないのだ。

Qは、銀色に光るムチの先を、少女の乳房の愛らしいバラ色の頂点にあててしゃべりだした。

「ほらほら、鏡のなかの女の子は、本当にきれいなからだをしているねえ。どんな一流のファッションモデルだって、こんなに美しいプロポーションはもっていないよ。裸になることを職業としている女の肌なんて、ちっとも魅力なんかありやしないからねえ。でも、こんなにきれいなからだをしている女の子がそんな見苦しい顔をしては駄目だよ。もっと胸をそらし、背骨を突っぱり、腰をしゃんとのばして、自分の美しさを堂々と誇らなければいけない。上品な肉体は、どんなにせつない状態におかれても、上品なポーズをくずしてはいけないのだ。それなのに、そのへっぴり腰はなんだ。醜いよ。せっかくの美しいからだが泣くよ。ほらほら、もっと顔をあげて

鏡のなかの自分を、よくごらん。そして、もっと気どった、品のいいポーズをとるのだ、高宮家のお嬢さまらしく……」

Qのおしゃべりは、いつまでつづくかわからなかった。

「お願いです、早くおトイレに行かせて」

極度の緊張に、美香の舌はしびれた。そのために、Qの耳には、ただ、アワアワとだけしかきこえない。

しかし、Qには、美香がなんと言ったか、ちゃんとわかっている。

いまの美香が発することばは、ただひとつしかないのである。

つつましく盛りあがった乳房のバラ色の頂点が左右とも固くとがり、下腹部にけいれんが走って、自制力の危急を告げていた。

「だめだめ、その腰のふりかたはなんだね。それは卑しい商売の女がする腰つきだよ。お前のパパやママは、そんなみだらな下品な踊りを、かわいい娘に教えたのかね。その顔はなんだ。だらしない口をあけて、まるで牝犬じゃないか。齒のあいだから、舌が見えているよ。ひとさまの前で、そんな醜い不作法な顔をして、それで高宮慶一郎社長の、お嬢さまといえるのかね」

Qは銀色のムチとことばで、美香をなぶりつづける。こうして、危機寸前までの時間をかせいでいるのだ。

「は、はやく行かせて！」

うめき声が高くなり、顔が蒼白になった。こまかい汗が、額からにじみでている。

「そこで、そのまま、するのだ」

冷酷な声が、美香の背後へ浴びせかけられた。冷酷なのは、声音ではなく、ことばの内容であった。両手を高く吊られ、立たされたままの姿で放尿しろというのだ。

「い、いやです……」

少女は、齒をくいしばってこたえた。

「鏡の一番下のところを見てごらん。そこになにが置いてある？」

Qは質問した。

美香はこたえない。そんな所に目をやる余裕なんか無い。視線を集中させる努力も、いまの美香にはつらいのだ。すこしでも気をゆるめると、股間がぬれてしまう。

「鏡の下の床に、なにがならんでいるか、早くこたえなさい」

重ねてききながら、Qは銀色の細いムチで美香の脇腹を突いた。その先端は、針のように鋭くがっている。

「ひいッ」

縮みあがり、ねじるように脇腹をくねらせ
た。こんな危急の場合にも、皮膚には人間の
神経がかよっている。

「質問にこたえなければ、このムチで美香の
お尻をピシピシしたくよ。お前は尻をたた
かれながら、立ったままの格好でおしっこを
しなければならぬ。しかも、あとで拭くこ
ともできない。それでもいいのかね、ウフフ
フフ……」

うすいナイロン生地のパンティにびっちり
と包まれた臀部が、ムチに突かれてわずかに
へこんだ。その刺激に、耐えつづけている神
経が一瞬ゆるみ、こぼれでそうになった。ハ
ッとしてまた美香は股間の神経を精いっぱい
ひきしめる。

つらい努力をして、美香は視線を鏡の前に
むけた。いまは、Qの命令に服従するよりし
かたがない。銀色のムチの攻撃がおそろしか
った。

鏡の前の床の上には五本のろうそくが一行
に並んでいた。

長さ二十センチ、ふとさ三センチほどの西
洋ろうそくが、美香の足もとに並んで立って
いるのだ。なんのおまじないか？

そして、その五本のろうそくには、色がつ
いていた。赤、青、黄、緑、黒。毒毒しい色
をしみこませた五本の奇怪なろうそくの列。

「ろうそくが……五本……あります」

下腹に力をいれないようにして、美香は、
きれぎれにこたえた。

「よし。美香は、そのろうそくから、目をは
なしてはいけぬ。シコ、火をつけなさい」

Qは、ふたりの女に同時に命令した。

「はい」

シコは、ジャンパーのポケットからライター
を取りだし、五本のろうそくに、つぎつぎ
と点火した。

空気の動かない、静かな室内である。ろう
そくの炎は、無心に、まっすぐにのぼった。
色は五種類だが、もえあがる炎は同じ一色だ
った。

「美香——」Qがいった。「お前は、これか
ら消火器になるのだ。お前は、あの、ろうそ
くの火を消すのだ」

美香の脳細胞に、そのことばの意味は、遠
く、かすかにしか、ひびかなかった。どこか
ちがう次元からきこえてくる、自分とはまっ
たく関係のない、物音のようであった。

「いいか、よくきくのだ。お前の若々しい消

火液で、あの五つの炎を消すのだ。もし一本
でも残したら、お前を、もっともって恥ずか
しい地獄のなかに、突き落とす。やる。その
かわり、うまく五本とも消せたら……」

Qは、ここでもやりと笑い、やさしい声で
いった。

「この『夢の城』から、美香を解放してあげ
る。城の屋上からヘリコプターにのせて空を
とび海を越えて、美香のお家にいちばん近い
郊外の野原に、そっとおろしてあげよう。本
当だよ。わたしは嘘はつかない。

屈辱の音

美香は蒼白になって、唇をふるわせた。

Qのことばの意味が、ようやくわかったの
だ。陶器のように白く硬直した頬が、やがて
かすかな、けいれんをみせた。

美香は、顎を下にひいてうなずいたのだ。
心臓が凍る思いだった。

命令にしたがったら、この男は、このいま
わしい城の中から私を解放してくれる。

これはもとより、美香にとって絶対による
こばしい条件であった。父母のもとへ帰れる
のだったら、私はどんなに恥ずかしいことで

しょう……。

しかし、Qの命令を承知するもしないも、美香の忍耐の限界は、あと数秒後にせまっていたのだ。

服従してもしなくても、両手を頭上に吊られ、棒のように立たされたこのパンティ一枚の姿のまま、最後の瞬間はかならずやってくるのだ。

美香は、どうにも逃げられないところまで追いつめられたのだ。

立ったままで、そんな屈辱にぬれるくらいなら、死んだほうが、ましだ。せめて腰をおろして、坐って、したい。しかも、うまくろうそくの火を消せたら、家へ帰してくれるとこの男は約束したではないか。

美香は、決心した。

「縄を、解いて……。ろうそくの火を、消してみます。だけど、このままでは、立ったままでは、いやです……」

きれぎれの声で、少女は哀願した。

「吊った縄は、解いてやるよ。腰をおろさせてもやる。だが、自由にはさせない。こんどは、うしろ手に縛る。そうしないと、どうしても、手が邪魔になるのだ」

微笑しながら、Qがいった。手が邪魔にな

るとは、どういう意味か。むろん、美香にはわからない。

Qの合図で、シコが壁のハンドルに手をかけて、さっきとは逆に回転させ、吊ってある縄をゆるめた。美香は、へたへたと背中から床にうずくまった。

しかし、すこしの休息もゆるされない。シコが猿のように美香のそばにかけ寄った。手首の縄を敏速に解き放つと、こんどは同じ縄で、美香の両腕を、うしろ手にして縛りあげた。シコの額にも、汗が光っていた。

左右の手を背中にまわされたとき、美香は泣き声をあげた。

「ああッ、もう、かんにんして、ゆるして」

目が、いったいのあわれみをこめて、シコをふりあおいだ。しかし、実力で阻止する意志も力も、もう少女には残っていなかった。

縛らないで、縛らないで、と哀願する上半身に、シコの縄は冷酷にのしかかっている。

抵抗するすべての気力を放棄したまま、美香はうしろ手に縛りあげられていった。さらけだした乳房に、じかに縄がかけられる。

「ここよ。この場所へかがむのよ」

シコが、縄じりをとって残忍に言った。音もなく、炎をあげて燃える五本のろうそ

くの、およそ三十センチ前に、美香を立たせた。

「うまくやるのよ。そうすれば、きっとあなたはお家へ帰してもらえるわ」

シコは、親切ぶって美香の耳もとへささやいた。そして背後から少女の腰の周囲に両手をあてると、放尿をはばむナイロン製のうすい幕を、女らしい器用な手つきでおろしてやった。

パンティがおろされた瞬間、美香は左右の膝を折った。このとき、一片の羞恥心もプライドも、美香にはなかった。意識は混濁し、すべての緊張と神経は、下腹部の一点に集中されて狂いわめいた。

「テープレコーダーの準備はいいな」

身構えるような格好で、Qがいった。

「はい」

シコも緊張してこたえた。めがねのレンズが青く光った。

Qは、鏡にうつる美香の表情を注意ぶかくみつめながら、

「よし、スイッチをいれろ」

と、はずんだ声で命令した。

足をひらいて腰をかがめた美香の、もっとも苦しく膨脹した内部から、外へむかって、

ひと筋の音が激しく、ほとばしった。

同時に、ハーツという切実な声が、少女の白いのどから発せられた。長い苦しい忍耐から解放された声だった。

音は、たたきつけるように連続した。ぎりぎりまでこらえた限界が、いちどきに破れた激しい力をもった音だった。

文字どおり、セキが切られたのだ。すさまじいしぶきが上がり、破壊の勢いすら感じられた。乳房にナイフを突き立てられても、いま、このほとばしりは阻止できないだろう。「なにをまごまごしているの。火を消しなさい、早く！」

シコが黄色い声をはりあげた。運動会の子どもを声援する母親のような格好をした。

美香の意識の一隅にも、もちろん、そのことはあった。五本の火を消したら、家へ帰してくれると、Qは言ったのだ。

美香は腰を浮かし、歯をくいしばって、ろうそくの火をねらった。

恥ずかしいゲームだった。しかし、勝たねばならない。勝たなければ、家へ帰してもらえないのだ。

一本目の火は激しい勢いに、たちまち、たたき消された。

二本目の炎にも、熱い消火液は猛烈な音としぶきで襲いかかった。

三本目の炎にも、しぶきが十分に届いた。

そして、四本目の火にねらいを定めて腰を浮かしたとき、美香は「うッ」と息をのんで表情をこわばらせた。

余すところなく、すべて鏡にうつっている自分の姿態をみて、愕然としたのだ。それは美香の自尊心と誇りを根底からくつがえし、羞恥と屈辱だけを招き寄せる醜怪なポーズであった。

縄でうしろ手に縛られ、尻を床にすりつけるようにしてかがみ、赤い顔でうなり声をあげている、あさましい自分。

自分の両腕をうしろ手に縛りあげたQの意図が、いま、ようやくわかったのだ。

手が邪魔になるといったQ。だから、うしろ手に縛るといったQ。

両手が背中に固定されているために、少女は自分の羞恥を、鏡から隠すことができないのだった。この美しい少女は、自分の肉体から、液体が放射される恥ずかしい情景を、いま、生まれてはじめて見ているのだった。

ああ、こんなおそろしい計略があるのだった。立ったままほったほうで、まだ、まだ

った。美香は白い尻をよじって狂い、狂ったまま排泄をつづけた。とめようにも、もうとまらなかつた。

たまりにたまった液体の大半を放射したあと、わずかに正常な意識が美香によりがえった。

二本の炎を残したまま、放尿の音はしだいに弱まり、やがて跡絶えた。足首と足首のあいだにひきおろされていた白いパンティが、ぐっしょりとぬれている。

美香は、骨のない人間のように、力なく立ちあがった。そして、自分の羞恥の姿態をすべてうつしだした鏡に背をむけると、こんどは膝をそろえてうずくまった。

屈辱と羞恥が、改めて急激に少女の全身を包みこんだ。背中をまるめ、肩をふるわせて美香は泣きだした。声は低いが、がっくりと首を折り、痛切な泣きかただった。髪の毛が黒い波のように揺れた。背中に縛りあげられている両手の、十本の細い指までがふるえ、悲しげに泣きじゃくっていた。

「二本も残したね。約束は五本の火を全部消すことだったね。これでは、お家へ帰してあげることなんて、とてもできない」

Qは、ひややかにいった。いかにも満足そ

うな笑顔だった。

「お家へ帰すどころか、約束を破った罰に、美香は、お仕置きを受けねばならないのだ。シコ、もういい。テープレコーダーをとめなさい」

「テープレコーダー？」

美香は涙にぬれた顔をあげて、呆然とききかえした。

その美香の耳に、Qはゆっくりとささやきはじめた。

「そうだよ、美香。この部屋のドアに『録音室』と書いてあっただろう。だからここは、録音する部屋さ。いま、美香はものすごい音をだしたね。それがそっくり、テープに吸いとられているんだ。しかも、ステレオでね。そうだ、お仕置きの手始めに、まず、その放射音をきかせてあげようかね。自分が発した音だから、そんなに恥ずかしいこともないだろう。ウフフフ」

「ゆるして、そんなこと、かんにんして！」

むせびながら、美香はいった。

Qは目をほそめ、屈辱にゆがんだ美香の顔をのぞきこみながら、あとをつづけた。

「しかし、本当にものすごい音だったねえ。美香みたいな品のいい、美しい女の子が、あ

んなに騒々しい、にぎやかな音をだしておしっこするなんて、とても想像できないよ。ほら、ごらん、鏡の前があんなにぬれている。びしょびしょだ。美香はおしっこでろうそくの火を消すのに夢中だったから、音までは耳にはいらなかったろう。だから、改めてテープできかせてやろうというのだ。だけど、高宮財閥のお嬢さんが、あんなにバシャバシャ音をたててよいものかねえ。お金持ちのお嬢さんなんてものは、なにをするにも、もっと静かに、上品にやるのかと思っていたよ、ウフフ……。この鏡は、じつはマジックミラーでね、つまり、鏡のむこう側から、こっこの部屋は全部見とおしなのだ。鏡のむこうから、カメラで撮影する装置も、完備されているのだ。いろいろ楽しいことのできる部屋なんだよ、ここは……ウフフフ」

美香は涙を流しながら、縄で固く縛られた上半身をゆすった。しかし、縄はすこしもゆるまなかった。

ぬれたパンティのために、下半身が湿っていたが、それを不快と思う余裕はなかった。ただ、縄のくいこんだ乳房をふるわせ、尻をよじるようにして、怒りとも哀願ともつかぬ目を、Qにむけていた。

両膝をそろえて、ぬれた尻をやや浮かし、首をかすかに左右にふりながら、なにごとかを訴えようとする美香の姿は、哀れではあったが、見ている者の心をひきつける異様な美しさもあった。

休息の時間

美香は疲労した。からだも心も、自分のものとは思えないほどの疲れかただった。

無理もない。死よりもショックな屈辱をうけたのだ。体内の臓腑が、すべて活動を停止し、灰色になって沈んだような疲労であつた。

美香の顔面は蒼白になり、力なく両眼をとじたまま、死人のようになっていた。

Qは注意ぶかくそんな美香の表情をのぞきこんでいたが、やがて、シコにいった。

「お嬢さんは、たいへんお疲れのようすだ。

これからすぐに浴室へつれていき、よくからだを洗ってあげなさい。よく筋肉をもみほぐしてあげてから、お部屋へ運び、ベッドに休ませるのだ。拘束具は、いっさいつけてはいけない。自由に、のびのびと寝かせてあげるのだ」

読者ギャラリー 『人身御供』 岡 たかし



「はい」

と、シコは無表情にもどり、機械的にうなずいた。

拘束具をつけないでねかせるといふのは、Qの性癖にとって、非常にめずらしいことで

あった。

シコは機械的にうなずいたが、その内心になにかの感情がつよく動いたようだ。

美香が寝起きする部屋は、四階のほぼ中央に用意されている。この「夢の城」で、はじ

めて美香が目ざめた真紅の部屋の、左どなりに位置した上等の部屋であった。

「ああ、それからな」と、Qがふいに思いだしたようにいった。「私は、明日いちにち、このパノラマ島を留守にする。たいせつな用を思いだしたので、外出する」

シコは、自分の左手首にはまっている大きな腕時計をみながらいった。

「ただいま、午前二時十五分すぎでございます。明日というのは、つまり、きょうのことでございますね」

「そうだ。私はこれからすぐに眠り、九時に起床する。朝食後、ただちに出発するから、ボートを港につけておくように、手はずしてくれ」

「かしこまりました。それで、お帰りは？」

「そうだな。夜、九時、いや、もしかすると十時すぎるかもしれない」

「それで……」と、シコはなぜか口ごもっていった。「あの……美香さんは、どういたしましょう？」

「ねかせておくんだ。きょうはすこし刺激がつすぎた。ゆっくりと休息させてやれ」

「はあ？」

シコの近眼鏡がいぶかしげに光り、うわ目

使いに、Qを仰いだ。

「手枷も首枷もいっさいほどこさず、やわらかいベッドの上で、明日の朝まで、自由に、のびのびと眠らせるのだ。いいか、わかったな。美香は、私にとって、だいじな、だいじなお姫さまだ。ただ訓練し、調教するだけの女ではないのだ。お前たちとは、本質的にちがうのだ」

「わかりました」

美香は、固い表情でうなずいた。

「食事も、第一級食をあたえなさい。私からとくに栄養士に言っておこう」

「かしこまりました」

シコはもう、よけいなことは質問しなかった。

美香のからだを移動椅子の上にのせた。

手枷も、胸枷も、足枷もつけなかった。美香は腰をおろすと同時に、ぐったりと背中をもたせかけた。

「では……」

シコは、Qに目礼した。

四階の入浴室へいき、そこで命令どおりよく洗ってから、美香の部屋へ帰還すべく、シコは移動椅子の背後へまわり、ハンドルに手をかけた。

平和な夜

シコという名は「しこめ」の略称である。「しこめ」とは、すなわち「醜女」である。美しい女にだけしか関心のないQが、どういう理由で、こんな醜い女を身边に置いておくのか。

この問いに対する答えは、しかし、かんたんである。

美しい女を、いっそう、ひきたたせるためである。シコはつまり「ひきたて役」であった。

いくら美しい女でも、見慣れると、その美しさに麻痺して、美に対する飽和を覚える。

美しい女を美しいと感じなくなったとき、

Qはシコの顔を凝視する。

——なんという醜悪な顔！

と、思わず心中でさげび、ぞおつとする。

戦慄に近い、悪寒を感じる。そして、ほかの女たちの美しさを再認識する、というわけである。

シコは、自分がなぜそんな名で呼ばれるかを、むろん知っていた。

しかし、どんなに醜いことを自覚し、あき

らめている女でも、頭からそんな呼ばれかたをされることは、屈辱である。

この女は「シコ」と呼ばれることに、じつは、けっして慣れなかった。つねに屈辱を感じ、反発していた。しかし、それは内心だけで、その反発を表面にだすことは、むろん、なかった。

反抗を表面にだしたときのQの怒りのすさまじさを、よく承知していたからである。

シコの反発心や不服従に対するQの仕置きは、それがたとえどんなに小さな、瞬時の反抗であっても、苛烈をきわめた。一片の愛情もふくまれない、ただ苦痛と忍耐力だけを強制する、残忍なものであった。

だからシコは、どんなに激しい屈辱も怒りも、内面に隠しておく。内側に秘めたシコのこの怒りは、一種の呪いとなって、日ごと夜ごとに貯蔵されていく。

Qは、この女の屈辱に慣れない強情な性格をよく知っている。屈辱に慣れ得ない神経をもっている女だからこそ、こうして身近な女奴隷として使っているのだ。

奴隷の境遇に、すぐあまんじてしまうような女だったら、なんのおもしろみもない。この女は、醜いくせに、自分を実際以上にみせ

ようとし、虚栄心がつよく、自己中心的な、おだてられやすい性質なのである。

ヒステリー症の女に、もっともよくみられるタイプであり、こういう女に奴隷の位置をあたえているという皮肉に、Qはサディスティックな満足感をおぼえる。

美と醜との形態的な相違はあるが、Qの手きびしい教育に、なかなか馴致されないという点において、美香とシコは、まさしく同一の本質をもっていた。

シコの左手首に巻きついている腕時計の針が、二時四十五分をさしている。Qはすでに自分の部屋へもどり、海のように広大な、やわらかいベッドのなかで、傲慢なねむりについていた。

そして、入浴をすませた美香も、母親の乳房のようにあたたかいベッドのなかで、屈辱にうちのめされた心身を横たえていた。

シコは、淡いピンク色であった。なんの恥じらいも抵抗もなく、少女はそのピンク色の平和な波のあいだに身を沈めた。

シコが、近眼鏡の内側の目を、針のように細めて、それをながめていた。複雑な感情の色と光りを秘めた視線であった。

「これを、おのみなさい。疲れがとれて、よ

く眠れるわよ」

上等のブドウ酒のなかに、鎮静剤と睡眠薬を混入した液体を、シコがグラスにつぎ、美香にすすめた。

「私がのませてあげるわ」

少女の肩に片腕をまわして、半身をやさしく抱きおこし、その飲みものを彼女の唇にふれさせた。

シコの手が肩をさえたとき、少女は眉をひそめたが、それ以上の抵抗はしなかった。目をつぶったまま、美香は唇をひらき、その血液色のブドウ酒を口にふくんだ。

白いのどを従順にうごかし、グラスの中の全部をのみほした。

「すなおね、おりこうさんね」

と、シコは賞め、美香のからだを、ふたたびピンク色の静かな波のなかに横たえた。

死人のようだった青白い頬に、すぐアルコールのききめがあらわれ、うす赤い血の色がのぼった。

「おやすみなさい、かわいらしい、幸福なお嬢さん」

と、やさしい声でシコがいった。

これから数時間は、たしかになんの束縛も恐怖もない、無意識の世界だった。少女は、

平和で幸福な眠りについていた。

シコは、美香の寝顔をしばらく上からのぞきこんでいた。そして、こんなつぶやきを、たいくつな老婆のひとりごとのように、低く細くながながと洩らしていた。

「いまは午前三時。私の長い苦しい一日のすべてが、やっと終わったわ。あなたのおかげで、私の腕も足も腰も、ぬれた綿のように疲れきってしまった。あなたよりも、私のほうが、よっぽどつらかったのよ。……だけど、私の明日はすばらしいわ。それを思うと、私は勇気がでる。朝がくると、社長さんはこの島から外出なさるのよ。私たちみんなを置いて……。そして、島へお帰りになるのは、夜の十時すぎになるとおっしゃったわ。それまでの長い長い時間、あなたは自由なのよ。ということとは、私たちも自由なのよ。この広いお城は、これから十二時間ものあいだ、私たちのものなのよ。うれしいわ、なんでもできるわ、なんでも。ホホホ……」

朝の恐怖

朝、Qは予定どおり九時にベッドをはなれた。朝食に三十分を費したのち、この「夢の

城”を出た。

シコは、四階の窓から、たしかにQのうしろ姿を見送った。

十時。

美香は、きんきんとあわただしくひびくシコの声によって、眠りからさめた。

「起きなさい、美香さん、もう十時よ。いつまでねているの。まぶたが腫れあがってしまいうわよ」

美香は、目をひらいた。

めがねをかけた針のような細い目が、美香の顔の上で、ぶきみな微笑をただよわせている。

乱暴にまるめた粘土を、そのまま顔のまんなかに投げつけたような形のわるい鼻。上顎と下顎を前方に突きださせた醜い出ッ歯。青白くむくんだ顔色。

美香は思わず悲鳴をあげ、ふとんの衿で顔をおおった。数時間前のいまわしい記憶が、美香の脳裡に、鮮明によみがえった。

あの羞恥と屈辱の舞台の、醜怪な登場人物の容貌を、朝のめざめと同時に見なければならぬとは……。

「きょうはね、美香さん。社長のかわりに、私たちがあなたをかわいがってあげるわ。い

えね、あなたのこれからの生活の、トレーニングだと思えばいいのよ。その準備だって、もう、ちゃんとできているのよ」

微笑をうかべたまま、シコがいった。しかし、いくらしとやかな微笑をうかべても、この女の唇からは、大きな歯がむきだす。しとやかさを心がけ、柔和をよそおえばよそおうほど、この女の微笑の表情は奇怪さを増す。

シコは手をのばし、美香の頬のまるみを愛撫するように触れた。

「いやッ、いやです、もうゆるして。もう、美香にはなんにもしないで。おうちへかえして！」

美香はその感触の不快さに慄然として、かなしい声音で哀願する。

「ホホホ、かわいがってあげるといふのに、どうしてそんなにいやがるの。失礼ではないかしら？」

シコは、めじりに濃い皺をきざませて笑った。

「もうゆるしてください。美香のからだに、お手を触れないでください。これ以上、美香をいじめないでください、お願いです！」

美香の目に、涙がうかんだ。

かわいがる、ということばの意味を、一夜

の経験で、美香は知ったのだ。

「ホホホ、そんなにいやがる顔をみると、どうしてもきょうは、私のお人形さんにしたくなるわ。お人形さんにして、うんとかわいがってあげるわ」

シコの声が、細くふるえ、金属的なずきさでとがりだした。

そのことばが、単なるいたずらや、脅しではないことは、昨夜の「散歩」で、骨の髄まで知らされた美香である。この奇怪な城の住人は、やると言ったら、かならずそれを実行するのだ。

ベッドのなかで、美香の手足が硬直し、縮んだ。

「おねがいです、かんにんして、もう美香をいじめないで！」

美香はもう半分泣いていた。

「ほんとにかわいらしいお嬢さんね、ホホホ。あなたの泣き声は、まるでウグイスの声のようだわ。私たち、あなたのそういう泣き声を、もっともとききたいの。さあ、きょうはあなたを「黒い部屋」へつれていってあげるわ。とっても楽しいお部屋よ」

シコが、私たち、といった理由は、すぐにわかった。

「さあ、あなたがた、来てちょうだい。お嬢さまは、はっきりとお目ざめになったわ。早く来てちょうだい。お嬢さまを、あの部屋へ運ぶのよ！」

シコが、のびあがるようにしてかん高い声をあげると、この部屋のドアがあいて、四人の若い美しい女性が、つぎつぎに姿を現わしたのである。

A子、B子、C子、D子の四人であった。

この「夢の城」に飼われている、光るように美しい女奴隷たちである。

透明な生地できている半袖のブラウスの胸には、若々しい乳房の隆起がゆれ、同じくすきとおったナイロンでつくられたミニスカートの太腿のあたりから、若い女のなまなましい体臭をあふれさせていた。ブラジャーも

パンティも、むろんつけていない。そのため乳房の形や、左右の太腿のつけねのあたりが、さらけだしたとき以上の魅惑をもって、男の目に迫るのだった。

シコは、この若く美しい仲間たちにむかって声をはりあげた。

「いいわね、ゆうべ計画したとおりにやるのよ。あと十二時間は、私たちの自由よ。すばらしい一日なのよ。一分だって、一秒だって無駄にはすげないわ。みんな協力して、このこなまいきな娘を、思うぞんぶん痛めつけてやるのよ！」

青くむくんだ顔のめす狼は、ついに牙をむきだした。嫉妬と復讐にもえて、近眼鏡は銀色の炎を八方に散らして光った。

「ほんとに、こなまいきな娘ね。こんな子ど

もみたいな娘に、社長の関心が独占されたら私たちの恥だわ。やりましょう、徹底的にやりましょう」

美しい四人の女奴隷は、シコの興奮にたちまちまきこまれた。

いつのまに用意したのか、シコが革手錠をとりだした。玩具で赤ン坊をあやすように、美香の顔の前で、その革手錠を、ぶらん、ぶらんと振った。

「さあ、美香さん、おめめをぱちりとあけて、これをごらんなんさい。これがなんだか、おわかりになる？ 手錠よ、革の手錠なの。これでまた、あなたの、そのかわいい手首をくくるのよ。おとなしくしなさいね」

「いやッ、いやッ、かんにんしてッ！」

美香は両手を胸の前で合わせ、おがむようにして泣きさげんだ。

シコは、首をふって女奴隷たちに合図を送った。

「手をおさえて！」

A子とB子が、ベッドの両側から美香の左右の腕をつかんでおさえつけ、細い両手首を前に組み合わせた。

美香は肩をよじるようにして抵抗したが、無駄だった。その白い両手首を、すかさずシ

天星社刊 ▲限定版グラビア写真集▼ 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

コが革皮錠でとめた。美香が、ぐうッと息をのんで絶望状態におちいったとき、革の足錠をもったC子とD子が、美香の両足首をひとつに固定した。

あっという間に、両手と両足の自由を束縛されたのである。

しかし、相手が五人とも女であることに、美香はいくらかの希望をもった。負けてはいけない、という気力が、美香の胸によみがえった。絶望するには、まだ早い。

「やめてッ、たすけてえッ！」

美香はふとんを蹴り、えびのように胸と腰をのけぞらせた。

七時間の熟睡で、美香の健康な若い肉体は完全に精気をとりもどしていた。肩を激しく左右にひねり、腰を勇敢に躍動させて、小さなベルトの束縛からのがれるための努力をつづけた。

しかし、五人の腕力に手足をおさえつけられては、美香の抵抗も、三分間ほどで封じられた。シコの手は左右の乳房をつかまれ、ねじられ、美香はうめいて抵抗をやめた。

美香の乳房をつかんだシコの両手に、なにか怨念のようなものが感じられ、底の知れない恐怖をおぼえたのだ。

「静かにしなくてはいけないわ。この革の手錠と足錠は、あなたを、黒い部屋まで運ぶまでのものなの。だから、そんなにこわがらなくともいいのよ。あばれたら、あなたが疲れるだけよ」

いいながら、シコは少女の乳房を固くつかんだまま、強く手前へひいた。

「ああッ！」

美香のからだは、ベッドから床へ乱暴にひきずり落とされた。

ネグリジェの裾が大きくまくれあがった。

とくに白い皮膚をもった膝から上のみずみずしい二本の足が、柔軟な弾力をみせてふるえた。パンティをはいていない尻が、まるくゆたかに、光るように白くむきだされた。

「やめて、ああ！」

美少女の羞恥の悲鳴があがった。本能的に太腿をよじり合わせ、腰をかがめた。

C子とD子が、美香の足をつかんで乱暴にもちあげた。A子とB子が、美香の腋の下に手をさしこみ、よいしょと小声でいいながら持ちあげた。

美香は胸と尻をくねらせてもがいたが、A子に乳首を強くつねられて抵抗をやめた。しかし、意地の悪いシコに髪の毛をつかまれ、

上へひっぱられたときには、耐えきれずに泣き声をあげた。

「痛い、たすけて、たすけてえッ！」

「うるさいわね。だまらないうと、こうよ」

A子はまた少女の乳房を手でつかみ、細い人さし指と親指で乳首を強くひねって、その悲鳴を封じた。

五人の女は、この協同作業に、早くも汗ばみ、夢中になっていた。

それらの汗は、女たちだけが発する神秘的な、そして卑猥な、なまぐさい動物的なおいてなあって、美香ひとりを押しつづんだ。

五人とも妙に呼吸をはずませ、乳房をわざとらしくゆすり、鼻息を荒くさせていた。あきらかに性的な興奮を感じているのだった。

美香をかつぎあげると、五人の女は廊下へ出た。

「黒い部屋」は、やはりこの四階の一隅にあった。シコが、美香の髪の毛をひっぱりながら、そこへ先導した。

黒い部屋

「黒い部屋」の床には、黒猫の毛のようなしなやかさと光沢をもつ黒いカーペットが敷き

つめてあった。

四方の壁には、黒い壁布が、すきまなく貼ってある。天井も黒い塗料で、ぬりつぶしてあった。

空気調節と冷暖房を兼ねた装置が天井の中央部にとりつけられていたが、そこにも、ていねいに黒い塗料がぬられてあった。

螢光灯の淡い照明が、このさむざむしい深夜の墓場のような部屋を、無表情にてらしていた。

しかし、その淡い螢光色も、部屋に六人の女をのみこんだときから、きわめて感動的にかがやきはじめた。

美香は、部屋のまん中に投げだされた。

ネグリジェをぬがされると、黒一色の床の上に、白い裸体があざやかに浮きあがった。

黒一色の部屋は、白い新鮮な十七歳の肉体を、いっそう白く神秘的にかがやかせた。

「ううッ」

とうめき、羞恥を隠すために、美香は本能的にからだを反転させ、折りまげた。

投げだされた美香の周囲に、五人の女が林のように突っ立ち、それぞれ冷酷な微笑をうかべて見おろした。

シコが、Qのそぶりをそっくりまねて、無

言で合図した。すると、四人の美しい女奴隷は、豹が獲物に襲いかかるように、いっせいに美香にとびかかった。

革製の手錠と足錠がはずされた。そのかわりに、鎖のついた重い金属製の手枷と足枷が美香の両手首と両足首にはめられた。

左右の手首の鉄枷をつなぐ鎖は、三十センチほどの長さがあった。左足首と右足首をつなぐ鎖の長さも、三十センチほどの余裕があった。つまり、手枷足枷をはめられても、最少限の自由はゆるされる仕掛けであった。

だが、それだけではなかった。

美少女の白いなめらかなのど首に、これも鉄製の、重い厚い首枷が、がちりツと音をたててはめられたのである。

それは厚さが三センチもある、頑丈な、重量感の豊富な首輪であった。

首輪にも、鎖がついていた。その鎖は長く二メートルほどのびていた。

「ゆるして、ゆるしてください」

と、哀願しつづける美香の声も、その首輪にしめつけられ、かすれた。

動く、鎖と鎖がふれあい、がちり、がちりという非情な音をたてた。

「いい格好になったわよ、美香さん。とても

すてきよ」

いいながら、シコはその首輪の鎖をつかんで、ひっぱった。

「う、う、うッ！」

と、美香の細いのは、鎖に引かれてきしみながら、のびた。

シコは、なおも強く鎖を手もとにひいた。美香は苦痛をすくなくするために、自分から首をシコのほうにむけ、両手を床につけた。

すると、美香の姿は、飼い主に首輪をひっぱられている犬のポーズそっくりになった。

本名のかわりにアルファベットをかぶせられた女奴隷たちが、美香のみじめな格好をみて、心地よさそうに笑った。肩を叩きあい、腹をおさえて笑いあった。

美香は耐えた。耐えるよりしかたがなかった。涙がこみあげてきた。犬のポーズをしたまま、少女はうなだれた。

「あなたの意識がはっきりしているうちにことうっておくけど、きょうのこのトレーニングのことは、社長さんには、いっさい内緒なのよ。秘密なのよ。約束してね。約束を破って、きょうのことを言いつけたりしたら、私たちは、また社長さんのお留守に、あなたをひどい目にあわせるわよ。このお城のなかに

は、あなたが見たこともきいたこともないよ
うな、おそろしい道具が、たくさん置いてあ
るの。私たちは、その道具の使いかたを、ぜ
んぶ知っているの。だって、私たちもその道
具や仕掛けで、さんざん泣かされてきたんで
すもの。だから、お約束したほうが、あなた
のおためよ」

うなだれた美香の顔をのぞきこんで、シコ
がいった。

美香は無言で、唇をかんでいた。

「だまっていけないで、なんとかいいなさい。
はっきりと約束するのよ。社長に言いつける
ことはしないと。さあ、約束しなさい。早く
返事をしなさい！」

いいながら、こんどはA子が、透明ビニ
ールのブーツをはいた足で、美香のまるい尻を
うしろから蹴った。

美香は四つん這いのまま、前へのめり、顎
を黒い絨毯にぶつけた。あわてて顔をあげた
が、みじめな姿だった。

「はい、はい、約束します。ですから、もう
いじめないで。ひどいことはもうやめて！」

涙と声がいっしょになった。

そのみじめなポーズをみたB子が、はずん
だ声でいった。

「そうだわ。……めす犬ごっこ。これからの
お遊戯を、めす犬ごっこと名づけましょう」

「さんせい！」

「さんせい！」

C子とD子が、声をそろえて同調した。五
人の瞳が、異様な期待と情熱をおびてかがや
いた。

Qの寵愛を、いま一身にうけている美香に
対して、美香以外の女性たちの感情と意志は
完全に一致したのである。

これはしかし、ふしぎな憎悪であり、微妙
な嫉妬といえた。

寵愛とはいっても、むろん、Qのそれは、
ふつうのものではない。美香の出現によって
彼女たちは、Qの執拗な嗜虐をうけずにすむ
はずなのである。Qの関心が、美香ひとりに
そそがれれば、自分たちはそれだけラクな時
間をすごせるはずではないか。シコはともか
く、A子たち四人は、美香に感謝すべきでは
ないのか。

それなのに、彼女たちは、美香に嫉妬し、
憎悪をむけ、いま、Qの外出をよいことに、
美香ひとりを責めさいなもうというのだ。

めす犬ごっこの準備のために、A子たち四
人は、こまごまと立ち働いた。

シコは、美香の首輪からのびている鎖をつ
かみ、悠然と立っている。つねに劣等感にさ
いなまれているシコに、この優越感、性的
な快感に似た陶酔をあたえていた。

——このめす犬の憎らしいお尻に、革の鞭を
鳴らして、いろいろ楽しい芸当を、させてや
ろう。

疲れてへばったら、塩水を腹いっぱいのも
せ、そのまま這いずりまわしてやろう。こ
の鎖をぎりぎり引っぱって、ひきずりまわし
てやろう。

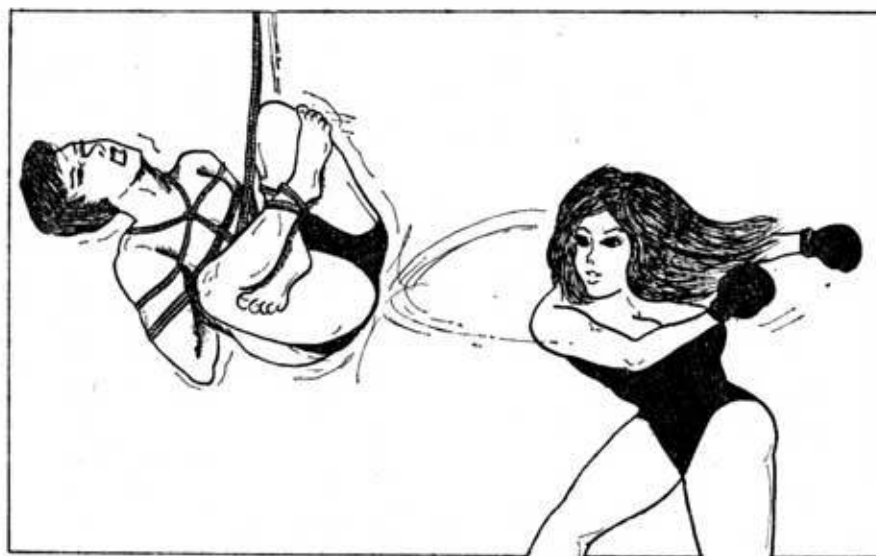
塩水だから、たまらない。そのうちに尿意
をもよおし、やがて、がまんできなくなるだ
ろう。

いくら「トイレに行かせて」と泣きさけん
でも、行かせてやらない。めす犬には、めす
犬の習慣があるのだから。犬の方法でさせて
やろう。いや、犬よりも恥ずかしい方法でオ
シッコをさせてやろう。

——どういうふうにやらせたら、この十七歳
の娘は、お尻まで赤くして恥ずかしがるだろ
うか。

鎖をにぎりながら、シコの空想は果てしな
くひろがってゆくのだ。

カット・山吹赤茶



☆感激と考察と空想☆

へんな

たわごと

虹丸 虹吉

私はいま、感激に溺れきっちゃまっている。
沼氏の『ある夢想家の手帖から』の一部を遂
に手に入れることが出来たからなんだが、正
に歓喜！

改めて沼氏のMへの考察博学に感嘆。『マ
ゾフィストこそは誇りたかい住人』たる詠句
を、夢幻の裡にわが身に振り替えて、欣喜以
外の言葉を知らぬ状態になっちゃっていたん
だから、せわがない。

もともと、Mとさえいえば無条件にとびつ
いちゃって、われながら恥かしいくらいに瞳
目讚美一辺倒に陥っちゃう私なんだが、それ
でも、かつてのM派巨星八田沼シコオV氏の
『マゾ天国』なんかには、実は常に幾分のヒ
ツカカリをどうすることも出来なかったのが
本音（もちろんM中にも諸段階があるだろう
し「私の考察趣向はかくの如し」といわれれ
ば「そうですか」と退き下がるより他はなく

かつて主にイタリヤ製とも思われる巨女群大
流行時代あり、眼の吊り上った女達がオリエ
ンタルなどとはやされたらしいが、毛唐人種
としてはおそらく特殊なマスクの女性に「も
っともドミナを感じる」と仰せられれば「さ
ようで……」とオジギでもする以外にないん
だが、これは氏自身「垂れ眼」生来、激しき
ためのコンプレックスにでも依るものか……
なんて思っちゃっていたものだ）であつたし
今でもそうである。

もっとも、人間が威張ってイカっちゃった
りすると、えてして眼付きは厳しくなり、特
に女の眼尻はやたらと吊り上っちゃったりす
るもので（毛唐でも？）そんな威丈高の恐ろ
しき女にセツカンされる男の夢なんてのは如
何にもマゾ的という他ないが、これは混血児
（眼の吊り上ったといえ、まず黄色人のそ
れで、西洋のマンガは大抵がこう描かれてい
るに違いないと思う）の方が、純粹の毛唐よ
りいい（エキサイト）と考えるのか？ それ
とも、純粹種毛唐からはとても相手（従者的
なそれですらも）にして貰えないだろう、と
いう意識から、いつの間にか「せめて混血児
に」が嵩じて「混血児至上」に変化してしま
ったのか？……。

たあいのない上に根拠もない私見で、データ云々など叱られるかも知れないが初期の谷崎文学中に見られる混血児礼讃は、時代のセイもあり彼が外人を余り知らぬので、書きたくとも書けぬところから、三者関係的性向が混血児礼讃に傾斜（つまり自分の劣位を強調する手段として）したのでは？ というふうにも考えちまう。もとより「空想M」にか過ぎぬ私なんかとのギャップはどうしようもないだろうが……。

又、河崎元大使の問題発言にだって、共感はあるがやはり幾分の抵抗は禁じ得なかったものだ。例えば「ホッテントットの方がマシ」というのは、ユーモアか何かのつもりだろうとはわかるが、ちっとも面白くもオカシクもない言い廻しにすぎないと思う。人間としてホッテントットより日本人が優れていると決っているのか、と問えば答えられる者がいる筈もないだろうと思うし、美価値の全然別種のことを比較すること自体、ナンセンスなのだ。勿論、かく言う私が、ホッテントットなるものは写真でしか見たこともないのにムキになるのもナンセンスだろうが、しかし「ホッテントットがきつと氣イ悪うしまっせ」なんてえのはオーバー過ぎ、それならテ

メエはいったい何人なんだい、なんて考えると、こっけいに思えちゃう。

……といった具合で、M派、非M派を問わず多くの日本人には「猿柿を笑う」的な、劣等感の裏返し意識が流れている？ ので、M作品などは、たとえ、非常に優れていて、論難の余地のないようなものでも、所詮はマニアのみにしか本当の理解は求め得ないのではな

いか？ と思ったりもする。つまり、いかに名作であろうとも、帰する所はアングラの域に座を占めるに過ぎぬもの？ だろう。

『ヤプー』や『手帖』などが堂々とマスコミ化されるということは、一方では、こういう優柔境というか、もう一つの世界が存在することの宣言とも言えないこともなからうし、多元化時代の一つの現われかも？ なんて考えこんじゃったりもする。

これもまた、メチャクチャな私見に過ぎないかも知れないが、白、黄、黒、三者（インド人などという、ごく大マカにいつてアリアン系だが特殊なものも沢山あるが除外、アイヌは白系統というのが定説）の歴史的考察ということになれば、それ以前の、先祖のサル的動物時代からめちゃうくちや？ に想像してみると、白色及び黒色の二者は比較的近距离

にあったのではないか、なんてへんなことを考えたりする。少なくとも白対黄、黒対黄よりは近距离にあったように思えてならないのだ。例外はあっても、体躯に於いて容貌に於いて、日本人の平面的、能面的、豚目的に比べてみて、白と黒の近似性が感じられて仕方なくなっちゃうのである。より立体的で、瞳は堂々と表情に富み、美しい。もちろん、米国黒人の相当パーセンテージが、白との混血が少しあるということを考慮はする、としても……などと、自分でも何を書いているのかわからなくなってきしまったが、ともかく、沼氏ファンのMマニアが、氏の書かれたものを手にすると、かくも感激し、かくもとりとめなきことを口走りたくなるヤツもある、という見本の一駒……妄言多謝。

○

妄言ついでに、もひとつ多謝っちゃうと、私のスクラップブックに、こんなものがある。

「……選手はなかなか現われない。と、まもなく、男たちの方がきを分けて一人の女性が登場した。彼女は、鉄アレイを持つが早い甲高い奇声をあげて、ガッン、ガッンとたて続けに打った。ゲームが終わると男たちのヤジにパイとした格好で、肩で風を切るように

読者ギャラリー

『馭馬手引書?』

春川ナミオ

人ごみの中へ消えて行った……』

この私にとって、いささかシゲキ的な記事は45・10・5付毎日新聞夕刊「たくましい女性」なる写真入りの報道であるが、ソ連邦はウズベク共和国の首都タシケントの広場での鉄アレイ様のものをテーブルにたたきつけて力だめしするゲームに逞しき女性が登場し、

なみいる男性どもを啞然とさせた、というわけ……。

『……あっけにとられ、シャッターのタイミングもおくれがちな「男」の私は、まぎれもなくここが日本でないことを確認してほっとした』と、このE記者は結んでいるが、日本でもウーマン・リブ大会なんてのがセンセイ



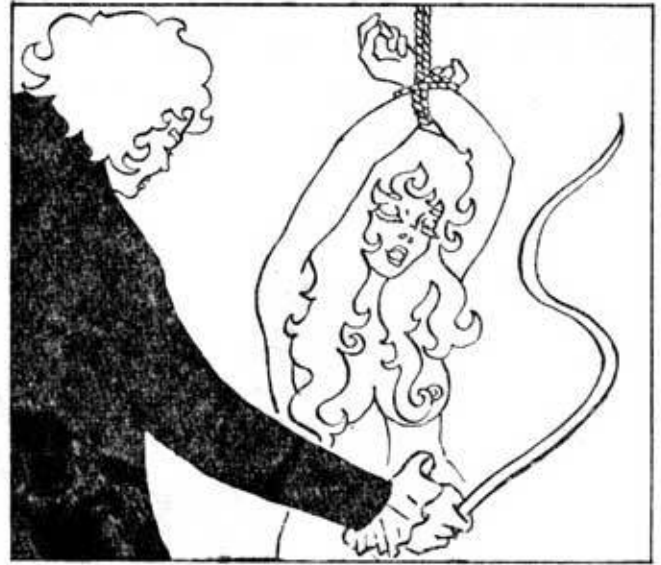
ショナルに報じられている折から、この写真記事は私好みで悦びだった。早速スクラップしたが、何回も見直しているうちに鉄アレイ怪力ゲームに端を発して、またぞろいろいろな空想をめぐらしている自分を発見しちゃっていた。

ついでに、もひとつ……。同じく毎日新聞11月29日の切り抜きに、

『27日ソウル各紙は、流産または死産した胎児の内臓が韓国から米国に大量に「輸出」されている事実を一斉に取上げ、「人間の死体で外貨をかせぐとは言語道断」と、非難した。非難を浴びているのはソウル医科大学の李明馥教授で、米国メリーランド州の医学研究所に頼まれ、昨年4月からことし5月までにソウル市内の産婦人科病院などで集めた胎児の心臓など計一千コあまりを空輸、そのうち「合格品」四百個の代金として計六千ドルを受取っていたという。当の李教授は「韓国の臓器はウイルス培養試験用に使われており政府の輸出許可も受けている」と反論している』

というのがあるのだ。なんともウス気味の悪い、猟奇的なニュースで、これまた、私にへんな空想をさせるに充分な記事であった。

カット・ユミヒコ



第三景 小間使い

小間使いがシャンデリアの明りに照らし出された時、Kを除く四人の紳士たちは、実際にひどくこまった。いかに小間使いといえどもつい一年半程前にはKの夫人であったのである。四人共に、夫人であった彼女を知っていた。それだけに居心地が悪くなるのは当然かも知れない。

「理加の準備はできましたか」

とKは小間使いに近づいて尋ねた。彼女は喪服のような黒い衣服に全身を包み込んでいた。彼女がKを見つめた時に、四人の紳士た

~~~~~  
 飲びの育つ館  
 ~~~~~

紳士たちのための

人間浄瑠璃

宇 光

仙

ちは大いに興味を持って、二人の動作に注目したが、彼女は、

「もう三十分程は必要であると申されていらつしゃいました」

と眉一つ動かさずにいった。

「それは困ったことである」

とKは、静かで落ち着き払った口調でいった。そのすぐ後に思い出したように、

「セパードは気が立っていませんか」

と尋ねた。

男たちは「セパード」という言葉を奇妙に聞いたが、大して気にもとめなかった。男たちは「セパード」とはKの飼っている愛犬の

ことだろうと思ったからである。

「いつもより心静かですと、係の者が申していました。実際、わたくしが見たところも、そのように窺えました」

小間使いは、少しだけであったが目を細めがちにしていった。

「それはよかった」

とKは頷いた。

「それではこれで」

と小間使いはKに対して丁寧に頭を下げ、四人の紳士たちにも続いて頭を下げた。

「少し待ちなさい」

とKはドアのノブに手をかけた小間使いに

(中)

いった。彼女はゆっくりと後ろを振り返ってKを見つめた。

「理加の準備ができるまでのつなぎに、君に一つ、ふるまってもらいたいのであるが」

とKは四人の紳士たちに、しかと聞こえる声でいった。

「どのようにふるまえば、よろしいのでございますか」

小間使いは尋ねた。

「簡単なことです」

「どんなことを？」

と彼女は、さらに尋ねた。するとKは、ためらいもなしに、

「衣装をこの場に脱ぎ捨てて、皆に酒をすすめるだけです」

といった。小間使いは生唾を飲み込み、Kの目を見た。

一方、四人の紳士たちも息をひそめたというのが本当であった。余りにもむごいことであると思った。だから四人の紳士たちは彼女が、きっぱりと断わるだろうと考えた。そしてこれもK一流の演出であろうと思った。

ところが事態は思いもよらぬ方向に進み出したのであった。

「引き受けてもらえるのですね」

とKがいうと、

「は……はい」

と、小間使いは返事をした。しかし彼女はすぐに言葉を續けて、

「奥様に対しての釈明は、ご主人様からお願いできますね？」

と一筆を入れた。

「それは易いことです」

とKは答えた。

四人の紳士たちは各々心の内で、Kの異常な家庭の成り立ちの一端を偶然にも覗いたような気がした。男たちにとってそのことは好奇心をかきたてられる話題として充分であった。また男たちは、タキシードを着けた自分にふさわしく、小間使いの裸をヴィナスの彫像でも見ているような気分できるとよい、といいきかした。

「わたくしはお化粧を控えていますので」

と小間使いは、自分の魅力のことについて心を痛めた。

「そんなことはありません。あなたはいつも男の心を抉るものを持ち合わせています。あなたのような方が、わたしの家の小間使いであることは気の卒倒するような喜びです」

とKは彼女を落着けた。

彼女はドアに向いたまま衣服を取り去り出した。四人の紳士たちはその事務的仕草に、彼女はそのようにふるまうことに慣れているなと思った。

「あなたは美しい」

といってKはスキャンティとブラジャーだけになった彼女の両頬を両手ではさみつけるようにして長く深い口づけを与えた。

「皆さん、この方が皆さんにお酒をおすすめる方です。拍手をお願いします」

とKは小間使いを紳士たちに向け、その右側に立ち、彼女の右手を左手で持ち上げて、いわば大形に紹介した。

紳士たちは拍手した、彼女は一メートル七十の上背があったことから、その一挙一動が見た目に鮮かに映ってならなかった。彼女がすすめる酒を断わることはできないことでもあった。

——不思議なことである。

と紳士たちは思った。

大方裸の女性を傍にして、彼女に異性を感じながらも、それが衝動的に拍車をかけるものとはならないのである。それは酒の量がかさんでいるせいかも知れないと紳士たちは思う。しかし考えるところがまとまらない内に

彼女がやってきた。

「大変に素晴らしい、お飲みっぷりでございませうわ」

『と彼女は柔らかく甘い声でいうのである。』

「ところでA君。いくら君でも、このような御婦人を前にしては、グラスを手になくしてはならないだろう」

Mは上機嫌で、これは多分に小間使いを傍にした意識的なものであったが、Aに語りかけた。

「全くその通りである。しかし、君、ぼくが思うに」

とAはM以上の上機嫌さでいった。小間使いが現われてから、Aのみではなく他の四人も、先程まで使っていた「わし」という言葉を口にしなくなった。

「この御婦人、とりわけ美しいこの御婦人は自然そのものであるね。ぼくは本来足をわずらわせることなしには味わうことの許されない自然が、わざわざおとし下さったような光栄を感じている位である。それゆえにグラスが軽くなるのが早くなる。そうではありませんかね、諸君」

「残念ながら、ここに集われている紳士は、口達者であられるようにいけませんな」

Tは胸を張り重々しく歌い上げた。皆の視線はTに集中した。そのことはTの気構えを大きくした。

「わたしは飾りなくその思うところを告げさせてもらいたい。わたしは元来が快楽に目のない男である」

「T君よ、君は分別をわきまえてはならん。こちらには御婦人がいらっしゃるというのに」

とMはTの話をかき消すようにいった。

「M君よ、君こそ分別をわきまえてはならんね」

とTはMに反撃した。

「大体において、美しい御婦人であるがゆえに、上品ぶった話題のみを取り上げるのは失礼にあたるとぼくは思うね。御婦人として『女性』であり、さらに噛みくだくなら『女』であるのだ」

「夜の闇を和らげてくれるものは、美しい御婦人である」

とSは小間使いの傍に近づいていった。

「しかしながらその美しい御婦人をさらに磨きあげるのには、大なる放埒ではございませんかね」

小間使いは、Sを見てからKを探した。K

はAと話し合っていて、彼女からは後ろ姿が窺えるのみであった。

彼女はSに微笑んだ。Sはそのことに氣をよくして、彼女の全身をなめるように見回した。そのことに気づくや、彼女は体をかわしTの脇をすり抜け、Mに近づいた。その時、Aと話し合っていたKが彼女を見た。Kは彼女を手招いた。

「この場の雰囲気には慣れましたか」

とKは彼女に尋ねた。

「ええ、少しだけですけど」

小間使いは、おどおどと答えた。

「あなたに今一つ、骨折ってもらいたいのではありませんが、願いを聞いてもらえますかな」

Kは彼女を肩から抱き込むようにいった。

「どんなことを」

と彼女は小さな声で尋ねた。

「ここに集まっておられる紳士たちのために何かをしなればいけないのです」

とKは、ただちにいった。

「何をしたらよろしいのですか」

と彼女は一層、小さな声で尋ねた。

「ブラジャーとスキャンティを解き、身軽になり、自由な氣分を味わって欲しいのです」

「どうして、そんなことをわたくしに」

と小間使いは悲しい目でKを見上げた。

「紳士たちの希望はタキシードの下でうなっているのです。あなたはそれに気がつきませんでしたか」

「少しはね」

と彼女は下をうつむき加減に答えた。

Kはステレオ装置のテーブルの上に小間使いをかかえ上げた。Aは素早くムーディな音楽を流した。五人の紳士たちはステレオ装置の周囲に集まった。

彼女は長いこと身体をかかめ、湧き上がってくる羞恥心と戦い続けた。彼女にとってK一人と対しているなら、どんなことにも動じないと思う。しかし他の四人の男たちの視線が気がかりでならなかった。さらに悪いことには彼女は男たちとは顔見知りであるのだ。

Kは小間使いの二つの衣装を解いた。その時、彼女は突然にテーブルの上から身体を翻し、Kの背後に身体を隠した。

「いやです。いかにご主人様のご命令とあつても、お従いするわけにはいきません」

彼女は声を張り上げて叫んだ。そのことは五人の紳士たちに活を入れることになった。

「お客様の前である。声を慎みなさい」

とKは、四人の紳士たちを見回しながら、

いった。

「いやです。絶対にお従いするわけにはいきません」

彼女は身体を震わせた。

「いかん。それはいかん」

Kは大声でどなった。

その声がやまない内に、「ピューン」という、鞭が空を切る音を四人の紳士たちは耳にとらえた。そのすぐ後に小間使いは四つん這いになって部屋の壁づたいに逃げ、Kがそれを追ひ、その後を四人の紳士たちが続いた。紳士たちは一様にタキシードを紳士らしからぬ乱しかたをしていた。

小間使いは部屋を何周かした時に引っくり返り、気を失った。Kは彼女をシャンデリアの明りが最も強いところまで引きずった。その後でKを除く四人の紳士たちは一息を入れるかのようにグラスに酒を満たした。

「全くすごい迫力だ」

とMが、まず最初にいうと、

「地獄絵図ではあるが、わしの心を天国絵図以上にときめかせる」

とTがいい、

「わしの倦怠の曇りを晴らすのは、この世界のみである」

とSが言葉を続け、

「わしは自然以上に『女』に興味を持てそうな気がする」

とAが目を見つめた。

四人は自分を「ぼく」あるいは「わたし」といわずに「わし」というようになった。四人は誰からともなくグラスを片手に小間使いの周りに片膝立ちになった。四人はKの一举一動を仔細に見守りつつ、

——気は確かだろうな。

と心配した。

小間使いは後ろ手に高手小手に縛り上げられた。続いて両足を首の後ろで一つにまとめられた。さすがに気を失っていた彼女もKの荒い扱いに目をさました。その時にはなすすべがない状態に追い込まれた時であった。

「皆さん、夜会はいよいよ幕を重ね、その都度に観衆に固唾を飲まさせてきました。が、

畜生めの登場への場つなぎに登場したこの小間使いは、皆さんに対して、小間使いにふさわしく何かつくしたいといっている。しかしその時に一つ条件があるそうです。それはあくまでも後くされなくするために、金銭と引き換えにしたいということです」

とKは一同に告げた。

紳士たちはKに対して小間使いが何をもつてどのようなつくしてくるかを尋ねた。Kはそれに対して小間使いの体を照し光る蠟燭を指差したきりであったが、紳士たちは充分に理解したようであった。続いて金銭問題に移った。その間に小間使いは垂れ落ちる蠟燭に身体をくねった。しかし、そのくねりは、さらに蠟燭を降らすことになった。

セリは始まり金額は高額につり上がった。そのセリにAは最初から加わらなかった。しかし今にも落着しようとした時に、

「待ってくれ！」

とそのAは一同に声をはさんだ。

「人を金でもて遊ぶなんて、紳士らしくはない話だ」

とAは小間使いから一方的に蠟燭を取り払いながら言葉を続けた。

「わしはこの御婦人を妻に迎えたい。わしはその答えを君たちからではなく、この御婦人から直接に受ける」

KとSとMとTは押し黙った。Aは、すぐさま、小間使いの綱を解いた。そして上着を脱いで彼女の肩にかけてやった。それからAは彼女の前に両膝をつき、

「わたしは独身である。わたしと結婚して欲

しい」

といった。

小間使いは一分程も、じっとAを見つめていたが、肩から上着を払いAに返した。

そして、ぽつりと、

「わたくしは小間使いです。わたくしの、ご主人様はK以外にはございません」

というなり、ふらふらと立ち上がった。

彼女は衣服を拾い、それで胸から下の前面をおおいながらドアの側で丁重に一同に対しておじぎをした。そして、

「間もなく、理加奥様がお姿をお見せになるお時間です」

といった。

第四景 黒衣夫妻

理加は小間使いに客間へ導かれた時に、我目を疑ったものであった。しかし小間使いは黒衣たちに目を投げはしたが、いささかの驚きも見せずに、

「わたくしはご主人様に、奥方様のご用意が今少しでできるということを伝えなくてはなりません」

というなり、夜会の開かれている広間の方へ消えてしまった。

だから理加は、一人で黒衣たちに相対することになった。ここで黒衣たちというのは黒衣が二人いることをさすのであって、あらかじめ知らされたところによれば、黒衣たちは夫婦であるということであった。

理加は、黒衣たちの縄れもさることながら『セパード』のことが気になった。部屋の中から『セパード』を探し当てようと努めた。ところがどこにも見当たらないのである。理加はそのことによってほっとしたもの、内心では、きつとどこかに潜んでいるに違いないと思う。さらには自分は今夜、最も卑しい『畜生』と呼ばれるにふさわしい行為をなすことを強いられ、結局のところそれに従うことになるだろうと思う。さらには、その十字架を背負うことになるはずであると思う。

理加は『セパード』のことを一応のところ棚上げにして黒衣夫妻に視線を投げた。黒衣夫妻は『黒衣』という職業にある者にふさわしく全身を黒い着物で装っていた。しかし正確にいうなら多少装いを乱していた。そしてこれからの一仕事前の肩のこりをほぐし合うかのように、あたかも獣たちのように悠々とふるまっているのである。

黒衣夫妻は各々が愛の行者でもあるかのよ

うであった。装いの乱れから理加は、夫妻の一部始終を見損じることにはなかった。

理加は思う。

——このまま、部屋にとって返してしまおうか！

しかし理加はためらう。『セパード』という言葉を囁き理加の足を引く者がいる。囁きは理加の意識を奪い、引かれた足は理加の体を狂わした。理加はふたたび思う。自分を淫乱的な性格の持ち主だと……。

「今少し、お待ちいただきたい」

黒衣夫妻の主人が理加にいった。その声は理加を妙な居心地にした。男はさらに、

「物事は何事においてもケリをつけることが大切であることは奥方様においても、ご理解いただけますことと思います」

といい、その上に、

「さあ、お前からもよく願ひするんだ」

と妻をうながす始末であった。

理加は二人を露出狂というよりは、大変な人をくった夫婦だと思ふ。理加がこれまでに知っている人たちの中でこの夫婦に匹敵するのは、館の調教師と彼の手下だけだった。

だが理加の、調教師に対する印象は満更でもなかった。それは今の男の言葉を借りるな

ら、彼のなすことすべて「ケリ」と「ケリ」の区切りよさで結ばれているせいかも知れなかった。調教師の手法は、例えば一千段の階段を上らせるのに、決して一挙に一千段を上りつめらせることはしない。十段、二十段という小さな区切りと、さらに百段目、二百段目という大きな区切りを設ける。その小さな区切りと大きな区切りで一千段の階段は百段の階段に等しい重荷となるのである。

「どうした。失礼にあたるではないか。早くお願いするんだ」

と男は妻に催促をした。

「お願いします」

男の妻がわりかしすんだ声でいつてきた。

「そんなお願いの仕方があるか。理由を述べろ」

男は不機嫌に声を大きくした。

「ケリがつかないのです」

女は間を置いてからいった。

理加は夫妻の顔の表情を観察できないことを残念に思った。黒衣という職業にある夫妻は先程も述べたように黒衣にふさわしい衣服で全身を包み込んでいたのである。もっとも顔面は網目になっているので、彼らは相手の表情を観察できる。だから理加は、夫妻が自

分たちの姿を見せつけることと引き換えに、理加から、夫妻の姿を見せつけられたことに對する反応を強奪することを、もくろんでい

るらしいと思った。

「どうぞ、私にはおかまいなく」

理加は毅然として答えた。すると男は、

「これは奥様、ありがたいお心です」

といい、続いて妻に對して、

「お前からお礼を述べさしてもらうのだ」

と、どやしつけた。

羞恥心を欠いた人間世界で、理加は心が落ち着くものの、このような風景に對して、あの美徳家のひしめく人間世界にいる時以上に感じる場所のないことに気づいた。風景はまさしく風景であり、大仰にいうなら物と化し始めていさえいる。

物が物をかき集め物の世界を作る。踏ん張らなくてはいけない。物化してはいけない。

理加は好奇心をかき立てることにした。愛の行者たちの姿を、一メートルと離れていない椅子に腰かけて見入ることにした。そしてできうる限りの視覚的・感覚的刺激を見出しそれに対して最大限に反応しようと思う。人間性と内分泌を高まらせるのだ。そこで『セパード』に對する関心を増大させよう。する

と『セパード』に対する関心は、炎を巻き上げることになるだろう。その時に関心は欲望に転じ、もはや欲望に従うのみになるはずであった。

それでも理加は思う。うまく自らの力で導くことができるだろうか。あばれはしないだろうか。相手は一体どれ程の働きをしてくれるだろうか。夜会を引き立てる充分な効果を得ることができだろうか。

それらの手筈は眼前の黒衣夫妻がつけてくれることになっていた。だから理加は、いわば棚から牡丹餅式に夫妻のいうがまま、なすがままになればよい筈であった。そうであっても理加は心配であった。黒衣夫妻にとって理加の相手は手塩にかけて育てあげてきている。その理由で、すべてを知りつくしているだろう。でも物事にはずみということがあり思わぬところで思わぬことが起こらないとは限らないのである。

「あなた、チャーリーを呼んで」

と女が男の首を引き寄せながら囁いた。理加は『チャーリー』を人の愛称であると思ひ、夫妻は隣の部屋に小姓でもはべらしているものと思った。

「まだ、早い」

と男は答えた。

「お願い、呼んで」

と女は、すぐに哀願した。

「まだ、早い」

と男は、じらすように答えた。

「あなた、お願い」

と女は、とぎれとぎれに哀願を続けた。

「チャーリー」をどうしようというのだろうか、と理加は考える。

「まだ、呼ぶべきではないのだ」

と男は怒った。

「呼ばないほうが、一層煌き光るのだ」

女は泣き始めた。そのことに冷淡に男は、

「耐えろ。耐えろ」

と叱りつけた。しかしすぐに、

「しょうのない奴」

と呟くなり、女の身体を抱き上げるようにして持ち上げた。

「いや。それはいや」

と女が叫んだ。

理加はこの行者たちの苛責が小休止したのを見た。女はそのことを口をひし曲げて非難した。すると男は、

「耐えられるのか」

と尋ね、

「耐えられはしまい」

と決めつけた。

しかし間もなく、「ピュー、ピュー」という口笛が吹かれた。男が吹いたであろうことを理加は、これまでの経緯から理解できた。さらには、その笛は『チャーリー』という小姓を呼ぶための合図に違いないと思った。

ところが理加の予測は見事にはずれた。理加にとってこれ程までに的はずれな経験はないことであつた。およそ理加はKと結婚して以来、意外なこととは何一つ得ることができなかったから、さらには小姓の余りに生々とした機敏な動きゆえに、理加は思わず腰を浮かしてしまった。

『チャーリー』は外ならぬ理加の探し求めていた『セパード』の愛称であつた。理加の憧れの『セパード』は黒衣夫妻の小姓であつたのである。

小姓は主人なる男の口笛にどこからともなく逸早く吠えるように鳴き声を響かせながら部屋の中に飛び込んできた。その出現は神わざに近い素早さであつた。理加の身体は身震いを起こした。

ところでその小姓はそんな理加に見向きもしなかった。小姓は尾をふつたが、それはす

べて黒衣夫妻のためにであった。立ち耳と差し尾にくさび形の頭部。黒い背と白い腹部に脚部。唾液がしたたる長い舌。理加は小姓に見とれ、小姓は理加を無視した。

「チャーリー、おすわりなさい。そして見つめなさい」

と女が小姓にいった。

「それから軽蔑し、罵倒するのです」

小姓は女の言葉を理解したのだろうか。夫妻の足元に腰をおろした。

理加は目を閉じた。胸が破れそうなまでに心臓は高まった。彼女にとってそれは全く未知のものではあったが、Kの暗示により、理加はかなり正しく絵にすることができた。

「チャーリー、よくご覧。今夜、あなたがおつかえする方なのよ」

女の声に理加は目を開き、黒衣夫妻が小姓の目を自分に向けさせていることに気づいた。理加は小姓のうるんだ目に戸惑いを覚えた。

「チャーリー、そろそろ時間がきたようだ」

男がいうと、女は理加の背後に回り、事務的に夜会服の裾をたくし上げたのだった。

「チャーリー、奥方様だよ」

女はいった。

理加は自分を、人形に等しい人間だと思っ

た。そしてこれからくりひろげられるのは自分という人形を、この黒衣夫妻が操る人間浄瑠璃となろうと予測した。

第五景 暗い部屋

Kは自分を嫌悪している。今自分が何をなそうとしているかを知った時、外ならぬ己れに戦慄を感じさえる。

Kは眺める。天井からの円形のスポット・ライトが照らし出す赤い円形の台を眺める。S、M、AそしてTの四人の男たちは、その台の周囲にKと同じくカーペットに腰をじかに落としている。Kから四人の男たちの表情はよくつかめなかった。それ程までにスポット・ライトの明るさと部屋の暗さとは極端であった。全く異なる世界が何の理由もなしに互いに腰をすえ合っているのにも似ている。そのことはKにとって幸いであったというべきであろう。

Kは思う。

四人の男たちの胸の内を思う。しかし、その前に自分に関わることを整理すべきであると思う。だが後者に関しては、すぐに考えがまとまり、

『一体、どう整理したらよいというのか』

と開き直る。ところが、そのように強気を露わにしたところで、相手は自分であって何の効めもない。声は自らの心の壁にぶちあたり鈍い呻き声を響かす。Kは溜め息をつく。

Kは心を落ち着けるために血眼になる。不幸なことに心は波打ち出す。

Kは理加の代役に、これから理加が予定していたことを、やりとげてもらおうと心を決める。代役とは、Kが『歓びの育つ館』の調教師にかけあい、いかなる恥知らずな行為にも耐える肉体と精神とを持つ接待嬢の紹介を受け、今夜の夜会のため邸に迎え控えさせている女性のことをさす。Kには最初から、ためらいがあったのである。Kは、そのためらいを押して、事をとにかく、ここまで運んだのであった。

Kは調教師に理加を六週間あずけた。理加が、いかなる調教を受けたかは、調教師より理加と一緒に送り届けられたアルバム六冊の任意の一冊の任意の一ページを見入るだけで充分であった。

Kは、その任意の一ページを見入った直後から、理加に恋を愛を復活させ、その理由で理加のすべてを独占しなくては気がすまなくなっていた。

Kは理加の性向を知っていた。理加が自分と結婚するまでに、どれ程多くの男を知っていたかも知っていた。しかし、そのようなことはKを燃やすのみであった。Kが理加のどのような点に魅力を感じたかというなら、理加の型破りに多淫な性格にといえるだろう。

Kにとって、その性格は気に入るものであった。女性という殻に閉じ込められた女には寒気を感じ吐気を催した。

勿論、理加と結婚する時に、Kは先妻を妻の座から追い出さなければいけなかった。Kはそのことが、長い目で見た時に、自分と妻と理加の三人が、もっとうまく行く最高の手筈であると思った。そもそも、いかに私的な日常生活がその本人の全くの自由裁量事であるとはいえ、他人を理由もなしに、より傷つけ痛めつけることは、Kの性格に合わなかったのであった。

Kは先妻が小間使いとして邸に残ることを希望した時に、本心はかなりの動揺したものであった。それは、いわゆる小間使いの報復的仕打ちを予想してのためである。でも、何事も起こりはしなかった。しかし、ここで奇妙な契約がKと理加と小間使いとの間で成立したことを、あげなくてはならないだろう。

それは小間使いがKから一週間に一度、愛を受けることを理加が黙認し、その代償として小間使いとしての報酬の三分の一を理加に与えるというものである。

Kは思う。

『小間使いは、わしがいつか目覚めて自分を捨てたように理加を捨てて、ふたたび、じつとあたため待ち続けるその懐の中に、わしが戻ってくることを信じてはいまいか』

と。そのことを否定する材料は、何一つKには考えつかなかった。肯定する材料は山積みである。それでもKは、あわてなかった。Kは思う。

『わしは小間使い以上に、理加を独占したい衝動にかられている』

と。さらに思う。

『なるほど小間使いは、例えば先程のAのふいの求婚にもかかわらず、それはわし自身、思いもよらなかった、ハプニングではあったが、より強く、わしへの愛を歌い上げてくれる。いうなれば彼女は、わしにベタ惚れである。そんな田舎芸者めいた言葉と仕草に照れながらも、小間使いは愛を歌い上げる。それに対して理加はどうだろう。考えることはすべて生理的、肉体的なことばかりで、箸にも

棒にもならない女である。とりえといえば美しい肢体の持ち主であることだけで、性的事項と関わりのない知能には、お世辞にもすぐれているとはいえない。まさに若い女体に物をいわせて、男から男へと渡り歩き、年老いて物乞いをするに、ふさわしい女である。それでも、わしは理加が気に入る。理加の多淫な性向が気に入る。理加の十七歳の女という名の魔性が気に入る』

と。Kは代役にこれから予定していたことをやりとげてもらおうことの決意を確認した。そのためには打ち合わせが必要である。打ち合わせのために控室へ歩を運ばなければいけなかった。しかし、そのような芝居の遣り繰りを四人の友人たちに、絶対に気づかれてはならなかった。そのためにはどうしたらよいかを、Kは考えた。

Sは、かなり焦燥感を積もらせていた。たかが妻の裸を見せるのに、もったいぶり過ぎることこの上ない。Sは女の裸などに左程、関心はなかった。一体全体において、女の裸が何であるというのだとSは思う。それが十七歳の少女の裸であっても、Sにとって二十・三歳の女の裸と、特別に異なるとは思わなかった。なるほどTが指摘した通り、Sは

KがMの妻と共に舞台上の獣になった時、舞台の側に一人、陣どった。しかしSがかくも見入ったのは、余すところなく、また隠すところなく、明瞭な生物学的行為に、非常なる清潔で素朴で清々しい感動を覚えたがゆえであつた。Sはその時に、その素朴さがこれまで密室に閉じ込められてきたし、これから閉じ込められ続けるだろうことを思い、つくづくと残念に思ったものである。

Sは思い浮かべる。妻のことを思い浮かべる。Sは彼女と、かなり自由な性的交渉を持った後に結婚したのであるが、それでも今にして思えば、早まったという気がしてならない。そもそもSは、結婚という制度が気に入らなかった。なるほど性的事象程に、わずかの時間内に成立しながら長く深く重く尾を引く事象は外にない。しかも、その当事者が行き当たりばったり式に結ばれたものであるなら、事態は深刻化しよう。それは一つの混乱になりかねないからである。男は自分の子供がどの女のお腹の中に、また女は自分のお腹の子が、どの男の子供かを知ることができなくなる。そのような混乱を招く位なら、凡人なる男の性欲を鎮める専門の凡人の女性をもうけ、子供を生む専門の女と男とをもうけ

た方がよからう。品種の改良である。優秀な男女の間には優秀な子供が生まれることは疑いのないところである。ところが世に生まれ出た生命は、すべからず平等であらねばならない。そのために、すべてはうまく行かなくなる。

『ならば、どうしたらよいのか』

とSは思う。答えがまとまらないままにSは娘のことを思い浮かべる。娘は八歳と四歳である。Sは娘と一緒に風呂に入ることが好きであつた。性の「せ」の字も感知しない娘たちが生々とはしゃぎ回るように、Sは好奇心を持っていた。大人になるにつれて悪知恵がつき、また悪知恵なしには生きて行けないのである。快い日常生活など、どこにもありはしない。あくせくと働き食べて、そして寝る。この世に生まれたことをSは後悔した。

Mは依然としてKが自分のために、何か特別な心遣いをしてくれるはずであるという確信を持っていた。もっともMは、妻がKと頻度は少ないながら、例えば一月に一度位の感で、姦通し合っていたことを知っていた。Mは、いわば妻とKとを告発する意味で、AやSの前で、それとなく事を運んだのであつた。ところが、妻とKとは顔色一つ変えはし

なかった。妻は、夫である自分にも見せたことのない、笑みでKの手を導き、Kは妻を、あたかも自分の妻であるかのように、振舞つたのであつた。

『そうだ』

とMは思う。

『もしもKが、おれのために何か特別な心遣いをしてくれなかったならば、行動によって奪いとう』

とMは思う。そのことには、理由がつくはずであるのだ。

『おれは妻を君に捧げた。君も妻を捧げろ』
 でいいのだ。しかし、その時にKの妻に抵抗をされたら、どうしようか。

『おれは唾を飲み込まなければいけない窮地に追い込まれることになる』

とMは思う。そこまで思うと、Mの決意はとたんに弱々しいものとなり出した。

『それでは、せめて鞭の一打ち位は許して欲しいものだ』

とMは願う。Mは鞭に対して関心を高めていた。先程のKと小間使いとの間で行なわれた鞭打ちに、最初にタキシードを乱したのはMであつた。そのMは、自分の体軀にいささかの自信を持っていた。その土壌は彼の妻に

あった。彼の妻は夫の体軀を絶えず、たたえるのである。Mは、さらに思う。自分が関係を持っている二人の女たちが、妻以上の賛辞をおしまないことを。でも今、Mの脳裏にあるのは、Kの鞭の一しなり一しなりであった。すると、Kが自分のために何か特別な心遣いをしてくれることなどは、どうでもよくなった。いや、それは正確な表現ではない。その別な心遣いが、Kの妻を手ごめにするこゝとは、なくなつたというべきである。Mは鞭の一しなりを自らで、再現してみたい。そのことをMは、切々と祈つた。それから、スポット・ライトの白さに見入つた。そのことによつて、自分がいるのは闇の中であることに気づいた。Mの手は闇の中で少しずつ動いた。

Aは思う。いや、Aは不快であった。餌をちらつかせながら、決して与えようとしなないKのことが、不快であった。Aは、別に女性に飢えてはいなかった。それでもAは先程、どうしても小間使いを手に入れたかつた。AはKが、そのことをそれとなく自分にさし向けて、かような状況を準備したものと解釈していた。その解釈に従つて、Aは行動したのだ。そもそも、五人の中で独身はA一人であった。Aの考えるところによれば、Kにと

つて小間使いの存在は、厄介なものであるはずであつた。ところが、Kは小間使いと組んでいたらしいと、Aは考える。そして、何て馬鹿なことをいったものかと、己れにあきれた。

『わしは、この御婦人を妻に迎えたい。わしは、そのことを君たちからではなく、この御婦人から直接に受ける』

その結果が、

『わたくしは小間使いです。わたくしのご主人様はK以外にはございません』

となるのである。そのことは、とてつもなく不快である。スポット・ライトを眺めながら、

『Kの奴、妻にストリップ・ティーズでもやらせるつもりか』

とAは呟いてみる。そうしておいて直ぐに『いや、待てよ』

とKを疑つてかかる。Kはここでも妻と仕組んで、一芝居を打つつもりかも知れないと思う。彼女は肉体を展覧することにおいてははなはだ、気前がよいことを仕草でもって示すかも知れない。しかし絶対に、展覧させはしないのだ。そんな田舎芝居を見せつけられる位なら、もう帰つた方がましであるとAは

思う。ストリップ・ティーズの膝の向きにつれて、右に左に大波のように頭を移動させる男たちの中にいた方が、ずっとよいに決まっている。ティーズは片手を背後について背を反らせ、他方は人差し指と中指でVの字をつくるのだ。Kの声が聞こえた。Kは、

「畜生めが、尻ごみしているようですので、引きずってまいります」

というなり、部屋を出ていった。Aは、

『そら、みる!』

と思つた。

Tは眠かつた。近頃、一般的にTは睡眠時間が充分ではなかつた。それゆゑに、今の眠気を思い、つくづくと人間の身体は実に精巧にできていると感心する。もし人間の身体が疲労を感じしなかつたり、あるいは睡眠を欲しく思わないなら人間の寿命というのは一カ月と、もたないだろう。それは、あたかも全身に、それらの探知器を張りめぐらしているのにも、似ていると思う。辛い物を口にしたら口をへし曲げ、ぶたれたら悲鳴をあげる。今のTの探知器は全力を傾けて、眠気をかき集めている。まぶたが自然に落ち、したがってスポット・ライトの明りが消え、それは闇につながつた。それでも眠るまいと思う。自

カット・土紋城 薫

☆懸賞創作入選作品☆



逆

転

室 一 鬼

A市は、東京から電車で一時間半くらいの所に位置する、いわゆる近郊都市である。同時に、ここは県庁所在地でもあり、目下、著しく発展中の町だ。

そのA市のにぎやかな中心部を少し外れると、山の手の住宅街になる。市を一望のもとに見渡す丘の上は、中でも高級地で、瀟洒な造りのマンションが、いくつか立ちならんでいた。

マンションの住人は、帰宅時間が遅い。その夜も、街路樹のかたわらにタクシーが止まって、男と女が降り立ったのは、もう深夜に

近い頃だった。

女は三十を出たか出ないかぐらいと思われる、キリッとした顔立ちの相当な美人だ。背が高く、みごとに均整のとれた体つきはコートの上からもうかがえた。連れの男もどこか言って非の打ちどころはないが、これはなんとなく気の小ささを感じさせるタイプで、そのため女の堂々とした物腰にくらべて、男の方が女の「連れ」である、と言う表現がピッタリなのだ。

二人はなぜか人目をはばかるようにして、そそくさとロビーの中へ消える。

「先生、しかしあの太川と言う奴はひどい男ですね」

自分達の部屋へ入ると、男は女を「先生」と呼んだ。

「ほんとうね。相良議員と高田議員は、あいつから賄賂を受け取っているわ。でも、その証拠もすぐ握めるはずだから、これであの男もおしまいよ」

女はこの県の県会議員、橋本峰子女史だった。一緒にいる男は秘書の小塩で、峰子女史が、本宅とは別にこんな所にマンションを持っているのは、どうも彼女と小塩の密会用の

ものらしい。正義派議員で通っている彼女だが、私生活の上では必ずしも、コチコチの貞女ではないようだ。

橋本峰子は今年三十二の女盛りで、才色兼備と言うのが定評の女性である。橋本家は、この地方では昔からの有名な財産家だ。彼女は一人娘だったので、ある若い県会議員を婿取りしていたが、結婚してから二、三年で、その夫は死んでしまい、今は家の一切を彼女が取り仕切っている。

橋本峰子が夫の跡をついで、議員に立った時は彼女もまだ二十代で、その若さと美貌のため大分評判になったものである。議員になってからも持ち前の勝ち気さで敏腕を揮い、現在は公害対策委員として活躍中だ。

二人が話していた大川玄一郎こそ、例のB産業の社長である。彼の会社は、このあたりで問題になっている公害企業の中でも、最も悪質な会社なのだ。橋本峰子女史は公害対策委員として、最近ずっと彼の社を追求している。そして、今日は議会に彼、大川玄一郎を召喚し、彼女がさんざんにやつつけてやったところである。

「あいつつたら、何を質問しても、人を馬鹿にしたような事ばかり言って。私はとても腹

が立ったわ」

「どうか、お手やわらかに願いますよ」

と、小塩が言っている。橋本峰子女史の朗らかなテキパキしたしゃべり方と対照的に、小塩はいやに大人しそうな、女性的な声を出す男だった。

「そう恐わがらなくてもいいわ。でも、今夜はあなたも、いいかげんな事じゃあ許さないわよ。さあ、こっちへいらっしゃい」

そう言うのを見ると、なんと橋本峰子は、すらっとしたグラマーな体に皮のスーツをまとい、黒いマスクをかぶり、足には乗馬用の拍車付きのブーツを穿いているのである。

さらに小塩の方は、あわれにも素裸にされて、犬の首輪を填められている。

二人はサディスチンとマゾ男と言う秘密のプレイを愉しむ間柄なのだ。なるほどこんな遊びをするのでは、隠れてマンションでも持っているければ困るわけである。

部厚いカーテンをしめ切った部屋の中は、まったくその目的のために作られていた。

天井からは吊るし責めに使う滑車の鎖が何本もぶら下がって鈍い光を反射している。壁には人間をはりつけに出来るような位置に手かせ足かせが取り付けられている。その他に

も、木馬とか、さらし台だとか、また、何に使うのか判らない責め具なども多数あった。

「さあ、畜生らしく四つんばいになるのよ」

と、橋本峰子は、小塩の首輪から伸びた鉄鎖を邪慳に引っばった。

小塩がよろけながら、膝をつくやいなや、彼女は細い鞭で小塩の尻に思い切り一撃を加えた。

「ウーッ」

小塩は大げさに呻く。橋本峰子は、かまわず腕が疲れるまで打ちつづける。

「ヒューッ」

と、だんだん男の声は高くなった。この部屋は特にしっかりと防音装置をほどこしてあるから、どんなに悲鳴をあげても外へ洩れる気づかいはない。

小塩は打たれるたびに四肢をふんばって耐えている。セントラルヒーティングがきいているせいもあるが、その体は真赤になっていて、首すじからは汗がポタポタとしたり落ちた。

小塩の下腹は、もう汗とは別の液で濡れている。だが、橋本峰子女史にとって、この鞭打ちは、ほんの前奏曲だ。彼女が完全に満足するまでには、まだまだ先は長いのである。

しばらく打ってから、次に彼女は小塩を馬にして責めた。

人間馬用の馬具とでも言うものを取り出して、小塩に装着する。

これは本当に馬具のように作られているのだが、一カ所だけ違うのは、通常の馬具には無い筈の、ある種の責め道具が取り付けられていることである。

橋本女史は小塩の背中にまたがると、部屋中を這い廻らせて、いためつけた。彼女は体重があるから、長いことそうさせられると、非力な小塩には、かなりこたえる。

口には轡がギシギシとくい込んで、もう彼はよだれを流しながら、声にならない呻きを上げるだけである。

もっとも、本物の馬の場合は、奥歯がないから轡がきくのだが、人間には馬と同じ構造の轡では、あまり効果もないかもしれない。

それでも、橋本峰子女史が乱暴に手綱を引っぱると小塩の顔は苦痛にゆがんだ。

やはり一番つらいのは、彼女の拍車だ。小塩は体中にそのものらしい古傷をつけられていた。

そうして一通り責めたあとで、始めて橋本女史も全裸になる。

小塩は抵抗出来ないように、細紐で後ろ手に縛り上げられた。小塩が好きなのは、木馬責めや浣腸責めである。いつも馬責めのあとは、木馬責めなどをされるから、小塩は期待で胸がうずいた。

橋本女史は自分の排泄物を小塩に飲ませることはあるが、小塩に浣腸するなどと言うことは穢らしがって、めったにしてくれない。

今日は、小塩は木馬責めにされた。そして尚もいろいろいたぶられてから、ご褒美として、橋本女史の豊満なヒップで顔の上に息が止まるほど坐ってもらったのである。

小塩が縛り上げられたまま、満足そうにグツタリと伸びてしまったのは、プレイ開始から二時間もたってからだだった。

○

「先生。今度は、私に先生を縛らせてくれませんか」

と、小塩がおずおずと言った。二人共、もう下着だけはつけている。

「まあ、どうして？ 私を責めたいの」

「いえ、とんでもない。先生の奴隷の分際でそんなことは思ってもいないですが、あのアルバムに一枚くらいは、先生が縛られているのがあってもいいんじゃないかと……」

と、小塩は言う。

二人は時々プレイの写真を撮ってアルバムを作っていたのである。もちろんそのほとんどは小塩の不様に責められている写真だが、中には数枚、美貌の県会議員、橋本峰子女史が全裸でポーズをとっているのもあった。

「この前も、ヌードを撮らせてあげたじゃないの。でも、それも面白いわね。だけど、縛るんなら、この下着はつけたままよ。全裸はだめ。あんまりひどく縛ったら、この次、私が責める時、許さないわよ」

そう言うとき、橋本女史はあっさり両手を後に回した。小塩は今まで自分が縛られていた細紐をつかんで、彼女の手を縛り始める。

「ああ、きついわよ。あなたの汗のしみ込んだ縄を、そんなにぐいぐい巻きつけないで」

「はい。でも、もう少し」

なんとか言いながら、小塩は割としっかり橋本女史を縛ってしまった。

縛り終わると、小塩は立ち上がって、彼女の緊縛姿を鑑賞するように、腕を組んだまま動かない。

「どうしたの、小塩。早く撮るんなら撮りなさいよ」

橋本峰子は、少し苛立った調子で言った。

ところが、いつも彼女の命令に易易として従う小塩が、今日は何故か落ち着きはらった態度である。

「いえ、先生。そんな大人しいポーズでは撮れませんよ」

と、彼女の顔をのぞき込むようにして言ったものである。

「な、何を言っているの。ふざけたことばかり言う」と承知しないわよ。もう、縄をほどきなさい」

今まで小塩に縛られたことなどないから、その体をじっと見つめられれば恥ずかしくもあり、橋本峰子はまったく怒ってしまった。

身をよじってみると縄目は意外にも堅く、ちよっとやそっとでは弛みそうもない。

「先生、私はねえ、先生にその綺麗なパンティやブラジャーなんかさっぱり脱いで、全裸になってもらいたいんですよ。そして姿勢もね、もっと脚を開いたり、エビ縛りにさせてもらいたいんです」

小塩は相かわらずおとなしい調子のまま、だが、悠然として続けた。

「本当に先生、裸で後手に縛り上げられていちゃあ、もう何をされても私の思いのままでしょう。ええ、そうじゃないですか」

小塩のその問いに、橋本峰子は小さな悲鳴で答えた。小塩が傍らに落ちていた鞭を取り上げて、彼女のすらっとした太腿に打ちつけたからである。

と、その時だった。

「はっはっは。いい恰好だな、橋本先生」

突然、第三者の声が部屋中に響きわたったのである。

「あ、あなたは」

橋本峰子は悲鳴に近い声をあげた。一瞬彼女は不自由な体を起こして、この場から逃げ去りたそうにしたが、勿論、そんなことは不可能である。

「県会じゃあ、あんな立派なことを言っておられる先生が、秘書の方と、こんなハレンチな遊びをしていらっしゃるとはね」

不意の侵入者は、今日彼女が議会でさんざんやつつけてやった大川玄一郎ではないか。

デップリと太った大川は、興奮しているためか、揉手をしながら入って来る。いかにも温和そうな顔つき、体つきの中で、よく光る小さい眼だけが、注意深い観察者には、彼の狡猾さを窺わせる。

「で、出て行きなさいよ。小塩、あなたが裏切ったのね」

橋本峰子は顔を赤らめながらも、ヒステリックに叫んだ。

「橋本先生、小塩君を責めるのはお門違いっでもんですよ。元はと言えば、先生があまり彼をいじめるから、こういうことになったんです」

と、大川がそれを受けて言う。

「小塩君が合鍵を渡したしてくれたんで、あなたが入ってすぐ私もしのび込んだんだが、お気づきにならなかったようですね。今までずっと隣の部屋にいたんですよ、覗き屋になってね。フッフッフ……ずいぶん小塩君に酷いことをしましたね」

小塩は黙ってにやにやしている。

「私をどうするつもりなの？」

「別にどうとも。ほら、私はもう小塩君からあなたのヌード写真をいただいているんだ」

大川が鞆の中から出して見せたのは、確かにあの秘密のアルバムにはってある筈の写真だった。

「ただ、小塩君の話を聞いて、私はもう少し芸術的なヌードを撮りたいと思ったんだ」

大川は橋本女史の前に、顔をくっつけんばかりにして坐りこむ。

「しかし小塩君の言う通り、つつしみ深い女

性が半裸になって男に体を縛らせるなんて、大胆すぎましたよ。この恰好では、どんなことをされても、全然、抵抗することも出来ないんですよ。たとえば、こういう風にされても……」

そう言いながら、大川は急に手を伸ばして橋本峰子の髪の毛をわし掴みにし、しぼり上げた。

もう一方の手は、彼女の体中をまさぐる。

「ひっ。や、やめて」

橋本峰子は、おどましさに身震いをして悶えた。自分の最も嫌いな相手に、素肌を弄ばれるのである。

その不自由な抵抗を愉しみながら、大川は彼女の乳首をつねったり、パンティのゴム紐に指をひっかけて、パチンと撥いてみたりする。身悶えした拍子に彼女のブラジャーは外れてしまい、光沢のある乳房がとび出した。

「フッフ、どうです。あなたは男にこんなことをされるのは、始めてじゃないんですか」

大川は、彼女をいたぶりながら言う。

「さて、そろそろ最後の布切れも取ってもらいますか」

大川は両手を彼女の腰にかけ、ゆっくり時間をかけてじりじりとパンティを引き降ろし

た。

「ひ、ひきょうよ。こんなことをして、どうなるか判っているの」

橋本女史も今は卵のようなむき身にされ、羞恥の汗で体中を光らせている。

「もちろん判ってますよ。そのために、来たんです。今度の件では、あなたにもう少し静かにしてもらわないとね。これから、あなたのその素晴らしい縛られヌードを、全部撮影させてもらいますからね。そうすれば、あなたも、もう私達には手が出せないでしょう」

橋本峰子は、口惜しそうに唇を噛んだ。

「さあ、小塩君。どんどん橋本先生の写真を撮りたまえ」

小塩はすでにカメラを用意していて、全裸の彼女を、前後左右から撮った。フラッシュが何発も光る。

「橋本先生、もっと顔を上げて」

と、大川はもう、うつむいてされるままになっっている彼女の顎を掴んで、カメラの方に向けた。向けた。向けた。

「よし。今度は先生に少し動いてもらいたい。が、どうしてさし上げようか」

大川は、揉手をしながら小塩に聞く。

「もっとギリギリに縛ってから、あの滑車に

ぶら下げてみましょう」

小塩は、ジャラジャラと滑車の鎖をいじくり始める。

大川は橋本女史に、さらに嚴重に縄をかけた。大川が縄尻を捌いて、股間縛りにしようとする、さすがに彼女も抵抗する。

「あっ、いやっ、それだけは許して」

「先生は、責めるばかりで、あまり責められた経験がないから、相手のされるままになるという心構えが出来てないね。君はもう、一切の自由を奪われているんだよ。しかし、そういうだの許してだのと騒がれちゃあうるさいから、猿轡を咬んでもらおう」

大川は、彼女の脱ぎすてたパンティを持って来る。

「フッフ、大分湿っているじゃあないか。さあ、これを口に含むんだ」

そう言われると、橋本女史も観念したのか大人しく自分から美しい唇を開いて、その不潔な下着を口中に噛みしめるのだった。

大川は、さらに手拭いで、彼女の頬がくびれるほどきつく、口を縛った。

「グググッ」

と、彼女が呻く。

大川は雑作なく、橋本峰子を股間縛りに縛

り上げてしまった。

「それにしても、先生はグラマーですね。これじゃあ小塩君でもいなりや、ヒップがプリプリと夜鳴きをしてたまらんでしょう」

大川は橋本峰子女史の、逞しいコリコリしたヒップをピタピタと叩いた。

教養もあり、知性もある婦人議員の彼女、一時間前にはサド女王として、小塩を思いのままに責めていた彼女が、今はまったく逆の立場にいるのである。

「ううっ」

「フッフ、先生、どんな感じですかね」

豊かな素肌にギリギリと本縄をくい込ませ、猿轡まで咬ませられて、彼女は大川のされるままに翻られている。

「さあ、先生、それじゃあ滑車の用意も出来ているようですから、そっちへ行きなさい」

大川は、足さばきも不自由になつたらしい橋本峰子を、縄尻をとってことさら乱暴に引きたてた。

滑車に縄尻を結わえつけて吊り上げると、彼女の緊縛体は、ゆっくり回転しながら上がっていく。この吊るし責めは、あまり苦しくはないらしい。

責めやすいように、地上二メートルくらい

のところで止めた。豊かなヒップを突き出したみじめな、だが男にとっては非常に扇情的な吊るしである。

「小塩君、今度は君が責めたまえ。私は写真撮るよ」

そう言って、大川はニヤリとした。

橋本峰子女史は、今さっきまでの奴隷に仕上げさせられるのである。

小塩は、堅にかけてある鞭のコレクションの中から一本を取って、ヒップの鞭打ちから始めた。

「クウ」

と、声にならない悲鳴がもれる。

それでも、小塩は一番弱い鞭を使ってやったのである。しかし、すぐに彼女のヒップから太腿にかけて、幾条もの赤い鞭跡が印される。パンツ一つの小塩の体には、まだそれと同じ跡がはっきり残っているのだ。

彼女との関係も、この裏切りで最後になるだろう。そう思うと小塩は、今まで女王のようにあがめ、手の出なかった橋本峰子女史をこれを限りにメチャメチャに責めさいなんてやりたくなった。マゾ気の方が多い小塩だが始めて女性をいたぶることに微かな快感を覚えたのである……。

○
そのあと、二人は鞭打ちにあきると、橋本峰子女史を鼻かせ口かせ付きの革具で縛り上げて、そのみじめな姿態を写真に撮ったり、エビ縛りにした上、いろいろなプレイ用の小道具を持ち出して責めたりした。

彼女は、大川よりも小塩に責められる時のほうが、奴隷に責められるという屈辱を感じるためか、激しく反応するのだった。

しまいには、二人で同時に彼女を責めることまでして、結局彼女が小塩をいためつけるために集めた責め道具を、殆ど彼女自身に味あわしてしまったのである。

○

明け方になって、やっと二人の責めは終わった。

あたりが明るくなってくると、大川と小塩は、あわてて身じまいをした。

「それじゃあ、橋本先生。たっぷり愉しませてもらいました。今後共よろしく」

と、大川は、下着だけをつけて隅の方にぐったりしている橋本峰子に、捨て台詞を投げつける。

「あら、二人とも……。そのまま、帰れると思っているの？」



期待と危懼

雜 夢

白川文子

彼女は、ふと体を起こして、いやに静かに言った。しかもその声は割としっかりしていたので、二人を少し驚かせた。

「ちょっと後ろを御らんないな」

そう言われて二人が振り向こうとしたとたん、背後からのがっしりした腕が二人を羽交締めにした。

「だ、誰だ」

と、大川が仰天したように叫ぶ。小塩は青くなったままだ。

いつの間に入ってきたのか、背の高い運動選手のような屈強な男が二人、小塩と大川をそれぞれ掴まえていた。

「じゃあ、これは返していただくわよ」

橋本峰子は立ち上がって大またに彼等に近

よると、まだ大川が手に握っていた鞆をひったくった。

「やっぱりこのヌード写真を持って来てくれたわね」

彼女は鞆の中から写真を取り出してゆっくりと確かめた。

「小塩、お前が私を裏切って、こいつに写真を渡したことは、すぐに情報が入ったのよ。」

それで、私はあなたの方のたくらみなど知らないふりをして、わざとお前の罠にはまってやったのよ。そうすれば、きっとその時一緒にこの写真を持って来ると思っていたわ」

峰子女史の美貌が微笑して、羽交締めされた小塩を瞞める。

「小塩、私の奴隷はあなただけじゃあないの

よ。こいつらもそうなの。お前に縛られるまでに写真を取り返してもよかったんだけど、こいつらには、終わってから来るように言っておいたのよ」

小塩と大川は動くことも忘れたようにポカんとした顔付で、女史の美しい口許を眺めているだけだった。

「そう。あなたの方の仕掛た罠にかかったふりして、されるままになっていたのは、やはり一度くらい責められると言うことを味わってみたかったせいもあるわ。まあ、まんざらでもなかったわね。……さあ、二人共、今日は大人しく帰りなさい。もしかしたら、またいつか、責められてやるかもしれないわ」

——(終)——

現代の科学の発達はいくらゆる方面で目を眩らさせられますが、ひとつ間違えると、とてもないことになるのは言うまでもないことです。物質文明の追求に於いてさえこの様であれば、これが生命の問題となると、一層深刻なものになるでしょう。

人間が火を使いこなすようになったとき、或いはダイナマイトを発明した時、相対性理論が立された時等は、人々はそれらが人類の繁と文化の向上に役立つものと信じ、祈

り、悪用されることを恐れたに違いありません。しかし、近來の科学の發達は、往々にして人間性を忘れ、あまりにも物質文化を求め過ぎていくようにも思われます。

身近な問題として、最近とくにやかましく言われている公害の問題にしても、人間本来の生活をするという最大目標を片隅に追いやって、単に目先だけの豊かさを求めようと躍気になり、あるべき姿の本筋を忘れ、物質文明を追いすぎ、視界の狭い窓から、宇宙の大きな因果関係を見ていたためにごく一部しか見えず、機械文化の發達とともに、人類をむしろしぼんできたのでしょうか。

さてこれが、生命に関することを取り扱う科学が、今までと同じような歴史を積み重ねてゆくとうなるのでしょうか。既にアミノ酸を合成することは可能のようですし、近頃ではタンパク質、或は単細胞なども造れるのではないのでしょうか。このことを飛躍させて考えると、人工的に「生物」を創ることが可能だということになります。即ち、「生命の創造」も不可能ではないということでしょう。仮にこのような人間が出来たとして、これを「人工人間」と呼ぶとしますと、大きな社会変革をもたらすことになり、いろいろな問題が生じてくるでしょう。

何もここまで飛躍しなくとも、現実人工受精や、試験管ベビー等の問題が既にあるわ

けで、人工受精にまつわる諸問題の複雑さを感じただけでも、法治国家のむずかしさに唯おどろくばかりですが、この場合、父親が何かの原因で親子関係を認めなかったらどうなるのでしょうか。現在の法律で、血のつながりを親子関係の根底としている以上、問題の解決は困難なものになるでしょう。ましてや試験管ベビーの場合となると、更に深刻なことになるでしょうし、例えば、実験的に育てられた試験管ベビーが成功した場合などの生命は、どう処遇されるのでしょうか。精子や卵子は現存する人間から得たものであれば、当然、人権として保証され、父母も存在するといえましょう。

ところが、科学合成によって創られた人工人間の場合はどうでしょうか。現在工場にいるいろいろなもの、例えば、自動車やテレビ、食器や机などのように、全然の合成物によって人工人間が生産された場合はどうでしょう。始めに記したように細胞分裂によって酒が造られるようにして人工人間が創られた場合も含めて、その製造課程に於て染色体の数や遺伝因子、ホルモンの状態等をコントロールする事が出来れば、生産された人工人間は社会的にどのように処遇されるべきでしょう。しかも人類にとって都合の良い、能力のかたよった人工人間が造られるならば、問題は一層複雑になることでしょう。

たとえば、この人工人間に考える力や、創造力を与えないで、我々人類の奴隷として使う目的や、或は単能生物として、人類のあらゆる肉体的、精神的苦しみの代行、もしくは道具とするための目的で造り、我々人類は人工人間の犠牲の上に快樂をむさぼろうとすれば、昔の奴隷制社会そっくりの狀態が、高度の文明社会の中に再現することになるように思われます。

労働に使役するための人工人間。快樂に奉仕させるための人工人間。興味や趣味趣向の道具とするための人工人間。それぞれの目的に応じて造り得る人工人間。

このようなことがもし可能になりますと、SMの世界も無限に拡がるだろうと思いますし、心がおどる様に感じられます。造られた人工美的な快樂と欲望の追求は、何かSMの世界が求めようとしているものと表裏をなすように思われるのです。

とりとめもないことを書きましたが、現在世界中のどこかで現実に行なわれているらしい人工受精や試験管ベビー実験のことを聞きアミノ酸合成可能というような科学の進歩ぶりを聞くと、このような人工人間を連想し、飛躍的な夢想に心おどる想いがするの、私が、高度に發達した文明社会の中の奴隷制度というものに、憧れに似た魅力を感じているからなのでしょう……。

連載・アブ紳士行状記 (16)

M 派 交 友 録

玉井ひろ美の巻 (1)

鬼 山 絢 策

舞 台 稽 古

新宿三丁目に内外ミュージック劇場という
ストリップ小屋があった。

したのだった。

新宿には当時、新宿フランス座がまだ健在
で、堀田金星（と言っても、いまの若い人は
知らないかもしれないが、大正時代オペラ華
やかなりし頃、田谷力三や、木村時子などと

前は内外ニュース劇場
と言って、ニュース映画
や、当時まだ数少なかった
ピンク映画などを上映
していたのだが、深井俊
彦氏がプロデューサーとな
って、はなばなしく開場



共にならした俳優だった）氏がマネージャー
で、ここから幾多のテレビタレントが生まれ
ていた頃だった。

フランス座は粒が揃っている。これにどう
やって対抗して行くのか、私は深井氏の企画
に興味をもって見ていた。

すると、今は廃刊になっているが「裏窓」
という雑誌の編集長I氏から電話がかかって
きて「今夜、内外ミュージックで舞台稽古が
あるんですよ。見物に来ませんか」と言って
きた。

「写真、撮ってもいいんですか」

「構いませんよ。うちからもカメラマンが撮りに行きますから、一緒に撮られたらいいでしょう」

次の演し物はI編集長の脚本で、雑誌とタイアップして行こうというプランだった。

それじゃあと、ニコンとペンタをぶらさげて、11時に小屋へ行ってみた。

深井氏とは、前に「五味の会」というのが誕生した時、銀座のガスホールでI氏から紹介されて顔見知りだったし、友人のK氏、須磨利之氏など、知った顔がチラホラ居た。

演^だしものは「のぞきの大スケ捕物帖」というセックス・コメディだった。

一座のスターには、美山ありさ、玉井ひろ美、佐和田明子、といった、芝居も踊りもできる芸達者な連中が顔を揃えている。

ガヤガヤと、にぎやかに楽しそうにやっている。そこへ雑誌の方のカメラの藤沢氏がやってきたので、I編集長は

「あ、ここだね、雑誌の方のスチル写真を撮らしてもらいますからね。サワリのところをピックアップしてポーズして下さい」

「どれから行きますか」

深井氏とI氏が、ちょっと打ち合わせした後、深井氏が、

「ひろ美ちゃん、源ちゃん」

大勢の中から女賊に扮した玉井ひろ美と間抜けな目明かしに扮した源氏大助を呼んだ。

「そろそろ、はじまるな」

と私は、ストロボをONにした。

「源ちゃん、ここへ四つん這いになって。ひろ美ちゃん、背中へ足をかけて踏みつける」

深井氏がポーズをつける、玉井ひろ美という女優は二十五、六か、大柄でグラマーな、なかなかの美人だ。源氏大助は一座の男の方のスターだが、目のまわりにデン助のような黒い輪をかいて、かなりふざけたメイクアップをしている。明日、初日を迎えて、衣裳もメイクアップも本舞台そのままだ。

「こうね」

ひろ美は心得たもので、片手でサッと着物の前を捲くって、白い脚線を高々と見せながら大助の背中を踏んだ。

「もうチョイ、捲ってほしいな」

I編集長がダメを出した。その言葉の終わらないうちに、ひろ美はグイと思いきり捲くった。

「アッ！」

と私は危うく声を出すところだった。くろいものがのぞけたからである。

「おい、見えちゃうぜ。大丈夫か」

「フフ、大丈夫よ」

この女優はノーパンで稽古に出てるのかと思った。

カメラマンの藤沢氏は、舞台から客席へ下りて、アップで女体に焦点を合わせる。既に私はそこに居て、ひとあし、お先にシャッターをきった。

「ハイ、次は蹴とばしたところ」

「どこ、蹴とばすの」

「肩でも頭でもいいよ」

「オイオイ、ひとの頭だと思って、ソマツにするなよ」

源氏大助が文句をつけたが、満更本気で言っているのではなく、言ったあとからニヤニヤしている。

「じゃ頭蹴とばしてあげるわね。エイッ」

ひろ美は、かけ声をかけて源氏大助の頭を蹴とばした。

「痛ててッ。おい本気で蹴りやがった。悪のり、すんなよ」

「ついでに倒れたところを、顔を踏んづけるのを一ちょう」

I編集長が注文を出した。私が舞台上上ってクローズアップで撮ろうとすると、I編集

長はニヤニヤしながら、

「これは鬼山先生へのサービスですよ」

と、ささやいた。

次から次へと男をやっつけるシーンの連続である。I編集長もMものが好きだからだ。

「もういい加減にしてくれよ」

源氏大助は悲鳴をあげたが、これも口先だけだ。

「面白いわ。先週は縛られたり、杖で殴られたり、さんざんいじめられたから今週はそのお返しよ」

ひろ美は張りきって大助をいじめている。あんまり張りきりすぎてヘソの上まで捲くたので、あるかないかの黒い吊りバタが見えてしまった。

「正体、見せちゃっちゃ、面白くねえな」

とI編集長をガツカリさせた。

次は美山ありさである。これも凄い美人でオッパイの形がすばらしい。お妾さんに扮して助平爺を、たらしこむ場面である。

「おい、助平爺。早く早く」

助平爺に扮した野呂甚吉は、座長格の源氏大助がコテンコテンにやられているのを見ているだけに、

「あんまり荒っぽい事やらないで下さいよ」

と、おどおどした恰好で出てきた。

「何言ってるのよう。この前、あんなにきつく縛ったじゃないか。今度はタツプリお返ししてやるからね」

腰巻をひろげて、内腿を舐めさせるところから始まった。

「何だ、うんとひっぱたいてやろうと思ったら、儲け役じゃないか」

「エへへ。こういう役なら、何度やってもいいねえ」

野呂甚吉は相好をくずしながら、首を突込んで行く。

「どのへん、なめさせるの」

「もっと奥の方」

「あらあら、よだれ、たらちゃ、いやよ」

「もっと足ひろげて。もっと首を突込んで」

方々から声がかかるが、お役御免になった源氏大助などは、いい気になって、野次っている。

ありさは大股に足をひらく。野呂甚助の顔が更に突進する。

「一体、どこなめてるのさ」

「一番いいとこ、なめさせてやれよ」

「本番で、こんなとこまでやるの」

「ああ、やるよ。パンティもとって、なめさ

せてやれ」

「なめさせてやってもいいけど、あげられたって、知らないからね」

甚助の顔を両足にはさんで、ありさは平然と見下ろしている。

私は夢中でシャッターを、きっていた。とにかく、こんな楽しい風景はなかった。

すばらしいモデル

稽古が終わった後、須磨氏、I、阿麻哲郎氏等と三丁目のスナックへ飲みに行った。

「どうでした？ いいのが撮れましたか」

「いや、大変面白かったです。ああいう写真を、ゆっくり時間かけて撮ってみたいなあ」

「撮れますよ。深井さんに紹介してもらったらしいでしょう」

I編集長は気軽に言ったが、私は可能性がある」と聞いて、その気になった。

「みんな美人ですねえ、身体もいいし」

「ああ、あのうち佐和田明子はダメですよ。

あの子は、演劇畑ですからね。玉井ひろ美か美山ありさなら、ヌードダンサーだから大抵のことは、やってくれますよ」

「男の方は、どうです阿麻さん。モデルにな

ってくださいか」

「いいでしょう」

「私は、あの玉井ひろ美がいいなあ。あのひとはSっ気があるんじゃないですか」

「サアね、あるかもしれませんね」

その夜は3時頃まで飲んで別れた。

ところが、私は大失敗をやらかしてしまった。最初、少し撮ったところでフィルムが切れたので、新しいのと取り替えたつもりだったが、どこをどう間違ったか撮影ずみのフィルムを入れてしまったので、現像してみると何と皆、二重写しになっているのである。

折角のチャンスに撮ったフィルムが、殆ど全部だめにしてしまったのがっかりした。

撮影を失敗したことが、なおさら玉井ひろ美をモデルにして撮りたい意欲を、そそりたてた。そうになると、矢も楯もたまらなくなつて、内外ミュージックに深井氏を訪ねた。

私は誰に対しても、変に体裁ぶったり、言葉飾ってしゃべることのできない性分なので、卒直に私の撮影意図を明らかにして、玉井ひろ美がOKしてくれるかどうかを深井氏に聞いてみた。

「やるでしょう、あの子なら。聞いてみます

か」

小屋の前の喫茶店で話していたのだが、深井氏は直ぐ小屋へ電話してくれて、玉井ひろ美を呼び出してくれた。

「いま来ますよ、直接当たってごらんさい」

間もなく、ひろ美がやってきた。シュミーズの上に羽織をひっかけてサンダルばきで楽屋からかけつけてきたのだ。電車通り一つ渡ればいいのだから楽屋着そのまま、どぎついメイクアップも、おとししていなかった。

深井氏は入れ違いに座を外した。

私は相変わらず単刀直入に、ビジネス的に話を、きり出した。

「いいわよ」

ひろ美は、じっと私の顔を見つめながら、いとも簡単にOKしてくれた。

あんまりアッサリ決まったので、拍子抜けしたくらいだった。

「いつ、やるの」

と話は早い。私は男のモデルを誰にしようかと迷ったが、阿麻哲郎氏に電話してみた。

「面白いですね。やりましょう」

と、これも二つ返事だったので、その場で明日の晩と日取りをきめた。

「小屋が9時45分にはねるから、そうね、10

時なら大丈夫よ。で、コスチュームは？」

「いまの芝居に出ているの、あのままがいいんだがなあ」

「いいわよ」

「ああ、それと、もうひとつ。男のかつらと着物が欲しいんだがなあ」

「何とかなるわ。じゃあね」

腕時計をチラッとみたひろ美はサッと立ちあがっていた。もう舞台の出が迫っているのだろう。

私は時代物の写真が撮りたくてたまらなかった。その時は、浅草にかつらや衣裳、刀や脚絆など一式を貸してくれる店があるから、あそこへ電話して借りようと、前々から、いろんな細かいところまで調べていたのだが、全然その必要がなく、こんなにトントン拍子に決まるとは思ってもいなかった。

玉井ひろ美は、新宿へ来るまでは、大阪でストリッパーをやっていたと言うので、ヌードになることに抵抗を感じない。

もうその頃は「特出し」の盛んな頃だったが彼女は特出しはやらなかったということである。

だが、実にすばらしい身体だ。表情もヴァラエティに富んでいて、どんな表情をしても

美しさがくずれない。

全く、こんなすばらしいモデルが見つかったとは、ついていると思つて、いまから胸がワクワクしていた。

異様な組み合わせ

翌日、午後9時半に阿麻氏とミュージックの前の喫茶店で、おち合った。

阿麻氏は比較的冷静だった。彼の出現を確認したところで私は新宿区役所裏のホテルに電話して、部屋をとった。前に一度、使ったことのあるホテルである。

喫茶店から小屋が見える。芝居がハネたと見えて、お客がゾロゾロと出てくる。あまり入りがよくないと見えて、五、六十人も出てきたら、お終まいになった。時計を見ると10時5分前である。

「じゃあ、そろそろ、行って見ますか」

阿麻氏と連れ立って、小屋の正面から入って行く。もう小屋には殆ど人影がない。

パラパラと一座の俳優達が「お疲れさん」と挨拶して出て行く。深井氏を探したが見当たらない。

そこへ黒いワンピースに大きな風呂敷包み

を抱えて、玉井ひろ美が出てきた。

「お待たせ。急いだから、顔を落とさずに来ちゃったわ」

見るとアイラインや、つけ眉毛をしたまま、かつら下地をとったあとの地肌と、ドーランを塗った額に、一本、線を引いたようなムラができています。

「いいんだ、そのままの方が。向こうへ行つてメイクする手間が省けるから」

阿麻君がペコリと一礼して「荷物をお持ちしましょう」と、無言で両手を出す。ひろ美は、チラと阿麻君を一瞥して、無難作にわたした。阿麻君は、早くも女主人に対する下僕のような態度だった。

タクシーをとめて、ひろ美と私が後部に、阿麻君は荷物を脇において、自分は助手台の方へ乗った。

「今度の芝居、面白いと思うけど、あまり入りがよくないね」

「場所が悪いからよ。東京はだめよ。特出しでもやればワンサと来るだろうけど、東京じゃ許可にならないしね」

ひろ美は弾力のある肉体を私の方に押しつけてくる。別に意味があるわけではない。だが、ムンムンする女体とドーランの匂いが車

内にこもって、抱きしめたいような衝動を我慢した。

「日本苑」というホテルの玄関に入る時、いつも感じるのだが、今夜は特にテレくさかった。

ダブルの背広を着た私に、どぎついメイクアップをしたグラマー美人。それに阿麻君はわざと、みすばらしく、色つきのシャツとズボンだけという恰好で、大きな風呂敷包みを抱えている。まことに異様な組み合わせで、これでは、とても「御休憩」の客の常識からはずれている。女中が変な目で三人をジロジロ見るのは、やむをえないことだが、どうも気持のいいものではない。

「お泊まりですか」

と聞かれて

「イヤ——泊まるかも知れないが——」

と、あいまいな返事をする。

四人なら麻雀でもやるんだろうと思うだろうが、三人で御休憩というのは、三人で一体なにをどういう風にやるのかと、女中もいろいろ想像を、めぐらせている様子が、ありありとわかる。

ひろ美もテレ臭いと思えて、ひっきりなしに何かしゃべっている。中で一番、度胸の坐

っているのは阿麻君で終始無言、私とひろ美から離れて、隅の方にションポリと坐って、無神経な風を装っている。既に彼は「演技」をしているのだった。

ひろ美は酒が好きだと聞いていたので、私はサントリーの小びんを持ってきたが、彼女は「お酒の方がいい」というので、料理と酒を注文する。

だが、料理が出来て女中が運んでこない。こちらは仕事の準備ができないので、ひろ美と話をして待った。

「あたし、今週は忙しいんだ。あさってから仙台へ行くのよ」

「え。舞台の方、休むの」

「ウン。南さんが代わってくれるから、三日間だけね」

「なに？ キャバレーか何かの仕事？」

「そう、三日間で七万円よ」

すぐ金の話をするとところが、関西の芸人らしい。

「持出しやるの」

「冗談じゃないわ。そこまでは落ちないわよそんなことしなくたって食って行けるもん」

後になって、彼女の唄や踊りを何度も見たが、いずれも一級品で、日劇の舞台に出して

も立派にスターで通る芸だった。

足蹴シーン

女中が料理を運び終わったところで扉に鍵をかけ、準備にとりかかる。

ひろ美が風呂敷包みをあけると、かつらが二つ出てきた。女の方は、銀杏がえしでよいが、男の方が前髪のついた若衆まげだった。

「ありゃア、へんなの持ってきたね」

「これしかなかったのよ。ごめんなさい」

衣裳も男女二揃いある。女物の方は彼女が舞台で着ていたのとは違った柄だったが、ちゃんと長襦袢も腰巻も揃っていた。

ひろ美は鏡台に向かって、メイクアップを手入れし、かつらしたじを巻いた。

「女やくざってことだったわね」

「うん、女親分ってとこかな。あね御だな」

「じゃあ、少しきついメーカーキャップにしましょうか」

顔が終わると、

「ごめんなさい」

ひろ美はワンピースをスルスルと脱いだ。

私達二人に背を向けてであったが、ワンピースの下にはブラジャーもパンティもはいて

ない。あつという間に、白い輝くような裸身が剥出しにされた。さすがに、玄人である。素人だったら、こう簡単には脱がない。

それにしても、パンティを脱いできてくれたことは、大へん有難かった。話のわかる女である。

スーッとしゃがんで長襦袢をとると、手早くまとい、次に紫色の派手な柄の着物を羽織った。

鏡の中から私を見てニッコリ笑ったが、そこには羞恥の色は全然、見られず、すばらしい色気がこぼれていた。

「それ、着てごらんなさい」

と、ひろ美に言われて、阿麻君はモゾモゾと縞の着物を着て角帯を締め、最後に前髪のかつらをションとかぶったが、見ると何ともヒネた若衆で、てんでサマになっていない。

ひろ美はプツとふき出して、

「何だが変ね。やっぱり、少し顔をつくった方がいいんじゃない」

ひろ美に笑われても、キョトンとして、全然、無感動な風を装っている。

「ここへ、いらっしゃい。あたしが顔をつくってあげるわ」

阿麻君は無言で、ひろ美の前にペタンと坐

った。ひろ美は阿麻君に目ばりをいれた。かつらを、ていねいにかぶせてやる。

「このかつら、少し小さかったわね」

阿麻君は幼児のようにおとなしく、ぬいだりかぶせたりする、かつらの具合を、神妙にかしこまって、なすままにまかせている。

一方、私の方は例によって、被写体の位置を設定し、それに対するライトのポジションを定めて固定した。五百ワットの写真電球二個である。光が同量なので、フラットな写真ができるなと思ったが、五百ワットと三百ワットでは方向を変えて撮った場合、ライトを一々取り替えるのが面倒なので、今夜は同量の球を使うことにした。

ようやく準備は終わった。既に一時間以上経過していた。

「どんなところから、いくの？」

「今日のはね、不始末をしでかした子分の清吉を、あね御が責めて折檻するという筋書きなんですよ。でね、最初は、あね御の前に両手について謝っているとから入ります」

ひろ美は坐らずに、中腰から、しゃがんだようなポーズをとった。この方が坐高が高くなって、豊に額をすりつける阿麻君に対して大きく見え、貫禄がついて見えた。

私は最初のシャッターをきる時は、かなり慎重である。絞りとシャッタースピードをセツトし、ミントをフレネルレンズで正確に捉えた。

ひろ美は怒った様な表情で阿麻君を見すえている。表情が玄人だけに堂に入っている。

「ハイ、次は男の首根っ子を左手で押さえて、上げて——。ハイ、次は膝小僧で押さえて、ぶんなぐるポーズ。どうもゲンコツってのはヘンだな。あ、これ、持って下さい」

傍の徳利をとって、まだ少し残っていた酒をあけて、ひろ美に持たせた。

徳利を逆手に持って、高々とふりあげたポーズは、なかなかよかった。

「ハイ、それを振り下ろして、頭をなぐる」

「こんちき生ッ」

ひろ美はアドリブのセリフを入れて、だがそつと徳利を頭にあてた。

「ハイ、次は立って下さい。足で頭を蹴つとばすところ」

ひろ美は立ち上ると、片手でグイと裾を捲りあげた。

「どのへんから蹴ればいいの」

「いや、構いません。私の方で、動きますから。ハイ、蹴って！」

「よいしょッ……と」

サツと足があがる。

「ああ、ダメだなあ。蹴とばされたのにポカソとしてちゃ。清吉君、ひっくり返らなくちゃ、サマにならんよ」

何度か、やり直して、どうやら動きのあるものができた。

「ハイ、ひっくり返ったところを足で顔を踏みにじる。清吉君の顔は、こっちを向いて」

ひろ美は前を捲くって、大腿のあたりまで足を見せ、阿麻君の顔へ足をのせた。

「一体、この清吉という奴は、どんな悪いことしたの」

「サア、どんなことにしましょうかね。あね御の一の子分が、いま伝馬町の牢屋へ喰らいこんでいる。その隙に、そいつの女房と問男

した、ということにしますか」

「ウフフ、ひとの女房を盗むガラじゃないわね、この男」

「のせた足の位置を右左に変えて下さい。踏みにじるんだから」

「この野郎、これでもか」

「そのあいてる手は腕まくりをして下さい」

「こん畜生ッ」

ひろ美の足は阿麻君の顔にペツタリと密着

している。ほんとに力を入れて踏みこじっている感じが出ている。あるいは多少、重味を加えて踏んづけているのかもしれない。

「ハイ、今度はまげをつかんで引きずり起して、往復ビンタをくわせる」

何がおかしいのか阿麻君はまげをつかまれて起き上ると、ニヤリと笑った。

「笑っちゃ駄目だよ。まじめにやらなきゃ」

「こん畜生ッ、まじめにやれッ」

ピシッ、ピシッと、ひろ美の平手打ちが、ほんとに音を立てて阿麻君の頬に鳴った。阿麻君は一ぺんに緊張した。

「サア、そのへんで片肌、脱いで下さい」

帯をグッと下の方に締めているので、右の片肌を脱ぐのは、いとも簡単で、かつこのいい乳房がプクリと顔を出した。

「ハイ、清吉君、そこでもう勘弁して下さいと両手を合わせて拝む」

阿麻君は無言で手を合わせる。ひろ美の方は、すっかり乗ってきているのだが阿麻君の方は素人だけに、どうも調子が合わない。

「清吉君の肩へ片足かけてみて下さい。イヤ向こう側の足。ハイ、そこでもう一ぺん、蹴り倒す」

私は、矢つぎ早やにシャッターをきった。

早くもフィルムがきれた。

「いけねえ、もうなくなったか。じゃあ、ちよっと休めますか」

細められた瞳

「面白いわ、男をいじめるのって」

「いじめられるのとどっちがいいですか」

「いじめられるのは、きらい。そりゃ芝居の上じゃしかたないけど、やっぱりいじめる方が楽しいわ。痛かった？ さっき、ほんとに打っちゃって、ごめんなさい」

阿麻君は、始めてテレ笑いして「いいんです」という風に、えしゃくした。

フィルムを入れ替える間、ライトを消していたので、何だか急に暖かくなった感じである。

「さあて、行きますか」

再びライトをつける。三月も半ばをすぎたが、部屋には暖房が入っているし、二個の電球の熱も、かなりあつい。

「暑くなったわ」

「じゃ、もろ肌脱いでもらいますか」

着物を着ている時は、そうでもないが、諸肌脱ぎになると、腕や胸の肉づきも豊かで、

男という男を圧倒するグラマー振りである。

「ええと、顔を蹴倒したとこでしたね。清吉君、黙って蹴られてる手はないね。一応、手をあげて、それを防ぐ態勢をとってくれよ。そこを構わず蹴って蹴倒す。いいね。ハイ」

「この野郎ッ！」

この蹴倒すところは四、五回くり返した。

「ハイ、清吉は、うつ向けに倒れる。あね御はその背中へ馬のりになって下さい。そして右手をとって逆に捻じあげる」

二人は、その通りポーズしたが、前の方へ出すぎてしまつてライトから、はずれてしまった。

「もうちょっと後ろへ退って下さい」

ひろ美が立ち上る。阿麻君は四つん這いになって一メートルばかり、後退した。

ひろ美は少し前を捲くって、その背中へ馬のりになった。

「片膝立ててみて下さい。左足の方」

片膝立てると腰巻が捲かれて、太腿がかなり上まで露出した。

「ハイ、そこで腕を、ねじあげる」

ひろ美は唇をゆがめ、歯をくいしばるような表情をして

「どうだ、これでもかッ」

「清吉君、痛そうな顔をして」

ひろ美は、ほんとに腕をねじった。この時阿麻君は目をつぶり、

「アアッ、痛ッ」

と、ほんとに痛そうな表情をした。いままでにはない優れた表情だった。

たしかに乗ってくると、ひろ美は本気でやっている。私もハッスルしてきた。

「さて今度は、清吉君を仰向けになるように蹴転ろがす」

仰向けと聞いて、阿麻君の表情がはじめて緊張した。

「ハイ、その調子で、おなかの上に跨がって下さい」

ひろ美は妖しい笑みを口許にただよわせてドッシリと跨がった。

「顔全体を驚づかみにしてみして下さい。爪を立てて」

ひろ美の目はサディスティックなひかりを放って、阿麻君の顔をバラ搔きした。

「そこで片膝立てて、足を顔へのせる。イヤ腰を下ろしたままで……清吉君は足のうらを舐める。舌を出して……」

「ウフ、くすぐったい」

「もう少し前の方へ出て下さい。胸のあたり

へ跨がって、叱りつけている気分で見つけろ。清吉君は恐怖の表情……そこで、もう少し捲くって下さい」

ひろ美の足は丸味があつて、肌理きめのこまかい肌きがライトに当たって雪のように白い。

「もうちょい前へ出て、首のへんに跨がってみて下さい」

ひろ美の開いた腿が、阿麻君の首をはさんだ。

上から、ひろ美はジッと阿麻君の顔をのぞきこんでいる。何かを問い求めている顔だった。

「やってもいいか」

と、いう風だった。阿麻君は、ひろ美の瞳に視線が合うと、まぶしそうに目をとじた。

それは極めて女性的な表情だった。女性が男性から接吻を受けるのを期待するような表情だった。

ひろ美の瞳が、うるんできた。

彼女は実に敏感な女性である。いままで、

場面々々で適当なセリフをはさんできたのだが、このへんでは黙ってしまった。

「もう少し、前へずらせて下さい」

その時、ひろ美はチラリと不安気な表情を見せて、ちゅうちよした。

「この写真、誰にも見せないでね」

と言って顔をあげ、私をジッと見た。

「もちろんです。誰にも見せません」

この場に及んで、ひろ美が怯んでしまったのでは、折角ここまで好調に運んできた意義を失ってしまう。

「ここが勝負どこだ——」

と私は真実をこめて、ひろ美を見つめながら言った。いまさらこまできて、くどくどと説明などしても効果はない。

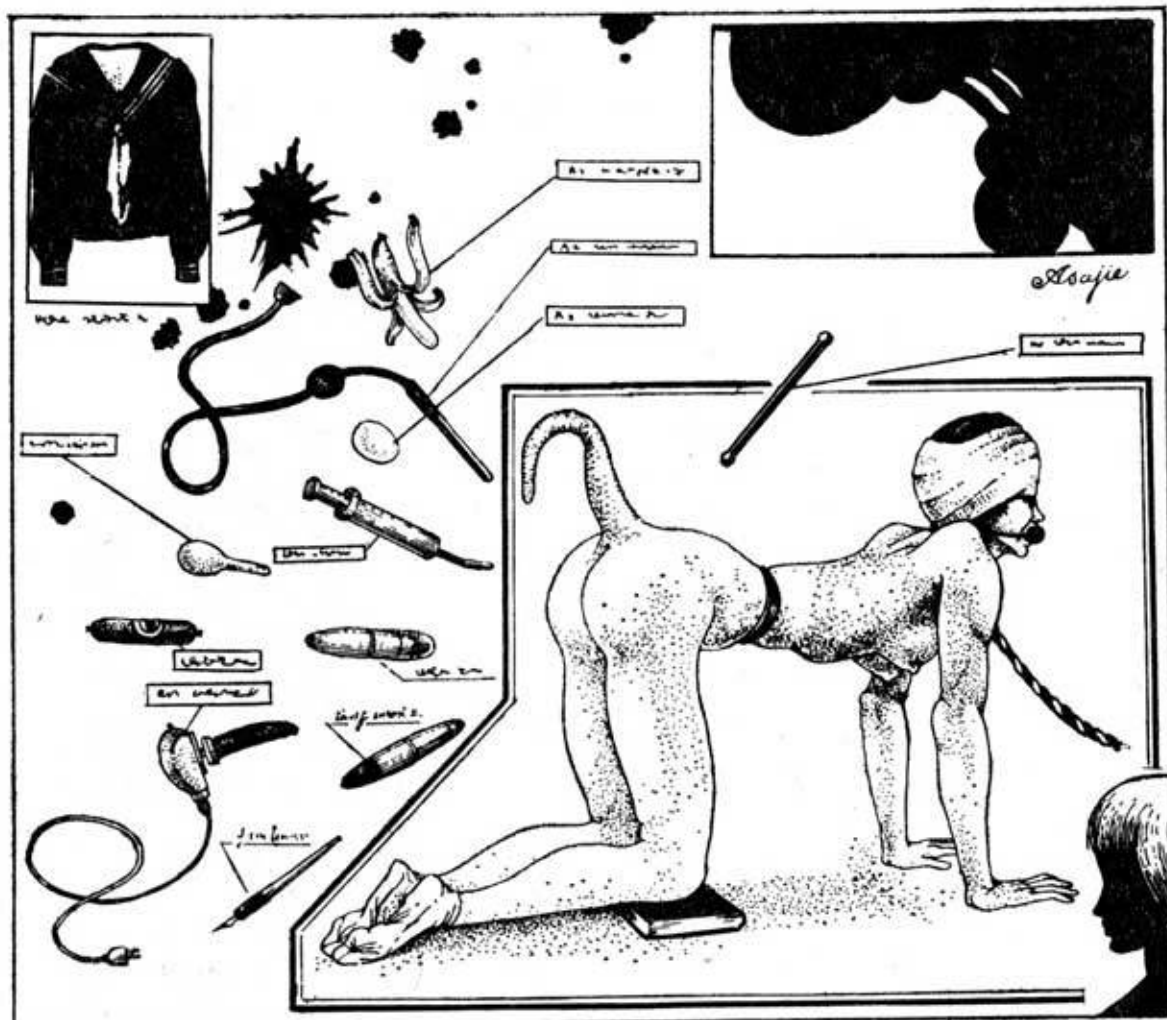
ひろ美は両腿にはさまれて動きを失った阿麻君の顔を、もう一度、念をおすように見下ろしていた。

そして意を決したように上半身を前に移動した。それは、ほんのちょっとした移動であったが、私の方向からは豊かな尻が阿麻君の顔を犯したポーズになった。

私は改めて慎重にピントを合わせようとしたが、手がふるえて、なかなかピントが合わなかった。

阿麻君の顔半分が隠れた瞬間、ひろ美は視線をそらし、空間の一点を見つめてスーッと目を細めた。それは何とも言えぬ美しい表情だった。

女性のエクスタシーの瞬間の表情をこれほ



どナチュラルに捉えた写真は少ないだろう。もはや、それは、つくり出された表情ではない。演技ではないのだ。

叶順子が「痴人の愛」で蚊張を通して見せた表情のうちに、これと似たものがあった。

そう言えば、ひろ美は叶順子と、よく似ている。

恐らく玉井ひろ美は、これまでいろいろの

経験を潜ってきた女であろう。いま行なっているようなことは、とくに経験しているで

あろう。にも関わらず、初めてのよう、しびれているのだ。ひろ美という女は、それほど感度のいい女なのだ。

(続く)

僕のイメージ画……室井亜砂路

実験報告書・カルテ X

カルテを絵で描いてみたつもりです。機械類の使用説明書等は、門外漢の僕には時に非常に美しく見えるのです。ピストルの分解説明図、機関車の車体、日本刀の冷徹な鋼の光の悩ましき等は、きっとその道のマニアにはエロティックなものにみえるのでしょうか。しかしそれは、いわば対象から拒否される魅力であり、疑似的な平和と近代化の中で、いわゆる人間的な社会生活に自足しながらも、一方でしきりに拒否されたがるマニア化の道をたどっている現代の我々こそ、無意識的な一億総マゾヒストなのかもしれないのです。そ

れでなくとも公害でジワジワとなぶり殺されつつ、そして新聞のコラムや一言欄では大いに憤慨しながらもその元凶の体制の為に喜々として骨身をけずって奉仕を続ける我々は、どう考えても正常ではないのです。マゾヒズムこそ現代の狂気を生きのびる方法……等と関係のない横道に話をそらして、テーマが何だかわからなくなってしまうのが、室井亜砂路のイメージ画の欠点の一つでもあります。この絵は退行性奇型児における感度実験報告書とでもいえましようか？

＝被虐の旅シリーズ＝

生

(いけにえ)

贅



由利美千子

私は彼に妻子があるかどうか、いまだに知らない。

お正月は誰でも家庭サービスに、はげむだろう。不思議にそれに嫉妬は感じなかった。彼の妻を見ていないせいかもしれない。知りたいとは思わなかった。彼も何もいわない

から、私も何もきかない。

しかし漠然と、彼に妻があっても、妻との間に縄によって結ばれあう愛情はないような気がした。

そして、縄をのぞいて、彼が妻を愛するとしても、何となく、うわべだけの、通り一ペ

んの愛情のように思われた。

冷たい家庭でもないだろう。むしろ表向きには、暖かい家庭のように、みえるかもしれない。けれど、私には、ぬるま湯のような気がする。とび出したら風邪をひくから、ぬるいのを我慢して浸っているような、ぬるいお湯なのではないだろうか。

それより、むしろ私は、六甲で会った香織のことが気になった。

信州で、彼に、ふと香織の名を問いかけた時、彼が機嫌をそこねて以来、よけい、しこのように気になっている。

しかし、彼が香織とお正月の祝い膳に向かっているとは思われない。

(どこで、何してるの?)

私は空気に問いかける。

早くあらわれてくれないと、私は又、自分で自分に悲をつけたくなってくる。

そんな、いら立ちのうちに日がすぎて、彼が伯母の店へ姿をみせたのは、残り福の晩だった。

大阪の人なら、残り福という言葉を知っているが、東京や地方の人では知らない人もあるだろう。

一月の十日を十日エビスといって、その前

の日は宵エビス、次の日は残り福という。つまり十一日の晩のことなのだ。

「京都へ行くか」

彼は言った。

「お正月の初詣でに行くつもりでいたんだけど、正月早々仕事で、こっちにいなかったんだ。清水寺からながめた冬の京都の街って、いいもんだよ」

私は二つ返事でオーケーした。

京都の清水寺では、まさか縄に縁のある場所はないだろうと私は思った。それが少し不満に思えたが、彼と二人で京都の町を見おろすなんて、映画かテレビの一場面のように嬉しかった。

京都という所は、何度行っても、何かしら旅愁を感じさせる町なのだ。大阪から僅か三、四十分で行けるのに、なじみ深く、しかも旅先の街のように思われるのは、私が東京生まれのせいかもしれない。

私たちは、いつものようにロイヤルホテルのロビーで待ち合わせた。

ここは車がとめやすかったので、ここで待ち合わせようという彼に、ああ、今日は車なんだなと私は思った。

車でも京都では仕方ないな、と思う気持ちも

あった。

彼は又、新しい車に乗ってきた。

(車のセールスマンなのかしら?)

私は、ふとそう思った。

「君は和服も似合うんだね」

彼は言った。

「お正月ぐらい着ないと、一年中、タンスの中で眠っているんですもの……」

「折角の晴着、汚されてもいいんだね」

「あら、京都へ行くんでしょ? 晴着を汚すような所あるかしら?」

「さあね」

彼は、あいまいに笑った。

祇園に近い小路を車は走ると、一軒の旅館のわきへ止まった。

「清水の駐車場は、混むからね。ここから歩こう。この家は時々泊まるんで、なじみなんだ。一寸、おかみに、ことわってくるよ」

彼は、いかにも京都風の木造の二階家へ入っていった。

旅館の看板は出ているが、小唄のお稽所のような家だった。

(誰と泊まるのかしら?)

私は、ふと嫉妬が体を走った。

戻ってきた彼は言った。

「ここは新聞社の定宿でね、東京から出張してきた者が利用するんだよ。仕事の話でね、泊まってしまうことがあるんだ」

私は私の一瞬、感じた疑いを、彼にさくられたと思った。

どうして人の心が解るのだろう。

憎いと思いながら、惚れ直す心をどうすることも出来なかった。

彼は車に鍵をかけて、スーツケースを手にした。あまり大きなケースではなかったが、清水寺へ行くのに、どうしてスーツケースがいるんだろう。

「一寸、このカバン持ってて」

彼は鍵を旅館へ預けに行った。

スーツケースは、あまり重くはなかった。

私は、あけてみたい誘惑にかられた。

○

清水寺への、ゆるい坂を上ると、見慣れた山門に行き当たる。

ウィークデーなのに観光客が、ぞろぞろと歩いていて。それでも、いつもより少ないのかもしれない。

清水の舞台から、更に奥へ歩いていった。

右へ折れると音羽の滝へおりの石段があるのに、彼は先に立って更に奥の細い道を歩い

ていく。

何度も清水寺へ来ているが、この道を通るのは初めてだった。

樹間の山道が爪先上りに続いていて、時折小鳥の鳴く声がした。

私は、ふと蓼科の落葉の道を思い出したがこの道は、ただ赤黒い土の肌をそのまま見せひからびた枯葉が、道の片隅に、肩をよせ合うように固まっているだけだった。

しばらく行くと、三重の塔が苔むしている場所に出た。

他に通る人もなかった。

谷をへだてて、清水寺が一望に見られた。

「わあ、すてき……」

私は思わず言った。

山門も、塔も、本堂も、勿論、舞台のあの特殊な木組みも、一つの景色に見えるのだ。

まるで横長の絵葉書を見るようだった。

「こんな所があるの」

私は意外だった。

観光客の殆どが、奥の院から音羽の滝へおりて帰ってしまう。ここまで足をのぼす人はいないのだろう。私自身、清水寺へは、何度となく来ているのに、はじめて見る景色だった。

だから京都という所は興味が深いのかもしれない。

「こっちへ行こう」

彼は先に立って、更に細い道へ入ろうとした。

「墓参道、抜道なし」

と書いてある。

「だって、そっちへ行ったら行き詰まりなんでしょう」

抜道がないのに、谷へおりるような細い道をおりていったら、どこへ出られるのだろうと思った。

「ばかだな。だから、いいんじゃないか」

彼は言った。

なるほど、抜道なしと書かれていては、大抵の人が此処から引返すだろう。

私は不安と期待と入りまじった気持で彼のあとを追った。

少し行くと、樹の間に墓が並んでいた。

そのどれもが、こけし人形を逆さに立てたような形をしていた。

こけし人形の頭は丸いけれど、それを逆さにした墓石の台の所は丸くない。

「認印をうんと大きくしたような墓だろう」
彼が言った。

本当に大きな判このようにもみえる。

お地藏さんが六体、並んでいた。

静かだった。

時折、鳥の音がするだけだった。

墓地の真中に、何かそなえる台なのか、石の、寝台のような台があった。

三界方霊何とかと彫ってある。

その台の下へ、彼はビニールの敷物を敷いた。

「さあ、その台は君の首の台なんだよ」
そういえば、さらし首をのせる台のようにも見えた。

「和服の君を縛るのは初めてだね」

という彼に

「此処で？」

と私は、あたりを見廻した。

清水寺の奥とは思えぬほど、シーンとしている。

「さあ、手をうしろへまわすんだ」

彼は晴着の上から縄をかけた。

「その敷物の上へ膝をついて、石の台へ首をのせるんだ」

私は後手に縛られた姿で膝をついた。
石が冷たかった。

「よし、動くんじゃないよ」

彼は、私の髪をといた。

折角、朝早く美容院へ行ってセットしてき
たのに……。

私は髷のようにまとめ、蓼科で買った黄
楊の、かんざしをさしていた。

彼はそれをとくと、私の首のまわりへたら
した。

「君は、お仕置をうけているんだ。動いては
いけないよ」

彼はスーツケースから化粧品をとり出し私
の顔を青く塗った。唇の上まで青く塗った。

「大分、血の気がなくなったな」
彼が、いうのに、

「みせて……」
と、私は立ち上ろうとした。鏡が見たかっ
た。

すると彼は邪険に私を押さえた。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載
分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を
附した集大成ですが、重版刊行は致しま
せん。只今、若干在庫があり、ますので、
未入手の向はお早めには是非蔵書の一部
にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便
局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円

「じっとしていないと首にも縄をかけるよ」

彼は私の首へ、わざと太い縄をかけた。そ
して、ぐるぐると二た巻き三巻きして結ぶと
結んだ縄を左右に分けて、石の台の足へ、か
らみつけた。

私の首は、さらし首のように石の台へ、あ
ごをのせ、動くことが出来なくなった。

バタバタと音を立てて、鳥が木の間からと
んだ。

(こんな姿を人にみられる……)

私は一瞬、息がとまりそうだった。

しかし、人は来なかった。

彼はゴザをみつめてきて、石の台の前をお
おった。私の下半身は、そのゴザでかくれ、

私は首だけのせているように見えるだろう。

「一寸いいね」

彼は口紅をとると、私の眉間から、血がし
たたっているように、えがいた。

「みてごらん」

彼は手鏡をスーツケースからとり出してみ
せてくれた。

自分の顔なのに、私はゾーツとした。そし
て体中を何か走って通った。

縛られて、首だけ石の台の上にのせている
自分に、私は満足した。

痛くはなかった。

うしろ手に縛られた手が少し痛いだけだっ
た。それなのに、いじめられているようなた
のしさがあるのは何故なのだろう。

もし此処が人の来る可能性の多い清水でな
かったら、私は裸で縛られて、こうして石の
台に首をのせて、身動き出来ないように石の
台にくくりつけられたかった。

この石の台に裸身を横たえたら、どんなに
冷たいだろう。

うしろ手に縛られて、石の台の上に寝かさ
れたら、石にすれて、手が痛いだろう。それ
でも、そうされてみたいように思った。

まして私の顔は血の気もなく、眉間から血
をしたたらせているのだ。

しかし、彼も真昼間の清水寺の奥の墓地で
は落着かないのだろう。

はじめな首をみながら、おいしそうに一服
つけたが、写真を二、三枚とただけで、首
の縄をほどいてくれた。

「和服というのは裸にするのに不便だね。洋
服なら、素裸の上にコート一枚着せかけても
すむのに、どうもその恰好は……」

と、私の姿をみあげ、みおろしていた。
「コールドあるよ。顔を、おふき」

「どうやってふくの、縛られているのに……」

「工夫してごらん」

彼はコールドクリームの口のひろい入れものを石の台の上にのせた。

私は犬か猫のように、そのクリームへ顔をこすりつけるより仕方なかった。

おでことか鼻の頭とか唇とか、つけやすいところから順に私は顔を右へ曲げたり、左へ曲げたりしてコールドクリームをつけた。

おかしい姿だったろう。

又しても私は彼の前で手のない動物にされてしまっているのだ。

彼は石の台の上へタオルを拡げてくれた。

私は、それに顔をこすりつけた。

「ハハハハハ」

彼は、ふき出した。

「みてごらん、自分の顔を……」

手鏡も又、石の台の上へのせてくれた。

子供の寝台ぐらゐある台なのだ。何でも、のせることが出来た。

額の紅が鼻柱にも唇にも散って、青と赤の入りまじった顔は、南洋の土人のお面のようだった。

「きれいにふくんだ。きれいにふけなければ今晚それだけ、お仕置するよ」

彼は言った。

私はお仕置を恐いとは思わなかったが、人が来たらどうしようという心配で、一生懸命タオルで顔をこすった。

タオルが汚れると、私は口でくわえてそれを裏がえし、汚れていない所でふきとった。

彼は、そんな私を面白そうに見ていた。

やっこの思いで、私はどうにか私の顔を素顔に近くすることが出来た。

ガヤガヤと人声がした。

彼は急いで私の縄をといて、ビニールの敷物にくるんで墓のすみへおいた。

私は道へ背を向けて、ハンドバックをあけ

なおもハンケチで自分の顔をこすった。

「あっ、お地藏さんがある」

「アベックの邪魔だよ、いこいこ」

「抜道なしというのが意味深長やったんや」

「ほんまに道あらへん。もとに戻らな、しゃあないわ」

そんな声がしていたが、やがて足音と一緒に遠のいていった。

「裸であの石の上へ寝かしてみたかったな」

彼が、いった。

「石の上に寝かして、体中をザックザックと切つてやる。血まみれになって死んでいくん

だ。どうだい？」

そんな連想がうかぶ石の台だった。

この台の上で生けにえを切りきざむ、大きい俎板のようにもみえる。そして、生き肝でもとり出したあと、そのままにしておく、カラスが群れて死体にたかるだろう。

もし、生きたまま、この台の上へ縛りつけられていたら、いつかカラスが突つつきにくるかもしれない。

私は二の腕がチリチリと、そうけ立ってくるように思えた。

(石の台に縛りつけられ、体中を紅でいろどられたら……)

その石の冷たさと、紅の冷たさをはっきり感じられるように私は思って、石の台をみつめていた。

○

「あまり人のこない所へ行こう。温泉は冬でも人が多いだろうし、山でもスキーの出来る所は人が多いし……」

「いい所、あるの？」

「ああ、いいか悪いか、行ってみなければわからないが……」

彼は車を西へ向けて走らせた。

大阪を素通りして、さらに西へ向かった。

姫路も、岡山もすぎた。

倉敷へくると日も暮れてきた。

「もう少し行ってみよう」

金光から彼は車を山へ向けた。

「たしか、この上にホテルがあるはずだ」

道は曲りくねって上っていった。

天文台のある山に、ホテルが一軒だけ建っていた。

部屋へ通されても急にはショールを肩からはずせない程、寒い。

「四度、違います」

と、女中が言った。

小さな電気ストーブをつけて、電気ごたつへ入った。それでも寒かった。

しかし部屋の外は夜景がすばらしかった。

「夏、いいんでしょうね」

私は言った。

はるか海の方へ向かって点々と光が、またたいていた。

風呂は部屋になかった。

別々に風呂へ入り、夕食の膳に向かうと、直ぐに彼は言った。

「さあ、裸にしよう」

まるで、それを待ちこがれていたような、口調だった。

「寒いわ」

私は辟易した。ショールをはずせないほどの寒さは、いくら湯上りでも、部屋の中は冷え冷えとしていた。

「贅沢いうんじゃない、脱がしてやる。じつと立っているんだよ」

彼は言う、どこから先にとくのかと、見廻すように私の姿をみた。

「帯からとかなければ……」

私は言った。

「わかってるよ。さあ、これでキミはボクに三つ、借りが出来たよ。三つの罰を与える」

「三つ……」

「そうさ。清水で一つ。今、寒いといって、一つ。帯からとくんだなんて指図したろう。

それで一つ。合計、三つ……」

「そんな……」

「四つ……」

彼は冷たかった。

帯どめをとく、帯あげをとく、おたいこの芯の紐をとくと、始めて帯の結び目になる。

「洋服より面倒臭いが、たのしみだね」

彼は言った。

私は、お人形のように、じっとしていた。伊達巻きをとり紐をとく、腰紐をといても

まだ長襦袢がある。

「よし、この紐をみんなまきつけてやるよ」

彼は言いながら私を脱がしていった。

「パンティも……おながが冷えるわ」

「じゃあ、パンティだけ許してやる。そのかわり、顔までぐるぐる巻きにしてやる」

彼は私の裸の腕をねじあげた。

「痛いわ」

「五つ……」

私は、もうだまるより仕方ない。

手首は帯揚げで結ばれた。薄い絹の帯揚げは手首にしっかりと、からみついた。

胸から腰紐がまわされた。

首へは、もう一本の紐がかけられた。

長襦袢の紐で両方の腕がくびれる程に、しっかりと締められた。

伊達巻きは猿ぐつわにするのに巾が広くて恰度よかったが、長すぎる紐を彼は鼻の上にも額にも巻きつけた。

まだ、帯どめがあった。

彼は、その組紐の帯どめで私の髪をしっかりと結び、手の紐と一つに結んだ。

私は顔を仰向けにして、上半身動けなくなってしまう。

「さあ、こっちへくるんだ」

彼は私を引き立てて、テラスのようになっている部屋の外へ坐らせた。

寒かった。

私の腕は鳥肌立った。

「部屋の中に入れて……」

私は哀願したが、彼は冷たく

「六つ……」

と数えるだけだった。

そして、スーツケースから縄をとり出して

くると、私の膝へぐるぐると巻きつけた。

私は冷たいテラスの床へ正座させられて動けなくなった。

「さあ、罰を一つずつ、与えてやろう。はじめに、これだ」

彼はソロバンを出してくると、私の体を抱いて、浮かした下へさしこんだ。

「ううっ……」

私は呻いた。

胫の下でソロバンの玉がコリコリと肌にくい入った。私は、ここもち胫を浮かすようにして、こらえた。

体をうしろへそらして、膝頭をあげれば、

ソロバンはそんなに痛くなかった。

「インチキをやってるな」

彼は、すぐそれに気付いた。

彼は私の首へ縄をかけて、その縄を膝の下をくぐらせて引いた。

私は、おじぎをしているように前へかがまされた。首と膝頭との間に空間はあったが、私はもう体を浮かすことが出来なかった。体の重みが、ともにソロバンにかかった。

「うう……」

私は、その痛さをこらえた。

彼はローソクを出してきた。

「二つ目の罰だ」

彼は細い板を、膝をくくった縄の間へおしこんだ。板には釘が出ていた。その釘へローソクを立てた。

「三つ目の罰にもう一本、立てるよ」

彼は右と左と腿の上へ二本のローソクを立てた。

「肌にじかに立てると、うまく立たないんだよ。この方が確実だ」

彼は板の釘にローソクを通した。

折りまげた顔の鼻先にローソクがともされた。

「寒くなくなったろう」

彼は二本のローソクに火をともしながら言った。

ソロバンの痛さが、寒さよりもこらえにく

いとは言っても、寒さは寒さで、裸の背や腕の色をかえていた。

そして、ともされた灯は鼻さきだけが熱かった。

亀の子のように首をあげると、アゴが熱かった。

「四つ目の罰は、しばらくそうして、じっとしていることだ」

彼はいうと、間の障子をしめて部屋の中へ入った。

私は横目で、それを見ていた。

彼は部屋へ入ると、障子の棧をあげ、硝子戸ごしにテラスを見ながら炬燵へ入った。

「いいながめだよ」

彼は悠然と食卓の箸をとった。

雪見酒というのはあるけれど、こういうのは何というのだろう。

女を裸にしてしばって、火の気のない冷たい床へ正座させ、ソロバンとローソクで責めている姿を見ながら盃を手にしているのだ。

ソロバンの痛みは益々加わり、ローソクの火が鼻さきをこがしても、体の寒さはブルブルと齒の根をあわさなくしている。

「かんにんして……許して……」

訴えたくても、口は猿ぐつわでおおわれて

いるのだ。ただ、じっとしているより仕方ない。

臘がポタツと膝におちた。

思ったより熱くはなかった。それより火先の方が熱い。

ポタツポタツと蠟が落ちる。

足が、しびれてきた。

「もうダメ……もうダメ……」

私は、おなかをふるわせた。

やっと彼が立ってきた。

「どうだ、おとなしいね。やっぱり声がきこえないと淋しいよ」

彼は猿ぐつわを、はずしてくれた。

「もうダメ……かんにんして……」

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

私は訴えた。

彼は足の裏を、自分の足の指でスーッと、こすった。

「あっ！」

私は足を動かしようもなかった。

「五つ……」

彼は数える。

そして、更にもう片方の足の裏を、くすぐった。

「あっ！」

「六つ……」

彼は平然という。

私が動く、ローソクの火は乳首へとどきそうになる。

「乳首をやいてやろうか」

彼はローソクを手にもつと、わざと乳首へ近付けた。

「いや……いや……」

私の大切な所なのだ。

乳首は厭だった。

「七つ……」

彼は数えながら、丸めている背中をローソクの焰の先でなでた。

「熱う……」

私は身をくねらせた。

くねらせても動きようもない。

足の下ソロバンが、かえって痛さを増すだけだった。

「おまけだよ」

彼は私の裸の体の方々を、ローソクの火でなでるようにした。

「熱う……」

私は寒いどころではなかった。

もだえればもだえるほど足も痛い。

「熱う……痛……痛い……」

胸を大きく上下させると、腿の上の一本のローソクが肌をこがす。

私は、右に左に身をよじった。

おなかの皮も、わきの皮も、変になりそうだった。

「かんにんして……許して……」

私が泣き声をあげるのを、彼はたのしそうに見ながら、ローソクを近付けた。はなしたりした。

いつの間にか、私の目には自然と涙が溢れきた。

「もうダメ……かんにん……」

いいながら、窓の外の灯がうるんでいるのを、苦しさの中で、とらえていた。

期待と随想

妊娠中のプレイ

羽 鳥 水 江



昨年九月号で「妊婦腹を晒したい私」と名乗りをあげられて、大いに期待を持たせられた佐野みさ子さんの妊婦プレイは、「あるM的妊婦の告白」(十一月号)、「M奴隷みさ子の臨月腹プレイ」(新年号)と、わずか二回だけのあっけない登場で終わってしまい、十二月号に「おねがい」を書いた私などにとつて、まことに物足りない感じがしました。写真の方も発表されたのは両方で六枚。しかもその一つは何でもない着衣での車中スナップでしたし、分譲写真も一切なし、ということのようです。人妻であり、夫以外の男性によるプレイという制約の下では致し方ないことだったのかも知れませんが、

枚のプレイ写真があり、その一枚が大きなお腹をした写真で、「妊娠腹のものは、八カ月頃のもので」とあります。原稿発送の時点ですでに一カ月前に分娩されてしまっているようですから、たまたままぎれ込んだハプニング写真というわけでしょうが、見逃せないものでした。しかし夫婦プレイなのですからあり得ても不思議でない現象だと思えます。(事実、以前にも何回かあったことです)一方、また、読者通信欄に東京・余田曉子さんの二回目の投稿で、「初めてなのでお手やわらかに、それに今の私は妊娠六カ月の身重ですので無理は出来ません」といいながら「縛って欲しい」と言われるのも、その勇氣に感服しました。

誰かその願いを聞き届けてあげて下さる方があって、堂々たるプレイ・フォトを見せていただけたらと思います。また、たとえプレイなさらずとも、妊婦写真だけなら、セルフ・タイマーでご自分ででも写せると思いますので、自分で撮って、寄稿していただきたいものです。それだけでも相当スリリングな行為だと思うのですが、どうでしょうか。二月号同じく奇クサロンで、阪東太郎氏の「初めてのクリップ・プレイ」がのっておりませんが、この中、写真とは関係なく、「現在妻は妊娠中ですので今後は随時、妊娠フォトを発表出来ると思います」という文句に気がつきました。毎月たくさんの夫婦プレイ・フォトが公表される以上、当然妊娠中もプレイが継続されているとすれば、いくらでもあり得ることでしょう。とくに、この阪東太郎氏

については、昨年七月号（サロン）「妻をM性にしたい」という短文がのって以来、九月号、十月号、十二月号といずれも写真付きで奥さまの飼育—馴致—開花へと、慎重にエスカレートされ、今もとも油がのって来ている様子が、添付されたフォトから推察されるだけに、非常に期待が持てる場所です。七月号で、「奇クを知ったのは十年も前ですが女を縛ったのは、これが始めてです」とただ一枚の写真を寄せられてからの半年余りの間に、九月号（四枚）、十月号（六枚）、十二月号（三枚）の写真に見られる長足の進歩ぶりに目を見張る思いです。本文の説明も適切で、このよろこびが奥さまの妊娠となり、妊娠中のプレイへと発展して行く様子が手にとるように分かります。ご健闘を祈らないでは、いられません。

ところでさらに私が惹かれる人に福井太郎氏がおられます。昨年十二月号サロンの「新婚縛り行脚」——「私達は今春結婚したばかりで、式を挙げてまだ半年にもなりません。妻の緊縛写真は、すでに数百枚にもなっています。まいりました」というすごい書き出しで、五枚の写真とその解説があり、さらに二月号の、「縄に酔う」（写真四枚）を読むと、「妻とのプレイは結婚する以前から、行なっており……」とありますから、なるほどと合点が行くのですが、とにかく若くて張り切っておら

れること、新婚だけに妊娠の可能性が非常に高いこと、など注目値するところです。今後が楽しみです。

要するに、「夫婦プレイは互いに楽しみながらでない」と意味がないので急激なエスカレートは控え、性に合ったプレイで、よい写真を撮るべきだと思った次第」（阪東太郎氏・二月号）と言われる通りだと思います。そして同氏の「今後は随時、妊娠フォトを発表出来ると思います」という言葉に、妊婦ファンとして期待するところ大なのです。

なお、私も十二月号に書きましたが、新年号で（サロン）朝野祐氏が、ストロボ、フラッシュによるベタ光の写真を排斥され、またバックを黒に統一することを提唱しておられる点は、全く同感です。

以上、主として二月号の感想という形になりましたが、そうだとすれば、辻村隆さんのSMカメラハント「凄絶！ 片足逆さ吊り」にふれておかないわけには行きません。対象はマゾヒスチック・アニマル、谷山久美子さんで、「空前絶後の高圧浣腸責め」が出て来るからです。私は欲張って言うのかも知れませんが、折角本職のドクター先生も一緒だったのなら、二リットルと言わず、三リットル、またはそれ以上の高峰に挑んでいただきたかったものと思います。縛りとか吊りを主

体とするのではなく、どれだけ多量に注入することが出来るかを実験する目的のために、久美子さんは絶好のモルモットではなかったかと思うのです。その点に関して、私自身の体験から申し上げると次の通りです。

一、液体は、もっとも刺激の少ない単なる温湯。体温またはそれよりほんの少し高い温度が最適だと思う。

二、一度ではなく、くり返して、最初五〇〇CC位。一たんすっかり出して次は一リットル程度。注入、排出をくり返して、腸をすっかり洗いつくしてから、最後に最高を試みてはしかった。

三、最後に最高に挑戦する前に、一度完全に水分を吸収させてしまい、二、三時間放置して、放尿も済ませ、最大限容量を受け入れうる状態にする準備もほしい。

辻村さんたちのプレイでは、責めと吊りにむしろ重点があったようですし、右の第三の条件を満たすための時間的余裕がなかったのかも知れません。しかし、第三の条件をつくっておくことを、事前に、マゾヒスチック・アニマルに命令しておいてもよかったのではないのでしょうか。

いろいろ書きたいことはありますが、今日はこれでやめます。ちなみに、高圧浣腸実験で右の第三の点として述べたこと、これを私はへ水切り（をする）とよんでいます。

S Mカメラ・ハント………続・薊 魔子の巻………

魔子の甘く泣く夜

辻 村 隆

同好者から届いた数十枚の年賀状の中に、一枚風変わりなのが眼についた。差出人は余り交遊のない、愛知県碧南市のC氏からである。御多聞に洩れず「亥」をあしらった、紋切型の賀状であるが、印刷された文面の片隅にペン字で、三行ばかり次のように書き足してある。

（昨年十一月、遂に魔子嬢と縁なき衆生になりました。詳しくは彼女からお聞き下さい。マンションが変わってTELは……番です。積年の御協力を感謝します）

この氏の年賀状が、永らく念頭から忘却し

ていた魔子の記憶を思わず蘇らせたのであった。

カメラ・ハントで「魔子の呻く夜」と題して、彼女を姐上にのせたのは、昭和四十三年の八月号で、おぼろげの記憶を辿ると確かその年の五、六月頃プレイしている筈である。あの時から、既に二年半以上の歳月が流れていた。

山本一章を手始めに、賀山芳男、芳野眉美とも、SMプレイした彼女が、その他の男性のK・Y・I・K・T・Uの諸氏を含めて、いつも永続きしないのは、その奔放我儘な性

格もさることながら、女豹の如き貪婪さで、相手をとことんまでシャブリ尽さずにはおかぬ驕慢な執念が、やがて、彼等を辟易させ、遁走させる原因のようであった。それは魔子のSの女王として君臨しようとする一つのゼスチュアであったとしても、虚構の想念と現実の相剋の板挟みとなって、M男性はたまらずマイってしまうのである。

Mの男共に随喜の涙を流させる、魔子の堂に入ったS女王の愛技に、高嶺の花を見出した欲びで、彼女の奴隷として奉仕する覚悟を一旦は誓ったものの、それをいいことに、物

心両面に気促一杯に振舞われ、ジャンジャン湯水のように浪費されては、如何にMの権化となっても、自己の犠牲だけでは済まなくなってきた、果ては到底ついてゆけず、尻尾を巻いて引退るより仕方なかったのである。

山本一章、賀山芳男の二人は、根がS性だから、魔子と火花を散らして、巧みに操縦して、さっと逃げたが、それ以外の男性は殆どM性だっただけに、K・Y氏との一年間を除いて、一様に短時日でカタストロフが訪れていた。

魔子は聡明である。奇クを読み、他の風俗誌にも眼を通していたが、私という人間からは、甘い汁の吸えぬことを逸早くさとして、専ら私をM男性の娯楽係に利用していた。だから、私との数度のプレイは、女豹の牙を隠して、爽やかに振舞い、時に応じて、SにもMにも転身して、一応は私の渴仰をみたしてくれていた。

愛知のC氏は、T・U氏と、Mの同好相通ずる仲で、彼がもう手に負えなくなつて、C氏を紹介したといった方が正しい。T・U氏が、拙宅を訪問した時、一度だけ同行して来られたが、所詮はSとMとの感覚の相違で、相通ずるものを持ちながらも、私もC氏を余

り深く知るには到らなかったのである。

仄間で、魔子とC氏が、名古屋市内のホテルで、SとMのプレイに耽溺していることを知っていたが、魔子が又ぞろ、新しい獲物に狙いをつけて、Sのテクニクを発散させているのだらうと、遠い他人事のような気持でさして意に解することもなく、ハントに次々と憂身をやつす私にとっては、最早過去の女として忘れるともなく、記憶から遠ざかっていたのであった。

C氏の年賀状によって、そこはかたなき懐旧の念が脳裡をみだし始めたのは、正月のなごやいだトソ気分が、ヒタヒタと追憶の旨酒となつて、私の心を酔わせ始めたからでもあらうか――。

嫁いだ長女と二女が、それぞれの婿や子供を連れて戻り、私の兄弟やいとこも混つて、正月三が日は二卓の麻雀に夜も昼もなく、縁者は次第に去つても、麻雀は五日の夜まで残った連中で続き、家内も寝るに寝られぬ、くたくたの数日が続いた。

魔子に電話する機会を得たのは、八日の朝である。午前十時を過ぎているのに、未だ寝ているらしく、マンションの管理人が呼びにいつでも、仲々電話口に出てこない。待つこ

と五分近く、私は少タイライラしてくる。いっそ切つてしまおうかと思う心の反面、ここまで待った電話料も惜しく、複雑な気持で辛抱して受話器を耳に当てている。

「もし、もし：××ですけど」

眠い重たげな魔子の声が、彼女の苗字を告げた。先月号でもいった通り、薊（あざみ）魔子は、彼女の自称であつて、本名は案外平凡である。でもマコという呼び名は、プレイ仲間の男性間ではそれで通している。私もズバリいえばいいものを、待たされた腹いせから、チョット焦らしてみたい。

「私だよ、分かる？」

「……………」

声がなく、一寸考え込んでる風である。

「誰……………」

「分からないかなあ、この声」

「豚野郎ね」

ひそめた声がククツと笑う。誰のことだ。

豚野郎っていうのは。

「当たりました、豚野郎ですよ。マコちゃん

おめでとう」

「……………」

又、声がない。しきりに声で暗中模索しているらしい。

「違うで」う。彼はマコなんて呼びやしない、いつも女王様よ。本当にダレなの？」

「ツ・ジ・ム・ラ」

「ツジムラ？ ああ、センセエやないの。いきなり朝早くから掛かって来たので、誰かと思っただわ。急に又、どんな風向きなの」

「碧南氏のC氏からの年賀状に、君と別れて書いてあったのね。どうなってるのかと思って……。精しいことはマコにきいてくれって」

「なあんだ、それで掛けてきたの。彼はもう全然ダメ。男性喪失者よ。うんとサービスしてやるのに、すぐくケチなんだから」

「君のことだ、暴君の女王振りを發揮して、絞れるだけ絞ったのだろう」

「スレープ志望の相手に当然でしょう。でも一寸やり過ぎたのかなあ」

一向に恬然たるものである。

「それで今のお相手は？」

「大阪に、も一人いたのよ。それも年末でストップ。やりくりに苦しいらしいのね。唯今失業中よ。センセエ、一度会ってえ」

「又、探させるつもりかい。もうその手にはのらないよ」

「いろいろと、話したいことあるの。それに」

懐かしいわ」

「プレイで苛めてはやつても、ギューギュー苛められる方は苦手だからね」

「ウソ、いつかは飲んでたくせに——。でもいいわ、センセエのお氣に召すままになるわよ」

「いつがいい？」

「いつでも。退屈で死にそうよ。今夜でも、明日でも」

「急だな、まあいいや。プレイは氣の変わらぬうちだ。じゃあ、明日の夜とするか」

「どこで？」

「南座前のレストラン、菊水の二階。思い出の場所だからね。午後六時にゆくよ」

「いいわ、きつとよ。ナデナデしてね」

「ああ、そしてイタイタイしてやるよ」

「経験豊富よ。じゃあ、バイバイ」

受話器を置いて、私の心はバラ色にふくらむ。SMカメラ・ハント回顧を書く氣で、追憶の甘き花びらの群れを捗獵した時、魔子はアパートを移っていて、消息不明であった。同好の仲間も、誰もその移転先を知らなかった。知っていても教えようとはしなかったのかもしれないが——。

二年数カ月振りに聞く魔子の声は、やはり

甘く、懐かしかった。

奔放の女豹であれ、驕慢なジャジャ馬であっても、魔子は私に何となく、一目おいてくれる。それは、SMの道の指南番という関係だけではなく、利害得失を又キにしたマコの創生期の繋がりが、いつ迄も尾を曳いているからのものであった。悪くいえば、クサレ縁。しかし、受話器から流れてくるマコの弾んだ甘い響きの声には、懐かしさ一杯の、切実さが溢れていた。

× × ×

午後六時、レストラン菊水の二階へ駆け上る。道路を隔てた向かい側が、市営の疎水駐車場で、折からの祇園のえびすの宵宮で、土曜日ときているから、満車なのを、三十分近く並んで待って、やっと車を納めてきたところであった。車の停滞を見越して、かなり早めに出ても、いい加減である。

颯爽と魔子が登場したのは、それから数分も経たぬ間であった。いつもいう通り、私は女性のファッションには弱い。次々とめまぐるしく変化してゆく流行の横文字の呼称は、ファッション界が、わざと分かりにくい、難解な言葉で表現したものだけに、尚更理解しにくかった。それでも、ミニやマキシム程度

なら私にも分かる。殆ど踵すれすれまでに長い、茄子紺のマキシムのオーバーコートに身を包んで、魔子は裾を翻して、テーブルに坐る。さぞかし生地代が嵩むだろうと、余計なことを考えつつ、私の視線は、魔子の黒耀石のような眸と、空間で久濶を舒していた。女の年令はきかぬものと知り乍らも、二年半有余の間隙を感じさせぬ、生き生きとした若々しさで、美しさも抜群。ボーイの眼を彼女に釘づけにさせる程の魅力を、あたりに撒き散らしていた。

間近くみる魔子の、白魚の指は、しなやかにくねり、ヘロタイプをかけた滑面の印画紙さながらに、顔面は輝いて、すべやかであった。この美女とデートする私のスタイルが、さしたる洒落気もないのが気恥かしくなるような雰囲気醸し出していた。

魔子は蘭をとり出すと、宝石を繚めた小型のライターで、テレビコマーシャルにでもなるポーズで火をつけ、紅唇から紫煙を細く吐いた。洗練されたしぐさに、私はつい気をのまれてしまう。



「ここで食事する？」
「美味しいところ、知ってるの。そこへ代わらない？」

「じゃあ、コーヒーでも」
「ええ」

恭々しく近づくボーイにコーヒーを頼んで、さて何から切り出せばよいかと、いつになく私は出鼻を挫かれてしまう。辻村隆よ、しっかりセエといいたいところである、つまるところ魔子の、眼を瞪るばかりの美貌と、端麗なファッションブックから抜け出したような容姿に圧倒されていたのかも知れない。

「元氣？」

「おみかけ通りよ」

「仕事やってるの、何か？」

「表面はデザイナーってことになってるんだけど、今の処——。何一つデザインできないデザイナー」

「それでゼイタクに暮しているんだから、見上げたものだよ」

「皮肉？ これもセンセエのお蔭といえ、ちょっとオーバーかな」

「私なんか、マコに貢ぐ甲斐性はサラサラない」

「フフ、貢いで貰おうなんて、考えてもないわ。センセエはセンセエ、アドバイスだけで結構なんよ」

「そのアドバイスも今は、教えてもらう方になったのじゃないかな。経験豊富なのだからね」

「センセエ、大槻さんって人、御存知？」

マコはフト話題を変えて訊ねて来た。

「オーツキ？ いや知らないね。私の知っている人の中には居ないね」

「ところが先方はセンセエをよく知ってるっていうのよ」

「何処の人だい？」

「名古屋の人」

「全然知らんよ、そんな人」

「へんね。例の豚野郎がつれて来たのよ」

「何だい、その豚野郎って」

「本名知らないの。碧南のCさんの仲間よ。」

その人、自分のことを豚野郎って呼んでくれているの。センセエに声が似ているから、電話でも間違ったの」

「フーン、何だか面白そうだね」

「Cさんのプレイの時の呼名はブラブラ狸。」

狸の何とか八畳敷というでしよ。そのものは貧弱なくせに袋ばかりがバカでかいのよ。袋ばかり大きくてもダメなものはダメなのね。

豚野郎は身長は一六〇センチぐらいのチンチクリンなのに、すごく太っていて、おなかかなんか、妊娠七カ月以上に出版っているの。それで色が白いから、裸になると、まるでブタね。豚野郎とブラブラ狸のコンビを、私が女王様になって、散々苛めてやるの。人間なんて思えないから、動物的に扱ってやったら、ブウブウ、ボンボンと泣いて飲むの。タヌキは何て啼くのかしらって考えたりして」

魔子は皓齒を光らせて笑った。M男性が立ち聞きしたら、ゾクゾクするような言葉を、恬淡と紅唇から吐き出すのである。

「じゃあC氏、いや、そのブラブラ狸は、とうとう尻尾を巻いて逃げ出したけど、豚野郎とは今の処、縁があるってわけ？」

「お正月の休みに京都へ出掛けるから、一晩中、苛めてくれなんていったもんね。幾らかは心待ちしていたの。その豚さんが、大槻という人を紹介したのよ。六十七、八才かな相当お爺ちゃんだけど、センセエよく知っているっていうのよ。いろいろな女の人の名を挙げていたわ。カワジだとか、ムラカミだとか……そんな人、知ってるの」

「ハハ、分かった。ハント女性だよ。あるいは私のカメラ・ハントの隠れたファンかも知れないね。だから、先方は私の名を知っている、私は知らない道理だ」

「なーんだ、そんなことだったの。でも、センセエのハントの愛読者なら、Sかも知れないわ」

「Sの人間は、又Mだってあり得るわけだ」

「センセエもね」

魔子はフツと、過去のプレイの実績を思い出してか、妖しく微かに笑った。そうだ、あのプレイのあとのひととき、魔子はSになり私に熱い神酒を唇に注ぎ込んだ筈であった。馬乗りになって、ぐいぐい責めつけて来たマ

コの、潑刺とした痴態が、めまぐるしく私の脳裡を、よぎり去った。それは確かに、私にとっても、陶酔の甘いたぐりに浸っていた、ひとときに違いなかった。積極的に挑みかけるマコに、私はありありと自己のM性を知覚したのを思い出す。

「時間は、いつまでいいの？」

「朝まででも」

「このレストランの向かいの疎水駐車場に車を預けてある」

「朝まで預けておきなさいよ。混雑しているし、のめば乗せていただくの御免よ」

「勿論、私だって乗らない」

「そろそろ出ましょうか、御案内するわ」

マコは、さっと伝票を握って立ち上ると、先に立って降りていった。私との一夜の逢瀬が、マコにとっては、モヤモヤから脱する仮そめの手段のように思えるのであった。Mの男達を相手にしない、正月以来の無聊を、私という、気の許せる対象を相手に、まぎらわそうとしていたのかも知れない。

渚ゆう子唄う「京都慕情」が、どこからともなく流れていた。私を歩道に待たせると、魔子は車道に身を乗り出して流れるタクシーに手を挙げる。忽ち一台が停まって近づく。

凄い美人の女には運ちゃんも弱い。私を手招いて素早く乗り込む。ぶざまに提げた黒革の袋が、いかにも場違いに荷厄介に思えた。

それがマコの身についたさがなのか、いつしか無意識のうちに、彼女に振り廻されている自分を発見し、易々として彼女の好む方向に随行する私自身、暗甲斐ないと思う反面、美女とデートする中年男の、甘酸っぱい優越感が、ヒタヒタと身内に泌み渡って行くのであった。

× × ×

左京区上高野、白川通りに面したドライブインレストラン佳北は、二階建てのゆったりとした豪華な雰囲気のお店である。ここの味噌ステーキがマコのお名指しである。車を運転しないから、安心してワインものめる。

ゴージャスなテーブルで、美女と対しながら食事していると、何となく心が豊かに膨れ上ってくる。この誇り高き女は、すべての面でデラックスを好んだ。みみっちい食堂で規格に嵌まった洋風の日本食をたべて、安普請のアベックホテルで、一時の情熱に任せてプレイの切り売りをするなど、彼女の矜持が許さなかったに違いない。往々にして、プレイの対象の男性の側に於いて、SMのプ



レイに逸り、その事のみを安直に走ろうとするから、ムードとゴージャスを前提とするマコとの間に、感情的なギャップがあったのかも知れない。バーバリストの私にしても、ムードづくりの間は、努めて、もの分かりのよい、ダンディなロマンスグレーの紳士でいなければならなかった。相手の雰囲気次第で、

マコのプレイへの情熱は時には激しく燃え、時にはひえびえと白けるのであった。

それもこれも、すべては、プレイを前提の忍耐と我慢である。女子大卒の誇り高き、じやじゃ馬娘に、私の神経は、かなり草臥れを感じていた。そして食事の間に流れるフランス小咄的な、軽妙なSMの会話——。マコ自身、その会話に次第に酔って、いつしかプレイせざるを得ないような、微妙な感情に没入してゆくのであった。

或る人は私をサジストと呼ぶ。又、或る人は私を分析して、ロマンチストと謂う。さはあれ、今宵の場合、確かに今、私は若き目のシャルルボワイエを気取り、ジャンギャバンめいたスタイルを真似ようとしていた。

「近頃、奇ク読んでるの？」

「ウウン、全然……。だってSとMの繰り返しに過ぎないじゃないの。未経験者の精神的オナニーの産物が多いわ。経験なら私、誰にも負けやしない。そうじゃない？」

「経験……。そんな歌があったね。マコの経験をきいてみたいよ」

「ここで？」

「いえない？」

「淑女がハシタないでしょう。ぐっとセクシ

カルだから」

「それは、あとのおタノシミにしよう」

「あたしには今、ひとつの夢があるの。笑わない？」

「うん、コトと次第ではね」

「近頃、SMバーなんてものがポツポツ現われたでしょう。家畜人やプーの店なんてズバリのものさえ、ある時代ですものね。でも経営者自身、SMの真髓が分からず、時代に阿諛便乗しているだけでしょう。だからマヤカシのボロがすぐ出て長続きしないと思うの。」

私に一千万円ぐらい投資するスポンサーがいたら、M人間が随喜の涙を流すような、ホンモノのSクラブをつくってみたいと、思うのよ。私、梶山季之の小説『男を飼う』のSの女王、冴子のようなマダムになって、クラブの女性には、十七才ぐらいから二十一才ぐらいまでの、ピチピチしたS女性ばかり揃えて世の中の数多きM人士を欲ばせてやりたいと思うの。このアイデアどう？」

「グッドアイデアだ。確かに面白い。会員組織にして、純粹にやれば確かに当たる可能性はあるね。問題はその出資者だ」

「それをセンセエにお願いしたいのよう」
ウンと唸って私はノドまで出掛かった言葉

の塊をのみ込んだ。ウマウマとマコの尻に引っ掛かりそうになった。何しろ話が大きいの。迂かつに返事すると、言質をとられそうである。この話がフィクションの、SM小説なら一千万円ぐらいポンと投出す物語りはいくらでもある。現に今、マコが一例を挙げた梶山季之の『男を飼う』のストーリーにしても、美男俳優、会社々長、稀有の美少年等をうまくハントして飼育し、果てはM男性を海外に輸出して、大いに日本M男児の国威を掲揚するところまで話は発展するが、梶山氏の小説にしる、かなり奇クの貢献に負うところが多いのである。Sの女王マコは、『男を飼う』の女主人公、冴子に大いに憧れて、それを実現したい気持も分かるのであるが……。

さて、これが現実となると、どうであろうか——。このマコの為に、ポンと大金を投資するような、奇篤なM男性が果たしているものであるかどうか。

魔子は、自分の過去の実績を過大評価し、過信している、きらいがあった。そうそう現実の世の中は甘くはないのだ。と、ここでズバリ言ってしまうえば実も蓋もない。ここでマコの夢を無惨に打ち砕くことは、これからのプレイへの熱意にも大いに影響もしてこよう

というものである。

「どう、ダメかしら」

「ダメとは言いい切れない。しかし、おいそれとはいかないことも確かだよ」

「センセエなら、沢山の同好者の方、御存知でしょう。だから……」

「生憎と、Mの男性には縁のうすい方だからね。しかし、すべては当たって砕けるだよ。万が一、いや世間は広いから、千が一ということもある。マコの意見を、ハントに書いてみよう」

「お願い、そうして……」

マコの頬はパツと輝く。心なしデザートのフルーツを摘む指先が、激しい期待に震えていた。

この刹那、私は薊魔子のカメラ・ハントの続篇を書く決意を固めたのである。今宵のプレイは、正直いって、私の遊びの一つぐらいのつもりであった。過去の女性を、再び蒸し返して登場させなくても、既に書くに足るハントした女性との構想はあったのである。

「書くよ、この事をマコの希望として——。しかし、私のカメラ・ハントの構成上、そうになると、緊縛フォートの数枚も、のせなければならぬ。勿論、異存はないだろうね」

ここにおいて、私の秘かな願望が、案外スラスラと口をついて出た。Sの女王を以て任じるマコの泣きどころである。忽ち答は刎ね返って、

「いいわよ、ギブ・アンド・テイクだわ。センセエのお好きなようにしてえ」

「泣かせるねえ」

「その代り、読んでみて、気に入らないとなると、あとが怖いわよ」

「どうするっていうの？」

「フフ、どうもしないわ。一晩ぐらいマコ独特のお仕置をするだけ」

「敬遠して来ないよ」

「センセエの家まで押しかけるから」

凄い鼻息で、気の乗りようである。マコの仕置を受けないためにも、改めて声を大にして付け加えておこう。

（全国のM男性の諸氏よ！ Sの女王薊魔子のSクラブ設立のために、奇ク編集部まで御協力の御連絡を乞うや切——）とね。

× × ×

洛北の山々が黒くつらなる道をタクシーは走る。マコは或る地点で車を停止させると、当然のように、ささと車を下りる。メーター代を払って私が降りると、もう彼女は数歩



先を、ゆっくりとヒップを振りながら歩いていった。表面は、さかさくらげとは見えない、木立に包まれたホテルの植込みに、ツト消える。あわててあとを追って、コの字形に曲折した眼隠しのある玄関に立つと、自動扉が音もなく開く。低いルックスの紫の灯の下に立って案内を乞う。出てきた若い案内の娘がチラッとマコに眼をやって、視線を交して会釈した。どうやら、初めてではないらしい。

部屋に入るまで、マコも私も無言。不必要な会話はこの場合、案内人の耳をときすますだけであつたからだ。

バスのカランをひねって案内人が出てゆくと、マコは踵まで引きずっている、マキシムのオーバーを、ささと脱ぎ捨て、ささとスカートをたくしあげ、きつく締まったコルセ

ットを外し、パンティをくるくるっとぬいでガードルだけになると、ミニスカートの裾からチラチラ隠見させながら、隣室の閨へ通ずる襖を、ささと押し開き、敷かれた夜具の上へどさりと身を投げ出して、私を迎え入れるように、両手を開いて差し出した。もっ

ともらしい羞恥や、不必要な虚飾をかなぐり捨てた、単刀直入の、求愛のポーズである。背広の上衣を脱ぎハイネックセーターで、ズボンと共に野暮を嫌うマコにみせまいとズボン下と一緒に脱ぎ捨てると、私の腰を蔽うのは、越中褌一枚という何とも奇妙な恰好である。めざとく見つけて眉をしかめ、

「イヤーネエ、センセエ、どうしてそんなヘンなものをつけてるの？」

「便利で、同好者仲間にも案外多いからさ。今年の夏から始めて、夏だけのつもりが、工合がいいので、冬になってもやめられない」

「でも時代錯誤だわ」

「これがいんだ又。正月の、新和歌の浦のような火事に、いつ出会わんとも限らんから

ね。夜中にあわてて、脱いだやつが分からず下半身放り出して飛出すより、これをしててみる。チャンと腹で紐を結んであるから、いざという時、さっと前に挟んで駆け出せる。少なくとも夜の紳士の身だしなみさ」

「フフ、ヘンな理窟ね。でもどうせするならそんな晒木綿じゃなく、垂れたところにデザインするとか、それなりに工夫して近代的にすべきだわ。それじゃ徳川時代と、ちっとも変わらない」

マコの苦言も一応、もったものである。確かにこの越中禪は何世紀前のものとも、寸分違わない、晒木綿に紐をつけただけの簡略さである。淑女の面前に曝して恥かしくない禪を考案するの亦、女性ハントをもって任じる男の身だしなみであるようであった。

「やはり縛る？」

「うん、そうしたい」

「好きなねセンセエ。女を縛ることが、そんなにいいものかしら」

「マコに虐められるのを、スゴく欲ぶ男達と同じくらいにね」

「何年振りかしら。びわ湖湖畔の雄琴の温泉で、センセエに縛られて以来よ。あの時は、ひどく叩いたでしょう。その上、あんなバイ

ブレーターなんか使ってたさ」

「その代り、あとでこっぴどく苛められた」

「ウソ、飲んでたくせに」

「そうみえたかい」

「私に虐められて、飲ばない男性なんていないもの」

すごい自信である。

私は話のやりとりの間

にも縄をとり出し、カメラに装填中のモノクロフィルム、撮影済のナンバーを記憶すると抜き出し、新しいカラーフィルムに入れ換えた。あでやかな妖艶の美女を撮るのにモノクロでは物足りなかったのである。

「脱がないの？」

「素肌に、いきなり縄がかかると痛いからイヤ。縛るのなら、服の上から縛って」

「服にシワがよるよ」

「構わない。どうせ常着だから」

マコという普段着の服の襟には、細緻な刺繍が施されていた。それも女の虚荣心の一つであろう。服の上からでは、私の縄も、弾ま



ない。上体を起こして、簡単に後手に縛ると胸に一巻きして、ウエストで巻いて止める。余った縄は背後に垂らした俣である。

マコはすらりと伸びたカモシカのような脚を投げ出し、私にチラリとながし眼をくれると、さりげなくポーズをとった。それがチャンとサマになる小憎らしさである。ミニのスカートが、腿の上までまくれ上り、めくるめく豊満さが覗く。

姿勢を崩させ、転がして尚も数枚とるが、所詮はこれ以上は発展しない着衣であった。敏感なマコは、私の不満を逸早く悟ったらしい。フト甘い、誘い込むような笑顔をみせる



と、私に媚びるように、

「センセエー抱いて……。ねエ」

と唇を突き出し、軽く眼を閉じた。やや濃いめのアイシャドウが、マコの臉を上げさせている。

私は傍らに崩れてゆく。シュミーズが邪魔をして、盛り上った双丘のふくらみに、じかにはふれるすべもなく、圧するように力をこめて握りしめるだけであった。

受身のマコは到ってぎこちない。声も立てず、微かに身をくねらすだけであった。

唇をよせると、喘ぐように紅唇が開き、ぬ

めついた舌端が、私の口中にスルリと侵入してきた。お互いに、微かなワインの香を口腔に漂わせて、甘い接吻がつづく。

そっと唇を離すと、「早くいじめたいわ、センセエを。ねえっちら」

と、心の昂ぶりを口に出して、マコは再び唇を求めてきた。いつしか身についたSへの愛虐が、マコにセックスの疼きを覚えさせた時、当然の行為のように、絢爛と甦るのであるうか——。

所詮プレイはSとM、MとSの陰陽でなり立つものである。M同志、S同志の間に、プレイの成立は難しかった。私もS、マコもSとなれば、仮にこうしてマコを縛ったとて、愉悦の快楽は私の一方的なもので、マコにとっては、已むを得ず協力しているに過ぎないようであった。とすれば、今宵のプレイを、より愉しいものにする為には、私かマコの、どちらかが折れて、M性に屈するより解

決はなかった筈である。

誇り高き女、薊魔子が、M性に屈伏する筈はない。とすれば、私の方が、マコの好むと好まざるとに拘わらず、緊縛のフォートを撮るだけ撮ったあと、Mに変貌するより仕方なかった。余人は知らず、マコ自身の口から云う通り、彼女の巧みなテクニックで苛められた時、内心の苦笑を禁じながらも、それがいつしか甘美な快楽に変わる事は、私は過去、既に二度ばかり経験済みである。

その事は、半月前のクリスマススイブの夜、始めて持った、イレズミの山原清子とのSM転倒した、深夜の戯れのひとときにでも経験済みである。まるで男の愛玩物になる為に、この世に生まれて来たような、山原清子の柔らかな餅肌が、ベッタリと私の顔を押し、口腔を塞いだ時、窒息しそうな刹那の、あの激しい昂奮の極は、今もありありと私の頭脳がメモしていた。山原清子がペルシャ猫のような柔軟な鋭さなら、薊魔子は牝豹めいた精悍さを備えていた。Mの甘美を私に教えたものは、このマコであり、清子であった。

相倒錯する性に心を疼かせつつ、それでも私は、マコの体を力強く抱きしめ、右手はいつしか本能のように、ガーター吊りの間隙に

伸びていた。

「そんなに私を虐めたいの？」

ひそと囁くように耳をくすぐると、

「分かってるでしょ。でないとエキサイトしないのよ。私って……」

「マコは本ものになったんだね。私が教えた頃とは格段の相違だ」

「男のMも多種多様ってことを知ったの。私のオシッコを欲しがる人でも、いろいろよ。じかに吸う人。顔に浴びせかけて大きく口を開けて受ける人。カップにとって呑む人。漏斗にビニールパイプをつないで、口に啣えてのむ人。トイレの便器に溜めた中へ顔ごと突込む人。私はビール、彼は私のをコップに注いで、カチンと乾盃して、食事しながらおいしそうにのむ人。必ずトイレ代りになって受ける人。ビールをジャンジャンのませて薄める人……。どう、いろいろでしょう。ネクターはMの共通の心理らしく、誰もが求めるのよ。センセエはどう？」

「私も求めるかも知れない。その時は……」

「やはりね、だったら、結構Mなのね」

「マコが、そうしむけるんだろ」

「どんな味か、しってるの？」

「知ってるつもりだ」

「のみのものの多寡で、かなり違うらしいっていわね。濃い味はいくらもカラくって、ほろ苦くて、何ていうか、ニガリをとっていい塩を薄めたって感じらしいわ」

「薄い味は？」

「ビールなんかで薄めると、辛味が少ないそうよ。微かにアルコールの匂いがするって」

「精しいんだね」

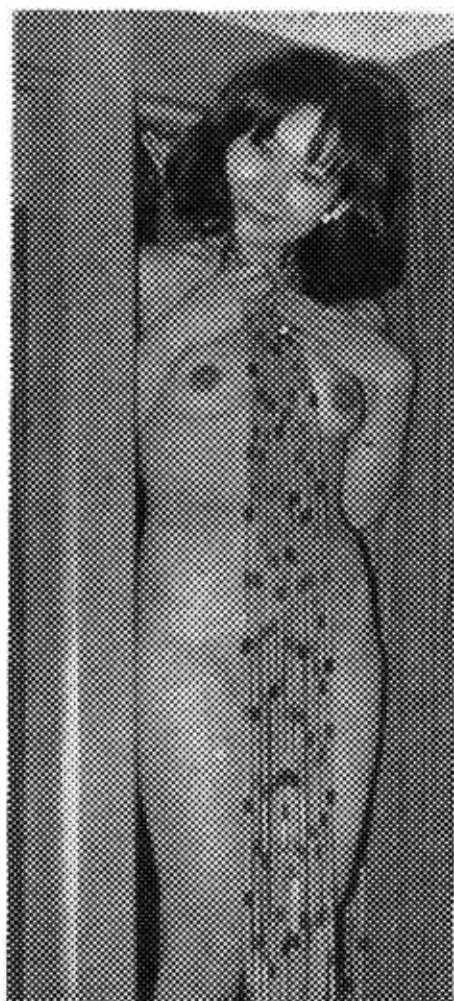
「クラブを開くとなると、それくらいは研究しなくちゃ」

マコは俄然、雄弁になり出した。縛られた不自由さも忘れたかの様に、私の胸に身を任せながら、憑かれたように喋り始める。

「Sクラブの構想、聞いてくれる？ クラブの名は、ずばり『マコ』。場所は北白河か上賀茂あたりの、静かなところがいいわ。間違っても大麻パーティや、LSDのような幻覚剤は使わないわ。蕭洒な三階建にして、一階は一般に開放して、SMの雰囲気味あわせてあげるの。二階は、会員組織のプレイルーム。三階は私個人のプライベートの愛欲の場所。投資者へのサービスは、ここでするつも



り。クラブのプレイメイトは、私が実験してSの女王たりうる人を選ぶつもり。Mの男をAクラスから五段階のFクラスぐらいまでに分けてMの性向のカルテをつくり、じわじわ責める人、きつく責める人、奴隷志願の人などを区別して、プレイメイトを適材適所に配置するの。プレイのあとの自由恋愛は原則として自由だけど、クラブを利用する人や、著しく名誉を傷つけるような行為の女性は、厳しく処分するつもり、時間は夜の十時から夜明けまで。一、二階共、Mの男共が涙を流しよだれをこぼしそうな飼育道具で飾り立て、埋めつくすつもり。プレイメイトは、乗馬服



シューズ、ヌード、華麗な黒のタイツと、いろとりどり。そして私はマダムとして君臨するの」

激しい気魄をこめてマコは憑かれたように喋る。紅唇は焰と燃え、耳朶は赤く染まり、官能に火照って、嗜虐の魔女は蠱惑的にうなされていた。息を嚔む思いで私はきく。

「だからさ、プレイメートの女性の紹介もセンセにお願ひするのよ。いい？」

怖るべき押しつけである。唯もう、タジタジとなり乍ら、この魔女に、譬えようのない駭きをおぼえるのであった。

いつしか私の右の指先が、愛虐を想像して気魄をこめて語る時、女体は自身の言葉によって昂揚し、愉悦を覚えていたのを知ったのである。

その感触が、私に嗜虐の想念をかき立たせ

た。別に一本の縄を捌くとさっと首縄にし、胸の縄に絡ませ乍ら降下すると、邪魔なミニスカートを一気に剥ぎとり、股縄にして後手につないだ。マコは夢みる眼付で、私の為すが俚になっていた。形よく整えられ、ダークとホワイトが判然と画された一角に私はありありと剃毛の痕をみた。マコの身だしなみは常に美しく刈りこむことにも気をくばっているようである。それはSの女王をもって任ずる女の、細心の配慮でもあろうか。

軽く悶え、微かに眉を顰めたが、マコは拒否しない。今しばらくは私の意に添うべく決意しているようであったが、その奥に秘められた打算に、一向に私の心は禅まなかった。

しかし、縦縄によって、彼女の肉体は、いよいよ隠蔽されてゆく一方で、上半身は縄の鎧を纏っているようであった。

「やはり脱げよ」

「ええ、脱ぐわ、解いて」

素直にうなずいて、マコは私を直視する。

女体を廻る場合、縛り方によつては、確かに縄は、邪魔になり、しばしば女体の官能を抑圧してしまうことがある。縄を沢

山使つての緊縛は、尚更そうであることを、近頃私はつくづく感じるようになった。五体の縛しめよりも、縄は、自由の奪取の方に使うべきが有意義のように思われたのは、マコの女体が、余りにも爛熟し、官能的であったせいであろうか。縄をとくと、マコは坐った筈、服をとり、スルスルとシュミーズを頭の方へたくし上げて脱ぎ捨てると、何と云ったのか、再び裸身に、澄まして服をつけたのである。

「脱がないの、それも？」

「だって、体に傷がつくもの。ね、これで我慢して……」

「仕方ないや」

不満をくすぶらせて、服の上から、ぐるぐる巻きに縛ってゆく。下半身は自由にして、わざと縄なしにしてある。その方が私にとって、如何なる場合にも都合がよかった。

ぐいと服を押し拡げて、胸のふくらみを突出させる。程よくしまった乳房はたるみもないが、心なしか乳量、灰黒く黝ずんで感じられた。二年有余の愛撫の実績であろうか。

二十枚撮りのカラーフィルムだから、モノクロのように、パチパチと矢鱈に撮りまくらない。それでも、坐らせたり、開かせたりし

て、数ポーズをカメラに納める。蔽いようもなき乱れたフォトがカメラのフィルムに焼きついている筈であった。

微かな冷たい反発をこめて、マコは私の為すが尽になっていた。

全裸ではなく、ガードルや、黒いタイツの脚線が、カラーの場合、アクセサリとなつて、むしろ全裸より生々しく、私の視野に迫ってくる。そのポーズの一つに、私はフト、スエーデンのセクソロジのマガジン「グライマックス」の、どぎつい表紙の一ポーズをタブらせていた。縄がなければ、あの表紙の美女とそっくりではなからうか。あのスエーデンのセックス誌のカラーフォトの美女も、ガードルやタイツがあり、胸をはだけて、薄ものを纏っているからこそ、見る人をして、刺激を惹起させる効果があるようであった。

マコが裸身に服を纏い、タイツをとらないのも、その演出の効果をねらつての計算であると感じると、緊縛はいつも裸身ときめてかかっている、私の単純なプレイフォトが、今更の如く、底の浅いものに、思えてくるのであった。黒革の袋から、黙って軽便バイブをとり出していると、逸早くそれに気付いて、「こんなポーズでは、いやよ。しないで」

とマコの厳しい拒否の声が走る。機先を制されて、握ったまま、

「どうして？」

と訊ねる私の困惑の態は、如何にも野暮つたい。

「どうして、そんなもの使わなければいけないの。センセエ御自身でできないの？ 何も…」

「そうでもないけど、手っ取り早いんだ」



「イヤッ、せくことないじゃないの。それに私って、自由を束縛されて人にされるより、自分の意志で快感につながりたいの。分かるでしょう、私のいうこと」

「分かったよ。よしよ……」

すっかり鼻白んで、私はスゴスゴとバイブを元に納める。マコの気力に圧されてすべてがタジタジであった。自由を奪われた女に、自由の筈の私が、どうにも手が出なかった。それは最早、S性が身についたマコの、いつしか備わった圧力であった。好きで縛られているんじゃないというマコの気魄を、ありありと肌感じて、私の嗜虐に走ろうとする心は、ともすれば挫折しそうであった。

白けた空気が、隙間風のように冷たく、よぎる。カメラ持つ手を垂れて、私は無言で凝然と立ちつくしていた。流石に語気の激しさを反省したのだろう、マコはフト弱々しい微笑を泛かべ、私を怒らせたのかと、顔色を窺うように、じっと私の眼をみつめた。

「御免ね、我儘いって。でも本当にイヤだったの。何故センセエが御自身で、私を愛撫して下さらないのか……と、そう思ってツイ。怒ったの？」

「イヤ、マコの云う通りかも知れない」

「糖尿だから自信ないの？」

「それもある」

「やはり、ずっと治らないのね」

「近視みたいなのさ。でも糖尿でもハッスルできることを、私自身で体験はした」

「じゃあ、自信を持ちなさいよ。ねえ、抱いてえ。早くう……」

全身に媚を籠めて、マコは縛られた身を、ゆする。

「いや、我慢しよう。冬の夜は長いからね。男は残念乍ら、一回しか勝負出来ない。若い

者は別だが……」

マコに、にじりより、柔らく抱きしめて熱いくちづけを交すと、私はスラスラと縄を解いていった。暖房の加減でもないのに、生暖かい湯気が部屋にこもってくる。

「アッ、大変だあ。バスの湯を出しっぱなしにしておいたんだよ」

私は慌てて、飛び上ると、バスへかけつける。湯は既にバスの扉の隙間から流れ出て、洗面所のタイルをヒタヒタとひたし、あと数分も経てば、部屋の敷居を越して、部屋中、

湯びたしになるところであった。

例え、湯が溢れても排水孔から流出する筈なのにと、程よい湯に足をひたし乍ら、湯気で濛々とするバスに入ってゆくと、もりこす湯量で洗面器が浮き上り、それが排水孔で栓をする恰好になって、流れる湯量より、溢れる方が強かったの

であった。あわてて温水両方の栓をひねり、放湯を止めて、ポリの洗面器をとりのぞくとやっとタイルの流し場が足裏に、じかに感じられるようになった。

「入っていいでしょう」

声にふり向くと、裸身を蔽いもせず、マコは私の背後に、よりそう様に立っていた。

「ああ、忘れていたよ。つい夢中になって」

「先ずバスを奨めるのは、レディに対するエチケットよ」

「そのつもりだったのに、いきなり布団に転がったりするものだから、つい……」

「入って、いわないんですもの」

「どうも逸ったらしい」

悪戯っぽい眼でニコツとすると、マコは掛かり湯をして、満々とたたえたバスに、ざぶりと軀を沈めた。ドドツと激しく湯が、マコの体量だけ溢れて流れる。

「センセエも入らない？」

「いいかい」

「今更、遠慮するなんて可笑しいわ。でも、それだけオナカ張り出していたら、一緒に入ればお湯がなくなるかも」

苦笑して、裸で戻ってくると、マコの背を抱くようにしてソロソロ身体を沈めてゆく。



懼らくバスの中の湯は半分近くに減量しているに違いない。

「したくなったらわ、のむ？」

「ここで？」

「いらないの？」

「でもないけど……」

「じゃあ、タイルに四ツ這いになって、アーンと口を開けなさい」

奔放な女王は、イニシヤチブを握るべく、放出にことよせて、命令を下していた。四ツ這いで、それを口辺に受けるより、この魅惑の女王の、眼近く仰ぎ見られる放出の状態の方に、私の興味は深く奪われていた。

云われる俚に湯槽から上り、大きい図体がかがませて、鎌首をもたげる様に、顔をあげる。そうする事が当然の様にマコは傲然と立ちほだかり、腰に両手をあてがって体をそらせると、前触れもなく生温かいシャワーを頭上からサンサンと浴びせかけたのであった。頭髮に、顔面に、潑ね返るしぶきに、私はいつしか眼を瞑り、美女の恩恵の甘露を、ハアハアいい乍ら、大きく口を開いて懸命に受け止めていたのである。

十秒足らずで、この、めくるめく行為は終わりを告げた。

「拭くの？ 拭かないの？」

激しい語気に気圧されて反射的に私の唇が近づく。マコの満足気な表情を頭上に感じ乍ら……。

× × ×

「センセエは、ヌードに興味ないの？」

「どうってこともないからね」

「どうして？」

「近頃は子供だって平気で見ているし、有名な女優や歌手だってヌードになる時代だぜ。立木義浩のヌード集にしろ、名の売れた連中がドンドン脱いでいるし、鰐淵晴

子がヒッピーの群れの中で全裸を曝しているんだよ。一億ヌード麻痺時代だからね。田舎のお婆あちゃんだって驚かなくなっているんだよ。今更面白いはずもなからう」

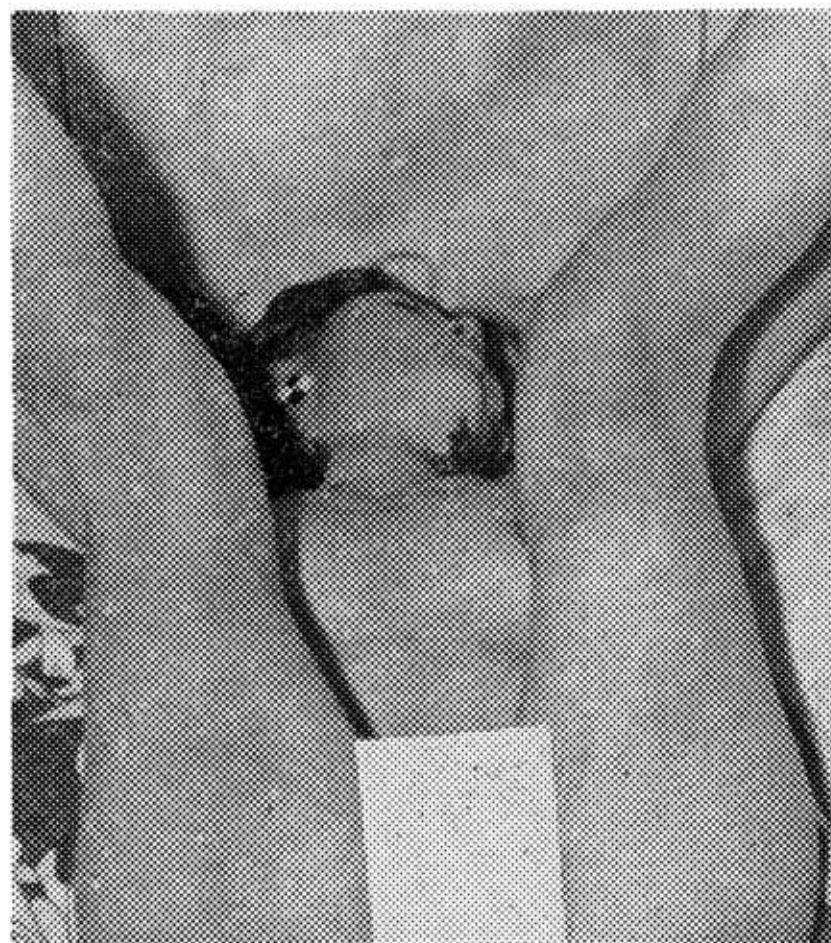
「私のヌードにも興味ない？」

「ヌードだけなら正直いってないね。でもマコが撮って欲しいというのなら別だけど」

「ああ口惜しい。自信あったんだがなあ」

「いいプロポーションを持っているけどね」

「カラーでうまく撮って欲しいの。先日テレビでみたんだけど、若い時代の自分という



ものを残しておきたいため、自分からヌードを志願するひとが多いって話よ。あのテレビをみた時、何だか私も、急に残しておきたくなったの」

「じゃあ、撮って下さいって、いえよ」

「頼むほど、うまくも撮れないくせに……」

「いったな。じゃあ撮ってやらないぞ」

「いやーん、撮ってえ」

「じゃあ、マコの希望を入れるかわり、私の希望の緊縛フォトも撮る」

「いいわよ、覚悟の上だから」



マコの黒い瞳は、妖美に輝く。カメラを無雑作に構えると、マコは自分から、しなやかなポーズをとり、艶な、ながし眼を送ってきた。

巧みに膝を立てたり、組んだりしていたが私がさもお義理のようにカメラを向けているのを逸早くみてとると、男心を悩殺させるような瞳はサッと冴えて、いきなり大胆なポーズを自分でとり出した。私にはプロカメラマンのようなセンスはない。在りの尽の姿を撮るだけである。七、八枚、撮った中で、一枚ぐらいは、彼女の氣にいったものもあるだろうかと、パチパチとポーズを変えるたび毎にカメラに納めてゆく。

自分からヌードを希望するだけあって、マコのポーズの巧みさは抜群であった。それはヌードのポーズの類型を破るものでなかったが、少なくとも過去の緊縛モデルには見当たらずに私には黙ってはい

るが、彼女の過去に、モデルの経験があったのではなからうかという疑いすら、持たれてくるのであった。

大胆に展開されるポーズに、私は又してもデンマークのセクソロジの雑誌の表紙を思い浮かべる。さりげなく、

「マコは北欧の本場のフリーセックスの雑誌みたことある？」

と訊ねる。

「あるわ、二度ばかり……。ちっとも汚くないのねえ。あのモデルの人達、ピンク映画のスターだっていうじゃないの。割り切っていると

思うなあ」

「マコもピンクスターになれば、一流にのし上れるよ」

「そこまで恥は曝したくないわ。でもねフトいっそ思い切ってジャンジャン稼ぎまくってやろうかしらって思うんだけど、男が虐められるって映画は少ないんでしょ」

「確かに……。ピンク映画数々のSMシーンあれど、女はいつも受身で被虐的だよ」

「Mの男性向きがあってもいいと思うんだけどなあ……」

「一般向きしないんだろうね。だけど、マコのいう通り、確かに、偶に一本や二本、マゾ的映画もあっていいわけだね」

「センセエがつくるのなら出るわよ」

「恐らく私じゃダメだろうね。M気に乏しいからね」

「若いピチピチした娘に苛められる愉しさを知らないのよ、みんな……」

マコは立ち上って、この間との仕切りの玉のれんに首を挟んで、挑発的に笑った。

笑顔に瞬間、ストロボの閃光を走らせ、私は早くも一本のカラーフィルムを撮り終わって、パトローネを巻き返す。蠱惑的なマコの挑発に、早くも二十枚を消費していた。



マコは飾り障子の手摺に足を掛け、鴨居を掴んで、玉のれんを背に大の字になると、ぐいと腹部を突き出して、

「キスしてみたい気、起こらない？」

と、挑むように妖しく口許を綻ばせた。

「Mの男性なら、忽ち跪いて法悦境にひたる
ところだろうね」

「のませてほしいって哀願するわ」

「残念ながら、一寸お門違い……」

フィルムを入れ終わると私は素早くカメラに納める。

「私なら、そんなポーズにして両手足を縛り
ウワハ、ウワハと喚かせてみたいね」

「やりたけりゃ、やれ
ばいいじゃない」
「そうこなくちゃね」
得たりとばかり近づ
いて、御意の変わらぬ
うちに、両手足を素
早く縛ってゆく。大の
字縛りである。

Sの女王を自認する
彼女にとって、それは
不本意な屈辱的なポー
ズであった事だろう。

しかしそれが私の好みと知って、賢明にもマ
コは、私の意に添っているようであった。

ゴロリと転がると、タタミすれすれにカメ
ラを構え、しなやかな双脚線をふり仰いで、
近々とピントを合わせる。奔放なマコが、カ
メラに向かって、さんさんと温かい雨を浴び
せかけそうな不安にかられながらカメラを安
全圏におくと、男性の誰もが渴仰するように
私も亦、唇を近づけていった。しかし、同じ
行為にしても、そこにはおのずから、SとM
との違いはある。大の字に縛ったマコに対し
その主導権は私が握っていたからである。マ
コは軽く呻いた。SとMとの主客は転倒して

も、じーんと大脳神経をつらぬく疼きは同一
のものである筈であった。

「あーん、だめねえセンセー、デリケート
なのよ、もっと優しく……」

縛られた手足で支えられた裸身が、ぐーん
と弓ぞりになって、あがいている。

そこには、SもMもない、頂点に辿りつこ
うとする痺れだけが激しく渦巻いているのみ
であった。

気愧しい昂ぶりが通過して、マコの火照り
が遠のいて冷たくさめていった時、マコは眉
を顰め、皓い歯を軽く顫わせて、私をいまわ
しげに直視していた。絢爛たる恍惚からさめ
た時、被虐の肢体で、自分自身を見失ったこ
とが、誇り高きマコにとっては、口惜しかっ
たのであろうか。

めくるめく世界を彷徨したのは魔子だけで
私は単にそれを助長したに過ぎなかった。そ
の助長がマコの意志によるものでなく、私の
意志によって遂行されたところに、同一の軌
道を経過し乍らも、マコにしてみれば釈然と
しなかったのであろう。

縄を解くと、どさりとその場に跼った彼女
が、突如、何を思ったか、猛然と私にムシャ
ぶりついてきた。いきなり鋭い皓い歯牙が、

私の肩につきささり、呀っと後ろに倒れた私に、裸身が獲物を狙う牝豹のようになのかかってきた。喉首に鋭い爪が、皮肉を裂くようにぐいぐいと迫って、呼吸を圧迫してゆく。私は、いつしか真剣になっていった。男と女の、意味のない争いの言葉の羅列がつづき、嗜虐の想念をかき立てられた私の力が、やがて、こざかしい女の猛襲を挫いて征服していった。

激しくのたうつ女体を押えつけ、巧みな縄が、マコの右手と右足、左手と左足を連結させて縛り、ぐいと彎曲した腿裏に尻を落として押え込んでいた。体のあちこちが引っ搔かかれたのか微かに痛む。

「どうだ、参ったか。もう容赦しないぞ」
馬乗りのにりかかった俤、平手でパシパシと臀部を叩く。マコは齒を喰い縛って声も立てなかった。

「どうしていきなり掛かってきたんだ」
「癢にさわったから……」

「何が——」

「センセエの思うようにされたから」

「いいじゃないか、結構飲んでいた癖に」

「私のプライドが許さないもの」

「何がプライドだ。だったら止めてくれとい

えばいいじゃないか。

黙って鼻を鳴らして、悦んでいたじゃない」

「体は受けいれても、心が許さないのよ」

「厄介な奴だ」

「どうするの。私を、こんな恥かしい恰好にして……」

「虐め直してやる」

「イヤッ」

「いやでもやる。いややってみたい」

「どうして、そんな我俤いうのよ。センセエは縛らないとエキサイトしないの」

「かも知れない」

マコは口惜しそうに唇を噛みしめた。

「いいわ、負けたわ。どうでも好きなようにして頂戴——もう私、しらないから」

自棄に口走って、マコはプイとうなじをそ

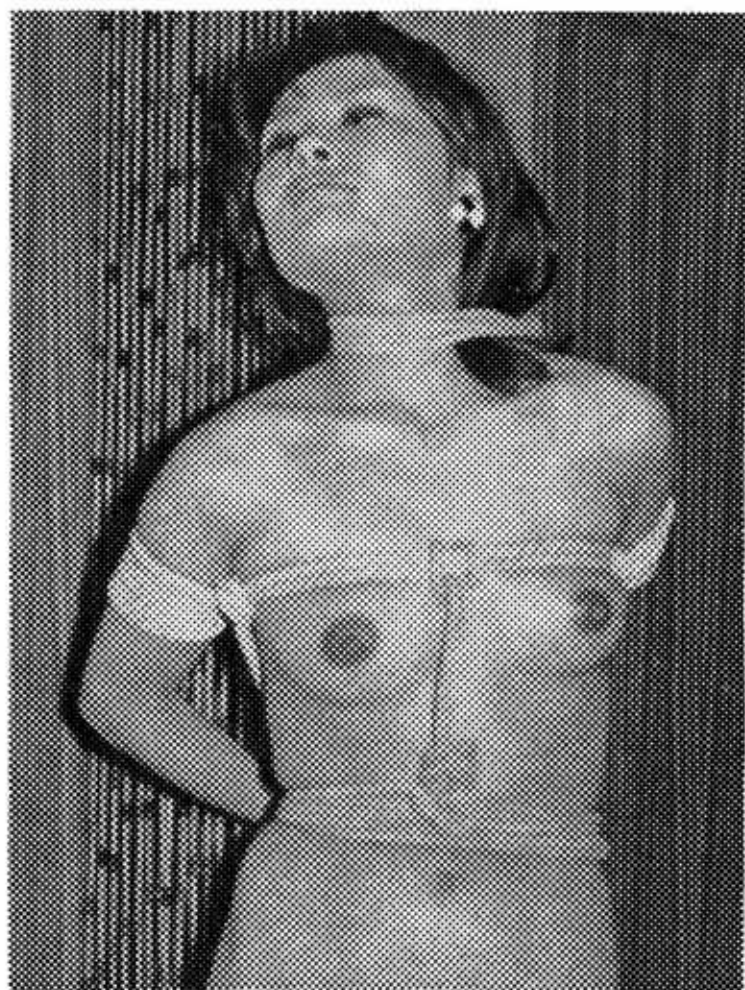
むけた。本当に怒ったのだろうか。そっと腰を上げて、彼女は不貞腐れたように、じつと両脚を高々と上げた俤のポーズを崩さなかった。

（扱いにくい女だ）心で呟きながら憮然とした思いでシャッターを切った。



Sの女にMを求め、Sの男に女はMを求めている。茲に慥かに氣拙い反駁が交錯していた。努めてM化されまいとする私と、緊縛を許容しながらも、いざとなれば反撥を感じるマコとでは、どこかでどちらかが折り合わなければ、愉しいSMプレイのひとつときは持てそうにもなかった。

如何ようにでも玩弄出来る、あからさまなポーズを眼前にして、迂濶に行動に移ることを憚かって、しばしは立ち竦んでいたが、肚を決めると、マコの縄を解いていった。マコの心がこれ以上、硬化するのを恐れたからか



も知れない。

意外の表情で、マコは体を起こした。私が怒ったとも思ったらしかった。軽く媚を含んだ笑顔になると

「止めたの？」

と、いぶかしげに訊く。

「ウン、マコに負けたよ。プレイは相互が愉しくなければならぬ。私の一方的な押しつけに気付いたのさ」

「怒ったのかと思ったわ」

「危うく、そうなりかけて、ハッと自制したところ」

それは、正直な私の心境である。あくまでイニシヤティブを握ろうとするマコの小生意気さに少々ムカッ腹を立てかけて、その大人気なさに気付き、たかがプレイで腹立たしくなりかけた私自身の心に苦笑を催したのであった。一廉の知ったかぶりのプレイ知識を振り廻し、如何にもSの女王ぶっているマコにうまく調子を合わせ、最後に笑えばよいのである。小憎たらしいプライドを温かく包容してやれば、自尊心を拡大させて、マコは私の口車に乗ってくるのである。

そう考えてみると、この一時間少しの時間は、兎角、私本位であった。マコがヌードを撮ってくれと頼めば、勿体をつけて投げやりな撮っている。一旦縛ったとなると、マコの意味を無視して、私の自由に振舞っていたようであった。須臾の反省と共に、私はマコの意味を尊重することにきめた。プレイは一方的では成立しないものである。M女性ならそれで歓喜する行為も、マコの場合は通じないといった方が正しかった。

「どうも自分本位だったね、マコの気持をちっとも考えないで——。反省していますよ」マコがパツと反転して噛みついてきた時、負けてやってマコの思う儘にさせて、擬装にしろM化して、マコの膝下で息を喘がせ、恍惚の表情を浮かべるべきだったのである。常にMの男性に対するマコにとって、あの行為が、愛情の表現であったことを、今になってさとした私であった。

マコは、やや白けた表情で、このプレイの中断に戸惑っているかのようであった。

二本の煙草を啜えて火をつけると、一本をマコに渡す。軽い仕ぐさの中に、私は一縷の望みを託して、じっとマコを見守っていた。

無言で、長く紫煙を吐いていたマコがポツリと、呟くように言う。

「センセェ、いいのよ、縛って。お好きなように——」

「ウン、でもね、何だか気が進まない」

「あたしの気持も、どっちつかずだわ。縛るなら縛って、好きなようになさって。そのあと、私もパーツと溜まっているものを、はかしたい気持。いつも私のいいなりになるMの男達と違って、センセェみたいな、M気のない人を、相手にやってみたい気、しきりなの

よ。いけないかしら？」

マコの妥協的な提案である。Sを殺して被虐態勢をとるから、私にも同じ行為を求めているのであった。妥協せざるを得まい。M男性がきいたら、ゼイタクの極みの垂涎のプレイを、私は内心、渋々ながら、それでも努めて愉しげな表情で、口許にニヤリと笑みさえ泛かべながら頷いていたのであった。

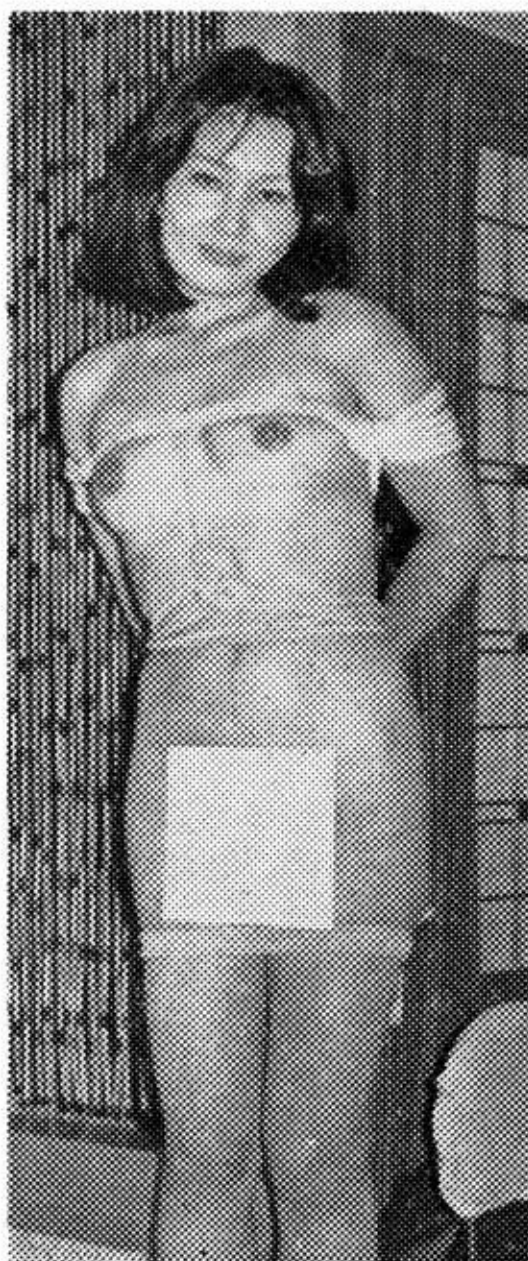
× × ×

二の腕をしっかりとめて、ウエストで数回ぎりぎり巻きにした、上半身の緊縛が完成する。マコは従容として、苦痛も訴えず、裸身への、かなり強い縛りを許していた。

「痛いかい、どこか？」

「ラクじゃないわ。でも、我慢できる」

カラーフォトオンリーだから、なるべく無



駄なポーズを省いて、数少なく撮っているから、どうしてもハント向きでないのが多い。

(若しカメラ・ハントにのせるとなれば、カットなしのフォトなんて、殆どありゃしないぞ。正方形、長方形の白地の羅列だろう。又しても敏感な諸賢に文句、喰うだろうなあ。ましてカラーネガを、モノクロで焼くとなれば、さぞかし粒子も粗いことだろう。早くカメラ・ハントのフォトがカラーでのせられるようにならないものだろうか——)

そんな感懷を抱きつつも、このところ、もっぱらカラーづいた私にとっては、ハント用のフォトより、私家秘蔵用のものがどうしても多くなっていた。

私は正直でありたい。若し仮に、諸賢のうちの誰かが、マコの様な妖艶な美女と一対一

で撮る機会を得た時、それが、又とない機会であるとしたら、誌上フォト式の、隔靴搔痒のフォトを撮るだろうか。十人

が十人、マコの裸身、ズバリそのものを撮りたいのは本心であるまいか。ハント用として撮っているのではなく、私個人のプレイの愉しみのよすがにマコの裸身をくまなく撮っているのである。いわずと知れた、白い伏型が多くなるのも、已むを得ないのではなからうか。懼らくはお見苦しいと思うが、この傾向は今後、ますます殖えてゆきそうである。そうしたフォトの掲載が許されぬ限り——。

私のカメラはプロではない。私のハントの一篇も亦プロの小説家ではない、私自身、愉しみながら、本職の余暇に、奇クの方々へ公表しているのである。弁解がましくなったがその点を御諒承していただきたいのである。

マコを立たせると、玉のれんの掛かった柱に立たせる。片脚に縄をむすんで、じりじりと吊り上げてゆく。マコは倒れまいとして、片足で、重心をとり乍ら、懸命に上体を支える。高々と吊り上げて鴨居で縄を止め、閃光が走る。マコはそれに対応して、私がいちいち云わなくても、巧みにポーズをとった。私がフィクションで、マコとのプレイを、さも彼女が被虐性の持主であるかのように書けばそれで結構、通用しそうな緊縛のポーズである。いや、やはりマコのあの不敵な挑発的な

瞳は、Mには見えないかも知れないようだ。否応なく伏型を貼りつけねばならぬ赤裸々のポーズに、私の貪婪な視線は、十分に満足して、足を降ろす。

ついで立柱へ、首を縛りつける。マコのノドはグビとなって苦しげである。プッチリと張りきって突き出た、かたちよい乳首が、私の食欲をそそる。そっと含んで吸ってみたい欲望を押えてカメラに走った。綺麗に刈り込まれた芝生の美しさは格別であった。

撮影所関係の同好者に毛相学を独力で究めた先生？ がいて、数多くのストリッパーやニューフェイス、ホステス、トルコ娘などのフォトや毛を丹念に集めて研究し、その生え工合、縮れ工合、手触り等によって、大体その女性の、性格を言い当てる、妙な大家がいた。

その彼も、刈り込んだり、整髪したりしていると分らないらしい。面白半分のためしに私が同一女性の、一枚は自然発生のもの、一枚はかたちよく剃り込んだもの、一枚は剃毛後一カ月のものの三枚をみせたら、この先生三人同一の見分けがつかなかったらしく、もっともらしい顔で、それぞれの性格を説明してくれたが、やはりバカには出来ないもの

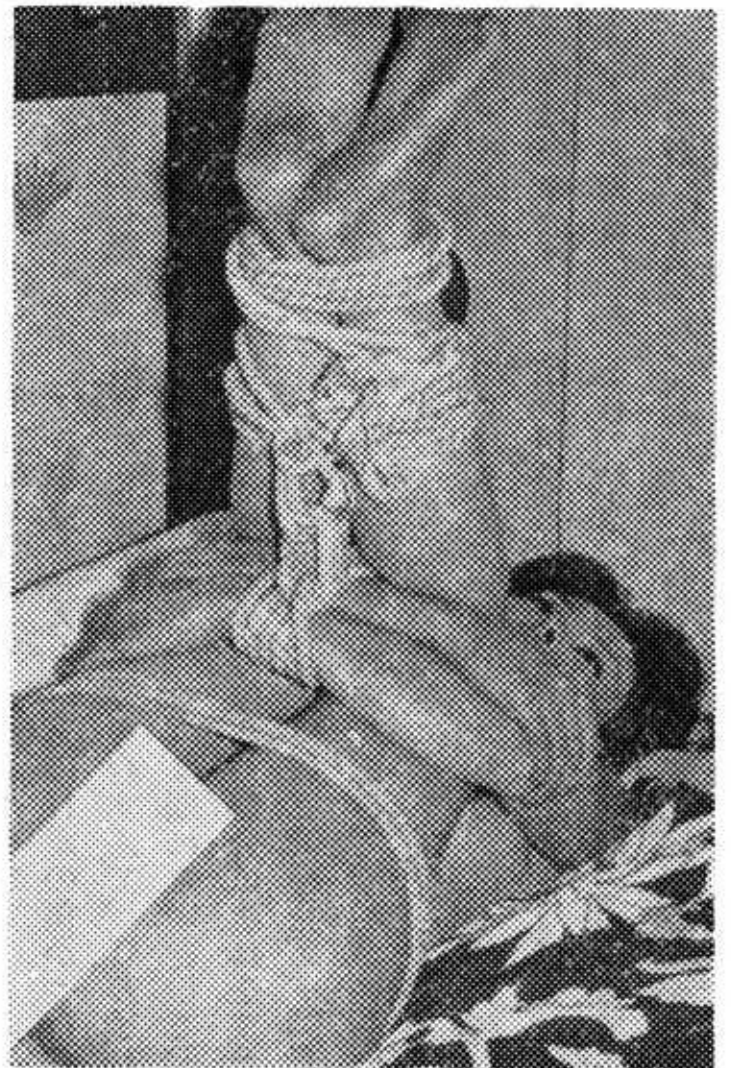
で、自然発生のもものが、当の彼女の性格をいい当てていたのには、内心おそれ入った。

五つに大別して、妬心型多淫型、感度不良型、貴方好み型、冷感型、もある。

発毛状態で、疎毛、長毛、縮毛、濃毛、淡毛などに更に分類し、発生状態で、熊襲型、渦巻型、三角型、逆三角型、長方形、滝の白糸型、素麺型など、彼独特の表現をもって區別し、その組合わせによって、大体その女性がどのような性格か分かるというのである。

剃りあとの青さをみせて、端麗に形よく刈り込んだマコの場合、そのいずれに該当するか、私には皆目、見当もつかなかったが、見た目には、Sの女王のたしなみを、まざまざと感じさせるのであった。

触りたい欲望を押える理性は、触れて又、先刻の前者の轍を踏む愚に、躊躇されたからである。マコはそれを求めないのではない。自己の意志のもとに求めたがっていることを知っていたからであった。

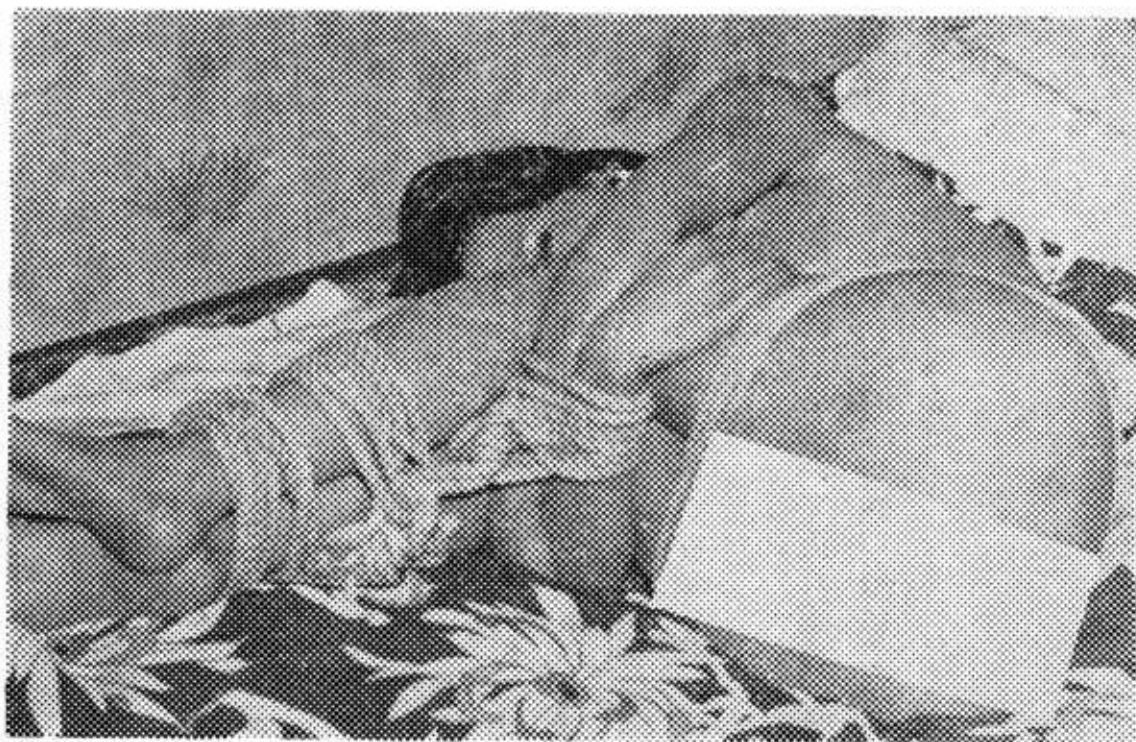


両腿を縛っていると、マコは苦しそうに呻いた。首縄が、やはり苦しいらしいかった。

黙って首縄を外し、カメラを向けると微かな笑みを泛かべた。女体を刺戟せず、ひたすら緊縛のみに走る私にマコは素直であった。

二本目のフィルムが既に十三枚、費消していた。相手がマコだから、緊縛フォトは、さしてとれないと、頭からきめてかかって、カラーフィルムの二十枚撮り、二本しか持ってこなかったのが、今になって悔まれる。

ヌードに六、七枚、使ったのが惜しいといえ、マコに文句をいわれるかも知れないがやはり、六、七枚にしろ、私好みの緊縛をと



りたかったと思ったが、今更云っても愚痴である。

「あと、七枚しかないんだよ」

縄をとき乍らいうと、

「二枚だけ残しといてね」

と、マコは微妙に笑って応えた。

「どうするの？」

「センセエを撮ったげる」

「えッ、私を？ 面白くもないじゃないか」

「私は面白いわ」

「どんなのを撮るつもり？」

「ここをキューと縛っちゃって」

マコは、私の禪の前垂れをぐいと引っ張った。どうも形勢不穏である。

「もう四、五枚あるでしょう。何でもいい早く縛って撮って、終わりにして」

せかされて、考えあぐね、敷きつめた布団の上に仰向けに寝かせると、両足を揃えて上に挙げ、膝裏で両手を組ませて手足を縛る。よく使うテである。

マコは鮮かな丸みをみせて、私の縛るが俣になっていた。

「浣腸したことある？」

「男の人に？」

「いや、マコ自身がだよ」

「プレイとしては一度もないわ。便秘で二度ばかり使ったけど。でも、Mの人が浣腸をせがむので、してやった事はあるわ」

「今度、一度してやろうか。いや、させてほしいね」

「いやよ、そんなこと。でも是非というなら」

構わないわ。その代り、センセエの体の上に跨がって出すわよ。それでいい？」

「やれやれ」

その時の状態を直視する興味にフトかられたが、矢張り怯気づいてしまった。しかし近頃、私の浣腸欲は、かなり昂進しているらしく、今もこうしてマコのポーズをマザマザと見ると、その意欲にかられるのであった。

垂直に足を伸ばしたポーズを双臀の方より撮り、布団を踏んで移動しようとする、柔らかな綿の凹みで、マコの体は横に倒れた。正面からとっても、側面からも、これすべて禁制のポーズである。それが又愉しくて、殊更に私のカメラは禁制破りをねらっているかのようにあった。マコは倒れた俣、じっとしている。そこには倒錯した被虐の姿が横たわっているように私には思えた。

そっと素肌をまさぐると、ビクッとうごめいたが、マコは黙った俣、黒い瞳でみつめていた。マコにとっても、拒否が再び、冷たい空気をもたらすことを敏感にさとしたのだろう。マコの顔に近々と唇をよせ、

「約束通り二枚、残しておいたよ。縄を解こうか？」

「もうよすの？」

「縛るのをかい」

「違うわ、センセエの手よ」

「いいの？」

「縛られてばかりで、すっかりさめきった私の情熱を、ちっとは掻き立ててくれないんじゃない？」

「縛ったままでいいんだね」

マコはコクリと肯いた。解けば忽ち、とびかかりたくなる自分を押えていたのかも知れない。私は体を屈曲させる。かぐわしい女薫を鼻腔一杯に吸い込んで、徐々に大脳神経が一個所に集中し始め、皮肉をつらぬく思いを感じた。

甘い呻きがマコの唇をついて流れ始め、呼吸が切迫するとみえた時、突然、激しく身をよじるとマコは高く叫んだ。

「やめてえー、もう」

× × ×

「帰さないわよ、ゼッタイに。帰るといふなら夜明けまで、こうして縛った儘にしておくから。ねえ、泊まっていて、一緒に」

「何時だい？」

体に縄はかけないで、後手で両手を縛り、両手首を縛っただけの簡単なものだが、しっかりと手首を結えてあるから、自力では抜け

そうにもない。鎌首をもたげて訊ねると、

「十時半を一寸、回ったところ」

マコは机上の私の腕時計を、仄暗い灯りにすかして応える。と、すると、八時頃にホテルに入ったのだから、もうかれこれ、二時間半は経ったわけである。文句の多い割に、緊縛の種類は少なかったのだから、それくらいのものかも知れぬ。

お見掛け通り、私は全裸で後手に手首を縛られ、両足首を縛られて、仰向けに転がり、マコは私の胸の上に跨がって、しきりに泊まることを奨めている。夜の十一時頃で疎水駐車場は閉鎖する。この洛北の地から、今すぐ準備して、すぐタクシーが拾えたにしても、所詮、無理な時間であった。聡明なマコは、のろのろと時間稼ぎをしながら、私をなぶりつづけ、仰向けの顔に跨がって、ぐりぐりと息も詰まる程に責めつけてくるのであった。

「うん、仕方ない、泊まるよ」

「いやいやそうね。奥さんが怖いのか？」

「そうでもないけど、明日の仕事の段取りもあるしね」

「久し振りのデートでしょう。少しは犠牲払いなさいよ。その代わりマコ、うんと愉しくしてあげるからさ」

「いいよ。でも夜中じゅう、ジワジワやられちゃ、体の方が参ってしまいそうだ」

「フフフ、弱いねエ、センセエって。ダメ、五十才は鼻たれ小僧よ。もっと元気出して頑張らなくちゃ」

若いマコにハッパをかけられて、私は苦笑を禁じえない。

ツト立ち上ったマコは、ショルダーバッグを開いて、細い丸紐をとり出すと、私に背を向けて跨がり、奇妙な作業にかかり出した。引きつれる痛みを、半ば快く耐え、私は無言で、この妖しいSの女王と化したマコの手、なすが俚に委ねていた。

「ダメねえ、もっとハッスルしなさいよ。これじゃM人間と、ちっとも変わりやしない」
ブツブツいい乍ら、丸紐の端に縄をつないで、長々と鴨居に引っ張る。

「さあ、チャンとこちらを向いて。いいおシヤシン、とったげるから」

カメラの機構が分かるらしく、
「ねえ、絞りは五、六ぐらいでいいわね」

と御気嫌な声で問いかけ、連動距離計になったカメラのダイヤルを回している。

閃光が、一瞬、視野に飛び込み、その刹那私の羞恥のポーズが、否応なくカメラの一枚

に納まっていた。モノクロなら自家現像する私でも、カラーとなるとどうしようもなく、馴染みになったカメラ店に出していたが、近頃いっばし同好者ぶる彼も、私のこのポーズを見て、どう思ふかと気愧かしい想いにかられるのであった。

マコは、私を抱きかかえるように坐らせ、鴨居のたるんだ縄を外すと、それを私の首に巻きつけ、引きつるように結んだ。このポーズでもう一枚とるつもりであるらしいと悟った時、一人前にあちこちからねらいをつけて覗いていたが最後の一枚のシャッターが切られた。

縄を首から外すと、私の上半身を足蹴にして倒し、丸紐の先を握って、ヒョイヒョイ引っ張り乍ら、

「伸びて、縮んで、又伸びて……」
と、ソルティシユガの「鼻毛の唄」か、



貼り薬のコマーシャルソングか、いずれにしても節をつけて、面白そうに口吟むのであった。

正直いって、私がMにされた、こうした卑屈な状態は、もうこれ以上、書く気にはなれない。

ただ在りの俣に端折って報告すれば、今一度ハルンの洗礼を受け、無気力の私を、マコは実に根気よく責め立て、トルコ嬢も、遙か遠く及ばないであろう手練の技で挑戦してき

たのである。兎も角も双臀の圧力に鼻がへしやげ、息も絶え々々になり乍ら、どうやら私は正しく、M性人間として陶醉したのであった。

オナペットで青春をはかさざるを得ない若者がきけば、正に羨望そのものみたいに見えるであろう私のこの体験も、だが私にとっては、まるで忘却の彼方の憶い出にしかつながらなかった。

それだけ女性に不自由しなかったともいえそうである。

薊魔子は、甘く泣いた。しきりに求めてきても、一旦ダウンした私は、哀れなくらい気愧しがっていた。そのくせ意馬心猿に、心は只管にプレイに逸り、両手を縛られたまま、マコを欲ばせるための努力を続けていたのである。

マコは、果ては私の髪の毛を掴み、グイグイ頭を揺さぶる。

さながら魔女めいた、妖しい魅惑にとりつかれて、私の奴隷的な奉仕は延々とつづき、マコは幾度か甘い歓声を挙げた。睡魔が襲ってくる。それを打破るかのように、イニシヤチブを握ったマコは燃えに燃えて、昏睡の私を責め立ててきた。

.....
曉方の寒さにフト眼ざめる。午前二時過ぎまで戯れていたのだから、眠りは浅く、頭は重たかった。

枕元の時計をのぞくと午前六時過ぎ。マコは私に背を向けて、体を丸め、スヤスヤと安らかな寝息を立てていた。マコも私も一糸纏わぬままで、暖房の止まった夜明けの空気は冷たかった。

肩までハミ出たマコの肌に、布団を引き寄せて、深々とかぶせてやり、煙草に火をつける。口の辺りが強ばってマコの匂いが、しみついていった。

仄明りの下で、下着を探して、身につけると、そっと洗面所へと立ち上る。

洋式便器の蓋が開いた俥になっていた。そうだ、この便器のタイルにしゃがまされ、身をのけぞらせて仰向けになり、立ちはだかったマコの液体が、顔面一杯に甘酸っぱく降りそそいだっけ。

まざまざと、記憶を蘇らせ乍ら、私は腰を降ろした。

ホロ苦い想いを扉の中にとじ込めておいて私は帰る準備を始める。

身支度をととのえるのに、かなりガサゴソ

いわせたが、疲れ切ったのか、マコはめざめる気配もなく、私のかぶせた布団の奥で、微かに寝息を立てつづけている。

メモ帳を千切って、

『一足お先へ失礼——、あとはこれでよろしく頼む』

と、走り書きしてから、高額紙幣一枚と共に、枕元の灰皿の下に敷くと、そっとドアを開いた。

シンとして音もない廊下をそっと伝って階段を降りようとした時、突き当たりの部屋から異様な呻きが、部屋の外まで洩れてきた。

ハッと足を止め、そっとドアに近づいて、耳をよせると、紛れもない夜明けの狂宴のさなからしい。

逢引の一夜の別れを惜しんでの愛技が、夜明けという時間に安心してか、声を限りに叫喚しているに違いなかった。

遥か何キロか先のレールの響きすらも、微かながらも耳につく静寂のこの時間に、まさかドアの外に佇む人間のいることを、閨の二人が意識しなかったのは当然のことであったであろう。

フト、心の疼く副産物まで頂戴した私は、しばし戸口に佇んでいたのであったが、やが

て声が途切れ々々になった時、そっとその場を立ち去った。

扉の奥の、その幸福な男女の顔を、一眼みてみたい関心を抱きつつ、玄関に立って、数度、声を忍ばせて扉の向こうに呼びかける。眠たげな中年の女に帰ることを告げると、宿泊料を請求された。

マコの手にとっくり残ることになったあの一枚の紙幣に、フト軽い未練を覚えが、未知の客になら、請求も当然のことと、あっさり払ってホテルを出た。

洛北からタクシーを飛ばせても、疎水駐車場は、未だ眠っているに違いない。

大きく深呼吸して、曙光のさし出した冷たい舗道を、私はあてもなくゆっくりと歩き出していた。

雄琴でもSになりMになり、洛北でも亦、それを繰り返してしまった。虐められても嬉しい——それはマコに限って見える、真実である。

今頃、未だぐっすり眠りこけているであろうマコの、魔女めいた妖しい魅力の裸身が、朝の太陽と共に、次第に私の脳裡から消えていった。

——(おわり)——

あらい・かず画



愛読者は姦しい

「花と蛇」に

夢を託して

大西弘明

その善悪は別として、現実にある種のフィルムや写真が世間には星の数程あると言われ、女優の数も何千人を下るまいと思われる。

毒喰わば皿までと言うのか、むき出しの本能を露わにして熱演する女。強要されて女優となったかと思われぬような、演技以上の初々しさを羞恥でもって示す女優等々。この世界の住人の持つ人間の魅力に興味を持たないSMMニヤはいないであろうと思う。この好奇的心理を上手に把握したのが「花と蛇」で、この許されざる現実を夢に託させて、ストレスを解消させてくれているのも「花と蛇」ではなからうか。

当該小説の愛読者が熱心であればある程、野次馬評も自然、多くなるのも事の道理であるが、「花と蛇」が大河小説化しつつある現今においては、これら愛読者の声程、重要な意味を持つものは他にないと考える。団氏の巧みな筆法もさることながら、現在の長編を

生んだ原因は、団氏の情念と愛読者の情念が一体化して、静子夫人という佳人を生んだことにあると私は信じている。

この意味において愛読者の一人として先輩諸兄の卓抜せる将来の提案や要望を乞い願うと共に、過去における秀逸な提案や願望が成就されないで放置されているのを甚だ遺憾に思い、ここに再度ひろいあげてみたい。団氏が、再考下さることを願うのみである。

〇〇〇〇

佐藤五郎氏（43年12月号）

「花はすかしき麗人達の羞恥地獄なれど、なにかそこはかと漂う明るい雰囲気、僕の口元は嬉しくゆがむ」

私は、佐藤氏の言う明るさを、エロスの神の微笑とみた。いつぞやの号の静子夫人のA責めでガラス棒に血がにじんだが、あのような行為は佐藤氏の言に反する。止めてほしいものだ。

前原昇氏（45年8月号）

「マゾ化しないジャジャ馬娘、京子の活躍を願う」

前原氏の意見は大賛成だが、やや静子夫人を軽んずる言が見出せ、以前と同様な意見ながら更にもう一步前進した結城氏の意見を想

い出した。

結城志輝氏（44年7月号）

静子に対しては美的なマゾ的技術教育（観賞するショー的存在）を、京子にはサディスティックな責め（観賞するための責めではなく泣かせるための責め）を求め、お互いの個性をひき出しながら、SMの羞恥の構造を駆使し盛りあげていくべきだと述べている。

前項の前原氏同様に、京子に焦点を絞りたいと提案しながらも静子の長所を忘れなかった点、一目に値いしよう。

美津夜静京氏（44年5月号）

新人美沙江と珠江夫人に対する提案で、多くの読者の共感を得たと思う。

珠江夫人と静子夫人を競合させての濃艶な演出を望み、具体的に白人女性との国際親善美女合戦と称する同性愛ショーを提案した点に注目したいが、前者は、どうやら珠江と静子の同性愛一騎打ちとして実現しそうであるし、且つ、後者も白人女性ではないが黒人男の登場で、異民族の虐げから生々しい被虐感を愉しめそうな気配となった。

この夢は実現されそうであるが、もう一つ美津夜氏が述べた素晴らしい意見が、ほんの少しではあるが実現されているのを、嬉しく

私は思っている。と言うのは「時には当事者の積極性を期待して身体拘束を解いてはどうかであろう」と論じた彼の意見である。私は大賛成で絶対にとりあげて戴きたい提案であると思っていた。特に自発的に浣腸なしで、あれ程のショーを演ずるまでに成長した静子夫人に、この意見を採用すれば、演技に深みと新鮮味の出ることは間違いないと信じていたからだ。全部の緊縛を解きたくないなら、猿まわしの猿のように腰縄をつって、衆人環視の中央で、いろいろな芸をさせればよいであらうし、「花と蛇」に新しい分野が誕生すると信じる。

西野正一氏（44年6月）

花電車を中心とする提案で特に題名どおりの蛇の登場への願いは卓越していた。

私も大体において、交合そのものにはあまりSM味が存在するように感じず、むしろ花電車の強要に興味を持っているので、西野氏の倒錯ぶりには双手を挙げて賛同した。酒を飲まされてフラフラになった大蛇を使うショーは、必ず「花と蛇」の美女たちに、試みてもらいたいと思う。

○○○○

以上、印象にある「花と蛇」に対する過去

の要望や提案をひろいあげてみたが、最後に見逃してはならないと思うのは読者通信に現われる「花と蛇」への願望である。

本文やサロンに比較するならば文章も短く単純、稚拙なものが多く代りに、ズバリと夢を託して言い切っているあたりが素直に受けとれ、将来の指針になるケースが多いのではないかと思う。読者通信にあらわれた声のうちで、採用された案も多いと聞き及んでいるが、夏次郎、春太郎というシスターボーイの誕生も読者の提案であったと聞いている。気をつけて読者通信欄の「花と蛇」への願望を読んでいくと、面白いことには、静子夫人の一番厭がる浣腸、それも開脚して青竹での拘束、つりあげ、仰臥、挿込便器使用というような願望が問題なく多いのに、苦笑させられてしまう。

SM情感羞恥責めを遠慮なく表現している当該SM耽美小説において、読者通信にあくまで浣腸要望の声が多いのは、SMのSMたる所以であり、奇クの読者が、長い歴史の中に淘汰され尽した同好の愛読者のみであることがうかがえるのである。

限定判に近い発行を地味に続けながら、派手に咲き派手に散っていった同系誌にない素

晴らしさは、このような一般愛読者の、ケレン味というか倒錯性というか、マニヤのマニヤたるユーモア性までも、うかがえるSM同好者の支援によるものであろう。

読者通信欄で、ある男性が静子夫人には巨犬、京子には青大将、美沙江にチンを配せよと、ズバリ要望したことがあった。既に、その第一項は採用されるらしく、香港より、よく訓練された珍犬が送られつつあるらしい。

団先生が、いかに受取られるかは想像の域を出ないが、このような読者の姦しい声が、SM大河文学を形成しつつあると信じたいと私は思う。乞提案を、と言いたい。

〇〇〇〇〇

最後に蛇足ながら私見を述べてみたい。

読者通信の要望の声が、爛熟きわまりない幾多の羞恥責めが当該小説に現われるにも拘わらず、あくまでA責めを望む方向にあるということは、前章でも記載したとおりであるが、斯く言う私もA責めを欲ぶアブ・ラバーである。とは言え、断わっておくが男色家ではない。徹底的に優しく可愛い女性を好む粹人と自分では思っている男性である。

元々、元来から裸体はごくナチュラルな人間のフォルムであって、裸体そのものは少し

もエロチックなものではなく、いわんやSMにおいては何をか言わんやである。パンティ一枚だけを身につけた美女であれ、全裸の美女であれ、それを注目する視線の様々な思惑からエロにも見え、SMにも見えるのである。つまり想像力が快美感を作るのであると思うのだ。

SMは未だ世間から白眼視され、SMマニヤ同志ですら孤独を愛さねばならぬ状況で、世間よりの抑圧とタブーの意識の下に、ひっそりと愉悅を楽しんでいる有様である。だが私は、いずれ、SMが、この様な状況から脱し、未来の性意識をさきどりし、未来の男女の愉悅の一端を背負うに違いないと思っている。

未来の性は、V感覚に定着している現代の性にこだわらないで、いずれ第二の性感たるA感覚に及び、その各人の好みに応じて、Vを主体としてAをデザートに、また、Aを主体としてVを利用する時代がやって来ると信じている。そして、これらの愉悅を上手に演出するために必然的にSMにゆだね、おもねる時代がやって来ると考えている。

さて、私の主題である「花と蛇」に話を戻すならば、とかく禁圧を感じさせられる当該

小説こそ未来の意識をさきどりし、最大公約数的エロス観をうまく演出している耽美SM未来文学であると断言したい。

清純な美女に初めて縄掛けする快感。全裸の縛りに絶句する深窓の美少女。羞恥責めにされる絶世の美女、足吊りで強制浣腸を施される令夫人等々々、正にSMマニヤ垂涎の字句が羅列され、文中の女が、生き、蠢き、悦ぶそれが当該SM小説の神髄である。

露出、接触、見せてはならぬ愉悅、これを私は羞恥と屈辱の三面構造と言いたい。

全裸に剥かれ、触れられ、あげくに現わす快感の震え、そして又、秘めて置きたい本心をひんめくられて引き出され、くずれ果てた女の洩らす甘い呻き。更に心の奥底までひびく太い嘴管の衝撃。耐えに耐えた後の甘美感への悦びの反応と呻き等々々。羞恥の三面構造を駆使してこそ、まことのSM文学の誕生であり、SMの耽美を発見でき得るのではあるまいか。

具体的に私が提案し要望したのは、羞恥の三面構造をより広義に導入しながら、適宜なデザートを配しつつ、徹底的なA責めを主体にして、美囚達を責めぬいてほしいということなのである。